

ワールドトリガー 「Re：自戒の絆」

悠士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

沢山の人の人生を奪ってきた少年は幸せになっではいけないと思っただ

失敗をして失った少年は過去の過ちを再び犯さないように鍛錬を積んだ

少年は自分の名前に恥じないように守りたいものを『護る』と

・前作の「ワールドトリガー：自戒の絆」をBBFを元にしたリメイク版です

・改投済みの話からアップしていきますので、登校は不定期になります

今日（9／30）から公開します！

目次

忍田護（設定を少し変えました）	1
1 話 動き出すトリガー	4
2 話 玉狛製護専用トリガー“春風”	15
3 話 最初の相手は風間隊	24
4 話 清藍祭（せいらんさい）	33
5 話 人を煽るのは程々が良い	43
6 話 イレギュラゲート	54
7 話 C級隊員・三雲修	63
8 話 鯨とゴミ掃除と痴話喧嘩	74
9 話 A級 三輪隊	84
10 話 ゲームと羞恥心は控えめなくらいが丁度いい	93
11 話 目的と面白いこと	102
12 話 嘘は即興に限るね	114
13 話 忍田隊再始動！	123
14 話 ブラックトリガー争奪戦1	132
15 話 ブラックトリガー争奪戦2	140
16 話 ブラックトリガー争奪戦3	149
17 話 権利+戒め⇨矛盾	157
18 話 なんともない一日	166
19 話 嘘の代償	175
羽山春多&福山一菜	183
20 話 崩壊	186
21 話 嘘から出た実（まこと）	192
22 話 クリスマスパティー！	200

23話	変わらない過去（じぶん）	207
24話	開戦	216
25話	罪と罰	225
番外	姉と弟	234
26話	傷跡	237
27話	境界の守護者（ガルディアン）	246
28話	守るために	259
29話	終わりの一手	267
30話	長い旅路の果て	275
31話	許せるのは自分だけ	281
32話	奇跡の糸	292

忍田護（設定を少し変えました）

名前：忍田しのだ護まもる

性別：男

年齢：15歳

身長・体重・血液型：170cm・56kg・A型

誕生日：10月21日

好きなもの：剣道、料理、掃除、祭り、絵イラストなど
嫌いなもの：虫、幽霊

パラメーター

通常トリガー

トリオン：13

攻撃：7

防御：5

機動：6

技術：5

射程：4

指揮：4

特殊戦術：8

TOTAL：52

サイドエフェクト：追跡・一度見たトリオンは障害物があっても位置が分かる、ただし閃光弾や至近距離での爆発などで強制的に瞬きさせられる目標を見失う

トリガー（護用）

春風はるかぜ、通常弾アステロイド、スコープオンガンマ、γ

春風、屈折旋空、予測、シールド

春風：玉狛製護専用のトリガー

槍の形をしており弧月（槍）とは違い柄の先にロボットアニメとかに出てきそうな機械的なパーツが付いている、その先端からは長さ50cmの弧月（直角三角形型）が出せて柄と合わせると1m70cm位の長さになっている。しかもガンモードとして先端の弧月（直角三角形型）からガンナー用トリガーが撃てる

サブと合わせて多彩な攻撃が可能

しかも先端には取っ手があり分離して剣と銃サブマシンガンに分かれる、その際春風はサブトリガーとして機能する

γ ：命中したトリガー・トリオン体は一定時間トリオンを使ったトリガーを使用できなくなる

屈折旋空：弧月専用オプショントリガー。旋空の軌道上にグラスホッパーと似た反射板が出現して斬撃の方向を変える。角度は160度が反射は2回

予測・護専用トリガー。「追跡」のサイドエフェクトと連動して相手の情報を収集、次の行動を予測する。データが多いほど精度は上がる

忍田しのだ 真史まさふみより5歳離れた年上の姉・広美ひろみとその相手・毅ごうの子

10歳のときに敵に捕まり拷問を受けた事があり、助けられて逃げるときに近くまで着ていた母広美が死亡する。

ネイバーの恐ろしさは心と体に刻まれている

父や他の人達に戦い方を教えてもらいながら強くなっていき11歳のときにクーデターを起こしてロイとともに玄界ミデンへと逃れる。その時父は護を行かせるために盾になり敵に殺されて死亡

苗字が一緒だったため、叔父の真史を見つけることが出来。そのまま引き取られて一緒に暮らしている

境界防衛機関ボーダーの旧ボーダーのメンバー

後に林藤が支部長となる玉狛支部の最初のメンバーの1人になる

序盤では一時的に木崎隊に所属していて配置は^{オールラウンダー}万能手。1年前の遠征で連れてきたかつての部下に慕われていることもあり、木崎に言われて自分の隊を作った。現在隊員達は玄界のことを学ぶため四日市で合宿中。ランクは木崎隊と同じくA級ランク外

本部のランク戦に一応参加しているが自分だけのトリガーが欲しくなり予備のトリガーを完成まで借りて戦う

実力はランク戦で1位を取れるほどで、ブラッグトリガーを1人で相手できるほど、過去のランク成績は1位。現在は9位（参加していないから他が勝手に抜いていっただけ）

過去にネイバーを何人も殺していて、罪の意識で幸せになっただけはないと女性からのアピールは受け流す

三雲と同じ学校通っていてクラスが隣同士、イレギュラーゲートの解決まではお互い隊員だったことは知らない

基本的に年上には「さん」を付けるが年下・^{フレンドリー}友好的なヤツ・失礼なヤツは呼び捨てにする

1話 動き出すトリガー

人口28万人が暮らしている、ここ三門市にある三門市立第3中学校の3年4組では今クラス中が緊張に包まれていた

11月の半ばも過ぎたこの時期で緊張する事といえば当然受験である

早いヤツは10月に済ませていて大半の生徒は早いうちに結果が出る。そしてその結果は通っている中学校に送られ1人1人呼び出して合否の結果を伝えている

そんな中1人緊張どころか居眠りするほど神経が凶太い生徒が1人

「忍田ー」

「……………」

「忍田」と呼ばれた生徒はまだ居眠りしている

「忍田ーー！」

「お……おい、いい加減起きろよ忍田」

2度目の呼び声はさつきよりも大きく隣のクラスにまで聞こえているだろう

流石に見かねた友人の1人青柳あおやなぎは寝ている忍田しのだの額にデコピンをした

「…………ツングー…………ふあく…………やつと放課後スか？」

ようやく起きた生徒…忍田しのだは寝ぼけた目を擦りながら隣に居る青柳に確認するように聞いた

「違うって！お前の番だから起こしたんだよ！」

そう言う教室のドアが開きジャージ姿の体育教師の佐久間先生が現れた

「起きているならさつきと来い！」

「…………あつ！そっかオレか！」

隣で「さつきからそう言っているだろ!!」と青柳が言っているが、無視をして机の横に掲げているバッグを取ると教室を出た

壁に沿って置かれている机のところまで行くと1つの大きな封筒

を渡された

「合格だ、お前ならもつと上の学校に狙えるだろうに……どうしてそこにしたんだ？」

佐久間が呆れたように言ってきた

「どうしてつてこつちのほうが任務のときに近いツスから」

さも当然のように答えた護に溜息をこぼすと、これ以上何を言っても無駄だと思つたのだろう別の話に変えてきた

「そうか……それよりここは学校なんだから居眠りなんかするなよ、任務が忙しいのは聞いているが時間は配慮されているんだろ？」

ボーダーに所属している隊員の殆どが学生で、B級以上は防衛任務のために警戒区域でトリオン兵を倒すのが仕事だ

だが、それ以前に学生である以上勉強も重要で定期考査などの結果は嘘の報告されない為に学校が直接ボーダーに送っている

その為成績が怠っている隊員は学校重視のシフトにされる。逆に成績が良いと授業中…放課後や夜などにシフトが入ることがある。ちなみに護の成績は上位だ

「まあ、昨日は22時から任務が入ってたから眠いんす」

「……そうか、わかった今日はもう終わりだから帰ってゆっくり休め」

「了解ッス」

護が眠い理由を知るとこれ以上引き止めるわけにいかず、早く帰らせてゆっくりさせてやろうと思ひ帰らせた

だが、このあと2時から防衛任務があるため佐久間の気遣いは無駄になった

学校を出て20分ぐらい歩くと護は足を止めた

あと1歩出ればその先は捨てられた町の警戒区域が広がっている

ボーダーが開発した門ゲート誘導装置のおかげでトリオン兵はこの警戒区域に現れ市街地への被害は無い

本部に向かうには専用の出入り口があるのだが、別にそこを通らないといけないわけでもない。今日は屋根伝いに跳んで行こうと考え

た

「今日も警戒区域を突っ切つていこう……トリガー起動」

胸のポケットからトリガーと呼ばれる物を取り出して起動コマンドを言った

とくに口で言わなくても使う意思さえあれば無言でトリオン体と呼ばれる戦闘体に換装が出来る

トリオン体は全身がトリオンで構成されていて、武器を持たなくてもその力は生身の身体の何倍の力が出せる

護は足に力を込めると跳んで着地場所の屋根に乗り、また跳んで、を繰り返しながら最短距離で本部に向かう。

途中であちこちから戦闘音が聞こえたが護の担当時間と場所は違うため無視した

「避ける日佐人!!」

「うわああああ!!」

基地まであと少しつてところでそんな声が聞こえて足を止めると、モールモッドが「ひさと」と呼ばれる少年の右腕を切り落としていた、しかもその数が異常で10体はいた

1人は先にバイルアウトしたのかショットガンを持った銃撃手が1人とさっきの少年の攻撃手が1人だけだった。しかも胸のランクを見るとB級隊員だ

モールモッドは動きが早く、動く為の足はすべて切断ができるブレードになっている、それが1体に10本はある、B級隊員でこれだけの数を相手をするのは上位の影浦隊や二ノ宮隊ほどの力がなければ困難だ

(これは流石に無視はできないスね……変化弾)

護はメイントリガー4つ目にセットしてある変化弾を5×5×5
|| 125発の弾丸をモールモッドまで飛ばしてB級隊員の2人に当たらないように周囲に雨を降らすように軌道を引いて放った

『変化弾』

弾道を設定して好きなコースを飛ばせる、誘導弾と違い複雑な設定ができる

不意打ちで攻撃を受けたモールモッドは体制を崩した、その隙を逃さず2人はその場から跳んで逃れる事に成功した。仲間障害物が無くなった事で遠慮がいらなくなり、腰の装備している『弧月』を抜いて先ほどまで2人がいた場所に下りた

「おいおい誰だアイツ？日佐人ひさと知っているか？」

「いえ、オレも知らないです」

変化弾バイパーによる援護のおかげで逃げる事が出来た2人は入れ替わるように下りた少年を見た

それからはモールモッドが可哀想なくらいに圧倒的な力の差があった

まず、前にいる3体のモールモッドを弧月専用オプシヨン『旋空』で、トリオンで拡張した刃で倒し、左右にいた2体のモールモッドがやって来て、12本のブレードが護を倒そうと次々と攻撃が繰り出されるのに掠りすらもしないどころか1本、また1本と切り落としていき残り5本のところで右手に持っていた弧月で右のモールモッドの弱点である目を切り、左手に通常弾アステロイドを2×2×2∥8発の弾丸を目に向けて放ち命中、目が割れ行動不能になった

残りの5体は左に回転でした護が発動した『旋空』で一刀両断、さっきまで苦戦していたモールモッド10体が2分も掛からずに倒された

「すげーなアイツ……取りえず札を言いに行くぞ日佐人」

「えっ……あっはいー」

自分と同じ弧月を使っているのに圧倒的だった、しかも素人目にも分かるくらい手加減しているように見えた

自隊の隊長に声を掛けられるまで憧れと尊敬の目を護に向けていた

「いやー助かったよ、正直ほかの隊が救援に来るまで持つか分からなかったが、来てくれて助かった。オレはB級諏訪隊の隊長の諏訪だ、こっちは日佐人」

「笹森ささもり日佐人ひさとっす、助けてくれてありがとう」

戦闘が終わり弧月をしまうときさつき助けた2人、諏訪と笹森が礼を

言いに来た

「いいッスよ別に、本部に向かう途中で見かけたただけだし、1人は本部に?。」

3人目の隊員は先にベイルアウトしたのか?と聞いてきた護に諏訪は「ああ」と短く答えた

「待たせたな、嵐山隊到着だ」

その後すぐに嵐山隊の4人がやってきた。ボーダーの広報をこなしている嵐山隊は「ボーダーの顔」とも言われる

「おっ!護じゃん!!何でココにいるんだ?。」

護の姿を確認した嵐山隊狙撃手スナイパー：佐鳥ざとり 賢けんが言いながら近づいてきた

フレンドリーな佐鳥は護とも仲が良い

諏訪に言ったのと同じように言うと言と笹森が聞いてきた

「佐鳥コイツ知っているのか?。」

この質問に呆けたのは護含めた嵐山隊だけで、諏訪と笹森はまずい事でも聞いたのかと一瞬そんな考えが過ぎった

「お……おいマジで知らないのか日佐人?。」

「んだよオレがバカだって言いたいのかよ?。」

因みに佐鳥と笹森は同じ高校の同級生で親友だ、嵐山は諏訪の反応を見て知らないのは本当だと分かることと紹介することにした

「知っているやつは多いんだが本部所属じゃないから知らないのも無理も無いか、こいつは忍田しのだ 護まもるで玉狛支部の木崎隊に所属している」

「忍田」という苗字でようやく2人は嵐山が言わんとしていることが理解できたようだ

「し……忍田って……まさか」

「少し違うぞ、護は忍田本部長の甥だ」

「ツツ!!」

諏訪がもしかしてと聞こうとしたら嵐山が先に言った、流石に部長の甥なのは驚きが隠せないようだ

「オレ、ちよつと本部に用事があるんで行ってもいいスか?。」

「ああ、後はオレ達がするから行ってもいいぞ」

「あざっす」

そう言つて護は来たときと同じように跳んで本部に向かった

本部前の入り口に着くとトリオン体を解いて生身の体に戻り、扉の操作パネルにトリガーをかざした、本部への直通入り口など出入りの際はこうしてトリガーをかざす事でドアが開き中に入れる

防犯の目的もあるが部外者の侵入阻止、隊員たちの居場所など把握するのに必要なのだ

中に入り本部長室がある部屋に着き入ろうとしたが、そこで護はただ学校で居眠りをしているのだと思つた、いや、思ひたかつた

「どうした護？頬なんかつねって」

「あつ！お願いだ護!!助けて」

「黙れ太刀川」

「ヒツツ!!」

部屋に入った瞬間正座をして膝の上はどこから持つてきたのは大きい本が山積みになつていた、その前では腕を組んだ風間と腰に手を当てた叔父の忍田しのだ真史まさふみが立っていた。2人とも背後に虎と龍が見えてしまうほどの気迫があつた

入つて早々頬を抓つた甥に何をしているんだ、と言つた感じに聞いてきた叔父と護の姿を見て助けを（切実に）求める太刀川を低い声量で黙らす風間

「ちよつと風間さん頬抓つてほしいツス」

「……………分かつた」

風間は『コレ』が現実だと思いたくないと、そう思う護の意図を理解し言われた通り頬を抓つた

「いっツ!!いひゃいひゃいひゃ!!」

身長が158cmと平均男性とは著しく低い風間はよく中学生、よくて高校生と間違われるがれっきとした21歳の成人で、見た目に反して力もある

軽く抓るだけでいいはずが思ったより強く抓られた

「学校で居眠りでもしていると思つたか？」

「うん……紛れない現実ツスね」

頬を擦りながらまた「やらかした」のかとすぐに理解した

「それで今度は何をしたんスか？レポート？単位？出席数？」

「テストだ。丁度良い、護これはどう訳す？」

そう言つて風間が見せてきた紙には1つの英文が書かれていた

『To hear him talk, you would think he knew all about the secret.』

「……………」『彼が話しているのを聞くと、その秘密について何でも知っているとと思うことだろう』で合っているツスか？」

まだ英語は完璧ではないが書かれている単語は知っていて1つ1つ思い出しながら文にしていった

「正解だ、太刀川お前はこれをなんと訳した？」

『ヒーローの話は、あなたの世界のありがとうは全部新しいものを全部選べれる』……………」です」

「……………」風間さんやつぱりオレまだ居眠りしているみたいツス、だからもう1回抓つてほしいツス」

ここはよく出来た夢なのだろうと思ひ風間に再度頬を抓るようにお願いした

太刀川は一応風間と同じ大学生で同じ大学に行つてて、ボーダーでも屈指の実力を誇る、なのに今述べられた回答は何かの呪文なのではないかと思つた

昔、訳のわからないひらがなが並べられていて、それを入力すると途中から再開できるゲームがあつたのを思い出した

「ツツ……いひやいひゆ………太刀川さん本当に大学生なのか怪しいスよ？」

「失礼だな!!正真正銘大学生だよ!!ねつ、風間さん!？」

「中学生でも解けるような英文すら訳せないお前がオレと同じ大学生だと?いつからだ?」

「3年前からだよ!!酷いよ風間さんっ!!」

現ボーダー内でランク1位の隊員太刀川隊長…太刀川 慶は涙

目に言ってきた

そんな太刀川を無視して風間は護に顔を向けてきた

「そんなことより護、用があつてここに来たのではないのか？」

ランク3位の風間隊隊長：風間蒼也は思い出したように聞いてきた、その事に護は思い出した。あまりにも目の前の光景のインパクトが強すぎて忘れていた

「そうそう、今の今まで忘れてた、一応報告だけど受験は合格したツス」

「そうか、よく頑張つたな護」

「ああ、流石だ護。となると来年から歌川たちの後輩になるのか」

今まで静観していた忍田がやつと口を開いて甥の合格を褒めた。それに続くように風間も褒めて思い出したように言ってきた

護が受験した高校は歌川、菊地原、出水、米屋、三輪、出水、佐鳥、笹森など多くの隊員が通っている高校だ

ボーダーが推奨する中学：高校では学費の殆どがボーダーが負担しているため出来高制の給料しかもらえていないB級隊員はここを選ぶのが殆どだ

「おおそうか、お——」

「それ以上言ったら声帯を切り落とすぞ太刀川」

太刀川が素直に合格を祝おうとしたら間髪いれず風間が制した

「お前が言う受験すら安っぽく思える、全国の受験生に失礼だろうが。分を弁えろ太刀川」

「オレ大学生なんだから祝ってもおかしくないでしょ!?!?そう思うでしょ忍田さんも!?!」

「すまんが慶、これっぽかりは保護者として同意しかねる」

頼みの綱であった師匠の忍田にまで匙を投げられて、とうとう太刀川は逃げ場を失った

「こういうときは弟子の味方をしてよ!?!」

「お前は本当に救いようがないな、護は本部長の保護者なんだ、保護者が甥の味方をするのは当然の理屈だろうが」

「風間、もういい後は私が代わる」

風間が太刀川を説教するのは最早当然の凶式になっていて、これ以上はキリがないと思つた忍田は代わりに説教をすると決めた

それに短く返した風間は護と共に本部長室を後にした

「……はあ………」

「お……おつかれさまツス風間さん」

「ああ……全くだな」

出てすぐに風間は溜息をこぼした、普通なら「そうでもない」「あれくらい平気だ」など返ってくるが太刀川に対しては本音を言う、さつきまで説教していた風間の顔には疲労の色が見えてラウンジで休憩しようと誘つた

「受験祝いだ、何か好きなのを頼んでもいいぞ」

「ホントツスか!? んじゃ、オレは……これにするツス!」

そう言つて買った食券は「チキン南蛮甘辛ソース定食」670円だ
昼食は既に食べていたが折角祝つてくれている風間に悪いと厚意に甘える事にした、それだけでいいのかと聞かれたが、昼食は学校で済ませていると伝えると納得してくれた

食堂のおばさんに先ほど買った食券を渡して少ししたらチキン南蛮甘辛ソース定食が出された

隣を見るとやっぱりというか風間はカツカレー大盛りを受け取つていた

「護はこのあと予定は空いているか?」

突然、風間がそんなことを聞いてきて2時から防衛任務があると言ふと、いつに終わると聞かれた

「えくと今日は7時に終わりツス、それがどうかしたんスか?」

「12月に遠征任務に行く事になってな、また相手をしてもらおうかと思つたんだが」

遠征任務と聞いてもうそんな季節なのかとそんなことを思つた、風間隊だけでなく太刀川隊、冬島隊、草壁隊などA級チームは遠征任務に行くことがよくある

そのとき護は模擬戦を申し込まれる事もある

理由は実力もあるからだだが最も厄介なのは護のサイドエフェクト

だ、風間曰く「カメレオンを封じる為にあるようなものだ」と以前そう言っていた

「そうか、オレの隊は5時からだから無理だな」

「叔父さんに言って都合つけてもらおうスよ？オレは2人1組での行動が殆どだから融通利きやすいし」

「すまないな、そうしてくれると助かる……………」

話が終わるところで風間の携帯に着信が来て画面を見ると「忍田本部長」と表示されていた

「はい、風間です」

『いきなりすまない、近くに護はいるか？』

「……………今一緒に昼食を摂っているところですが？」

『そうか、それなら都合だ、風間悪いが私の代わりに護を叱ってくれるか？本部に来るのにまたトリガーを起動したようなんだ』

「……………分かりました」

風間がそう言った瞬間普段から鋭い目がさらに鋭くなり、この後の訪れる時間地獄が急に怖くなった

「……………その様子だと心当たり怒られる理由があるようだな？」

「……………はいッス」

「ならいい、もう2度とするな。もしまた同じ事をしたらあ太刀川のバカと同じだと思うことにするからな」

「ツツ!!し……………しないッス!!もうしないッス!!ア太刀川レと同じになりたくないッスよ!!」

基本的には年上にはさん付けをするが、年下とフレンドリーなヤツと失礼なヤツには呼び捨てにするが、太刀川は戦闘面では尊敬しているがそれ以外ではダメダメで、呼び捨てにしようかと思っただがなんか馴れ馴れしく聞こえるから仕方なくさん付けにすることにした

「ただ、時たま失礼な呼び方もする、今みたいに「ア太刀川レ」とか

風間の中でア太刀川レと同列になるのは精神的にもダメージが大きく、2度としないと固く誓った

「ツフ……………早く食べるぞこのあと防衛任務なんだろう」

「はいッスー!」

説教という説教はしなかったが風間はもうしないだろうと思った

2話 玉狛製護専用トリガー“春風”

風間さんに合格祝いと奢ってくれた2度目の昼食を食べ終えて、担当時刻の2時前に予定場所に着くとオレが所属している木崎隊長：木崎レイジが先に来ていた

今日はレイジさんと2人での防衛任務だ

「こんにちはツス、レイジさん」

「ああ、いつも通り早いな護は」

無表情でオレに言うレイジさんは予定より早く来たオレを褒めた、時間前に来るのは当然なのだが、ついさつき時間を平気で守らない人がいたため早めに来た、ホントは昔からのクセで、作戦開始前には配置に着いていることが日常だったため、早く来るのは当たり前になっている

そのおかげか学校で遅刻は1回もしていない

「レイジさんもツスよ、あつ、そうそうオレ無事合格したツスよ」

「そうか！それはおめでたいな、オレが非番なら赤飯でも作れたのだが今日は無理そうだな」

オレの合格を知ると声だけは嬉しそうに言っていたが、ポーカーフェイスが上手いレイジさんの表情はあまり変化が無い

「いいスよ、祝いの言葉だけでも嬉しいツス、つと、そろそろ時間スよレイジさん」

「ああ、いつも通り暴れて来い、援護してやる」
「了解ツス!!」

木崎隊の戦術は大抵が前衛にオレと小南^{こなみ}で、2人を援護するようにレイジさんともう1人無表情の烏丸^{からすま}で戦う

だが全員がガンナー：アタツカーの2種類のトリガーもセットしているため基本的には援護の必要も無かったりするが

援護があつたほうがスムーズに事が運ぶから、もう随分前からこの隊形で戦っている

門^{ゲート}から出現したトリオン兵はバムスターとバンダーが合わせて15体、モールモッド20体で本部隊員なら苦戦するほどだが

「いけるか？」

「愚問スよレイジさん、むしろ人の方が苦戦するツス」

自惚れとも聞き取れるオレの言葉は嘘でも何でも無い、空高く跳んだオレに砲撃しようとバンダーが狙うが機関銃型のレイジさん専用トリガーから放たれる通常弾アステロイドがそれを阻止する

オレが重力に従って落下しようとしたところでメイン：サブ両方のトリガーにセットしてある腰に装備した弧月を2本抜いてXの字を書くように交差させて『旋空』でバンダー、バムスターの半分を斬る

丁度落下地点にはモールモッドが最高硬度を誇るブレードを構えてオレを待ち構えるが

『通常弾』アステロイド + 『通常弾』アステロイド || 『徹甲弾』ギムレット』

弧月を納刀して両手に出したトリオンキューブを1つに合わせて、
4×4×4 || 64発の弾を落下地点周囲に放った

『徹甲弾』ギムレット』

アステロイドとアステロイドを掛け合わせて作られる合成弾で、その名前の通り貫通力が飛躍的に上昇する

徹甲弾ギムレットくらったモールモッドは11体が倒され、その中心にオレは着地した

(残りはバムスター4、バンダー4、モールモッドが5)

オレが落下中にレイジさんがモールモッドを4体、倒したことで残りは5体に減っていた

雑魚だからと言って長時間離れる訳にはいかないから1度合流しようとしてレイジさんとオレの間を塞いでいるバムスターを切って合流した

「どうした？何かあったのか？」

「いや、離れすぎないように合流しようかなーと、思っただけツス」

「そうか、なら今度は後ろを任せるぞ？」

「アイアイさ〜」

今度はレイジさんが前衛、オレが後衛に回り弧月を収めて変化弾バイパーでトリオン兵たちを牽制、その間にレイジさんは機銃を置いてレイガス

トを取り出し、トリオン兵に向かって突っ込んで行った

最初にやってきたモールモツドのブレードを回避しながらレイガストを握っている拳で弱点の目を殴る

レイジさんのパンチをもろに食らった目は碎け散り、そのモールモツドは活動を停止した

だがすぐに近くにいたモールモツドが襲い掛かるが、オレがアステロイドで怯ませて阻止してその隙にレイジさんが再びパンチを当てて倒す

レイジさんに攻撃当たらないのはオレだと判断したのか、残っていたバンダー4体が一斉に砲撃してきたが、見え見えの攻撃が当たるはずもなく跳んで回避する

すぐに合成弾：徹甲弾^{ギムレット}でバンダー、バムスターを一掃する

これで残りはモールモツドが……と思っていたらレイジさんが残り3体を倒し終えていた

「流石スねレイジさん」

「護が援護してくれていたから倒しやすかったただけだ、終了までまだ時間があるから気を抜くなよ」

「了解ッス」

オレは敬礼と一緒に軽いノリで答えた

その後はトリオン兵が来ては倒して、来ては倒して、で気付いたらおそろしいモノが出来ていた

もうすぐ終了の時刻になるとレーダーにこちらに向かってくる反応があり、そちらに顔を向けると三輪隊の4人が屋根の上を跳んでやってきた

「うおお!!なんじゃこりゃ……」

「す……す……い……」

オレたちの元まで来た三輪達が見て米屋と古寺が驚いた
「……これをお前達2人で……?」

三輪が確認を取るように聞いてきて、そうッスとオレが答える

奈良坂にいたっては開いた口が閉じないようだ

三輪隊が見ているソレは活動を停止したトリオン兵の山^山で、大小合

わけて数十体はいそうな数に到底2人で倒したとは思えない量だった

担当していた時間が終了して、今日は玉狛に泊まろうと思いレイジさんと一緒に帰ると、そこで待っていたのはテーブルには沢山のご飯が出来ていて、茶碗には赤飯が盛られていた

「誰が作ったんだ？」

レイジさんは防衛任務に出ていて作っておらず、まだ支部の誰にも言っていない、ならオレが言ったのかと思つたレイジさんが振り向いてきたがそれは違う。すると2階から降りてきた迅がレイジさんの疑問に答えた

「宇佐美とオレが作ったんだよ、今日護が支部に来て合格した事言う未来が見えてな。だから宇佐美と一緒にさっきまで作ってたんだよ、でオレからの合格祝いはコレだ」

そう言つてオレに渡されたのはいつも迅が箱で注文しているぼんち揚げだった、しかもダンボール1箱分

「あ……ありがどうス……」

ぼんち揚げは好きだし、たまに食べるけど箱で渡されたのは初めてだ、反応に困つたが祝つてくれているのは分かるから礼を言う

「それで宇佐美はどこに行ったんだ？ここにはいないようだが？」

レイジさんの言うとおりリビングから見えるキッチンには誰もいない、烏丸はバイトで居らず小南は学校の文化祭で忙しいと最近は遅くまで準備している

「宇佐美はロイを呼びに行つてて、京介もさつきバイトが終わつたと連絡が来た、支部長ももうすぐ着く」

「流石スね、迅さんは……」

未来視のサイドエフェクトを持っている迅は暗躍が趣味だ。ともあれ、迅の言うとおりその後すぐに玉狛支部支部長の林藤匠と息子の林藤陽太郎が帰ってきた

「ようう合格おめでとう、ほいこれ、オレからの合格祝いだ」

そう言つてオレに渡したのは有名な温泉旅館の2泊3日に宿泊チ

ケットだ

「いつも任務ばかりで叔父さんとゆつくり出来ていないんだろ？たまにはボーダーの事は忘れて楽しんで来い」

「ツゝありがとうツス支部長ボス」

「はっはっは、いいぞ感謝しろー」

林藤支部長の懐の広さに感激してチケットを掲げながら喜んだ

「おれからもあるんだぞ」

若干ふて腐れた感じに頬を膨らませた陽太郎がオレの制服の裾を引つ張りながら合格祝いがあると云つてきた

「なんだ陽太郎？」

子供の感謝といえば「——ちけつと」みたいなのだろうと思つていたが少し違った、スポーツドリンクが1本とラムネ、ガム、アメ、チョコと駄菓子が入つた袋を渡された

てつきり陽太郎のおやつだろうと思つたが違つたようだ

「……………いいのか陽太郎？お前のおやつじゃないのか？」

もらえるものは喜んでもらいたい所だが、流石に5歳児から袋に入つたお菓子までもらうほどではない

「うむ、〃ゴウカク〃 ってのはおめでたいのだろう？だからこれはおれからのおいわいだ」

子供にしては健気なところが嬉しく抱きつきながら「ありがとうツス陽太郎」と礼を言つた、どうやらこのお菓子は100円均一の店で「3個で100円」とかそういうのだった

その後地下に続くドアが開き、宇佐美が「何か」を引つ張りながら入つてきた

「あくほらもう来てるよ!!」

「やめろくうるさいのはイヤだゝ離せゝゝ」

「いいから来なさい!!それっ!!」

宇佐美が力強く引つ張ると1人の少年が現れた

何度言つても直さない寝癖が鶏のトサカみたいになっていて、しかも太陽を嫌うため肌は病氣と見間違ふほど白い

名前はロイと言い玉狛支部の数少ないエンジニアの1人

レイジさんの機関銃型トリガーはこの世界に来て初めて知った強
そうな武器として模倣したものだ

小南の『双月』も「合体…変形は漢のロマン!!」と言って面白半分
で作ったものだ、扱いが難しく小南が一番まともに扱えたので小南の
トリガーとなった

「ううう、これだから女は自分勝手に嫌いなんだ、護くくオレを癒し
てくく」

仕方ないと言った感じに立ち上がりゆらゆらとオレに近寄った

「ふざけんな！オレにそんな趣味は無いツス!!」

抱きつこうとするロイを両手で押し退けようと力を入れるが一向
に離れようとしない、以前に抱きつかれた時にはクンクンと首元を嗅
いで「護く汗で良い匂いする」と言って股間を触られた事がある

別に同性愛に偏見とか軽蔑はしていないし、近界の世界では寧ろ普
通とも言えた。だけどオレは「そういう事」はされないようにしてい
る、中一の思春期にそれらしいことで言い含められて危ないところ
だった

「ロイその辺にしとけ、じゃないとそれ以上はただじゃ済まさないぞ
？」

助け舟を出してくれたレイジさんに感謝しつつロイは仕方ないと
言った感じにようやく離れた。前に寝ているレイジさんに襲い掛か
ろうとしたが当然返り討ちに合い、1時間くらい支部の屋上に出され
た経緯がある。あのときのロイは干物になっていた、因みに季節は夏
だ、お水もセットという優しさもあつたけど

「……………木崎に言われると従うしかない……………太陽はもういやだ
……………それとコレを渡しておくよ、それじゃお休みくく」

去る前にポケットからトリガーを取り出しオレに渡して地下に
戻って行った

「あくもう……………遅れたけど合格おめでとう、そのトリガーは私とロイ
で一緒に仕上げた護くん専用のトリガーだよ！ロイが注文どおりに
作り上げてくれたから。迅さんがなんとしても今日までに完成させ
ないと干物にされるぞくって、なんで脅迫なんてするのか分からな

かったけど合格祝いなら納得がいくよ」

「マジで!!? やった〜オレだけのトリガー」

チケツトをもらったときと同じように上に掲げて喜んだ

ボーダー隊員はトリガーは1つだけだが、オレ用のトリガーを開発している間は玉狛にある予備のトリガーを使っている、だけどこれからは自分だけのトリガーで戦える。慣れるには時間があるがそこはレイジさんたちが相手をしてくれよう

「ざっ、そろそろ食べようか」

宇佐美がそう言っただけが椅子に座り林藤支部長の「合格おめでとう」言葉と共に食べ始めた

途中宇佐美に借りていたトリガーを返してコンソメスープを飲むとした時、迅が「そろそろだな」と呟くとドンツとドアが乱暴に開ける音がして、皆がそつちを向くと肩で息をする小南がいた

「はあ……はあ……何で……先に食べてるのよ……?」

「小南が来るまで待っていたら折角の料理が冷めるだろう?」

途切れ途切れに言う小南に迅が答えた

「……………それも……そうね、はい、護。合格おめでとう、まあアタシが教えたんだから合格して当然だけど」

手に持っていた袋を勢いよくオレに差し出して言ってきた

祝っているのかバカにしてるのか分からないが、とりあえずありがとうと言った袋の中を覗くと有名な洋菓子店のどら焼き、イチゴ大福が5つずつ入っていた。使っている材料も良いやつだから1つでもそれなりに高い、ざっと計算すると3890円くらいのはずだ

「この店って桐絵ちゃんが入ってる店の!?! しかもどら焼きとイチゴ大福じゃないスか〜」

「まあ、これくらい当然よ」

腰に手を当てて言ってきた、相変わらず態度がでかいなあと思いつつももう一度礼を言う

その後、玄関のドアが開く音がして玉狛のメンバーは殆どが揃っていて客でもなければ残りの烏丸だろうと思った

オレの予想通りというか当たり前だけど烏丸がやってきた

「護、合格おめでとう、これオレからの合格祝いだ」

「ありがとーとりまるく……おお、これはすごいッス」

烏丸から渡されたのは水色の模様が描かれたガラスコップだ、しかも説明を聞くと「サンドブラスト」という技法で、ガラスコップに砂研磨材を吹き付けて、マーキングしていないところを削って白くしていき、終わったならマーキングしたところを剥がす。するとそこだけ元のガラスコップの美しさが残るようで烏丸が言うように玉狛支部のマークと「護」の文字だけガラス本来の透明さを残していた

「以前に家族旅行で行った時体験したのを思い出したんです、護の成績なら確実に合格するだろうと思つて一昨日の非番のときに作ってきたんです」

「ありがとッスとりまるく、一生大事にするッス」

「そうか、なら作つたかいがあつたな」

その後からは烏丸も加えて宇佐美と迅が作つたご飯を食べた、オレの専用トリガーが完成したと知つた小南は模擬戦しようと言つてきたが、防衛任務の後にまた戦うのは精神的に疲れるから明日と言つた

翌日

日が昇り始めている朝は少し冷えたがベッドから出てジャージに着替えると支部を出る、思つたとおりそこにはレイジさんが屈伸をして準備運動をしていた

「おはよう護、いつも通り準備運動したら走るぞ」

「はいッス」

レイジさんに言われたとおり体を動かして準備運動を済ませると一緒に走つた

玉狛支部は元々水質調査のために建てられたのだがそれをボーダーが買い取り、玉狛支部として利用している、そのため川沿いを走つて橋を渡れば自然とランニングコースになる

迷う事も無いから玉狛支部に泊まつたときはいつも走っている

1時間かけて走り終えるとシャワーを浴びて汗を流し、オレとレイジさんはキッチンに立った。本当なら今日はレイジさんの当番だが今回はオレもいる為手伝ってもらおう事にした

メニューが半分ほど出来上がったところで新聞片手にやってきた林藤支部長と、玉狛支部のマスコットとも言えるカピパラの雷神丸と乗ったまま寝ている陽太郎が運ばれてきた

その後は烏丸、小南、迅、宇佐美と来ていつも通りの玉狛時部の朝の風景になった

今日は土曜だから学校が休みで朝食を食べ終えた途端、小南が模擬戦と言ってきたが叔父に作った弁当を届けるためにこれから出ると言った

わざわざ夜中に友達にメールして手伝いが遅れると言ったらしい、「小南ごめんッス」とだけ言って本部へ向かった

3話 最初の相手は風間隊

オレは昨日と同じように本部の本部長室に入った

「ん？どうした護？」

誰かが入って来たのを知ると動かしていた手を止めた顔を上げてオレを見た

「はい、今日の弁当ツス」

「ありがと、いつも助かるよ」

叔父さんは中身が入った弁当を受け取ると代わりに空になった弁当箱をオレに差し出した、忍田本部長と一緒に過す事になって分かった事はまず食生活は適当だった事

最初のご飯は黒い炭と思うほど黒かった卵焼き、しかもそれ以降はレトルト：インスタント：惣菜と料理が苦手だという事

これでは体が壊れると代わりにオレがキッチンに立つことになったが、それでもやはり最初は四苦八苦したが、風間さんと一緒にポーターに入隊してきたレイジさんの趣味が料理だということを知ると頼んで料理を教えてもらった

それからは叔父さんの昼は弁当になり、朝と晩は自宅で食べるのだが昨日みたいに泊まつたりなんて事も少なくなる

「それと護、今日はトリガーを使っていないだろうか？」

「もう使わないツス!!太刀川さんと同列に扱われるのは嫌だから!!」

どう言う意味なのか聞かれて、昨日の風間さんとのやり取りをそのまま話した

「……………そうか……………ならもうするなよ」

「わかってるツス!!つと、それと昨日支部長ゴが合格祝いどころをくれたんす」

昨日の合格祝いのことを思い出したオレは、ポケットから林藤支部長からくれた温泉の宿泊チケットを見せた

「たまには叔父さんとポーターの事は忘れて楽しんで来いって言うってたツス」

「そうか林藤さんが、日付は1週間後かそれまでには行けるように

するよ」

その後少しだけ朝見たニュースの事とか学校の事とか話をしてこれ以上邪魔するわけにはいかないと部屋を出た

オレは本部を出て玉狛支部に行き、まだ使ったことのないトリガーの訓練をしようと向かった

玉狛支部には殆ど人がおらず小南は文化祭の準備に、烏丸はバイトに、レイジさんは大学に向かい林藤支部長は本部へ会議に行ったそうだが、残って課題とか片付けている宇佐美がオレに何処へ行くのか声をかけてきた

「これから訓練室に行くツスよ」

「そう？なら私もいくよ、説明とか必要でしょ？」

課題を片付けて宇佐美と一緒に地下の訓練室に行った

「トリガー起動^{オン}」

トリオン体に換装を終えたオレには仮のトリガーと違い、弧月の代わりに右手にはオレ専用の大きな槍型トリガー^{はるかぜ}が握られていた

「おお!!カッコイイツス!!」

「私もそう思う、ロイ^{ろっち}の話だとガンダムとか言うアニメの作品に出てくる武器を元にしたらしいよ。先端から弧月が出るよ」

宇佐美の言うとおり春風を起動すると先から弧月が出た

この世界に来てロイは日本料理：アニメ：マンガなど大層気に入ったようだ、何よりBL作品があることに一番驚いていた

「それじゃ中に入るよ、適当に的とか出してツス」

「いいよ！それならアタシの『やしゃまるシリーズ』はどう？」

宇佐美が独自にプログラミングしたモールドの改良版、速度重視、硬度重視など戦闘訓練するにはいいが

色とネーミングセンスがなあ……………

これまでに宇佐美のズレたセンスの被害者は少なくない、とくに以前所属していた風間隊の3人は苦勞したそうだ

「今回はいいツスよ、トリガーの練習がしたいだけツスから」

「んんっ……………分かった……………」

悔しそうに『やしゃまるシリーズ』が入った記憶媒体をしまった

『それじゃスナイパー用的を出すね』

仮想戦闘空間が作られると、それと同時にボーリングのピンと似たような形の的が出現した、頭と胴と思われる表面には的が描かれていた

「ソードモードはさつき試したから次はガンモードだな」

『それならそのまま撃ち出す感じでいいよ、弾は——』

その後の訓練は順調だった、試しに通常のモールモッドと結局だけど宇佐美の『やしゃまるシリーズ』も出してもらった。初めての武器で扱いに苦労はしたが何とか撃破した

その日の夜8時頃に防衛任務も終わり帰ろうかと思ったそのとき、ポケットに入れている携帯が着信を知らせる曲が鳴った、画面を見ると掛けてきた相手は風間さんだった

「もしもし?」

『護か、今空いているか?』

昨日に続いて今日も予定を聞いてくるあたり1つの事に思い当たった

「もしかして模擬戦ツスか?」

『ああ、空いているなら相手を頼みたいんだが?』

「いいツスよ、これから本部に行きますね」

『無理言つてすまないな、本部長に言つてランク戦のブースを借りているからそこで待つてるぞ』

「了解ツス」

電話を切つて帰ろうと思つていた足を本部に向けて歩き出す

20分ぐらいして本部に着いて、風間さんが借りていると言つたら

ンク戦のブースがある通路には風間隊の4人が待っていた

「遅いよ、もっと早く来てよ」

「さっきまで任務だったんだからしょうがないだろ、菊地原」

耳が隠れるほど長い髪が特徴で口が過ぎる少年は菊地原士郎きくちばらしろう、ケンカに発展しないようにいつも菊地原を抑える役割をしているのが歌川うたがわ遼りょう

「早速で悪いがはじめるぞ」

風間さんが急かすように言うと先にブースに入っていた

「はじめまして風間隊のオペレーターの三上みかみかほ歌歩かほです。今日はよろしくお願いしますね」

風間隊のオペレーターがオレに挨拶してきた、いつもは風間さんたち3人しか知らなかったからオペレーターに会うのは今回が初めてだ

「おー忍田護ツス、よろしくツス」

「そんな奴の相手してないで早く行くよー」

菊地原が相変わらぬ口の悪さで三上に入るように促してきた

オレは隣のブースに入りトリオン体になって準備は完了すると風間隊が使っているブースから通信が入った

『今回は遠征任務を想定している、ステージ選択はそっちに任せる』

『え〜こっちで選びましょうよ？そのほうがボツコボコに出来るし』

『遠征任務では相手の方にアドバンテージがある、だから模擬戦では護に選んでもらう』

端末の先で風間さんと菊地原が少し話をしていたが、風間さんの言い分が正しいと唸るような声が聞こえてきた
「分かったツス」

——— ランク戦ブース：風間隊

「今回はどう攻めます風間さん？」

「当然最初からカメレオンで行く、今のところ護のサイドエフェクト

は1度トリオンを視ないと効果は無い」

「だけどあつちはガンナー用トリガーを使って自分の周りに撒くんですよ？攻撃するのはカメレオンを解かないといけないじゃないですか？」

最初に歌川が戦術をどうするのか風間に聞くと以前と同じ策で行くようだ、だがそれに菊地原は文句を言うが他に手が無いのも事実「歌川、今回はアレを使え。それで護の壁を削るぞ」

風間隊の3人は護攻略のキーマンを歌川に委ねた

戦闘が開始されフィールドに転送された風間隊はまず部隊の合流を優先、ランク戦の仮想エリアでは隊員1人1人が離れた場所に転送されるため当然合流が優先される

『三上、護から離れている場所に合流できるポイントを調べてくれ』
《了解です。このフィールドで最適なポイントは……こことここですな》

三上が指定したポイントは護から凡そ北西に200mと北500mくらいのところだった、護が選択したフィールドは高層ビル群が戦闘フィールドの9割を占めていて行動範囲が限定される、特に機動力を生かして奇襲が主な戦い方の風間隊では攻撃の方向が絞られるフィールドは弱点ともいえる

風間はリーダーで2人の位置を見て合流場所を指定した

風間隊が合流し始めている頃、フィールド中央で周囲に超スローのガンナー用トリガーを展開して風間隊がやってくるのを待っていた「どう攻めて来るかなく楽しみだなく」

毎回オレのサイドエフェクトの弱点を見つけようと様々な手で攻めてきたが未だに判明していない、今のところ分かっているのは忍田本部長、太刀川隊、嵐山隊、迅、玉狛第一とA級チームには殆どバレている

未だに風間隊だけが分からないのはセットしているトリガーが理由だけ

今回はどう攻めてくるのか考えようとしたところで想定外の攻撃が後ろから飛んできた

「ツツ!!この攻撃……」

予想以上に数が多くて撒いた弾も当たって相殺されたが、残りは間を通ってきてオレに命中した

ガンナー用トリガー!?!誰が!?!

後ろを向いても既に誰も居らず撃つてすぐに隠れたようだ

すると次の瞬間いきなり目の前に風間さんが現れ右手に出したスコーピオンでオレの首を切ろうとしたけれど

「ツ!?!」

「惜しいッスね風間さん、さっきのはマジでビビったスよ?」

オレのメイントリガーにはスコーピオンをセットしており、顎と鎖骨を繋ぐように出して風間さんの攻撃を防いだ。すぐにγガンマを起動してトリオンキューブを出して無理矢理風間さんを後退させて距離を取らせた

オレは春風に付けられているグリップを左手で持ち右手で柄を持って風間さんに狙いを定めると撃つ

「ツツ!?!……なんだ!?!」

春風から撃たれた弾丸をシールドを展開して防いだがシールドが勝手に消滅した

トリガーの故障なのかと原因を考える暇もなく2発目が撃たれ今度は防がずに避けた

『三上、オレのトリガーはどうなっている?シールドが勝手に戻ったが?』

『はあ?何言ってるんですか風間さん、勝手に戻るわけないじゃないですか?それこそトリガーが故障でもしない限りありえないですよ』
菊地原が即座に違うと言うが風間のトリガーを調べた三上は違う

と答えた

《いえ、トリガーの故障ではないです。ただ、どういうわけか風間さんのメイントリガーにセットされているシールドの接続が切れているんです》

『切れている?』

《はい、風間さんの使用命令は届いているんですが、途中で「何か」が阻んでいて使えなくなっているみたいなんです》

『……………おそらくあのトリガーから撃つ弾丸が原因だろう、あくまで仮定でしかないがトリオン体に命中したら全トリガーが使用できなくなるはずだ。菊地原、歌川絶対に当たるなよ』

『わかりました』

『トリガーが使えなくなるとかチートじゃん、まあ、でも当たらなければいいだけけど』

ついさつきシールドで防いだ風間に聞こえていてもお構い無しに言う菊地原に歌川は出ないはずの冷や汗が流れた気がした

今度はオレが前へ飛び出し春風を振る、風間さんはそれを鍛えた反射神経で避けながら攻めるがメインにセットされている春風からスコーピオンに切り替えて防ぐ。お互い防がれたり防いだり避けたりと中々手傷すら負わせられない

そんなとき風間さんの攻撃を避けようと後ろに跳んだらいつの間

に接近したのか歌川が手にガンナー用トリガーを出して構えていた

『アステロイド通常弾』

「っ!?しまっつ……………」

シールドを持っていないオレはもろに被弾した

「つくー……………まさか歌川がガンナー用トリガーを装備しているなんて……………オレへの対抗策ツスか?」

「いや、訓練生の頃からからだ。今まで使わなかったのはこういうときのために使わないように言っていたからだ」

スコープオンを出しながら歩いて近づいてくる風間さんが言ってきた、確かにこれは想定外だと思った

風間さんは隊長としても優秀で、隊を作るときも当時孤立していた菊地原を誘ったり利用価値が高いと早い時期から見出していた

歌川のアステロイドは当たり所が悪く片足を無くし地面に突っ伏すような状態になり、ここからどう凌ごうかと策を巡らせた

「……………エスクード!!」

ワザと声を大きく言って警戒心を上げさせて玉狛独自の防御壁を風間の足元に出現させた

オレの手から薄緑に輝く軌跡が地面を這うよう進み、その先に壁が出たため2人の視線は自然とそっちに向いた、オレはその隙を逃さずガンナー用トリガーで歌川の足に傷を負わせた

後ろに飛んで避けた風間さんは援護に行けず、地面から出た壁が囧だと気づいたときには歌川は既に手傷を付けられていたが、被害は小さくお互いオレから距離を取っていた

「大丈夫か歌川？トリガーに変化は？」

「すみません風間さん……………全トリガーが使えなくなりました」

『何やってんだよ歌川、まんまと引つかかって』

傷は大きくもないがトリガーが一切使えなくなった歌川は必要以上におれから距離を取った、無防備の状態からは足手まといにしかないからだ

「風間さんの予想が当たりましたね」

「ああ、中々に厄介だ。おまけにサイドエフェクトの弱点すらまだ分かっていない」

他の人から聞けばいいだけなのだが風間さんはそうはしなかった、プライドが高く自分で弱点を見つけると決めている。とある大学生のようになるべく他人の世話になりたくないという子供染みた意地が主な理由なのだが

欠けた足をスコープオンでフィギュアスケートの靴のように形を変えて足の代用とした

すると前後にいた風間さんと歌川が突然飛んで逃げた、追いかけてよ

うとしたら地面に影が出来て段々と大きくなっていき、上を見るとどこから壊したのか電柱の一部がオレに向かって飛んできた

「ちよ……なんスカソレーっ!!?」

体を捻って避けたがそこでしまった、と思った

落下した電柱は土煙を上げてオレの視界を塞いだ、回りを見ても風間さんと歌川の2人を見失ってしまった

体を捻ってもギリギリで当たるかと思ったオレは目を咄嗟に瞑つてしまったため追跡できなくなってしまった

『どうだ三上、護に動きはあるか?』

《いえ、ないです。どうやら隊長たちを見失ってしまったみたいですよ?》

『見失う?護のサイドエフェクトは障害物があっても位置が分かるはずだが』

『いいじゃないですか見失ったんなら、これでまた奇襲が出来ますよ』

先ほどの電柱は菊地原が投げ飛ばしたものだ、歌川が逃げる時間が稼げればいいと思っただけの攻撃だが、まさかそれがオレのサイドエフェクトの追跡から逃げる事が出来るとは幸運だった

4話 清藍祭（せいらんさい）

風間隊が始めて護からの追跡を逃れた

これは偶然だとしても大きなチャンスだが風間は思案していた、「なぜ護から追跡を逃れたのか？」

それと同時にこのチャンスをどう生かすか巡らせていた

（菊地原が歌川を逃がそうと電柱を投げた、これに大きな理由があるのか？）

電柱を投げても菊地原はカメレオンを起動させたままだった、カメレオンの特性上他のトリガーと同時に使用はできない、使おうと思っただけなら解除しなくてはいけない

つまり菊地原は素手で電柱を壊して護に投げ飛ばしのだ

そのあと舞い上がった土煙の中を進もうとした菊地原を止めて歌川と一緒に少し離れた一軒家に隠れている。バググワームを起動しているからリーダーには映らない、歌川を除いては

「これからどうします？歌川はまだトリガーが使えないんでしょう？」

「ああ、全く使えない。すみません風間さん」

「反省は後だ、ここは遠征先の近界ネイバーの国だということを忘れるなよ」

「はい」

「今はこの状況はどう打開するかだ、何が切欠なのかは正確には分からないが護のサイドエフェクトから逃れることが出来た。その逃れる条件が分かれば後はこちらのものだ」

「条件と言ってもただ電柱を投げただけですよ？そんな間抜けな条件じゃないですよ？」

電柱じゃなく瓦礫でも投げるだけで逃れるのなら護のサイドエフェクトは大した脅威でもなくなる。なのに護のサイドエフェクトはSランクの超感覚のままだ

このまま護のサイドエフェクトから逃れる条件が分からなければいつものように得意の接近戦を仕掛けるしかない

そのとき三上が通信を繋いできた

『あのあんまり関係ないかもしれないんですがいいでしょうか？』

「なんだ三上?」

『弟が狩り?のゲームをしていて』

「こんなときにゲームの話しは関係ないでしょ?早くしないと護がリーダーで歌川を見つげるかもしれないでしょ?」

菊地原の言うことも最もだが三上が何の関係も無くゲームの話しを出してくるはずが無い、風間はそのまま話しを続けるように言う

『それで強いモンスターとかでよくピンチになるんですけど、その時閃光手榴弾みたいなものを使ってよく逃げているって言ったのを思い出したんですけど、あまり役に立ちません……………よね』

「立たないよ、閃光手榴弾なんてトリガーは無いんだから」

「……………いや、ヒントは得た」

「どういうことですか風間さん?」

歌川は何処にヒントがあつたのか頭の中で思い返したが全く思いつかない

「閃光手榴弾は一時的に視界と聴覚を奪う殺傷能力が皆無の兵器だ。不意打ちだとしても条件反射で目を閉じてしまう、そこに意識的にではなく無意識に起こることだ」

「つまり、菊地原が投げた電柱がその閃光手榴弾の代わりとなって護に条件反射で目を閉じさせた、ってことですか?」

確証はない、だが可能性はおおいにあつた。その証拠にこれまで護のサイドエフェクトを見破ってきた隊には射手シューターがいる

本部長などの一部は除いてだが

「やばい!護が真っ直ぐこっちに向かってきてる!!」

突然菊地原が慌てて言ってきた。強化聴覚のサイドエフェクトの持っている菊地原は遠くの音が聞こえる為護の動きも分かっていた

速さを聞くと結構な速さで向かっているという、片足を失っているが最後に見たときにはスコープピオンを足の代わりにしていた

形や大きさを自由に出来る特性を利用した使い方だと感心もした。風間と菊地原はカメレオンを起動して姿を消した

『歌川は囷になれ、トリオン体自体の能力は失っていないから逃げに徹すれば大丈夫なはずだ』

『了解』

突然の囀命令に何の疑いも無く頷いた歌川。姿を消した2人は屋根の上に移動した

リーダーを見れば2つの反応が少し動いたがすぐに戻った

(風間さんと菊地原が動いたのか？歌川はまだ時間があるからカメレオンは使えないし……普通に考えて待ち伏せツスよね)

普段は姿を消して攻めに行くのが風間隊だが歌川を1人で置いておくわけにもいかないということなのか、もしくは歌川自身を切り捨てるつもりで囀役をさせるのかもしれない

(けど風間さんの思い通りにはならないツスよ！)

損失した足は既にトリオンの漏出が止まり片足で跳びながら風間隊が隠れているであろう民家の近くに着いた。メインをスコープピオンを起動して足代わりになると春風を両手で持つて振る

「食らえっ!!」

振った瞬間サブトリガーにセットしてある「屈折旋空」を放つ、そして返す要領で2回起動する。リーダーからは1階、2階、屋根の何処にいるのか分からない。だから1回目の屈折旋空を屋根にいと仮定して1つ目のトリオン反応に放つ、けど反応があった場所を過ぎても何も変わらないが次が屈折旋空の本領発揮

グラスホッパーと似た板が出現して2つ目の反応へ向けて反射したのだ。すると今度は菊地原を貫いた、運のいいことにトリオン供給器官を貫いていたのだ

「ちよ………旋空が曲がるって卑怯でしょ!?!」

緊急脱出する直前菊地原がそんな事を言い残した、曲がるのが卑怯なら隠れてこそこそするのにも卑怯だ

そんな事より2度目に放った屈折戦空だが見事歌川を貫いたのか緊急脱出した。残りは風間さんだが少し動くとリーダーから反応が消えた、どうやらカメレオンからバグワームに切り替えたみたい

(レーダーに反応しないんじゃないや探すのが面倒だよ……………)

頭の中でそんなことをボヤクが動かないことには意味がないと、反応が消えたところまで行く。でもそこには誰もいなかった、草を踏んだ後はあつたけど

オレはさつき歌川が隠れていた民家の屋根に上って周辺を見渡すが風間さんを見つけられなかった。道に下りて適当に歩くしかないと思つた

「あゝ面倒ツス!!風間さん何処ツスカー!」

そんな感じに暢気に探そうと思つたときだつた

「随分と緊張感がないな?」

「つつ!!?……………つぶな!」

いきなり後ろから声がしてのだ、すぐにその場から緊急脱出したいほど驚いたオレは瞬時に振り返つた、そこには右手にスコープオンを持って突こうとしている風間さんがいた

咄嗟にシールドを起動してギリギリで防御に間に合つたが

「それだけか?まだ甘いぞ」

「え?……………つつ!!マジっすか?」

後ろから軽く押されたオレは胸からスコープオンが飛び出していた、オレのスコープオンは足代わりに使っているからこれは風間さんののだということだ、そして後ろを見れば地面からスコープオンが湾曲しオレを刺していたのだ

これは風間さんが不意を突くのたまに使うもぐら爪モールクローという技だ

流石に足裏からスコープオンを出すなんて気付けるものは殆どいないと思う、油断していたオレも二刀流が戦闘スタイルの風間さんがスコープオンを一本しか持つていないのに早くに気付くべきだつた

「油断してしまつたツス」

「全くだな、菊地原と歌川を落とすたぐらいで勝てた気になるのは」

部屋を出たオレは風間隊と一緒にボーダーの地下通路を通つて車

を停めている駐車場まで向かっている

緊急脱出ベイルアウトした後スマホにメールの着信に気付き開いてみれば叔父さんからだった、内容は駐車場で待っているということだ

当然顔を合わせれば菊地原は曲がる旋空について文句とか卑怯だとか言ってくるがそんなのは知らないと無視することにした、一々答えていたら面倒だからだ

「あの曲がる旋空は玉狛の？」

「そうツスよ、オレのサイドエフェクトを利用した旋空ツスよ」

歌川が確かめるように聞いてきた問いかけに答えた。オレのサイドエフェクトの追跡は建物越しても見えるため、障害物を避けるように放てる旋空の改造版を開発したのだ

だがこれは変化弾バイパーと同じように予め曲がる先を設定して放つから避けられてしまつてはそれまでだ

「なるほどな、お前のサイドエフェクト用に改造か。自分のものにするばかなり強敵になりそうだな」

屈折旋空の説明を聞いた風間さんがそう言ってきた。どうやらオレがまだ春風など専用に変えたことに日が浅いことを見抜いたらしい。そしたら双月を使っている桐絵ちゃんや弧月（槍）の米屋と比べたらまだまだだと言われた

その時車のクラクションがなりそちらを向けば叔父さんの車があった、どうやらいつの間に駐車場まで来ていたらしい

「それじゃ護くんまたね」

「はいツス、三上も訓練頑張るツスよ」

「ありがとう」

三上と短く挨拶をすれば風間さんの車に乗った、オレも叔父さんの車に乗ったが1人で帰ればよかったと後悔した

「護はああいう子が好きなのか？」

「つぶ!?いきなりなんスか!?!」

「いや、風間隊のオペレーターと仲が良さそうだったからな、気があるのかと思つてな」

「違うツスよ!!三上とは今日初めて会ったんス!気があるとかそういう

うんじやないツスよ」

「ほう？そのワリには顔が赤いぞ？」

「つゝ叔父さんがそういう話しをするからツス!!!」

オレが女子を話しをしているのを見るだけでこうして気があるのかとからかってくる、女子が嫌いとかそういううんじやないけど

(オレが……人を殺したオレが幸せになっていいはずがないんだ……)

それは母さんを殺された復讐のために侵略してくる近界民ネイバーを沢山殺したオレが自分自身に課した戒め。オレに殺された人たちも人生があり、家族や友人恋人、これからの幸せを奪ってしまった。そんなオレが幸せになっていいはずがない

日が上って翌日の朝からオレは玉狛支部に来ていた、いつもなら今日は防衛任務とかなんだが予定を変えて木崎隊4人全員非番の日にしてもらっている。宇佐美は友達と買い物とかで玉狛には来ていない

「よし、みんな準備は出来たか？」

木崎が聞くと護、烏丸、陽太郎はおおーと声を上げて答えた

今日は小南が通っている学校の文化祭の日だ、4人は木崎が運転する車に乗り込み学校に向かった。因みに烏丸は文化祭小南を笑いにを楽しむに有給を使ってバイトを休んできたのだ

お嬢様学校に通っているその学校の歴史は20年と少し古く建物は綺麗に保たれていて文化祭の今日はアーチやら簡易テントでの出店やら展示、ステージイベントとか催されるため色鮮やかに彩られている

「おおーここがこなみのがっこうか」

「小南のじゃなくて小南が行っている学校だ」

陽太郎が少し的外れな言葉に木崎は訂正を入れた

「それにしても今年も派手ですね」

「そうツスね、バルーンまであるなんて凄いツス」

烏丸とオレがそう言うのも無理はない、屋上からは風船が飛んでいてその下には「ライブイベントは午後13時から!!」とか「清藍祭20周年記念!!」とか垂れ幕で宣伝していた

3人は20周年記念の文字を見て去年より派手に彩られた学校に納得がいった

「恐らく予算がいつもより多く出されているんだろう、遅い時期に開く事になったのは準備など考慮しての事だろうな」

いつまでも眺めているだけでは人の邪魔になるからまずは小南のクラスに向かう事にした

「小南先輩のクラスは知っているんですか？」

「もちろんツスよ、桐絵ちゃんのクラスは2―4組だよ」

「流石スね護」

褒められたはずなのにオレは何故かバカにされたように聞こえたのは気のせいかなとそんな考えが思い浮かんだ

玄関で来客用のスリッパに履き替え校内の見取り図と時間ごとのステージイベントの一覧が書かれたパンフレットを受け取りまずは小南のやっている2―4組の「メイド喫茶」へ足を運んだ

「ねえねえあの人カッコよくない？」

「あの大きな人もいいかも」

「あの小さい子弟かな？可愛いね」

「私あの髪が黒い人見たことある！ファミレスでバイトしている人だよー」

「メガネの男子もいいなあ、わたし付き合ってみたいよ」

「声かけてみなよ」

「やだよ、恥ずかしいじゃん」

向かっている最中そんな話し声が聞こえオレは少し落ち着かなかった

木崎と烏丸は慣れているのかいつものポーカーフェイスは崩れない、確実に聞こえているはずなのに

「おれにもとうとう『もてき』がきたな」

「いや、陽太郎は子供だから可愛いと思われているだけなんスよ？モテ期じゃないツスからね」

進む道にいる女子がそう言うのも無理はないだろう、3人は普段の格好と違い外出用に少し整えてきたのだ

木崎は上は長袖のTシャツにブルゾンを重ね着してデニムのズボンを履いている、烏丸は何を着ても普段からモテているのに今日に限ってはニットシャツにダッフルコート…ジーンパンといつもより少し高めの服装だ

オレはパーカーの上にニットジャケットを重ね着して襟からフードを出している、ズボンはカーゴパンツを履いて度が入っていない伊達メガネをかけている。陽太郎はいつも通りの格好だ、木崎に作ってもらったお気に入り帽子もちゃんと被っている

とりあえず女子達の声には耳を傾けず木崎たちと一緒に行くところ的地の2―4組に着いた

白とピンクを中心に赤、青、黄、黒などで飾り付けされた教室はTVとかで見たことがあるメイド喫茶のようだった

ドアを開けるとドアベルを付けていたのかリインリンと鐘が鳴り奥からメイドの服を着た女子がやってきた

「お帰りなさいませ〜主……………な……………なんで来てるのよ!!」
いつも下ろしているだけの髪が今は後ろで一纏めにされポニーテールにして頭にはフリルが付いたカチューシャを付けている小南が現れた

もう慣れているのか定形文を言っている最中に見た”ご主人様に驚きが隠せなかった

「……………なんか……………桐絵ちゃんいつもより可愛くなっているツスね……………」

オレはほぼ無意識にそんな事言っていた、それを聞いた小南は一瞬にして顔を真っ赤にした

「大丈夫か小南？熱でもあるのか？」

「別に無いわよ!!」

心配そうに聞く木崎にメイドとは思えない言葉に近くにいる人が

見てくる

(それにしても見事に……………ウン)

改めて教室の中を見ると巷で噂されるオタクという男共が多くいる、客の8割くらい

「と……………とりえず席に案内するわ」

「小南先輩……………オレ達が今”ご主人様”だってこと完全に忘れてますよね？」

煽っている、完全に小南を煽って無理矢理にでもメイドをやらせてたいようだ

烏丸は以外にムツツリなのかと思っていたが視線を下げて手を見ると携帯を握り締めていた

タイミングを見て撮るつもりなんだろう

(うわああ……………暫くは玉狛に平和が来ないツス……………)

そんな事を思いつつも席に案内されてオレとその隣に陽太郎、向かいに木崎と烏丸が座った

「……………注文がお決まりになりましたらいつでもお呼び下さい”ご主人様” ツ……………」

怒気を含めたセリフにちよつと残念と思いテーブルに置かれているメニュー表に目を通す

「ねえねえ桐絵、あの人たち知り合い？カツコいいじゃん!!」

「私あの髪が黒い人と付き合いたい」

「はあはあ……………隣同士で座って……………はあはあねえあの2人はもしかして付き合っているの？それともメガネの男子と誰かがあの男前の人たちと？あくもう私お腹いっぱい!」

小南が準備室に戻ればクラスメイトに話しかけられた、一部は全く関係ないことを聞かれたけど

「同じボーダーの仲間よ、つく今日が非番だって事忘れてたわ!」

木崎から小南の文化祭を考慮して忍田に今日が休みになるように休暇申請をしていたのだ、ついでに言えば護たちが来る事も聞かされ

ていた。それを忘れていたのは接客のセリフを覚えようとしてたからだ

「あつ桐絵、注文みたいよ」

「ご注文はお決まりですか”ご主人様”」

「ごなみ、おれは”きゅんきゅんおむらいす”がたべたいぞ」

「そうだな、メイド喫茶で何を食べたらいいのか分からないからオレはとりあえずサンドイッチで頼む」

「それじゃオレは愛情クルクルスパゲティで」

「……………メイドちゃんの……………スキスキパウンドケーキ……………を／＼」

オレのメニューを聞いた小南は思いつきり動揺してた、注文した「メイドちゃんのススキパウンドケーキ」は2枚のホットケーキが重なって1枚1枚チョコレートソースで愛情表現を表す言葉や絵をメイド役の人が書かないといけない

「ま……………護……………アンタサイテー」

「ち……………違うツスよ桐絵ちゃん!?これは……………その……………」

「罰ゲームツスよ小南先輩」

「罰ゲーム?」

いつの間にか烏丸が昨日オレが風間隊と模擬戦をして負けてきたと知っていた。慣れないトリガーだったとは言え負けたのは事実で、陽太郎が「まけるなんてなさけないぞ!バツゲームだ!」と言って烏丸もそれに乗ってきて、強制的にメニューを決められたのだ

「……………情けないわね護」

「うるさいツス!!」

5話 人を煽るのは程々が良い

「お……お待たせしましたご主人様」

注文を受けた小南がトレーに乗せた品をそれぞれテーブルに置いた、心なしか小南の顔が赤い気がするのはオレが注文した「メイドちゃんのスキスキパウンドケーキ」のせいだと思った

「そ……それじゃメイドの私が……あ……あ……あいを……込めて書きますね」

そう言つてまず陽太郎のオムライスに「♪ようたろう♪」と書いた「おおーこなみすきだぞ」

陽太郎は親指を立ててサムズアップをした、それに「はいはい」とメイドらしからぬ返しに烏丸が指摘するがそれを無視して今度はオレの隣に来た

「ご……ご主人様、何を書きましたようか？／＼／＼」

陽太郎のオムライスに書くときよりさらに赤くなった顔に大丈夫なのかと思つてもそれを口に出来るほど余裕が無かった、それは――

「ほら言わないとダメツスよ護」

「ツ……………『スキ』と……………『？』ツス／＼／＼」

「……………一応聞くけどそれ罰ゲーム？／＼／＼」

確認する小南にオレは顔を俯かせながらコクリと頷いた、いつ暴れてもおかしくない小南に烏丸は加減を知らないのか追い討ちをかける

「チャンスですよ小南先輩、護に――」

「とりまる!!あんたは黙ってて!!」

咄嗟に大声を上げたから教室にいるお客や控え室にいたクラスメイトまで気になって覗いてきた

「と……とりあえず書くから!!」

持っていたケチャップをチョコレートソースに持ち替えて1枚目に『スキ』、2枚目に『？』を書いた

「それではご主人様、ごゆっくりどうぞ」

可愛げも無い感じで言うときさっさと奥の控え室に帰ってしまった

「やりすぎだ京介」

「すみませんッス、でも小南先輩ももう少し素直になったほうがいい
と思ったんですけど」

「ん？なんの事ッスかとりまる？」

烏丸の言ったことに何のことなのか、疑問を浮かべながらパウンド
ケーキを食べるオレは聞くがそれを見た木崎は「……確かにな」と溜
息交じりで答えた。小南が赤くなる原因であることを知らないオレ
は蚊帳の外に居る気分だった

(このケーキおいしい)

4人は食べ終わると慣れない空間に長居はしたくないというのが
本心で会計を済ませて次は展示コーナーに向かった。1―6組は写
真展の様で文化祭の準備の様子を撮った写真を並べられている、1枚
1枚に一言書かれていたりセリフのように吹き出しが書かれたり見
てて面白そうだと思った

「来年にはオレも高校で文化祭ッスか〜楽しみッス!!」

まだ楽しむ側のオレは来年から通うことになる高校での文化祭が
今から楽しみになってきた

今度は写真部の展示写真を見ると同じ文化祭の様子を撮っている
という意味では同じだが違うのは歴史だった。写真部は過去に撮ら
れた文化祭の様子の写真を厳選して「清蘭祭20年の歩み」という題
目で展示されていた

映っている写真には今と違う本当に歴史を感じさせる展示物や撮
影の様子、校舎の増改築など様々だった

「さて、次はどこに行きますかね？」

「あ……桐絵ちゃん」

写真部の展示を見て次はどこに行こうかと迷っていると休憩中な
のか友達らしき女子と楽しそうに歩いてきた、服装がメイドなので直
ぐにわかった

「う……護……」

「すぐに護の名前を出す辺りやはり――」

「とりまるアンタさつきから五月蠅いよ!!」

「いや、桐絵ちゃんのほうが声が大きいツスよ……」

さつきのメイド喫茶でも小南は声を上げて注目を浴びた、慌てたり怒ったりすると大声を上げてしまうのは昔からのクセだ

「……ん？立ち止まっているのは邪魔になるからここに入るか？」

木崎が行ったのは「ドキドキ恐怖のパニックロード!」といういかにもアレを連想させるタイトルにオレは青ざめた

「え？……マジで？……コレって……アレ……だよね？」

「もしかして護、コレが怖いのか？以外だな」

「ちっげえよ!!」

「じゃあいいツスね、えくとあつ」

つい売り言葉に買い言葉で答えてしまったオレは直ぐに後悔してしまった、けど男である以上「お化けが怖い」なんてところは見せたくなくて意地になってしまった

入ろうと入り口を見た烏丸はプレートに書かれている文字を見るとコレはチャンスかと思つた

「木崎さんここ『2人で1組』しか入れないみたいですよ？どうします？」

「そうか……ならオレは陽太郎と入ろう後は……」

「アタシこの人と入りたい!!えーと……」

「烏丸です、よろしくツス」

木崎も少しくらいはいいだろうと烏丸の考えに乗り陽太郎とペアを組む事にした、烏丸と組んでもよかつたがそれだと陽太郎と小南の友達と組む事になってしまふ、支部長ホスから預かつてきている以上危険だなど思うことはさせないようと思つた

烏丸が組むペアを小南かオレか迷っていると即座に友人が名乗りを上げた、これも予想通りで軽く自己紹介すると列に並んだ

最後に残ったオレは自然と小南と組む事になった

「どうしたスカ桐絵ちゃん？早く並ぶツスよ？」

「わ……分かつているわよ!!／／／」

オレは小南も怖いのか再び赤くなつた顔に風邪でもあるんじゃない

いかと不安になった

「お次のお客様どうぞ」

20分並んでようやく小南…オレペアの番になり100均で売っている小さいペンライトサイズのブラックライトを1本渡され暗幕をくぐって教室の中に入った。もうすでにオレは帰りたいた気分だった

「……護、怖いなら怖いって言いなよ、そんなに震えてたんじゃこけるわよ?」

「ベ……別に怖くなんか……ただ……寒いだけだよ!!そう、寒いだけツス!!」

「あのね……言うほど寒くないわよ?」

「イヤアアアア!!何!?何!?今!冷たいのが!!」

小南の手を握りながら歩いているとベニヤ板で飾られた墓やブラックライトに反応するインクで描かれた絵が人魂に見えたり最初から震えていた、そんな時に首にピタと「ナニか」が触れてそれがヌメつとして冷たいと感じると思わず叫んでしまった

「五月蠅い護!!ただのこんにやくでしょ!ほら!!」

ブラックライトは道を照らすための道具じゃないからよくは見えないが、照らされたものを恐る恐る見ると小南の言うように確かにお化け屋敷の定番である「こんにやく」が吊るされていた

「……うえ……あ……ほんとだ」
こんにやくなんかであんなみつともなく叫んでしまった自分を何度も切つてベイルアウトさせたかった

先に行く小南に手を引かれながら進むと今度は後ろから「何か」が聞こえた

「ねえ……置いていかないで……ねえたすけて……ねえ」

「ツツツ!!」

そんな言葉が小さく聞こえ咄嗟に手に力を入れてしまった、「痛い!今度は何!?!」と半ば八つ当たりとも言葉をオレに言つて振り返ると「何かいる!?!」と言つてきた

ライトを後ろに向けるが何もいない

「?……………何もいないじゃない?空耳じゃないの?」

「ねえ……………置いていかないで……………ねえ、たすけて……………ねえ」

「いる!!?絶対いる!!いるって!!」

オレがそう言っても後ろには何もおらず上や左右にもいない、最後に下を照らすと顔の半分が焼け爛ただれて体のいたるところには肉が抉れた生々しい表現に加えて骨まで見えた

しかも下半身は膝から下が無い

「ツツ!!?イヤアアアア!!」

流石の強気だった小南もここまでリアルに再現された死体は叫ばずにはいられずオレの手を持って先へ急いだ

「はあ……………はあ……………なんでアソコまでリアルなのよ?本気で怖かったわ……………大丈夫護?」

「ツツ……………グス……………」

ここまで本気で泣くなんて親が殺された時以来だった、しかもホラー系がここまでダメだったなんて思わずオレにもこんな苦手なものがあるんだなって、そんなことを思った

「大丈夫だから、最後までアタシがちゃんというからもう少し頑張るよ」

「……………うん……………わかった……………ツス」

もうオレには意地を張るなんて事は頭には無く早くここから出たいと一緒にいる小南に頼った

(女の子に頼るなんて……………情けないツス)

2人がいた所は休憩地点なのか足元にライトが置かれていて周囲を淡く照らしていた、先を行くと今度は豆電球が中から照らしている提灯が置かれていて机には何か書かれていた紙があった『お化け屋敷は怖かったですか?YES or NO』だった

「コレだけ?何か謎解きみたいなのがあるのかと思った」

謎解きなんてやめて欲しいとおもった、もし解けないと出れないとかだったらすごく困るからだ。子供が道端でお漏らしをしてしまう

くらいに

アンケートに「YES」と書いてお化け提灯の口に入れると隣に置かれていた箱にカンツカンツと音がして蓋らしきものを開けるとオレンジ色のピン球があった

何か意味があるだろうと持って出口に行った、当然襲ってくるお化け役の人達に度々驚き隣で何度も叫び声を聞いた小南は耳が痛くなつた

「ほら護、もう出口だよ」

「……ホントだ……」

小南の言うとおり前を見れば光が漏れて出口まで来たんだとやっとな安心した、暗幕を潜ると先に行った木崎たちが待っていた。陽太郎は木崎に抱っこされて泣いていた

(やっぱり陽太郎も怖かったんだ……)

5歳児に仲間だと思ったオレは酷く小さい人間だと自分で思ってしまった

入り口の様子でオレがホラーが苦手なのは分かっていたが泣くほど怖いなんて思わず木崎と烏丸も驚いてしまった

「大丈夫か護？」

心配する木崎が聞くと首を横に振って大丈夫じゃないと、

「小南先輩そこで球とコレが交換できるツスよ」

烏丸が示した方を見ると勉強机に1人の生徒が立っていて、垂れている紙には『オレンジのピン球と飲食類お1人様1品タダ券交換です』と書かれていた

そこまでするなんて手が込んでいると思つてたら小南のクラスがやっているメイド喫茶でもタダ券を持ってきた客は何人か見た。何故全員じゃないかというところに入り口で「2人1組」と書かれていた。つまり1人では入れずタダ券が手に入らない

お化け屋敷↓メイド喫茶↓お化け屋敷↓メイド喫茶のタダ券を得る為の無限ループをさせないためだ、もちろんお化け屋敷もお金は取る、500円ほど。メイド喫茶はもつと掛かるけど

そのあと中庭の飲食スペースで一行は移動した、オレと陽太郎を落

ち着かせるためだ

「…………昔…………父さんがホラー映画を見て…………子供だったオレは丁度タイミング悪く捕食しているところを見てしまった…………それ以来…………ホラー系が苦手…………今でも…………」

泣きながら言うオレにそんなことがあつたら確かに苦手になると木崎と烏丸と小南の3人は納得した

「でもそれはフィクションでしょ、現実にかかるわれないから少しは平気になるでしょ？」

「それは…………分かつているんすけど…………でも…………でも」

「あくもう分かったわよ、ほらもう泣くなって男なんですよ！」

地雷を踏んでしまった小南は何とかしてオレを宥めようと必死になつた

オレが見たホラー映画とはゾンビ映画として有名なもので、その頃は1作目の人間を食べているところだった、音も肉の表現もあまりにリアルに作られていてその時は泣きながら母親に抱かれて寝た

大丈夫だと思つてもやはり恐怖心が勝り今でも見ることを極端に避ける、もちろんゾンビ系以外にも幽霊なども苦手だ。TVから出てきたり、知らない番号から鳴る携帯とか…………

大分落ち着いたオレと陽太郎はもらったタダ券で何かおいしいものを食べようと立ち上がった、そのとき丁度小南とその友達も休憩時間が終わるからと自分達のクラスに戻って行った

「護…………ホ——」

「とりまる、帰つたら『ちよつと』付き合え」

「…………拒否権は？」

「あると思うツスか？」

「…………分かりました、けど容赦はしないぞ？」

「安心するツス、春風の錆びにしてやるツスから」

オレの専用のトリガーなら勝機はあると思つていた烏丸だがまさかここまで怒るなんて少し後悔しているだろう。それにまた黒星が増えると思つた、烏丸とオレの対戦戦績は29勝4敗3引き分けとオレがかなり勝ち越している、引き分けも苦し紛れの反撃で得たものだ

その後陽太郎は近くにあったたこ焼きが食べたいと言いタダ券を使って買った、オレはとりあえず甘いもので落ち着きたいから（主に烏丸との制裁お仕置きのために）大学いもを買った（ほど良い甘きッス）

次に一行が向かったのは道場、ここでは剣道部、空手部、柔道部がそれぞれゲーム形式の出し物をしている

剣道部は参加者が竹刀を持ち部員から竹刀を落として3点取るか面：胴：籠手のいずれかに1発当てて1点取る、5分の制限時間内にいかに多くの点を取れるかというゲームだ。獲得した点数に応じて景品が貰える

空手部と柔道部は参加者の攻撃に部員が避けるもので当てた回数だけ点数になる

点数票を見たら剣道部が5点で空手部が2点、柔道部が3点だ。得点は20点が最大で景品は某リングマークが有名なタブレット端末（64GB搭載型）だ。因みに各クラス：部に5万円の予算が与えられている、武道系の部活がそれぞれ出し合って景品を買ったのだ

「おおくアレ欲しかったんスよね!!」

「お前が出たら部員が可哀想だぞ？ 剣の腕で勝てるやつなんて本部長か太刀川くらいだろ？」

現在本部のソロランク戦で1位の太刀川は忍田の弟子でその実力は折り紙付きだ

「まあいいじゃないッスか、今日は文化祭なんですし誰でも参加可能なんですよ？ たとえそれが中学生で剣が強くても良いんですから」
「……確かに京介の言う事も一理あるが……やるからには全力でいけよ」

「了解ッス!!」

「まもる、まけたらゆるさないからな！」

烏丸の後押しで木崎からの許可も下りて意気揚々と参加申し込みをしに受付に向かった

「それではこの竹刀を持って前へどうぞ」

オレの順番になると竹刀を受け取ると前へ出る、学校でも一応剣道部に入っているから靴下は脱ぐと防具を身に付けた剣道部員が出てきた

なんで防具を付けているかという部員は攻撃を一切しない、その代わり点を取られないようにしないといけないうい怪我もしいために着けている

旗を片手に持った審判が「スタート」と言うて反対の手に持っていたストップウォッチのボタンを押した、制限時間は5分

オレの初手は竹刀に当たって体制を整える間に籠手と胴を1回ずつ当たって2点ゲット

「まずは2点ツス」

開始して5秒も経たずに竹刀を弾いて籠手と胴で点を取りに来るオレに中学生だからと手加減は出来ない、相手になつて居る剣道部員はいつも試合に出るときみたいに集中したようだ、麵の奥の目が鋭くなった

「行くツスよ?」

そう言うて今度はオレは1歩踏み込むと相手の竹刀を1回転して上に飛ばした、剣道の技で「巻き技」という。

技をかけるタイミングが難しい巻き技をオレは簡単に繰り出して驚いている部員にすかさず面：胴：面：面：籠手：胴と連続で当てていき5点、それと竹刀を落としたから3点足して8点取った事になる、さっきの点と合わせれば10点。1分経つか経たないくらいでこれまでの最高得点の5点が軽く超えた

「竹刀拾つてもいいツスよ、そうじゃないと一方的で不公平じゃないツスか?まあこっちしか攻撃が出来ない時点で公平じゃないツスけど……」

剣道部員が竹刀を再び持つて構えるとまたオレが前へ出て面：胴：胴：籠手：胴：面：籠手：籠手：胴：面と、本当に中学生なのか怪しいくらい怒濤に攻めてあつという間に10点取られて合計20点を取った

「そ……そ……まで!!え……と得点が20点に達しましたのでゲーム

は終了とします」

残り2分30秒という所で審判が終了を宣言すると見ていた観客達は一斉にオレに拍手を送った、そんな中オレは審判に言った

「あのく残りの時間でこの人と試合してもいいツスか？」

「あ……えつとそれは……」

「いいわよ、残りの時間で今度は1本でも取ってみせるわ」

どうすればいいのか分からず困惑する審判に代わってオレの提案に剣道部の人が乗ると言った、サイズを聞いて近くに部員に予備の防具を貸してもらい今度はちゃんとした試合を始めることにした

「試合は1本先取でいい？」

「いいツスよ、本気できてほしいツス」

「当然よ」

それを最後に2秒ほど睨み合うと審判が「始め！」の合図と共にお互い上段からの振り下ろしで竹刀同士がぶつかり合った、すぐに離れるとオレは左下からの切り上げで籠手を狙ったがそれを竹刀で防がれた

オレの竹刀を上へ打ち上げて胴を狙ってきたがバックステップでギリギリ避ける

(つぶない!!……この人結構強いツスね……)

お互い距離が開くと構えなおした

「もしかして護が負けたりなんてしないですよね？」

「それはないだろ、トリオン体でないだけでなく防具の重さがあったも護は強い、油断でもしなければ」

「なにをいう！まもるはつよいんだぞ！ぜったいにまけないんだぞ！」

離れたい位置にいる木崎たちの会話が聞こえた、陽太郎の言うとおりのオレは強いから負けなと思うっているとそろそろ決着がつきそうだった

相手の突きを竹刀の横を打って払うと返す要領で胴へ打つ

「1本!!」

審判が旗を上げて終わりを告げると再び拍手が沸き上がった

「ありがとう……君強いわね、名前はなんて言うの？」

「どうもツス、忍田護ツス。えくと……」

試合が終わるとそれぞれ手を差し出して握手をした

そのあと景品を受け取り最後に勝負も出来てオレは気分上場だった

これで帰った後の制裁^{お仕置き}を忘れてくれればいいと烏丸は心の中で強く願っているだろうがそうはいかない、支部に戻ればしっかりと春風の練習台になってもらおうつもりだ

6話 イレギュラゲート

武道系の部活のゲームで電子パッドを貰えたオレは気分良く歩いていると、木崎がそろそろ昼だと言いパンフレットを見ながら歩いて行くと、木崎と烏丸はお好み焼き…焼きそば…焼き鳥を、護はハンバーガー…焼きそばを、陽太郎は木崎のお好み焼きを少し分けてもらってお腹がいっぱいになった

「さて、どこに行きますか？」

「そういえば13時から体育館で何かするってあった気がするツスよ？」

「ああ、13時からライブイベントを開くそうだ。そこに行くか？」

他に行く所を決めていなかったから反対意見も無く体育館に向かった

オレたちが着いたところは開始時間を少し過ぎていて観客は多くいた

ステージには衣装や私服に着替えた生徒達がギターやドラムや電子ピアノなどで演奏している、なかにはオレも知っている曲も流れた「普段は音楽を聴くことなんて殆ど無いんですけどこういうときに聞く音楽はいいもんスね」

「確かに京介の言うとおりだな」

「おれはうるさくてわからないぞ」

子供の陽太郎はイベントとかで聞く音楽は確かに五月蠅いだけだなと思いいオレと一緒に外に出ると言い陽太郎と一緒に体育館を出た、オレとしては他にも何が演奏されるのか聴きたかったが

「みみがキンキンするぞ……」

「まあちよつとだけ我慢しな陽太郎……ん？桐絵ちゃん？」

近くのベンチに座ると制服に着替えた小南が辺りを見ながら歩いていた、オレが呼ぶとやつと見つけたみたいになり全力で走り寄って来た「なんで電話に出ないのよ!?何回も掛けたのよ!!」

近づくなり小南はいきなりオレに怒鳴った、そう言われ携帯を取り出すと確かに着信が5件も着ていた

「ご……ごめんス、さつきまで体育館にいたから気がつかなかったッス」

「体育館？……ああそっか今はライブの最中か………ってそれよ
りいいから来て!!」

「つえ？ちよ……桐絵ちゃん!!」

オレがさつきまでいた場所を知ると納得はしてくれたが、突然腕をつかまれ力任せに引っ張られた。陽太郎もその後を付いてきた

「これは『しゅらば』ってやつか？」

(どこでそんな言葉を覚えたんスか………支部長、ちゃんとTVとかは制限つけないといけないッスよ………)

陽太郎のませた言葉に心の中で静かに突っ込みを入れた

着いた先は被服室で中からはすごく騒がしい声が漏れ聞こえる、その中には

「すごいねーコレも似合うよ!!」

「あっじゃあじゃあコレは？」

「きゃーいいよ！コレにしよ！コレに!!」

「……ちよつと桐絵ちゃん？オレに女子の着替えを除く危険な行為はしたくないんスけど………？」

容易に想像できる中の状況に何故小南はオレを連れてきたのか分からなかった、後ろにいる陽太郎は握った手で親指を立てて「まもるのことはわすれないぞ」とか言ってきた

「何言ってるのよアタシだって護に女子の着替えを見せるわけで連れて来たわけじゃないわよ、それに………もし覗いたりしたら生身の方を切るからね……」

少し間を空けて言った小南の迫力は怖くその場から逃げようと思っても、変わらず腕を掴まれているわけで逃げる事が出来なかった、そんな時中から聞こえてきた声にオレは耳を疑った

「それにしても男子は背が高いから合う服が少ないね」

「そうねー、でもウィッグを着けてメイクをすると案外似合うわね」

「後はこの筋肉さえ少なければ完璧なんだけどね」

「もういい加減にしろよ!!オレを人形みてえに着せ替えるな!!」

「ツツ!!?.....桐絵ちゃん?.....えつと.....オレは何をさせられツスか.....?」

「なにしらないで来たの?女装よ、じよ...そ...う!」

そう言つて被服室のドアを勢い良く開けた、窓が壊れちゃうと一瞬間そんなことを思ったがこの後無理矢理にでも女装をさせられるというオレの人生に黒歴史が追加されようとする現実に引き戻された

「連れてきたわよ!」

「.....あれ.....忍田!?え.....ウソ!?ちよ.....」

「?.....あれ?青柳?.....えつと.....その格好は.....?」

「見るな!.....!!」

オレは自分を呼ばれたことに気付き俯かせていた顔を上げるとそこにはいろんな服を持った女子達に囲まれたクラスメイトの青柳がいた。

しかもいつもは短い髪には背中まである長いウィッグを着けられていた、そこまでは良かったんだが.....格好が小南のクラスがやっていたメイド喫茶のメイド服だった

「.....ごめん.....誰にも言わないでおくツス.....だから頑張つてツス.....」

「せめて目を見て言ってくれ!!いや見ないで欲しいけど.....忍田はどうしてここにいるんだ?」

目を逸らして言うオレに見て欲しいのか見て欲しくないのかどちらなのか分からない事を言った後に青柳はどうしてここにいるのか聞いた

それにオレは小南に捕まって強引に連れてこられたと短く言った
「そっか.....お互い災難だな.....オレは姉ちゃんに脅されて.....」

青柳に姉が居たんだとこのとき初めて知った、友人を一人見捨てるほど薄情じゃないオレはいつそのこと付き合つてやると言うと言われた服を見て早速逃げ出した

「おおおおおい!!さっきの言葉はウソだったのか忍田!!」

「無理無理無理無理!!それは無理ツス!!死んでもそれはイヤツす!!」

いきなり逃げ出そうとしたオレの腰を掴んで阻止した青柳は必死に離さないようにするが、オレに渡された衣装はなんと……………：バニーガールだった、何所からこんな衣装を持ってきたんだよ!!

「たとえ罰ゲームだったとしてもコレは絶対に着ないツスよ!! オレは帰るツス!!」

「待て待て待て忍田!! オレを見捨てるなよ!! 友達つてさつきおまえ言っただじゃないか!？」

「青柳……………世の中には即断即決が必要なときもあるツス」

「……………ざとばかり良い顔で良いセリフっぽく言うじゃねえよ!! 絶対に道連れにしてやる!!」

オレと青柳の攻防を見ていた他の女子達はひそひそと話をしていた

「ああ……………やめて、それ以上掴んでいるなんて……………」

「どっちが攻めでどっちが受けなんだろう……………?……………」

「私青柳君が攻めに1票よ、忍田君の語尾が『ツス』なんて……………もう……………」

(……………(お腹いっぱいだわ……………!!))

鼻息が荒くなっている女子達はそんな会話に花を咲かせている、何人かは鼻にティッシュを当てている

「全く……………そんなの冗談に決まっているじゃない……………護に着て欲しいのはこっちよ」

いい加減見かねた小南が今度はちゃんとした衣装を持ってきた、それを受け取ったオレは簡易カーテンが設置されている場所で着替えを始めた

(……………一体女装なんかさせてどうするんだ……………?)

パンフとか見れば分かるのだろうけど生憎持っているのは木崎だから知りたくても知れない。初め女の服を着たオレはカーテンを開けて着替えた格好を見せた

「ふっくん意外と似合っているじゃん」

「まもる、じつはおんなだったのか!？」

小南の意外との一言は余計だと思った、陽太郎まで驚くなんてそん

なに似合っているのかよと褒められた嬉しさ以上に悔しさのようなものが出て複雑な気持ちになった

青柳の方を見れば携帯を持ってシャッターを切る音が聞こえた

「おい青柳ー!!今撮ったのを消すツス!!消さないとお前を消すツス!!早く消すツスー!!」

「ふざけんな!!こんな可愛いやついたら普通撮るだろうが!!」

「誰が可愛いツスカ!!オレは嬉しくないツスよ!!」

画像を保存した青柳は追ってくるオレに捕まらないように逃げる

「小南ちゃんそろそろ行かないと時間が無いよ……」

「ああ!!ほらアンタ達行くわよ!!」

いきなり小南に腕を引つ張られたオレと青柳の文句に答えず無理矢理連れて行かされる

「なんなんスカ……コレ……?」

小南に連れられ着いた場所は体育館のステージ裏、そこでは2人と同じように”女装”した人たちが凡そ10人くらい居た

着いたら着いたで胸に12と書かれたプレートが付けられた

「もう諦めるしかねえよ忍田……」

「……そうツスね」

ここまでくれば大体予想はつく、青柳の言うとおりもうここまで来たら諦めてなるようにしなければならない、そんな時嫌な予感が頭の中をよぎった

「な……なあさつきまでここでライブしてたんスよな……!?!」

「あ……ああそうだけど……?」

「……ああああああ……」

近くにいた女装した男に確認しようとして聞くと予想通りの嫌な予感が当たってしまったので頭を抱えて蹲った

「一体どうしたんだ忍田?」

「いるんス……」

「?……何が居るんだ?」

「仲間が……女装する前まで仲間とここでライブを聞いてたんス……」

「……………ああ……………」

ここまで聞けばオレが何に対して蹲ったのか青柳は悟った。オレはボーダーで仲間というのは他のボーダー隊員でさっきまでライブを聞いてたということはこの後の女装のイベントも見られるという事、確かにそれには同情した

「……………まあ諦めるしかないよな……………」

青柳の言うとおりに諦めるしかない……………だけどオレは後で堅く口止めさせようと帰ってからの予定を追加した

『エントリー番号12番!!それでどうぞぞ!!』

「骨は拾ってやるからな!!」

「頼むツス……………」

「あれ……………木崎さんあれって……………」

「ああ……………護……………だよな?」

ライブも終わりこの後は女装した男達のアピールのイベントがあるようでどうせなら見ていこうと思いだれもこれもまるつきり男にしか見えなかった

とても女装には見ええず精々女物の服を着た変態にしか見えなかった、そんな時12番の少年の顔に烏丸と木崎は見覚えがあった

「そうよ、あれは護よ」

「まもるはじつはおんなだったぞ!」

横から小南が12番は護と言った

「どうして護がこのイベントに?アイツはこいうの出たがらないんじゃない?」

「アタシが無理矢理出させた」

木崎に疑問に小南は当たり前のように答えた、なんとも女王様な性格なんだと思った

しかも烏丸はスマホを取り出しカメラ機能を起動して女装姿の護

を収めていった

『それではまず趣味を教えてください』

『えーと趣味は料理と絵と剣道ツス』

『すごいですね！料理が出来るなんて!!それでは次に特技を教えてください』

『特技は趣味と同じツス、料理と剣道ツス』

司会者が得意な教科、嫌いなこと、いつもしている事など聞いてオレの番は終わった、その後には青柳の番で緊張しているのか声が裏返っていた

(あいつ確か野球部だったよな？しかも捕手だったはず、なのになんで裏返るんだ?)

試合ではいつも外野まで届くほど声を出しているのにこういうときだけ裏返るんだと、オレはどうでもいいことを思った

エントリーは青柳で最後のよう結果発表となり選ばれたのは2番のワンピースを着た男だった。優勝商品は模擬店のタダ券15枚セットだった

優勝できなかったことに悔しめばいいのかしなかったことに安堵すればいいのか微妙だった

(とりあえず後で烏丸のスマホから写真消さないといけないツスね)

ステージの袖に戻りながらオレは頭の中で烏丸に対する制裁を追加した

先ほどの着替えをされた教室に戻るときさっさと着替えて体育館のほうへ向かうと途中で木崎たちと合流した

「桐絵ちゃん一体なんなんスカアレは!!?すごい恥かしかったツスよ!!」

「あー!!うるさい護!!文化祭を盛り上げる為のイベントに決まってんでしょ!何が恥ずかしいよ?普通にしゃべってたじゃない!」

「だからって無理やり出させるなツス!」

そのあと烏丸のスマホから撮った画像を無理矢理消させて時間も3時を過ぎてそろそろ帰ろうかと思ったその時だった、グラウンドにゲート
門が発生した

「ちよつとなんで学校で門が開くのよ!？」

「最近開く〴〵イレギュラー門〴〵だな、京介、護、行くぞ」

驚きで慌てている小南に簡単に答えた木崎は隊員であるオレたちに倒しに行くぞと言った。しかも小南は学校の皆にはオペレーターと言っているらしい、だから今回はオレたちだけで戦うしかない

「トリガー起動」

それぞれトリガーを持ち体をトリオン体に換装すると門から出てきたトリオン兵を見た、捕獲用のバムスターが1体…戦闘用のモールモッドが6体が門が出現したグラウンドに立っていた

「バムスターとモールモッドか…護とオレはモールモッドを、京介は生徒たちを逃がしながらバムスターを相手にする、小南は避難誘導だ」

木崎の指示に答えるとオレは跳んで春風の先端をモールモッドに向けた

「ガンマ」

春風から放たれた弾丸は全部モールモッドに命中した、オレは6体のモールモッドの前に降りると春風をソードモードに切り替えると先端から弧月が生成された

「急いでこっちにー!」

烏丸はグラウンドにいた生徒や民間人を誘導しつつアサルトライフルでバムスターを牽制した、それでもオレと木崎で6体のモールモッドをすべて相手をするの不可能だったみたいで、1体が避難している人たちの所へ向かっていた

「まじい!!…っ!?!木虎!!」

さすがにこれはマズいと阻止しようと思ったら木虎がスコープオンを装備してすぐに倒した

「ツフ…何このモールモッド、ブレードが出なかつたけど…?」

瞬殺だどちよつと驚いていたら後ろから来ているのが分かり、振り返ると同時に春風を振って目玉を斬る

「残り2体だ、あと一踏ん張りだ」

「はいッスー!」

「丁度いい。木虎、援護するからあのバムスターを倒してくれないか？」

「烏丸先輩！はい、分かりました！」

木崎さんに言われて目玉を突いて、木崎は殴って破壊するという力技で倒した。そしてバンダーの方も烏丸のアサルトで進むのを阻止している間に木虎が急接近、ハンドガンに取り付けられているスパイダー（改）を目玉上部に放つと巻き取って近づくとスコープピオンを出して目玉を斬る

A級だけあつて無駄がなくすぐに倒した

「こちら木崎、星輪女学院でイレギュラーゲートが発生、バムスター1体モールモッド6体が出現したがこれを撃破。回収班を要請する」

『こちら本部、了解した。すぐ向かわせる』

撃破を確認した木崎は本部に報告と回収班を要請した

「まったくいったいいつになったらイレギュラー門の原因がわかるのよ？」

「それはわからないな、本部の人たちが調べてくれているが……」

イレギュラー門^{ゲート}

ここ最近になって本部が使っている門誘導装置が効かない門が市街地で発生するようになった、今までは近くに非番の隊員がいたため被害は最小限で済んでいる

本部のエンジニアたちが昼夜問わず原因を探っているがまだ何も解ってない

結局その日は市街地で門が発生することなく終えた

7話 C級隊員・三雲修

小南通っている学校の文化祭があった日から時間が進み12月ももうすぐ半分を過ぎるころ、依然としてイレギュラーゲートの原因どころか対抗策すら出来ていなかった

「……………はよッスー」

昨日も遅くまで防衛任務で寝不足のオレは間の抜けた挨拶をした

「おお、おはよう忍田！その様子だと昨日も任務だったのか？ごころーさん」

「おお……………ふあ〜」

席に着いてHRまでの少しの間眠ろうかと思ったらクラス委員の田鍋たなべはじめ一がやってきた

「なあなあ隣のクラスに今日転入生が来るの知ってるか？」

「……………転入生？……………いや知らないッスけど？」

「そっかー忍田が知らないならボーダー関係者じゃないのか」

どうやら転入してくるやつはボーダーの関係者だと思っただようだが、確かにこの時期に転入してくるなんて珍しいどころか、三門市にやってくるやつなんて普通はいない

日々ネイバーがやってくる三門市に出て行くやつはいる、だから来るやつはボーダーの関係者だと思っただろう

「ほんとに知らないのか？」

話を聞いてた青柳が聞いてくるがオレは知らないと返す

(……………もしかして迅さんが言ってたやつはそいつなのか？)

『護、明日さこれからの未来に重要な奴がやってくる』

『重要な奴スか？』

迅と一緒にやってくるトリオン兵を倒して休憩しているといきな

りそんなことを言ってきた

『そう、重要な奴。護には静観していてほしい』

『…………その言い方って…………来る奴は…………』

『そう、ネイバーからだ、しかもそいつはボーダー俺たちにとって必要なんだ』

『なら早いとこ玉狛に匿った方が良いんじゃないスか？なんで静観しないといけないんツスか？』

『それは不味い未来になってしまう、だから少しでも良い未来にするために静観してほし、少なくとも勧誘とか匿うとか誘うようなことをしないでいてくれたら良い』

『……………了解ツス』

(オレたちに重要な奴って言ってたスけど……………どんな奴なのか気になるツスね…………)

勧誘とかしなければいいと迅は言っていた、なら話だけしようとする転入生を一度見とこうと休み時間とかに行こうと頭の隅に置いた

HR、1時間目と過ぎて休み時間になった

(さてと、確か隣のクラスだったな)

次の授業は物理で移動するから教科書とノートを持って噂の転入生を見に行くとそいつは簡単に見つかった

髪が白く極端に背が低かった

(背ひつく!?風間さん2号ツスか!?……………っは！風間さんごめんツス！)

この場にはいない人に心の中で慌てて謝る

風間は背の低さを気にしていないが言うとう当然怒ってくる、かなり強めに

「どうした忍田？お？あいつか噂の転入生って奴は？」

そのあと授業の開始を告げるチャイムが鳴りオレと青柳はあわて物理の教室に行った、だけどオレには少し変だと思った

(何でサイドエフェクトが反応してるんだ……?)

オレのサイドエフェクトの追跡が転入生に反応していた、階が違う物理の教室からでも転入生のトリオンが見え続けて少し授業に集中できなかった

その日の放課後ネイバーが出現したが一番近くにいた三輪隊が着いた頃にはすでに倒されていてしかもかなりの威力だったのかネトリオン兵はバラバラになっていたと報告されている、しかもボウダー以外のトリガー反応が出たそうだ

「こんばんはッス、ネイバー君」

「……………誰？」

夜9時になってオレは転入生のトリオンを目指して暗い住宅地を彷徨った、何で彷徨ったかはオレのサイドエフェクト…追跡は障害物があっても居場所はわかるが目標までどんな障害物があるのかはわからず当然道もわからない、だから何度も行き止まりに行き着いた

そしてようやくさつき目標の転入生までたどり着いたわけだ

ネイバーの少年はいきなり声をかけられただけでなくいきなり自分のことを「ネイバー」と呼んだ、警戒心を一気に上げて様子を見る

「ああ別に君をボウダーに言うとかそんなじゃないッス、うくんオレも君と同じネイバーッス。とりあえず何処かで話ができる場所に行かないッスか？」

「……………いいよ、さつきまで公園つてとこにいたんだ、そこでもいい？」

案内された公園は街頭がいくつもあり鉄棒、ブランコ、滑り台、トイレとあり整備されているのかきれいに保たれていた

オレとネイバーの少年はベンチに座った

「それであんたは誰？どうしてオレがネイバーだってことがわかった

の？」

「オレは忍田護ツス、俺にはサイドエフェクトがあつて一度見たら見逃すことがないんすよ」

「ふくんアンタ……つまんない嘘つくね……半分だけ」

このネイバーはオレが半分だけ嘘をついていること見抜いた、確かに条件さえ満たせば見逃してしまう弱点もある。カマをかけているかと思つたが見つめてくる目でそれは違ふとわかつた

「怖いッスね……詳しくは言えないッスけど仲間から今日ネイバーから転入生が来るつて聞いてどんな奴なのか知りたかつたんすよネイバー君」

「ネイバー君じゃないよ、空閑くがゆうま遊真だよ」

「……空閑……遊真ツスカ」

「それでマモルはオレに何が話したくて来たの？それにさつき自分もネイバーつて言つたし」

黙つて静かになつたオレに今度は空閑が話を切り出してきた

「まあ何でこの世界に来たのかと思つて……オレは母親がこの世界の人で父親がネイバーなんす、それでオレは向こうの世界で生まれたからオレもネイバーと言つたんすよ」

「ふむ……なるほど、オレは親父の知り合いがボーダーにいるから『オレに何かあつたらボーダーを頼れ』つて言われてやってきたんだ」

(遊真の親父さんの知り合い？誰だろ？)

「あ………すまないッス、何かあつたらつて……もしかして……」

「うん、死んだよ、3年前に」

「………そうツスカ。まあ何か困つたことがあれば言つてほしいッス、オレに出来ることは多くないけどこつちの世界の常識とかルールとかは教えれツスよ。オレも4年半前に初めてこつちの世界に来ていろいろ困つたこととかあつたスから」

「おおそれは助かる、では早速——」

「マモルのおかげで助かつた、じゃ」

「ああ……気をつけるツスよ」

困ったことがあつたら教えるといったオレに早速こちらの世界の日本の常識などをいろいろと聞かされた

スマホを見れば時刻は22時を過ぎていた

「ヤッベー！」

「こんな時間までどこほつつき歩いてたんだ護？」

「あー……いや……ちよつと……散歩をツスね……あははは……」

家に帰れば腕をで組んで玄関で仁王立ちをしている叔父に頬を引き攣りながらあながち間違つてもいないこと言ったが

「あはははじゃないだろ!!もうすぐ高校生だからって任務以外でこんな時間まで中学生が出歩いていい時間じゃないだろ!!」

叔父がそう怒鳴った後にオレの頭を強く叩いた

「ごめんなさいツスー!!」

オレは涙目になりながら謝罪を叫んだ

翌日の今日1時間に及ぶ説教でさらに寝不足になったオレは午前の授業は居眠りをした、当然怒られた

昼の鐘がなりようやく昼休みだと鞆から弁当を出すと青柳や田鍋など集まつてきてうまく出来た弁当を自画自賛しながら食べた

(今日も味も見た目も上手く出来たツス)

食べ終えた弁当箱を片付けて鞆にしまうと門ゲートが開いたことを知らせる警報音が鳴り響いた

「ツツ!!?こんなところに門がっ!?みんな早く逃げろ!!」

「わ……わかった……無茶はするなよ?」

「それはごつちの台詞ツス……トリガーオン起動!」

クラスメイトの忠告を聞きながら制服のポケットからトリガーを取り起動コマンドを言うと言生身の体からトリオで構成されたトリオン体に換装した

窓に近寄ってグラウンドを見ると発生した門からはモールモッド

が4体出てきた

「……………多いッスね」

4体ごときオレにとつては雑魚同然だが場所が問題だった。発生したのは昼間の学校だから当然生徒が多くいて、訓練どおり避難ルートを通るがそれまでオレが4体を瞬時に倒すこともできないし、守りながら相手もできない

倒しきるまでに何人か被害者が出てしまうと思った。長いこと戦いをしてきた所為かそういう考えを仕方ないと思う部分もあった

「それでも……………やるしかないッス!!」

窓を開けて校舎の壁を蹴って最初の1体目の前に着地するとすかさず足を2本切りそのまま目玉に突き刺して倒す

すると校舎近くまで来たモールモッドは上を見上げて何かに狙いを定めたようだった

「行かせな……………ック!!」

進入を阻止しようとしたが傍にいたモールモッドが背中中の最高硬度を誇るブレードでオレに襲い掛かる、咄嗟に春風の柄で受け止める「このっ……………っ!!……………くらえ!」

2本のブレードじゃオレを倒せないと判断したのかももう2本出して振りかぶろうとしていた。オレは春風を解除して変わりにスコーパーを胸から出して目玉を貫く

これで2体目を倒せたがすでに1体は壁を破壊して中に進入していて急いで壁を登っているもう1体のモールモッドを倒そうと飛んだがその時突然2つに割れトリオンが噴出した

「うわっ!?! なんスか!?!……………グヘ!」

蛙が潰されたみたいなき声を出して地面に落ちたオレは校舎を見ると遊真のトリオン反応が見えた

(昨日あれほど言つといたのに何で使ったんスか……………?)

昨日の夜にオレは非常時以外なるべくボウダーのトリガーを使うなどと言っていた、けど実は遊真自身のトリガーは使わず訓練生用のトリガーを使っていたのは後から知ったことだった

ネイバーがいなくなったと知ると生徒たちは校舎から出てきて口々にオレを賞賛した、最後に倒したのオレじゃないけれどもこういうのは黙つていた方がいいのかと思つたら、遊真が眼鏡をかけた生徒に担がれた状態で出てきた

眼鏡の生徒は遊真を担ぎながら進むとクラスメイトたちが集まっていた

少し離れたところにいたオレにも話し声が聞こえてきて会話の内容から「ミクモ」という生徒はボーダー隊員のようにだった

(……ミクモ……知らないツスね……本部の隊員なんスカね?)

みんな「ミクモ」を褒め称えているのにその表情は何処か気まずい感じのようだった、すると横にいた遊真が「ミクモが助けてくれた」と言つた

トリオンが見えるオレにはその言葉こそが嘘だとすぐに分かり、何を言っているんだと言おうと思つたが迅の言葉でとりあえずはここは言わずそのままにした。下手に干渉するのはよくないと、特にボーダー関連だと迅が見た未来から変わってしまう可能性があつたからだ

しばらくするとレーダーが近くに来るのトリオンを感知してそこらを見ると嵐山隊がやつてきた

「……………これは……………」

「遅いツスよ嵐山さん!もう片付いたツス!!」

「護……………そうかお前が倒してくれたのか!助かつたぞ!!」

ボーダーの顔とも言われる嵐山隊が着いたことで生徒たちはまた騒ぎ出す、今度は有名人が来た意味で

「確かにやったのは俺ツスけどそれでも2体だけツス、残りの2体はあそこの『ミクモ』って奴が倒したらしいツスよ?」

「君が?」

「ミクモ」は自分から前に出てきて「自分はC級隊員の三雲修みくもおさむです」と言つてきた

(C級……………なるほど知らないのは当然ツスね……………ということは自分

のトリガーじゃなく三雲の訓練用トリガーで倒したんスか？すごいッス)

詳しくは知らないが昨日のボーダーのトリガーじゃない反応が出た件は空閑のトリガーということ、その倒された後の報告を見る限り空閑のトリガーはパワー系じゃないかとオレは思っている

だから今回のモールモッドに倒され方は切られていたから自分のトリガー以外で倒したと想像が出来る

三雲は隠したり誤魔化したりせず正直に使用した理由を告げた

「C級隊員……!?!」

「C級?」

前に出てきた三雲がC級だと知ると木虎藍きとらあいと嵐山准あらしやまじゅんは驚きを露にした。それも当然だ、C級は基本的には合同訓練以外ではランク戦ブースで自分の腕を磨き上げる。モールモッドとの戦闘は訓練用に調整されているけれど、実践のモールモッドをトリガー一つで相手をするのは相当自身がないと危険だ。何より訓練用の出力を抑えたトリガーじゃ尚更

「……………」

「そうだったのか!よくやってくれた!」

そう言つて俯く三雲の肩に手を置いた嵐山は褒めた

「えっ!?!」

てつきり説教でもするのかと思つたオレは正反対の対応をした嵐山に驚いた

「ありがとう、君がいなかったら犠牲者が出たかもしれない。ウチの弟と妹もこの学校の生徒なんだ」

嵐山に溺愛している弟妹がいるのは知っていたけどまさかこの学校だとは知らなかった

「兄ちゃん…………」

「……………まずい…………」

少し離れたところにそんな話し声が聞こえると嵐山は目を光らせて一目散に駆け寄つた

「うおおおおお!!副!佐補!」

「他人の振り……うわああ！」

振り返って無視しようとしたらしいがそれは叶わず嵐山に抱き寄せられている

「……………オレだったら絶対グレてるツス……木虎たちも大変ツスね」

「ええ……まあそうですね」

「まあ慣れたけどね」

木虎も時枝もちよつと呆れた顔で嵐山兄弟を見ていた。視線を戻すと多くの生徒達がいるのに平気でスキンシップをしている

（これが世に言う“ブラコン”っていうやつツスか？あ、妹もいるから“シスコン”も……？）

「いやあそれにしてはすごいな、ほとんど一撃じゃないか、しかもC級のトリガーで」

やっと開放された弟妹は疲れきった表情をしている

「こんなの正隊員でもなかなか出来ないぞ」

「いえつ……そんな……………」

「いえいえそんな」

「……………」

謙遜なのは良いが褒められれば嬉しいんだから喜べばいいのに三雲は遠慮していた、だけど代わりに遊真が喜んだ

「……………、どうしたツスか木虎？」

隣の木虎を見ると難しい顔をして三雲を見つめてた

「お前なら出来るか、木虎？」

「スコープオン」

木虎を見て嵐山に聞かれると右手にスコープオンを出すと、既に活動停止しているモールモッドの近くに跳んで何度か切りつけた

「出来ますけど、私はC級のトリガーで戦うような馬鹿なマネはしません」

そのあと嵐山達の下まで戻って来た木虎はそう言った、オレは木虎の悪い癖がまた出たと思った

（木虎またツスか……………自分より優秀な隊員がいると許さない

……………そういうくだらないプライドは早々に捨てたほうが言いツスよ」

「そもそもC級隊員は訓練生、訓練以外でのトリガーの使用は許可されていません。彼がしたことは明確なルール違反です、嵐山先輩、違反者を褒めるようなことをしないでください。C級隊員に示しをつけるため、ボーダーの規律を守る為、彼はルールに従って処罰されるべきです」

「硬いツスよ木虎、オレからすれば確かに三雲がやったことは隊務規定違反だけど、木虎たちが来るのを待っていたら確実に犠牲者が出ていたツスよ」

「それは……………例えそうだとしても!!」

「それじゃ犠牲者たちにはどう詫びるんスカ? 『犠牲になって不幸でしたね、ルールでC級は戦うことが出来ません』とでも言うんスカ?」
「なっ……………!?だ……………だったら護がさっさと倒していれば彼がトリガーを使うことは無かったわ!」

「それは無理だ木虎、いくら護でも守りながら4体のモールモッドをすぐには倒せない。三雲君は確かにルール違反はしたいけど結果的に市民の命を救ったわけだし」

木虎に攻められるオレを庇うように嵐山がフォローして後ろにいた生徒たちが三雲が助けてくれたと言うが

「それでも人命を救ったのは評価に値しますがここで許せば彼と同じようにC級隊員がトリガーを使う可能性が出ます、ボーダーに入ったからと言ってヒーロー気取りで戦おうとすればより甚大な被害が出るのは火を見るより明らかです」

いくらオレや嵐山が言ってもやはりプライドが高い木虎は規律やルールなど言葉を使って三雲を責め立てる

「嵐山さん、木虎の奴1回痛い目に遭わないと直りませんツスよ、あの性格」

「あははは……………それはわかってはいるんだがそういう機会が中々……………」

通常の任務以外に嵐山隊は広報活動にも出ているからエリート思考が高い木虎の性格を直そうにも時間が無いのだ

2人がそんな話をしている間に木虎は三雲に指を指して処罰されるべきだと言いつつ放った

三雲はこうなることを覚悟してトリガーを使ったはずなのに思い悩んでいる顔をした

(まあ……当然ツスよね)

一応三雲がいたから生徒たちに犠牲者が出なかったと報告書にそう書こうと頭の中で決めた

8話 鯨とゴミ掃除と痴話喧嘩

「おまえ、遅れてきたのに何でそんな偉そうなの？」

すると突然それまで会話に入ってこなかった遊真が割り込んできた

「……………誰、あなた？」

「オサムに助けられた人間だよ」

「やめろ空閑、おとなしくしてろ」

そんな三雲の言葉を無視して数歩前に出た遊真はまた言った

「日本だと人を助けるのにも誰かの許可が要るのか？」

「それはもちろん個人の自由よ、ただしトリガーを使わないのならの話だけど、トリガーを使うならボーダーの許可が必要よ。当然でしょ？・トリガーはボーダーの物なんだから」

「なに言ってる——」

「違うツスよ木虎、トリガーは元々ネイバーのツス」

これ以上遊真に言わせてたらボコを出すかもしれないオレが言葉を遮り代わりに言った。これ以上言わせてしまうとボーダーに目をつけられてしまう、それは困るなと思ったオレは自然と口が開いていた

「な……………何を言ってるのよ護、そんなわけ」

「ボーダー設立時からいるから色々詳しいいんす、トリガーがネイバーの物でオレたちはそれを元に複製や新たに開発しているだけツス」

この場にいる者たちはオレの言葉で時が止まったかのように静かにしている

「はいはい、このままだと話が脱線しそうだから戻そう、三雲君」

さすがにオレの爆弾発言で混乱させてはいけなと思ったのか、嵐山が手を叩いて余計な争いが出ないようにと話を戻そうと言ってきた

「はい」

「後で呼ばれると思うから学校が終わったらそのまま本部に行くよう

に」

「……はい」

そう答える修の表情は少し暗い、違反しているんだから当然だ
「今回のことはうちの隊から報告しておくよ、君には弟と妹を守って
もらった恩があるからね処罰が重くならないように力を尽くすよ」

その後回収に来た人たちがトリオン兵を回収して戻っていった。
幸いにも壊れた校舎が人が少ない空き教室に近かったためか通常授
業は行われた、そして放課後になりオレも報告書を書くついでに本部
に行こうと思いい隊長の木崎にそうメールしてから下駄箱で三雲を待
つとすぐに来た

「オサム、あそこにいるのってマモルって奴じゃないのか？」

「え？………ホントだ」

「………お？オレも報告書書かないといけないから一緒に本部に行こ
うッス！」

修と遊真が来て3人で学校を出ようとしたとき校門で人ばかりで
きていて、何事なのかと思っているとその中心にはなぜかファツシヨ
ン誌にでも載ってるようなポーズをとって、生徒たちから写真を撮ら
れている木虎が立っていた

「なに………やっっているッスか？」

「………ッハ!?………コホン………待ってたわ、確か三雲君だったわね」
咳払いした木虎はさっきのことを無かったことにするのか何事も
無かったかのように振舞っている、しかも校門前で立っていたのは本
部基地までの同行、つまり逃げないようにするための監視ってことだ
(誰かくあのカッチカチのプライド揉み解してほしいッスよー)

夕焼けで辺りが橙色に染まった時間に女子と歩くのは少しドキド
キする場面だが他に修と遊真がいるからドキドキもしないし一緒に
いる理由が本部への同行と報告書の提出だから尚更ガツカリ感があ
る

「勘違いしないでほしいのだけれど私はあなたをエスコートしに来たわけじゃないわ、あなたが逃げないように見張りに来たのよ」

まさか木虎の口から堂々と言うとは修のことがよほど気に入らないようだ

(勘違いって……あれツスか？ツンデレってやつツスか？)

まだ日本のことをよく知らないオレは木虎のさっきの言動にツンデレかと思っただが、さっきはじめて会ったばかりなのにそれは無いなと思っただ

「見張られなくたって逃げたりなんかしないよ」

「簡単にルールを破る人間の言葉が信用できる？もう少し自分の立場を自覚したほうがいいわね………いいわ、少しくらいは褒めてあげる、C級のあなたをA級の私が今回だけは特別に」

先に行く木虎がブツブツ何か言っただと思っただら少しは修を認める気にはなったようだが何故か「C級」とか「A級」の部分を強調して言った

「いや……あれは」

「ただし、派手に活躍してヒーロー扱いされたかって調子に乗らないことね」

「いや乗ってないよ！全然！」

「ハッキリってあなたがいなくてもあたしたちの隊が事態を收拾してたわ、あなたはたまたま現場の近くにいただけよ」

ここまで派手に修に突っかかる木虎を見ると昔の自分を見ているような気がした

(父さん達からみたオレってこんな感じだったんスカね)

昔のことを少し思い出していると隣にいた遊真が修の前に出た

「いやいや無理だから、別に責めるつもりは無いけどお前全然間に合っってなかったから、普通に」

「なんなのあなたいきなり？何であなたが付いて来ているわけ？」

「いきなりじゃないよ、ずっといたよ。付いてきたのはお前だろ。オレはネイバー来たとき学校にいたけどお前らを待っていたら確実に何人が死んでたぞ、お前はもつとオサムとマモルに感謝してもいいん

「じゃないの?」

「部外者は黙っててくれる? さつきも言ったけど彼のやったことはルール違反なの、きちんと評価されたいならルールを守ることね」
(部外者どころか思いつきり当事者ツスよ……………)

オレがそんなこと思っていると遊真が修に対抗心を持っていると指摘すると、木虎は面白いくらいに動揺した。それからA級がどうか精銳がどうか部外者がどうか2人が色々と言いつ争っているとおれたちの近くで門ゲートが開いた

ゲートから現れたのは鯨みたいに大きなトリオン兵だ

「あれはイルガーじゃないツスか!!? こっちの国じゃまだ見たこと無いのに!」

「こっちの国? ……護! あれを知っているの!?! どうなの!?!」

「うるさいツス、とりあえず行きながら教えるツスよ、トリガーオン起動!

オレに続いて木虎と修がトリガーを起動した、だけど修が自身の武器であるレイガストを出そうとしたがトリオン切れで出ることは無かった

「トリオン切れ? やっぱりC級ね、そこでおとなしくしていなさい」

「護、知っているなら分かってるんだろ?」

「最後が厄介なんスよね? その前に倒すツス」

遊真に聞かれたがイルガーの対処法はあっちの国で経験済みだから問題は無い、そう言うとも木虎とともに跳んでイルガーに近づく

「それで? 最後が厄介って何よ?」

「イルガーは拠点制圧するための爆撃型トリオン兵ツス、気を付けなといけけないのは下にいないこと。トリオンが尽きるまで爆弾を落としまくるんス」

屋根から屋根へ跳び徐々にイルガーに近づく、あと少しでイルガーは橋に近づこうとしていた

「それにイルガーは一定のダメージ負うと全トリオンを使ってそのまま墜落して自爆するんス!! だから木虎には住民の避難と救助をしてほしいツス、イルガーはオレが倒すツス」

「ちよつと待つてよ！自分だけ手柄を取るつもり!?あたしだってA級なのよ！それに対処法を聞いたから問題ないわ!!」

「あーちよ……」

オレが止める暇も無く木虎はイルガーの上に飛び乗った

「あの……バカ野郎がっ！」

すぐにオレも飛び乗ろうとしたが落ちる爆弾の下には逃げる親子がいて、春風の銃撃で撃ち落す。そんなことをしているうちにイルガーは既に過ぎ去ってしまい飛び乗ることは出来なくなっていた

「はあ……木虎が倒してくれるのを期待するしないツスね」

イルガーから落ちてくる爆弾を銃弾で当てて街への被害を減らし、というふうと決めた。サブトリガーにある「予測」を使って落ちてくる爆弾の軌道を視界に表示、あとはタイミングを合わせて春風で撃ち落していく

「早くシェルターへ!!……木虎早くしろよ、移動しながら爆弾に当てるのは骨が折れるツスよ」

するとイルガーの上から爆発音が響いて木虎は大丈夫なのかと不安になるがすぐに銃撃聞こえたから無事みたいだった、それでイルガーは何とか倒せたみたいだが、ガキンツと口が歯で固く守られた
(木虎のやつ倒しきれなかったのか!?一か八か………っ!!)

A級だからって自信を持ちすぎた所為でイルガーは自爆モードになってしまった。オレは近くのビルに登って賭けだけど春風を両手に持って屈折旋空を使った。何度も使って横っ腹を攻撃して、何とか川に落とせないかやってみるが思うようにいかない

(ここで旋空の威力を上げれば倒せれるけれど、でも確実に街に落ちるっ!どうしたら………鎖………?)

街へ落ちようとしていたイルガーをどうすればいいのか迷っていたら、腹の中央辺りから鎖っぽいのが河川敷に伸びていくのが見えた。そして鎖に引っ張られるようにイルガーは動く川に落ちて派手に爆発した

「っ!!木虎は………無事みたいツスね」

爆発があったりから木虎が上がってきた。オレは近くに行つて

手を取ると立ち上がらせた

「トリオン体に感謝ツスね、生身なら確実に風邪引いているツスね。大丈夫ツスか木虎？」

「……………なんで前もって教えてくれなかったの!?あなたがちゃんと対処法を教えてくれていれば私一人で倒せた!!いい!?私もA級なの!!」
手柄を横取りされた所為なのか木虎は八つ当たりをしてきたが、そのときオレが木虎の頬を叩いた

「な……………?……………何よっ!?八つ当たりされて怒ったの?そうよね!……………っ!?!」

オレはまた叩いて今度は何も言わせないように木虎を抱きしめた

「全部言わなかったのは謝るツス、けど自分がA級だからエリートだからってあまりにも自信過剰ツス、そんなこと続けていたらいつか絶対痛い目に遭うツス。だからもう少し自分の周りを見るツス」

「あ……………あなたに言われなくなっっちゃんと見ているわよ……………それよりこれ以上はセクハラで訴えるわよ?」

「わっわっ……………ごめんツス!!」

諭すように言うが、唐突に木虎の目が獲物を狩るような目になって、自分を状況を改めて見るとこれは確かに不味いなと思いき木虎を離して謝った

「ぎ、被害の対処にあたるわよ!!」

「は……………ハイッス」

上にあがって声がするほうへ行くと一般人に囲まれた修が感謝されていた

「あ、彼女たちです!皆さん彼女たちがネイバーを倒してくれたんです!」

対応に困っていたのか修はオレと木虎を見つけてネイバーを倒したのは2人だと言った、確かに事実だが自分たちになすり付けるのはやめて欲しいと思った

「バカ言うな!!何が助かっただ!?ウチの店は壊されちまったんだぞ!!」

「俺の家もだ!!」

「ボーダーは何をやっている!？」

「何で街にネイバーが出るんだ!？」

命があるだけいいのに家とか店とか、こつちの世界では平和ボケしてる所為で大したことの無いことまで文句を言ってくる、問い詰められて返答に困った修は口ごもる

「それは……………」

「ネイバーによる新手の攻撃です。詳しくは近々ボーダーから発表があると思います」

修の近くまで来ていた木虎はイレギュラー門ゲートを新手の攻撃と言った、それでも壊された家や店など損害はどうしたらいいのか食い下がってくる

「はいはい、壊れた家や店はその時に聞いてくださいッス、とりあえず今は避難所に来てくださいッス」

オレも続けるように言うと、木虎は修を下がるように言った。あれから数十分して住民を避難所に行くように納得してもらいオレたちは当初の予定通り本部に向かうため直通の出入り口に向かった

ただの資材置き場にしか見えない場所の倉庫と思われる場所に行くと木虎が壁にトリガーをかざすと扉が開いた

「ふむ、トリガーが基地の扉の鍵になっているのか」

「そうよ、ここから先はボーダー隊員しか入れないわ」

「じゃ、俺はここまでだな、なにかあったら連絡くれ」

「わかった」

空閑は手を上げてそう言うのと帰っていった。基地に着くと木虎は修を連れて会議室に向かったので、オレは何処かの部屋を借りて報告書を書こうと歩いていると嵐山隊の時枝ときえだみつる充と会った

「本部に何か用かな？」

「学校のこととさっきの新型トリオン兵の報告にッス、学校から玉狛まで遠いッスから何処かの部屋を借りようかと思っただんす」

「聞いたよ、爆撃型のトリオン兵なんだってね。初めてなのによく倒せたね」

「あはは、別にオレは初めてじゃないんすけどね……………」

「?……まあ報告書書くならウチの隊の部屋を使うといいよ」

「あぎッスー!」

時枝に案内されて嵐山隊の部屋に入ると狙撃手スナイパーの佐鳥賢さととりけんとオペレーターあやつしはるかの綾辻遥あやつしはるかが寛いでいた

「お? 護じゃないッスか」

「今日はどうしたの?」

2人にPCを借りたいと話すとすぐに借してくれて、報告書を上げると丁度木虎がやってきて同じように報告書を書き始めた

時枝たち3人に礼を言うのと部屋を出て玉狛に戻ろうとすると、迅がダンボールに入ったファイルを抱えて本部長補佐さわむらぎようこの沢村響子と一緒に歩いている

「お、奇遇だな護。これから会議に行くんだけど一緒に来るか?」

「いや、いいッス。腹減ってるんで」

「そうかーそれじゃまた明日な」

「おつかれーッス」

迅と別れた後本部のラウンジで少し遅めの夕ご飯を食べることにした、会議と言っていたから今日は帰りが遅いだろうから帰って作るよりここで食べた方がいいと思ったからだ

そう思っていると携帯にメールが着信したことを知らせる音が鳴り開いてみると案の定叔父からのメールだった

カツ揚げ定食を頼み席に着くと諏訪隊のオペレーターの小佐野が塩ラーメンを持ってきた

「相席してもいい?」

聞くだけ聞いといて勝手に向かいの席に座り箸を割って食べ始めた、一緒に食べる相手もないから座ってもよかったけどせめて返事を聞いてからにして欲しかった

「そういえばだけどね」

「ん?」

オレもカツ揚げ定食のカツを一切れ食べ終える頃に小佐野から声をかけてきた

「この前諏訪さんと日佐人を助けてくれたでしょ? 2人が礼を言いた

「いって」

「この前って……1ヶ月近くも前の事じゃないツスカ……別にいいのに」

「いや、それでも隊長として言わねえと示しがつかねえ！って」

タバコの真似をするように口元に指を2本持つて諏訪のモノマネをして言った

あの風貌で礼は言いたいなどと真面目だなど失礼な事を思った、人は見かけによらないとはよく言ったものだ

「分かったツス、今からツスカ？」

「今日はもう帰ったから無理ねー、明日以降なら大丈夫だよ」

「そうツスカ」

玉狛に所属しているオレは基本的には本部に用が無い限りは来ない、それならと小佐野は携帯を取り出しメモアド交換しようと言ってきた

それなら連絡がつきやすいと護も携帯を取り出し赤外線通信で小佐野のアドレスを登録した

翌日迅がサイドエフェクトでイレギュラーゲートの原因を見つけ、開発室の鬼怒田にリーダーに写るように頼み広報室の根付に市民に呼びかけたりして見かけたら連絡するように言ったりしてその後C級隊員も駆り出して小型トリオン兵・ラッドの駆除が始まった

ラッドは倒されたバムスターに内蔵されていたよう^{ゲート}で周囲の人間からトリオンを少しずつ吸収して門を開く

今までボーダー隊員の近くで開いたのは一般人より多くのトリオンを吸収できるからということだった

『レイジさん2時の方向20mに3対いるよ』

「了解した」

『京介、6時の方向55mに1体いるよ』

「了解です、宇佐美先輩」

『小南、3時の方向40mに4体いるよ』

「あくもう多すぎよ!!」

『護、12時の方向80mに5体いるよ』

「ちよ……俺だけ多くないツスカ!？」

『はいはい文句は後々まだまだいるんだからがんばって駆除してー』
「というより護!アンタはサイドエフェクトであたし達より居場所が分かるんだからもっと動きなよ!!」

「ちよつとー!?俺中学生ー!もつと優しくしてツス」

宇佐美のナビゲート聞きながらラッドを駆除していると小南が苛立ちの所為かオレに半ば八つ当たりをしてきた、だけどオレの心からの叫びは小南の「うっさい!!」で一蹴された

『うっしー!これで作戦終了だ!みんなよくやってくれた、お疲れさん』
ラッド駆除作戦が開始されてもう直ぐで1日経とうとする頃、迅が作戦終了を知らせてきた

「はあく……はあく……もう……無理……俺まだ中学生なのに1日中働かされるなんて……あだつ!？」

「なーに言ってるのよ?ボーダー隊員なんだから中学生だからって理由は通じないわよ」

「桐絵ちゃんの鬼く痛い!痛いツス!!」

「トリオン体に痛みなんてあるわけ無いでしょ!!」

近くの木にもたれかかっていると小南が近づいてオレにチョップをしてきた、嫌味も込めて言うとう今度はグーで叩かれた

「相変わらず小南先輩と護は仲がいいツスね」

「古い付き合いなんだから当然だろ」

2人のやり取りを少し離れたところで見ていた烏丸と木崎はそんな事を言ったが「聞こえているぞ!!」と見事にハモった

9話 A級 三輪隊

「護、ちよつと」
「？」

明日は学校が休みで任務も入っていないから何処か行こうかとラッドゴミ殲滅掃除作戦の帰りに考えていたらさつきまで何処かに消えていた迅さんが現れてオレを呼び止めてこつちに来るように手招きしてきた

案内されたのはどこにでもある橋だった少し先には玉狛支部が見える

「なんスか？今日はレイジさんとご飯を作る当番なんスけど？」

「わりいわりい当番は宇佐美に変わってもらったから、それでな明日お前はちよくと危ない橋を渡るかもしれなんだ」

「危ない橋……………」

「そ、隊員同士で戦うことになる」

「つ……………それなら戦わず逃げればいいんじゃないや……………それとも回避できないんですか？」

迅さんが見た未来ではほとんどが回避できない未来で、だから返り討ちにしないようにこうして忠告に来ている

「時間を稼いでくれりゃオレに考えがあるが、相手が相手だけにそれは無理だろうなあ。だから無力化すればそこまで事が大きくならな
いから」

無力化ガンマつてことはγガンマを使えつてことなんだろう、確かにそれなら鉛レッドバレット弾と同じように傷を与えずに無力化できる。問題は相手が誰なのかだけど、そこまでは教えてくれなかった

次の日、オレは本部の諏訪隊の隊室に来ていた

以前に小佐野から日佐人と諏訪が礼を言いたいと言っていたから時間を合わせて今日来た

「いやーあの時はホント助かったよ、おかげで嵐山隊の手助けもあつて任務が終えたし」

「マジで助かったよ、サンキューな護」

嬉しくもあるけどあの後トリガーの私的使用で怒られたこともあったと、一緒に苦いことまで思い出してしまった

「そんな大したことはしてないツスよ……日佐人だっけ？弧月使っているなら『旋空』とか使わないんすか？あれなら目の前のモールモツドが数体は倒せて逃げれたツスよ？」

「あー……えっと……旋空を使うべきか迷ってて」

頬を搔きながら日佐人は言った

「あの……さ、オレに剣を教えてくださいませんか？」

「オレにツスか？……でも今はもう弧月は使っていないツスけど」

「え……う？そうなの………それでもオレは強くなりたいたいから頼む！」

春風に乗り換えたからもう弧月を使っていないと聞いても、それでも剣を教えて欲しいと言ってくる

「分かったツス」

「ほんとに!?ありがとう護!!」

「おうおう、よかったな日佐人。けどもう任務の時間だぜ、訓練なら後にしろ」

喜ぶ日佐人に諏訪は任務だと言って堤と3人で防衛任務に出撃した

オレはオペレーターの小佐野に番号とアドレスを書いたメモを渡して、この後をどうしようか本部を出て警戒区域内を歩いていると今は使われなくなった弓手町駅に修たちが入っていくのが見えた

他に遊真と小さい女の子がいたが

……いやいやそんなわけないツス……よね?………確認だけでも

修に限ってそんなことはないだろうと、大して話をしたわけじゃないのに知った風な気でいるのは恐らく修の性格の所為だと、勝手に決め付けて後を追って入ると

「な……なんすか……ソレ？」

「ん?……お、マモル」

「なんで……ここに!?!」

オレが来たときそこにあつたのはまるで炊飯器のような形をしている謎のトリオン兵らしきもの、そして口のような部分から何かを出して女の子に握らせている

その上には巨大な白く輝く立方体が浮いていた

『はじめまして護、私はレプリカ、遊真のお目付け役だ』

「あ、ご丁寧に、忍田護ツス………じゃなくて!!」

レプリカと名乗ったトリオン兵らしきものは丁寧に挨拶をしてオレも返すが、挨拶をしている場合じゃないとツツコむ

「えーと修と遊真は知っているけどその子は？」

「あ、はじめまして、『雨取』千佳です」

「っ!」

『雨取』という名前にオレは驚いたが、何も知らない3人に余計なことを言うわけにはいかないと思い。『あの件』のことは黙っておくことにして自分も名乗ることにした

「さつきも言ったスけど忍田護ツス、それでさつきのはナニ？」

「トリオンだよ、あれはチカのトリオン量、いやあれはすごいね」

遊真が言うにはオレが見たあの巨大な立方体は千佳のトリオン量で一般的な量よりかなり多いという、そうならば必然的にサイドエフェクトを発現しているだろうと聞くと

修が千佳が自分を狙うネイバーの居所が分かると言う、それはレーダーなんかよりずっと便利だ

それとは別にオレは自分のトリオン量がどれくらいなのかちよつと気になった

「なあレプリカ、オレも計測してもらっていいツスか？可視化できるなら見てみたいツス」

『心得た』

まだ日本に来て5年のオレでもレプリカのさつきの言葉選びにはちよつと疑問を覚えるが、それは過去の自分にも言えることなんで飲み込むことにした

さつきと同じように口を開いてコードのようなものを掴むと1分足らずで計測が終了してレプリカの上にオレのトリオンを可視化し

た

先ほどの千佳の大きさより劣るがそれでも半分くらいの量はあつた

「ほうほうこれは中々、サイドエフェクトを持っている奴らの中じゃそこそこ多いほうだよこれは」

ボーダーの計測器でもそこそこの数値を出していたオレは今こうして可視化したトリオンの大きさに自分自身が一番驚いている、そんなときに来訪者が来た

振り向くと首にマフラーを巻いた三輪隊隊長の三輪秀次みわしゅうじとカチューシャが特徴の米屋陽介よねやようすけがいた

「動くな、ボーダーだ」

「っ!!」

「?」

驚く修に何が起こったのかわからない千佳、これは不味いという対処するべきか考える遊真とオレ

「間違いない、現場を押さえた、しかもボーダーにスパイがいた」

「ッ!」

「ボーダーの管理下にあるトリガーだ、ネイバーとの接触を確認、処理を開始する」

電話で誰かに報告する三輪、しかもスパイと言うとこの場で該当するのはオレだけだ

ネイバーでありボーダー隊員であるオレが一番ピンチだった

ネイバーである遊真を知っていてボーダーに報告せず、しかも隠れて会っているこの場を見られただけでなく、トリオン兵のレプリカまで見られてしまった、しかもオレのトリオンを計測し終えたときに現れたからスパイだと勘違いした三輪にどう説明するか悩むが

「……トリガーオン起動」

先に三輪がトリガーを起動してその後に米屋も起動した、慌ててオレも自衛する為にトリガーを起動する

不味いツスね……三輪はネイバーは皆敵だと思っているツスからね、つたく迅さんが言ってたことつてこのことツスか?時間稼ぎして

くれって言うってだツスけど

「ツ!!護、貴様もネイバーだったのか?よくも今までボーダーを騙していたな」

「違います!護は——」

「そうツスよ」

「!?.....護.....なにを言うて.....」

三輪の勘違いだと言おうとした修だったが、それを遮るようにオレは自分がネイバーだと認めた。それを聞いた三輪は更に目を細めた

「このことは上に報告する、そしてお前はここで仕留める」

「報告しても無駄ツスよ、城戸さんは知っているツスから」

「なっ!?苦し紛れの言い訳が通用すると思うのかネイバー!!」

そう言うて腰のハンドガンを抜くと流れるような素早い動作でオレに1発撃つが春風で防ぐ、その隙に米屋が一気に近づいて弧月(槍)を首に狙いを定めて突くが見え見えの攻撃にオレは簡単に避ける、とそんな時

ガキンツと何かにつつかる音がした

「ツ!!なんだよそれ?卑怯じゃね?」

「陽介の攻撃は狙いが分かれば簡単に防げるツスよ?残念ツスね」

米屋のセツトしてあるトリガー...弧月(槍)は『幻踊』^{げんよう}という専用のオプシヨントリガーをセツトしてある

『幻踊』は弧月(槍)の穂先を変形させるトリガーで米屋は首を狙うが避けられるのは当然、だから避けた方向に瞬間的に刃を出して斬ろうとしたのだが

オレは下がると同時に首にスコーピオンを出して防ぐ、槍の突く方向と同じに動いたから耐久力で劣るスコーピオンでもギリギリ防げる

距離を取らせようと春風を振り米屋を後退させるが、今度は三輪が刀の弧月を振りかぶるように襲ってきた

オレは横に跳んで回避するが先を読んでいたようにまた米屋が槍を振り回してくる。1ヶ月も使っていれば扱いに慣れた春風で攻撃を受け流す

すると急に米屋が後退したと思ったら後ろにいた三輪がハンドガンで撃ってきた

っ………相変わらずこの2人のコンビは厄介だな、まあA級なのは伊達じゃないのは嬉しいことだけど

避けるためにステツプを踏んでいるとまた米屋が突いてきたが、変形させた槍をまたスコープオンで防ぐがやはりというか耐久力が低い。スコープオンは今度は壊れオレの横腹に傷を負わせた

「お、今度はやったね」

「つく……」

迅からは手を出さないように言われているため防戦一方無力化しようにも^{ガンマ}γを使えば三輪隊の報告しだいで処罰が下ってしまう

なーが無力化すればツスか？相手が三輪なら攻撃と報告されちゃうじゃないツスか!!

三輪と米屋の阿吽の攻撃に避けているとホームで壁にぶつかり挟み撃ちに誘い込まれてしまった

まずっ!……こうなったら!!

リスクはあるが上に跳んで屋根を突き破って挟み撃ちを避けるが三輪隊は4人のチーム、当然後方支援の^{スナイパー}狙撃手がいる

どこツスか!?古寺と奈良坂は………そこかっ!!

飛び上がるとあたりを見回し一箇所だけ光って春風で弾こうとするが外れて肩に当たると後ろに何かが当たる音がした。振り向くと親指サイズのチビレプリカが盾を出していた

「『盾』印^{シールド}」

護に潜り込ませていたチビレプリカが^{スナイパー}狙撃手がいると言いつりガーの印の一つである『盾』を展開した

もちろん三輪はその様子を見逃さなかった

「お前もネイバーだったのか」

「そうだよ、トリガー起動^{オン}」

遊真もトリガーを起動すると何処かのヒーロースーツのようなト

リオン体に換装した

「なんだよお前もネイバーだったんならそう言えよ！」

米屋は1番乗りと言わんばかりに突撃し槍で突こうとするが遊真は大きく避ける

「その攻撃はマモルが相手しているときにみたからわかるよ」

「あちやく避けられたか、それでもオレと遊んでくれよ！」

口では悔しがるように言っているが予想はしていたからそこまで悔しくはなかった。すると線路のほうでは護が落ちてきて肩に傷を負っていた

「遊真、いつ潜り込ませてたスか？」

『以前にこの世界での注意を受けていたときにボーダーはチームで動くことがほとんどだと護は言った、だから遊真はあの2人が来たときに狙撃手スナイパーが1人くらいは潜んでいるだろうと戦闘前に襟に潜り込ませてもらった』

チビになつたせいとかチビレプリカが出す声は高くなっていた

「余所見をするな」

声のしたほうへ向くと三輪が弧月で襲い掛かってきたがオレはすぐに飛び退いた

「逃がすか!!」

『秀次が相手なら』と思うじゃん？

「ッ！」

突然後ろから声がしたと思ったたらさつきまで遊真を相手にしていた米屋が後ろにいた、反対に三輪はカートリッジを入れ替えて遊真に向けて撃っていた

オレはサイドエフェクトの『追跡』で位置は大体把握していたが戦闘中では目の前の敵に集中するからうっかり忘れてしまうこともある

槍の攻撃は避けても幻踊げんようで飛び出した刃がオレの右腕を切り落と

した

「やりこー」

遊真のほうを見れば予想通り三輪がよく使う鉛レッドバレット 弾を受けていて動きが制限されていた

これでは不味いと仕方なくγガンマを止めを刺そうと、柄を極端に短くしてグリップを握ると跳んだ三輪と米屋に向けて放った

それと同時に遊真も鉛レッドバレット 弾の解析を終え自分の武器にすると空中の2人に放った

『錨アンカー』印+『射ボルト』印四重

「つぐー……つ!?!」

三輪は落ちて弧月を支えに立とうとしたが弧月の刃が突然消えて倒れた、そしてまた新たな来訪者が来た

「言つたとおりだろ」

「迅さん!」

声のしたほうを見れば迅さんと後ろに三輪隊狙撃手スナイパーの古寺章平こでらしやうへいと奈良坂透ならさかとわるがいた

「どもどもービルの屋上でレプリカ先生とバッタリ会っちゃってさ折角だから来てみた」

迅さんがレプリカ先生と言っているあたりオレの知らないところで遊真たちに会っていたんだなと、趣味が暗躍だけあって時々迅さんのことが恐ろしく感じる

しかもいつもの癖なのか習性なのか千佳にナンパ混じりの挨拶をしておれと遊真のところに来た

「おーなんだ遊真に護、結構やられてんじやんか」

「お、迅さん」

「油断したのか?」

「んなわけないツスよ!城戸さんの処罰なんてごめんだからなるべく穏便に終わらそうと頑張ったんスよ!!」

「いや、普通に強かったよ」

古寺と奈良坂は米屋のところに行つて呆れていた
「派手にやられましたね先輩」

「つゝやば、これ超恥ずかしい」

米屋はホームで古寺と奈良坂は線路に下りているから顔は横にあるから無様な姿を真横から見られて恥ずかしい、やられようによつては穴に埋まりたいくらいだ

三輪のところに来た迅は三輪と米屋がやられるのは当然だと言っている、しかも戦闘前に忠告はしていたようだった

「なにせこいつのトリガーは『ブラッグトリガー』だからな」

その言葉に全員が驚いた、もちろんオレも、だけど何も知らない修と千佳は分からなかった

「ウソっ!？」

「ホントだよマモル」

そうなればさつき遊真が使っていたトリガーは明らかに鉛レッドバレット弾だった、それを撃つたと言う事は遊真のブラッグトリガーは学習して自分のトリガーとして使えると言う事だ

それに鉛レッドバレット弾はボーダーが出来てからオレとロイが独自に作り上げたトリガーだ

オレはよく相手を無力化するトリガーを使う、今回のγガンマもだ、理由は当然同じネイバー同士無駄な争いはしたくない、仲良くなりたいという平和的な考えが理由だ

「むしろお前は善戦したほうだったな、こいつらがその気になれば三輪隊はあっさり4人もやられていたぞ、さすがA級三輪隊だ」

ブラッグトリガーが何なのか気になった修はレプリカに聞いた。説明を受けた三雲は最初に助けてもらったときに聞いたトリガーが「親父のトリガー」「死んだ親父の形見」と言っていたのを思い出し納得した

「ブラッグトリガーはレプリカの言うとおり強いツス、その力は普通では作ることが出来ないトリガーなんすよ、遊真の学習するトリガーとか」

トリオン体を解除したオレは修たちのほうへ移動して補足するように言いながらホームに上がった

10話 ゲームと羞恥心は控えめなくらいが丁度いい

迅は遊真の頭に手を乗せながらコイツを追い回しても得はないと三輪たちに行った。奈良坂は遊真が街を襲うネイバーの仲間じゃないという保証はと聞くと

「オレが保証するよ、首でも全財産でも掛けてやる」
「？」

「迅さん！」

遊真はなぜ片手で数える程しか会っていない自分をそこまで庇うのか気になったようだが、未来視のサイドエフェクトがある迅には確信があつたからだ

迅さん「何か」視たな。遊真がそこまでオレたち^{ボイダー}にとって力になるってことなのか？

「何の得もない!? 損か得かなど関係ない!! ネイバーはすべて敵だ!」
『ベイルアウト』!!」

それまで地に平伏していた三輪が一方的に吐き捨てるベイルアウトを起動して本部に飛んで行った

「お？ 飛んだ」

『ベイルアウト』だ。ボイダーの正隊員のトリガーにはベイルアウト、つまり自身の意思で緊急脱出するかトリオン体が破壊されると自動的に基地に送還されるようになってる」

「負けても逃げられる仕組みか、便利だな」

迅からベイルアウトの仕組みを聞いた遊真は単純にボイダーはすごいなと感心していた。確かに緊急脱出の機能なんて出来たときはかなり驚いた。それから米屋はトリガーを解除した

「あー負けた負けた、しかも手加減されてたとか、もう。さあ好きにしろよ、殺そうとしたんだ殺されても文句は言えねえ」

「別にいいよ、アンタじゃオレは殺せないし」

起き上がった米屋は肩を竦めながら言うが、遊真はそんなことをするつもりは無いみたいだった

「マジかーそれはそれでシヨックー！……じゃあ今度は仕事関係なしで勝負しようぜ、サシで！」

米屋は相変わらずというか戦闘に関してはかなり喜ぶタイプだ、強い奴を見つけては模擬戦を度々申し込んでいる

三輪はまだ引き摺っているのか、また家族を殺されたことを恨んでいる。そんなの殺した分だけ自分が傷付いていくだけだ

思い出すのは5年前。逃亡してそのまま成り行きで協力してトリオン兵は倒していったが、その日は雨が降っていてオレの後ろには1人の亡くなった女性と傍らに膝を付いて呆然としている少年が1人
三輪がボーダーに入隊したときは顔に見覚えがあつたからほんとに驚いた。遊真は何故かまだトリオン体のままだが、服装が換装前の格好に戻っていた

「さてと、三輪隊だけじゃ報告が偏るだろうからオレも基地に行かないやなー、メガネ君はどうするー？どっちにしる呼び出しは掛かると思うけど」

「あ、それじゃ僕も行きます！空閑と千佳は何処かで待っていてくれ」
そう言つて千佳が頷くのを確認した三雲は迅とオレの後を追いかけた

「……ん？護お前は付いてこなくてもいいぞ？城戸さんにはオレから言つとくから」

「ホントツスか!?いや〜正直城戸さんのことは苦手だから助かるよ、さすが迅さん！」

「それもそうさ、なんたつてオレは実力派エリー……つてなんでいないの？」

「えつと……護は言いたい事言つたら一目散に走っていききましたけど……」

「マジでっ!!?」

オレは聞き飽きたセリフを大人しく聞くつもりはなく、颯爽と走り

去った

「迅さんのあの口癖どうにかなんないんスカね、いい加減聞き飽きたッス」

迅のあの口癖を聞くより早く走ったオレは街を歩いているとゲーセンが目についた

最近はいレギュラーゲートやラッドの殲滅でろくに遊ぶ時間が出なかつたし、久しぶりに遊ぼうと中へ入ると

左側に景品ゲーム、右側にメダルタイプのパチンコ、中央に円形のカウンターがあつてその周囲には筐体ゲーム機がある、さらに右奥には手や足など使つて音楽に合わせて遊ぶいわゆる音ゲーがある

この三門市ではそこそこ大きめのゲーセンだ

中に入り中央周辺にあるパワードスーツを着て鎧のように硬い外骨格の虫と戦うゲームをしようと思つたら、景品ゲームところで聞き覚えのある声が出た

「あーあーまた外れた、焦り過ぎよ双葉ふたば」

「うーでもあそこで外れなければ取れたのに……………」

景品ゲームの方では身長差がある女性2人がいた

ロングヘアで口元のほくろが妙にいやらしいのが加古隊隊長の加古望かこのぞみ、そしてゲーム機の窓を壊してでも欲しそうなしている目つきとツインテールにしてるのが黒江双葉くろえふたば

「珍しいッスね、ゲーセンにいるなんて」

「?…………あら玉狛の護君じゃない、護君こそどうしたの?」

「いや〜最近いろいろ忙しかったしよ?だから非番の今日なにもすること無いッスから、久しぶりに遊ぼうと思つたんスよ」

オレの理由を聞いて加古さんたちも同じ理由で来たと知った

「……………取つて」

「はい?……………あ〜これッスか?」

双葉が短く先ほどの景品を指差しながら言つてきて、オレもなんなのか気になってみると思わず頬が引き攣りたくなるものがあつた

それは半分にカットされて中が見えるみかんに顔が描かれていて、

左右に手足が付いているクッションだ、取りやすいように半分近くまで台から出ている

「双葉はみかんが好きでね、このクッションを見つけてすぐに取ろうと必死になったわ」

みかんが好きなんだと知り双葉を見ると口を尖らせていた、何故かその仕草がちよつと可愛いと思った

「随分前にだけど護君がこういうゲームが得意だって聞いたことがあってね、お金は出すからお願いできる？」

そう言った加古の表情はいい加減他のゲームを遊びたいといった感じに呆れていた

「得意と言ってもこのゲームのアームのパワーはランダムで決まるんすよ、だから何でそんな話になっているのかは知らないツスけど運がよかつただいだッ！」

加古から百円玉を受け取り投入しようとしたら双葉が足を思いっきり踏んできた。あまりの痛さに少し悶えた

多少痛みが和らぐと立ち上がり百円を入れてゲームスタート

「つつ〜!!ありがとう」

「どういたしまして」

「ツ／＼」

1回で落とせたみかんのクッションは取り出し口から取って、双葉に渡すといつももの鋭い目つきが無くなり13歳の子供らしく喜んでオレにお礼を言った

子供らしい表情にオレも少し気分が良くなり、前に桐絵ちゃんにしてみたいに頭を撫でた。すると双葉の顔は見る見る赤くなっていき熱でも出たのか、心配して聞くと今度は顔にグーで殴られた

「痛いツス……恩を仇で返すとはいい度胸ツス、あれで勝負するツスよ!!」

そうやってオレが指差したのは某太鼓ゲームだった。久しぶりだから失敗はするかもしれないけど女の子に負ける気は無かった。

年下の子相手に大人気ないツスか? いいツスよ! オレもまだ中3

の子供ツスから!!

誰に言っているのか分からない問答を終えると、双葉も勝負には負けるつもりはないようで顔は真剣だった

「それじゃオレから選ばせてもらっスよ」

後ろで成り行きを見ていた加古さんの顔は何故かニヤニヤしていた、聞いても頑張ってね〜とか返さない。気にはなるけれど今は勝負が先だ

オレが最初に選んだ曲は「アシタノヒカリ」、最近聴いた曲の中では気に入っていてよくリピート再生している。因みにこれはクラスの奴等からお勧め教えられた

曲が始まると少しして太鼓を叩くマークが流れてきてリズムに合わせて叩いていたが半分過ぎたところで

「あっ!?!しまったツス」

「……よく見ないからだ」

オレがそれまでコンボが続いていたのにミスをしてしまいカウントが消えた

もう曲の終わり頃で今度は双葉がミスをしてしまった

「あっ!?!」

「…………へ〜余裕のある人は今頃ミスですか? いいツスね〜」

「つく今度は私が選ぶ番よ」

曲が終わりリザルト画面に移ると結果は僅差でオレの勝利、双葉は最初の1分ぐらいいは聞きなれない曲でなかなかコンボが出来なかったからスコアが低いのだ

そうして双葉が選んだ2曲目は「GIRIGIRI」だった、この曲も知っているから勝てると思ったが結果は双葉の勝利に終わった

そして3曲目は「Crossing Field」だ、これは某文庫では代表作に入るほど人気でアニメやドラマCD、漫画など出てくる

曲が始まりリズム叩いていたのだがまたもミスをしてしまった、それは双葉も同じだがオレの負けだった

リザルト画面になるとミスは大差ないのだが叩くタイミングが双

葉のほうが良かったというものだった

「そ……んなっ……負けた……ツスカ?」

まさか自分で選んだ曲で負けるなんてあまりにも悔しくてその場に跪いた。すると後ろからパチパチと控えめの拍手が聞こえてさらに顔を向けたら加古さんが手を叩いていた

「いや〜まさか双葉に本気で勝負して跪くなんて余程シヨック?」

「……ツス……」

傷を抉るような言い方をしてくてオレは更に気分が落ちてしまった、すると双葉が

「……楽しかった、ありがとう」

そう言っ店を出て行った、加古が言うにはこの後宿題を片付けるそうで加古さんも後追っ店を出て行った

まあ楽しんでもらえたからいいツスカ、オレも早くあのゲームをしよつと

加古隊の2人が帰ってから当初の目的のゲームを2時間、そろそろ玉狛に行こうと思いつ途中でスーパーに寄って、冷蔵庫の中が寂しかったなと思いつ。お菓子のほかに材料を今日の晩の分だけの量を買った

店を出ると1時間も材料選びに費やしたせいか日が沈みかけていて、あたりはオレンジ色に染まっていた

30分ほどでオレが所属している玉狛支部に着いて、中に入り扉を開けるとそこには三雲と遊真に千佳の3人がいた

「……どうしてここにいるんスカ?」

「はっ!? 護くん君は救世主だよ」

「うわっ!? ちよ……宇佐美離れるツス………なんか………イロイロ……あ……当たってるんスけど……」

「ん〜? んふふ初心だね〜護君は」

救世主とか言っオレに抱きついた宇佐美は、恥かしがるどころか更に押し付けるように力を込めた。少ししてやっとなんかオレの手から買い物袋を受け取りキッチンに入っいった

「このお菓子は？」

「／／／／／……支部のツス、だから後で経費で落としておいてくださいツス」

「うふふふりようかい」

買った物袋の中身を出して材料を見ると卵丼が作るようになった、ソファに座ろうと移動するとキッチンの入り口あたりで、玉狛のペットであるカピパラの雷神丸が昨日のカレーを『舐めて』いた

「っ／／／／／」

さっきの救世主という言葉に納得がいったが、雷神丸が舌で舐めているところを見たオレは一気に恥かしきMAXになり慌てて借りている部屋に入ってしまった

その様子を見た三雲たちは別々のことを言った

「ふむ？……マモルは何で顔が赤くなって慌てて2階に行ったんだ？」

「く……空閑！いいからこのことは誰にも言うなよ！！／／」

「うむ……納得はいかないけどオサムが言うなら分かった」

「護君も男の子だね」

「……／／／／」

遊真は疑問に思っただけ三雲に聞いたのに教えてくれなかった、嘘を見抜くサイドエフェクトで何かを隠しているのはバレバレだけど聞いても答えてくれそうになかったからすぐ諦めた

護が慌てる原因になった本人はこれからどんな扱いをされるのか分かってるのに恥かしがるどころか面白がっている、隣にいる千佳もその意味が分かったのか頬を赤らめて俯いた

「いや〜青春だね〜」

自室にいた迅はうつかり護の未来を見てしまったせいで、現在の部屋の様子が分かっていた

その日のご飯、オレは食べ終えるまで宇佐美と顔を合わせられなかった

食器を片付けた頃、迅の携帯が鳴り少し話をした後電話を切った

「まもなくウチの支部長ボスが帰ってくる、遊真とメガネ君、支部長ボスがお前たちに会いたいそうだ、ついでに護も一緒にな」

「オレもツスか？」

怒られるような事でもしたのかと思いついたが特に……いやさつき三輪隊と交戦したけど、あれは迅さんが何とか城戸さんに納得させたから問題はないはずだ、他のことかと探しても心当たりはなかった

「失礼します、2人を連れてきました」

「お、来たなお前が空閑さんの息子か」

部屋に入った遊真はじめての支部長室に当たりをきよろきよろと見回している、そんな遊真に玉狛支部支部長：林藤匠りんどうたくみは挨拶をした

「はじめまして」

「……………どーも」

「お前のことは迅と三雲君から聞いている、どーせ護は口止めでもされてオレに言わなかったんだろ？」

「ちよ……何でオレが悪いみたいない方になっているんスか!?!迅さんがそうしろと言ったから今まで見ていただけだったんスよ」

オレのいいわけにやっぱりなと言ってそれ以上は何も聞いてこなかった

「まあなんだ玉狛ウチはお前を捕まえる気はないよ」

林藤の言葉に安堵した三雲は肩の力を抜いた

「ただ1つだけ教えてくれ、お前は親父さんの知り合いに会いに来たんだろ？その相手の名前って分かるか？」

その問いの答えを知っているオレは顔を曇らせ、未来を見て知っている迅さんはさつきまでの軽い感じから真剣な表情になる

そして遊真は会いに来た人物の名前を告げた

「……最上宗一、親父が言ってた知り合いの名前は最上宗一だよ」

名前を聞いた林道はやはりかと思つた

「そっか、やつぱり最上さんか」

そう言つて机の上に置いてあるタバコを手にする

「支部長^{ホス}、未成年3人もいるんですけど？」

「あれ？オレは？」

「つとわりいわりい……最上宗一はボーダー創設メンバーの1人でお前の親父さんのライバルだった、そして迅の師匠だった」

2度も「だった」と過去形で言つたことに流石に遊真も気付いたと思う。でもまだ確証はない、どこかの国にいるかもしれない、それからその国に行けばいいことだった思つているかもしれない。けど現実には残酷だ。迅さんが前に進みだし腰に挿していたブラッグトリガー……風刃^{ふうじん}を鞘ごと抜いて机に置いた

「この迅のブラッグトリガーが最上さんだ」

「!!」

「!!……じゃその人は……」

さすがに遊真も頼るべき人がブラッグトリガーになっていたことに驚きを隠せなかった

「最上さんは5年前にブラッグトリガーを残して死んだ」

「そうか、そのトリガーが」

11話 目的と面白いこと

「すまないツス遊真、ホントはあの日の夜に言ってもよかったんスけど、迅さんから何もするなと言われてたスから」

「いいさ、別に。気にしてないから」

オレは遊真に謝るがそこまで気にしていと言った

「最上さんが生きてたらきつと、本部からお前を庇っただろう。オレは新人の頃空閑さんに世話になった恩もある、その恩を返したい。お前が玉狛支部ウツチに入れば本部とおおつぴらにお前を庇える、本部とも正面切ってやりあえる。どうだ？玉狛支部に入らないか？」

「……………それは——」

林藤支部長に申し出に少し迷った後遊真は……………

「空閑にとつてもいい話だと思ったのにどうして断ったんだろ？」

「さあな、それでも遊真が決めたことならしようがないツスよ」

支部長室を後にした3人は遊真は屋上へ、三雲とオレは1階のダイニングへ行った。林藤支部長の話は残念なこともあったが逆に遊真を庇うとまで言って損をするような話ではなかった、なのに遊真は断ったのだ

『2人には話しておこうと思う、遊真がこちらの世界に来た理由を』

「理由って、親父さんが死んだから最上さんを頼って来たんじゃないツスか？」

『いや、それは建前でしかない、遊真がこちらの世界に来た理由は別にある』

突然話し出したチビレプリカが遊真の過去を語りだした

それは今から4年程前、遊真とその父の有吾はネイバーの戦争に参加していて、昔の縁と恩から防衛に力を貸していた。まだその頃の遊真は半人前だった

それでも半人前なりに頑張って動いていたからそこそこの活躍していた

『すべては上手くいっていた、有吾が死んだあの日までは』

他の国から攻撃を受けていた城塞国家カルワリア、そこが遊真と有吾の運命が大きく変わった。そんなある日静かな夜に南を警護していたトリガー使いが殺された。その殺され方は普通ではなくトリガー使い、しかもブラッグトリガーの可能性が高く、危険だと感じた有吾は遊真に砦の中で待機するように命令した

けど戦闘が始まって押されている状況見て前に出てしまったのだ、それが誤りだった

敵の裏を突いて部隊を崩そうと、様子を見るために止まった場所の背後に嫌な気配を感じ、振り向くとスピントールが雇ったブラッグトリガー使いだった。しかもその雰囲気は禍々しく怖れでその場に立ち尽くしてしまった遊真は、赤子の手を折るように簡単に倒され瀕死の重傷を負った

そこで遊真の人生は終わりを告げるはずだった。すぐに遊真を見つけた有吾は自分の命と全トリオンを引き換えにブラッグトリガーを作り、その中に瀕死の遊真の身体を閉じ込めそれに代わる身体をトリオン体で作った

「それじゃオレのサイドエフェクトがずっと遊真を感知しているのは、体がトリオン体だからツスカ!？」

『そういうことだ、そして——』

カルワリアはブラッグトリガーを受け継いだ遊真にこれからも戦うように命令をした。理由は国家としての威厳もそうだが主な理由は有吾の名前を歴史に刻もうとか、有吾を英雄とてこれからも称えようとか、敵を潰すことが有吾も望んでいるだとかそんな建前を言っていた

だけどそいつらは知らなかった、有吾が持っていた「嘘を見抜く」サイドエフェクトを遊真が受け継いでいることを

「嘘を見抜く……それが空閑が持っているサイドエフェクトなのか」「修には心当たりがあるのではないのか?」

オレは知らないが、レプリカに聞かれた三雲は心当たりがあるのか少しだけ俯いた

「……………それってすごい力だけど、多分すごく辛い力だ」

三雲の言葉を聞いたオレは確かにそう思った、嘘を見抜くということとは言い換えれば信用が出来なくなるということだ

遊真がブラッグトリガーを受け継いでからおよそ3年の間戦い続け、力と経験を身に付け気付いたときには戦争は終わっていた

だけど遊真は達成感はなかった、カルワリアが勝って平和になったというのにな

レプリカから話を聞いた遊真は有吾の故郷に行って、自分の体のことを相談しようといくつかの国を渡ってこちらの世界に来た

「じゃあ、あいつが年のわりに小柄なのは……………」

『そう、トリオン体の身体に成長する機能はない、遊真の身体は11歳のときから変化していない』

体が変わらないというのを聞いて三雲は不老不死なのかと聞くがチビレプリカは違うと言った、遊真の本体は今も緩やかにだけど着実に死に近づいている

その状態をどうにかしようとボーダーに来たんだと三雲とオレは思ったが、遊真自信の目的は違った。レプリカは指輪の中の遊真の身体を取り出す方法を、だけど遊真はブラッグトリガーになった有吾を甦らせないかと考えていた、けどそれは先ほどの支部長室で見た、ブラッグトリガーになった最上さんを見てボーダーでもそれは出来ないんだと知った

『遊真にはもう……………生きる上での目的はない』

三雲と護がチビレプリカから遊真の過去を聞いている時と同時に、玉狛支部の屋上で遊真自身から過去の話を聞いた迅はこれからどうするのかと聞いた

「そうだなこっちだとネイバーは肩身狭いし、親父の故郷だけどオレのいる所じゃないな。オレは向こうの世界に帰るよ」

「オレがこっちに来た理由はもう無くなった、これ以上ココにいても

ゴタゴタするだけだからな。けどこの何日かは面白かったなあ、久々に楽しかった」

そう言った遊真の顔は笑っていた

「……………そうか、これからもきつと楽しいことは沢山あるさ、お前の人生には。それにほら、さつそく面白いことが来たぞ」

迅が後ろ向くとそこには護が立っていた、手にはトリガーを持って「遊真、これから少し遊ばないか？」

『願わくば修、護、遊真に目的を与えてはやってくれないだろうか』

すべてを話し終えたチビレプリカは2人に頼んだ、だからオレはボーダーには楽しいことがあると思わそうと模擬戦をしようと思っただのだ

折角だからとオレの申し出に答えた遊真は三雲と一緒に3人でエレベーターに乗って地下室に来ていた

大きな白いコンクリートのタイルで左にはデスクがあり右には数字が書かれた扉が3枚と人数分のベイルアウト用のベッドがあるだけの簡素な部屋だった

先に来ていた宇佐美は机に座り既に設定を済ませている

「お、来たね〜いつでもはじめてもいいよ」

「それじゃ2番の部屋に入るッス」

オレに言われるままに遊真も付いてきて三雲は宇佐美の隣に、その反対には千佳がいた

「おお〜何だここ？おつきな街があるぞ!？」

「ここは模擬戦とか訓練するのに使う訓練室ッス、いまは仮想空間で三門市の街を再現しているんす、トリガー起動オン」

「トリガー起動オン」

2人とも戦闘体に換装すると簡潔にルールを説明した

「勝負は1回のみッス、どんなに暴れても訓練室は頑丈に出来ているから大技を使ってもOKッス、レプリカのサポートもいいッスよ」

「いいの？そこまでオレが有利なルールにして？」

「別にいいッスよ、タダで負けるつもりはないッスから」

『それじゃーカウント始めるよ〜』

「おっ？葉ちゃん？」

訓練室に宇佐美の声がしてどう責めようかと思いつつカウントが始まった

5、

4、

3、

残り3秒のところでオレは春風を後ろに構え左手を前に出す、遊真は両手を握り最初の1発で手足のどれかを壊そうと考えた

2、

1、

『……………0!』

何故か0のカウントだけ声が高かった

『弾』印バウンド二重ダブル

開始早々遊真は足元に『弾』の印を2重で展開して一瞬でオレに近づき、胸にパンチすれば回避しようと腕か脚が当たるだろうと思っ
ているようだが、簡単に回避する

「へえ、今の避け……………っ!?足が……………いつの間に」

銃弾のように跳んで来た遊真を避けると春風を解除して左手にメ
インからスコープオンを出して遊真の左足首を斬る。着地した遊真
はバランスを崩してオレを見る。きっと今でオレがとんでもなく
強いのだと再認識したのだ

パソコンに写る戦闘を見ると先制攻撃した遊真がカウンターを食
らっていた

「空閑が……………やられた!？」

2度も遊真の戦闘を見ていたけど、三雲は護の実力がどこまでなの
か分からないが相当強いと思っていた、けどその強さが今空閑より強
いのか?と思いはじめた

「ふふーん早速やられたね、護君に下手に近づくと火傷するぜ?」

「え……う……なぜ宇佐美先輩が言うんですか……?」

さすがの真面目な三雲にはジョークはあまり通用しないようだ、さつきも陽太郎と遊真が釣った活動停止したラッドの残骸を調理しようとしたら千佳と一緒に本気で驚いていた

「……剣と槍、2つも使えるんだ?」

「……………」

遊真の質問にオレは答ええない、きっとサイドエフェクトで嘘か本当か探ろうとしているのだと分かった。戦闘中に敵に情報を教えるのは命取りになりかねない。だからオレは何も答えなかった
「今度はこつちから行くツスよ!!」

手に持っていたスコープピオンを投げたが叩かれて壊れた

「昼間も見ただけどこの剣脆いね、……?」

「γ」

春風の先端を遊真に向けてトリオンの弾丸を放った、当然遊真は防
ごうとシールドを出す

「『盾』印……なんだ?」

向かってくる弾を防いだとこまではよかった、けど遊真はその後解除したつもりはないのに勝手に消滅した。何でなのかと思議に思っているレプリカがトリガーの以上を伝えてきた

『遊真、異常事態だ、『盾』が使えなくなった』

「どういうことだレプリカ?」

『詳細は不明だが何故か使えなくなっている、他の印は問題ない』

「わかった、『鎖』」

遊真から鎖と描かれた魔方陣の様なもの展開してトリオンで出来た鎖が飛んできた

「ぐあ!?……いつ……いつの間にも!」

遊真から飛んできた鎖はバックステップで避けたが、背中がいきなり引つ張られる感覚がしたと思うと地面に叩きつけられた。起き上

がって見るとオレの背中から鎖が出て地面に固定されている

いつの間に仕掛けたんだと驚いたが、レプリカには分離機能があるのを思い出した。多分最初の特攻のすれ違いの時に、オレの後ろにチビレプリカを置いたんだ

「レプリカのサポートもありって言ったのはそつちだよ」

いいながら跳んでオレに1発食らわそうとしていたが、動きを制限されたからといってそう易々とやられるつもりはない

『強』印ブース十三重トリプル」

「シールド」

突っ込んできた遊真に対してオレはシールドで防いだ。当然簡単に壊して、また跳んでくる。バク転をするとき、足にスコピオンを出して蹴り上げる。流石と言うべきか頭は切れなかったが右肩にダメージを負わされた。切れたところからトリオンが漏れている

「……………マモルって結構強いね」

「ツス、オレも『色々』経験してきたツスから」

着地した遊真は肩を押さえながらこれ以上漏れるのを抑えている。オレがここまで強気でいられるのも遊真のブラックトリガーがそこまで脅威じゃないことだ。1発の威力は確かにすごい、けれどそれは当てれないと意味がないし、危険を冒して近づかないといけない

オレはただ攻めすぎず遊真の動きに注意をすればいいだけだ

状況は遊真が不利だが、動きを封じようと思ったのか駅でコピーしたトリガーを使ってきた

『錨』印アンカー十『射』印ボルト二重」

弓手町駅で見せたものより量は少ないがそれでも確実にオレを捕らえていた。そういえば鉛レッドバレット弾をコピーしているのを忘れていたオレは一か八かの賭けに出た

「マモル……………すごいな」

『だがアレではもう槍は使えまい』

遊真のレッドバレットを春風を回して何とか防げた、けれど全体に鉛が付いたためもう使えるような状態じゃなかった

「あ……………どうしよ……………」

メイン武器を仕えなくされたオレは結構ピンチだった、それでもスコーピオンは残っているし。アステロイドと^{ガンマ}γは単体で使えるからまだ戦える

「結構楽しかったけどこれで終わりだよ」

「っ!!」

遊真は自身のトリオン体を強化して威力を上げてきた、オレの前まで来て勝利を確信しているが、油断をしているわけではない。むしろ来てくれて良かったと思うほどだ

「っ!?!……ん? 何で槍が……」

オレを殴る直前、振りかぶる遊真の腕を春風で切り離した。使えなくしたのに何で? という不思議な表情をしながらバックステップで距離を取る

「教えてあげるツスよ。仕えなくなったトリガーはもう一度起動すればいいだけツス。ただし、オレのγで命中したトリガーはどうやっても仕えなくなるツスけどね!!」

左手でグリップを持って遊真にγ撃つ。シールドを使えない状態では逃げることもしか出来ない遊真は躲していく

「つまらない嘘吐くね? そのγってトリガー、本当にずっと使えないの訳じゃないよね?」

「自分で確かめたらいいツスよ」

以外と避けるのが上手くて建物の影に隠れられてしまった。けれどオレのサイドエフェクトには遊真のトリオン反応が鮮明に見える、だから撃つのをやめて屈折旋空を放った

「屈折旋空ー」

春風を振って帯びのように細い弧月の斬撃が飛ぶ、そして反射板が一瞬だけ出ると弧月は曲がって遊真を貫いた

そのあと爆発音が聞こえたからトリオン体を破壊できたと思っただが。次の瞬間、隠れていた建物の壁が派手に壊れて、瓦礫がオレに飛んできた

「ちよっ!?!……」

シールドで何とか当たってしまふことはなかったけど、何で壊れた

のか分からなかった。屈折旋空にはそこまでの威力はない

じゃあ仕留めそこなった？と思ったときには遊真の反応が上から感じて、見上げてみればもう目の前まで来ていた

「っ!!」

ギリギリで避けたオレは春風を振るより、スコピオンを肩から出して遊真の首を貫いた。そして今度こそ倒した

「空閑！」

「遊真君」

「……負けた、いや〜マモルは強かったよ」

そう言った遊真の表情は悔しがつているようにも見えたが笑っていた、思ったとおり楽しんでもらえて良かったと思った

「さすが護君ね、遊真君に勝つなんてね」

「褒めてるのか呆れているのかどっちかにしてほしいツスよ」

オレはそう言い返したが、宇佐美に褒められた事が素直に嬉しかった

「そういうええ何で戦闘中に何でオレの質問には答えなかったの？情報を与えないため？」

「そうツスよ、オレの予想じゃ遊真のサイドエフェクトは『相手の返事を聞いて嘘を見抜く』、つまり相手が何も言わなければ嘘かどうかなんて分からないんじゃないかって思ったんすよ」

最初の攻撃でオレが槍の春風以外で剣を使っているのを見て両方使えるのか、それともカウンターや防御や牽制などに装備しているのか見抜こうとしたんだろうけど、オレはそれに答えなかった

「どうだ遊真？ボーターにはオレみたいに強いやつが沢山いるツスよ！さっきみたいに遊真が苦戦する奴とか」

「……ふむ——」

オレとしては模擬戦が楽しみの一つとして、この玄界ミデンに残る理由として、生きる為の目的になって欲しいと思っている。オレの知る限り、3年間戦い続けた遊真は戦うことで楽しみを得ているような気がしたからだ

すると今度は三雲が前に出てきた

「空閑」

「ん？どうしたオサム？」

「千佳がボーダーに入るって言ってるんだ、ネイバーに攫われた兄さんと友達を探しに行きたいんだそうだ」

「あー……なるほど、オサムはどうすんの？」

「止めようかと思ったけど止めても聞きそうに無かったから手伝うことにした、僕は千佳とチームを組んで玉狛支部からA級を目指す」

いつそんな話しになっていいのか不思議に思っていたら、隣に来た宇佐美がこっそり教えてくれた。どうやらオレが屋上で遊真を誘っている間に、そういう話をしていたらしい

「おー、面白そうだな」

「お前も一緒にやんないか？おまえに嘘ついても仕方ないから言うけど、レプリカに親父さんの話を聞いたんだ、お前がこっちに来た目的も」

「んー残念ながら無駄足だったけどね、おれはもうこつちでやることはなくなった」

「だったら僕にお前の力を貸してくれ！千佳が兄さんたちを探しにいけるように……正直今の僕と千佳だけじゃA級に上がるのは難しい」

「難しいどころか絶対に無理ッス」

三雲の自分の限界をしっかりと理解している所は感心するけど、それでも遠征に行くなら今のままではだけだと容赦なく追い討ちをかける。A級へ上がるのは最低でも今の倍以上の力と経験を積まないとB級のランク戦すら怪しいのだ

「つぐー……確かに護の言うとおりだ、だから僕と千佳には実力のあるリーダーが必要なんだ」

「……オサムは相変わらず面倒見の鬼だな、相手が千佳だからとはいえ」

「っ!？」

遊真の一言に急に頬を赤らめた三雲の表情は虚を突かれたといっ

た感じに驚いている

「いや、オサムは誰が相手でもそうか、そしてたまに死にかける」

最後は笑いながら言うセリフじゃないだろうと、頭の中でツツコむが声に出さずこのまま成り行きを見る

「親父がオレを助けて死んだとき、親父は何故か笑ってた。その理由がオレには分からなかった。オレが死にかけたのは親父の忠告を聞かなかったからで。親父が代わりに死ぬ必要なんて全然なかったのに、なんであの時笑ってたのかそれを親父に聞いてみたかった……けどその辺、ちよつとオサムと似てる気がするんだよな」

「……え？」

「自分が損しても他人の世話を焼くところとか、オサムは何で死にかけてでも人を助けるんだ？困ってる人は見過ごせない性質なのか？」

「別にそんないいもんじゃないよ、僕は、ただ………自分がそうするべきだと思ったことから1度でも逃げたら、きつと本当に戦わなきゃいけないときにも逃げるようになる、自分がそういう人間だつて知ってるんだ。だから僕は人のためにやってるんじゃない、自分のためにやってるんだ」

三雲の過去に何があつたのかは知らないが、さつき言った言葉は自分を理解していてすごいけど、もう一つ、強迫観念にも聞こえた

恐怖があれば逃げるのは当然だが、やらないといけないからつて逃げて戦うのは自殺行為と一緒だ

「なるほど、オサムっぽいな、けどヤバイ時は逃げないとそのうち死ぬぞ、逃げるのも戦いの内だ」

「遊真の言うとおりッス、自分を理由に逃げる選択肢を捨てるのは愚か者のすることッス。A級目指して遠征メンバーに選ばれたのなら、最低でも生き残るための考えも身に付けなさいといけないッス。でないと本当に辛い目に会うッスから」

「護………分かってる、この間の学校での戦いでそれはなんとなくだけど理解している、でも後悔はしていないから」

三雲は理解力はあるから今言った言葉も嘘ではないだろう、そう

思ったオレはこれ以上何も言わなかった

「さて、オレも手伝うか、ほつとくとオサムとチカがすぐに死にそうだからな、後チームを組むのも楽しそうだしマモル以外にも強い奴は沢山いるみたいだし、そいつらと戦ってみたかったりもする」

「空閑！」

「遊真くん」

無事遊真からも合意を得られた千佳はまた、目標のために1歩近づいたことに嬉しかったり、友達が仲間になるのが嬉しかった

そして3人は支部長室に行き三雲には転属用の、遊真と千佳には入隊の書類が準備されており迅さんが未来視のサイドエフェクトで視ていたそうだ

12話 嘘は即興に限るね

朝早く起きたオレは24時間のスーパーに行つて野菜や魚を買つて朝食はサラダ、スクランブルエッグ、サケの塩焼き、ご飯と殆どの家庭で見られる朝ごはんが出来た

それを食べ終えた三雲と遊真と雨取はホワイトボードの前に立つ宇佐美の講義を受けていた

「さて諸君、諸君にはA級を目指す、そのためにはもうB級になつている修くんを除く千佳ちゃん遊真くんの2人にB級に上がってもらわねばならない、それは何故か?」

宇佐美はホワイトボードに書いたピラミッドの2段目に書かれているところをペンで指した

「まずはB級、つまり正隊員にならないと、防衛任務にもA級に上がるためのランク戦にも参加できないのだ」

「ランク戦?」

聞きなれない言葉を聞いた遊真は聞き返した

「簡単に言えば同じ隊員同士で戦つてランク、つまり順位を上げていくことが目的なんス。そうすることで自然と強いやつが上に行くんスよ、この玉狛には新しく入つた3人と迅さん以外は皆A級ツス」

「あ、それは昨日宇佐美先輩に教えてもらいました」

「そうなんスか!?!」

三雲の言うことに驚いて宇佐美を見ると「早い者勝ちよ」とでも言わんばかりに眼鏡を押し上げて誇らしげに笑っていた

「つまりオレがB級になるにはC級の奴らを蹴散らしてくればいいわけだな」

「正解!」

「それいつからやるの?今から?」

早速戦いたそうな遊真を落ち着かせると説明を続けた

「まあまあ落ち着きたまえよ、ボーダー本部の正式入隊つてのが年に3回あって、それは新人単位が一齐にデビューする日なんだけど、そ

の日まで遊真くんもランク戦できないんだよね〜」

早くB級に上がろうとした遊真は入隊日までランク戦がお預けになったことに不満を漏らした

「ふあ〜……あわ——」

「まあ落ち着くツスよ遊真、遊真にはこっちのトリガーに慣れないとダメツスよ、ランク戦にはブラッグトリガーは使えないんすから」

「ちよ！オレのセリフ!？」

「ふむ、何で？本部の人に狙われるから？」

「それもあるツスけど、一番の理由は強すぎるからA級の更に上のS級になるんす、しかもランク戦に参加できなくなるから修や千佳ちゃんとかチーム組めなくなるツスよ？」

「ふむ、そうなのか、じゃ使わんとこ」

遊真がブラッグトリガーを使わないのを聞いた宇佐美は次に千佳をどうするかと言った、戦闘員かオペレーターか聞こうとしたら遊真がすぐに戦闘員だと言った

確かに駅で見たトリオン量を見れば戦闘員として敵と戦うための力を身に付ける必要がある、そのことには千佳も同じだったようだ

そんなとき部屋のドアが開くとパジャマ姿の陽太郎が雷神丸に乗った状態で入ってきた、起きているのか寝ているのか分からないが続けてくれと言ってきた

陽太郎のこういうところは見てて面白いツスねー

戦闘員に決めたら次はどのポジションにするか決めようとボードを裏返すとカエルが3匹、右から剣を持った攻撃手、銃を持った銃撃手、銃より長い狙撃銃を持った狙撃手が書かれていた

さっつきのもだけどいつ書いたツスか……？

「で、ポジションについてなんだけども——」

モデルが蛙なのはスルーのようだ

そのまま説明を始めた宇佐美は質問をしていくと、普通かそれ以下という答えが返ってきた、けどそんな時三雲が助け舟を出した

「あの……千佳は足は速くないですけどマラソンとか長距離は結構早いです」

「お、持久力ありね」

「それに我慢強いし、真面目だし、コツコツした地道な作業が得意だし、集中力があります」

三雲が次々と千佳の特徴を挙げていくとそれを聞いていた皆はニヤニヤした

「あ、あと意外と体が柔らかいです」

「「お〜」」

遊真、護、迅が驚きの声を上げると千佳は頬を赤らめて照れた

「ふんふんなるほど……よし分かった、私めの分析の結果、千佳ちゃんに1番合うポジションは——」

「狙撃手スナイパーだな」

今度は宇佐美の言葉を遮って迅さんが先に言った

「もう迅さん!!あたしが言いたかったのに何で言っちゃうわけ!?!」

セリフを横取りされた宇佐美は不満を漏らしながら後ろから迅さんに飛びつくが、その光景にオレはちよくと納得がいかなかった、いやモヤモヤしたものが煮込み料理のように沸々と沸いてきた

そんなオレの心情を知ってか知らずか迅さんはこっちのほうを向いて笑ってきた

落ち着くツス……あれは挑発ツス………乗っては負けツス………つ!!?

自分の中の葛藤と戦っていると宇佐美に見えないように左手でVサインを出してきた、流石に我慢が出来なかった

「天誅——!!!」

「うぐおおお!!」

立ち上がったオレは慣れた動作で回し蹴りを迅さんの横っ腹に叩き込んだ

「迅さん!?!」

「お!?!」

「……大丈夫ー、迅さん?」

迅さんそのまま横の壁にぶつかり力なく倒れた、いきなりの出来事に三雲と遊真は驚くし千佳ちゃんも声すら出していなかった

「だ……大丈夫……」

ゆらゆらと立ち上がって蹴られた横腹を押さえながら自分が座つてた椅子に座つた

すると廊下から足音がして次の瞬間勢いよくドアが開かれた

「あたしのどら焼きが無ーい!!誰が食べたの!!?」

開口一番どら焼きが無いと叫んだ桐絵ちゃんは周囲を見た後、陽太郎の下に行き足を持って問い詰めた

「さてはまたお前か!?お前が食べたのか!」

「……たしかなまんどく……」

えく陽太郎の奴また食つたんスか!?

「お前だなー!!」

「ごめーん小南、昨日お客さん用のお菓子に使っちゃつた」

宇佐美が謝りながら言うときまで陽太郎を振っていた桐絵ちゃんは動きを止め足を離す

「はああ!!」

「!!……ぐ……ぐめんぐめん……てへ」

振り返つた桐絵ちゃんは鬼の形相で宇佐美に近寄り頬を引っ張つた

「あたしのどら焼き返しなさいよー!!」

なおも謝る宇佐美だが中々許してくれそうに無かつた、陽太郎は近くにいた三雲が身体を張って助けたので怪我はない。そのあとすぐに入ってきたのはレイジさんととりまるの2人だ

「なんだなんだ?騒がしいな、小南」

「いつもどおりじゃないすか?」

「よう、レイジさん、京介」

「はよッス、レイジさん、とりまる」

迅さんの後にオレも挨拶をすると三雲たちを見た

「もしかしてこの3人、迅さんが言つてた新人スか?」

烏丸の一言にさつきまで宇佐美の頬を引っ張りまくっていた桐絵ちゃんも手を放して振り返つた

「新人!?あたしそんな話聞いてないわよ、なんでウチに新人なんか来

るわけ？迅！」

「実はまだ言っていなかったけど」

桐絵ちゃんに聞かれた迅は立ち上がって3人の後ろに行くと「また」とんでもないことを言った

まさかツスけど迅さん……………

「この3人、オレの弟と妹なんだ」

冗談が通じない三雲はこの人何言ってるんだ!?見たいな戸惑いと、流石のレイジさんととりまるも少し驚いている、まるで聞いていた話と違うと言った感じに

普通なら誰もがこれが嘘だとわかるはずなんだが、1人だけ例外がいる

「え、そうなの!?迅に兄弟なんていたんだ……………護、あんた知ってた?」

「もちろんスよ、長い間一緒にいるのに知らなかったんスか?」

そう、桐絵ちゃんは非常に純粋で非常に騙されやすいのだ、だからこんな幼稚な嘘も簡単に引っかかる

「とりまるは!?!」

「もちろんスよ、知らなかったんですか小南先輩?」

次に聞かれたとりまるも迅さんの嘘に付き合うことにしたようだ、2人が同じ答えを返してきた事に確かめようと、遊真の顔を見つめるがここにも伏兵が1人

後ろにいた迅さんと一緒に「やってやったぜ」みたいな顔をした、嘘を見抜くサイドエフェクトを持っている遊真はもちろん嘘だと分かっているけれど「面白いことになりそうだと」思っけて付き合うことにしたようだ

以外と空気を読んでノリがいい奴だ

「……………言われてみれば確かに似ているような……………レイジさんも知ってたの!?!」

ただどあまり長引くと面倒だと思っけたのかレイジさんが終らしてしまっ

「ああ、よく知っている、迅が1人っ子だっこと」

「え……………?1人っ子……………どういうこと……………?」

まあ普通に考えれば迅さんに兄弟なんて出来ないツスもんね、
ジョークは即興に限る、禍根を残せば嘘になるって言うし

「紹介するね、このすぐ騙されちゃう子が小南桐絵、17歳」

「え？……だ……だ……だ……騙したのおおお!!」

「いやーまさか信じるとはーはっはっは」

やっとな騙されていたことに気付いた桐絵ちゃんは叫んだ、宇佐美は
それを無視して次にとりまるを紹介した

「こっちのモサモサした男前が烏丸京介16歳」

「モサモサした男前です、よろしく」

宇佐美のジョークにも動じることなく挨拶をする

「こっちの落ち着いた筋肉が木崎レイジ21歳」

「落ち着いた筋肉？それ人間か？」

レイジさんの聞き返しにオレも同じことを思った、すると今度は迅
さんが口を開いた

「さーて全員揃った所で本題だ、こっちの3人はわけあってA級を目
指してる、これから厳しい実力派の世界に身を投じるわけだがさつき
宇佐美が言ったようにC級ランク戦開始までにまだ少し時間がある。
次の正式入隊日は1月8日、約3週間後だ、この3週間を使って新人
3人を鍛えようと思う、具体的にはレイジさん達3人にそれぞれメガ
ネくんたち3人の師匠になってマンツーマンで指導してもらう」

迅さんのこれからの説明を聞いて最初に口を開いたのは桐絵ちゃ
んだった

「はあ!?ちよつと勝手に決めないでよ!あたしこの子達の入隊なんて
認めて——」

「小南、これはボスの命令でもある」

さつきまでうるさかった桐絵ちゃんがボスの命令だと聞くとすぐ
に静かになった。レイジさんにとりまるも納得した、というかもとよ
り桐絵ちゃん以外は入隊には反対してはいないけど

「わかったわ、やればいいんでしょ、でもその代わりこいつはわたしが
もらうから」

桐絵ちゃんは自分の弟子を遊真に決めたようだ、確かに3人の中で

1番強いし組み合わせとしては合っていると思った

次に狙撃手スナイパーの千佳にはオレ達の中で唯一の経験者であるレイジさん本人が、残った修は烏丸が相手をする事になったのだが

「護はどうするのよ?」

「護はメガネくんのサポート、京介はバイトもあつて忙しいから」

1人残されたオレはどうするのか聞いた桐絵ちゃんの疑問に迅さんが答えその理由に納得した、最後にそれぞれ師匠の言うことを聞いて頑張るように言つて解散となった

「はげめよ」

「こら、威張るな陽太郎」

いつ起きたのかお腹を掻きながら陽太郎はエールを言った

「よろしく頼む」

「うん、了解ツスよ……と言つてもまだ日佐人の実力は知らないツスから今日は模擬戦にするツス」

「わかった」

本部の訓練室に來たオレと日佐人は今日が初の訓練。さつそく日佐人は腰の弧月を抜いて真っ直ぐに向かつてきた。手元で振りやすいように回転させて握ると春風を振つて後退させた。距離を取らそうとした瞬間日佐人の姿が消えた

「っ……カメレオンツスカ、でもオレには意味が無いツス」

サイドエフェクトでトリオン反応が見えるオレは春風のグリップを左手で持つとアステロイドを何も無いところに撃つた

「っ……どうして……カメレオンは見えないんじや?……つぐ!」

姿を現してシールドで防いだその隙に春風を突き出した。耐えられなくなったシールドはひび割れてしまった、割れた瞬間日佐人は弧月を振り下ろそうとしていたが、春風からスコープオンに切り替えて左手に出すとトリオン供給器官を貫いた

「サイドエフェクトは知っているツスよね？」

「ああ、トリオンが多いと感覚器官に影響が出るっていうやつだろ？」

「オレは一度トリオンを見れば隠れても意味が無いんス」

「ええ!? うそだろ!？」

「2戦目やるツスよ」

それを聞いた日佐人は次からどう戦えばいいのか頭を働かせたが結局戦闘に集中できず、ランク戦よりも酷い負けっぷりだった

日佐人は諏訪隊の攻撃手アタッカーだから前に出て連携を崩したり隙を作るのが主な役割なんだが、それはカメレオンを使つての奇襲攻撃で成功できたことだ

だけどオレのように今まで、できていたことが出来ない敵と遭遇したときの対処も出来るようにしないとダメだし、最低でも落ち着いた判断が出来るようにしないとダメだし、今日の戦い方を見て思った「熱くなりすぎツス、段々と攻撃が単調になってきてたツス」

「そうは言うけど、カメレオン使つても居場所がバレるんじや難しいよ」

「そんなんじやいざというときにみんなの足を引っ張つて迷惑かけるツスよ、日佐人」

全く傷さえ負わせることが出来なかった事に愚痴る

「……わ……わかった、次は頑張る」

『次』は無いと、今言うべきなのか迷ったが立て続けにキツイ事を言うのはやる気を削ぐかなと思ひ、今は言わないでおこうと頭の隅に置いた

「まあ、今度の練習までに反省したらいいツス、動き事態はそこまで悪くはなかったツスから」

さつきまで悪いとこばかり言われてたから、急に反対のことを言われて日佐人は喜んだ、レイジさんから弟子をとつたときは「飴と鞭」を上手く使うことだと言われた

とりまるるを弟子にとつた経験があるからアドバイスを聞くとそう言われた

「それじゃ、これを渡しとくツス」

「……………竹刀？」

「そうッス、弧月を使うなら剣の基本的な動作など覚えておくと戦いやすいッスよ、まずは——」

竹刀の持ち方から振り方、足の運び方など初心者がまず覚えることを教えていった

「今日はありがとう、護」

「礼はまだ早いと思うッスけどね、今日は実力を調べただけだし、次からメニュー考えてそれをこなさないといけないんスから」

13話 忍田隊再始動!

「ただいまー……って誰もいないんすか」

本部から帰ってきたオレはドアを開けるが誰もいなかった。2階にも人がいるような気配はなかった。それじゃ地下にでもいるんだろうと思った

迅さんは修たちにそれぞれ師匠がついて修行をするように言っていたわけだし、降りて言ってみると懐かしい顔がいた

「あ、隊長!! 久しぶり!!」

「お久しぶりです、隊長」

そこには日に焼けた肌に太眉の少年の羽山^{はねやま} 春多^{はると}と、髪を後ろで束ねて泣きボクロがあるポニーテールの少女の福山^{ふくやま} 一菜^{かずな}。オレの部隊の仲間だ

「一菜、春多、もう帰ってきてたのか」

2人はこの玄界^{ミデン}のことを教えるために四日市のボーダーが所有している合宿所に行かせていた。一時的だが学校にもそつちに通わせていた、今度からは三門市の中学校に行くことになる

「もうって酷いじゃないッスか! ちゃんと宿題はやったッスよ!!」

そういつて見せてきたのは玉狛のみんなで考えた玄界^{ミデン}の常識や決まり、日本での風習や文化などを纏めた2人に課した宿題だ

中を見れば確かにやっている。ただ春多はバツが多い、反対に一菜はマルが多かった。やっぱり優秀だなと思った

「まあちゃんとやっているみたいで良かったッスよ」

「当然ッス!」

「隊長たちが私たちのために作ってくれたものです、当然のことです。ただ、ハルタが中々理解しないのが苦労しましたが」

「だ、だって……!!」

「だってじゃない!! アンタの所為で1ヶ月も遅れたんだよ!」

「騒がしいな。あ、2人も帰ってきていたのか」

2と書かれた扉から出てきたとりまると何故か酷く肩を落としている修、多分こつぴどく搾られたのか分からないけれど

「ただいまーとりまる!!そいつは誰？」

「新しいメンバーですか？」

「ああ、最近入ったばかりの三雲修だ。迅さんから色々教えるように言われてね。丁度いい、護、これからバイトで出るからこの後頼めるか？」

A級隊員としてそれなりの給料を貰っているとりまるだけど、兄弟が多い家庭の為かそれでも足りず、バイトをいくつも掛け持ちをしている。だから迅さんはオレにも3人のサポートに入るように言ったんだろう

「了解ッス」

「それじゃ頼む。修は思った以上に弱い、何を教えるべきかまだ迷っているがお前なりのやり方でいい」

「はいッス」

簡単に修のことを伝えると上にながっていった。それじゃ始めようと思ったけど修にはまだこの二人のことは知らないから、まずは自己紹介からだ

「修、紹介するよ。こっちは羽山春多。それでこっちが福山一菜」

「よろしくー!」

「これからよろしくお願いします」

「僕の方こそ、三雲修です。よろしくお願いします」

春多は手を上げるだけが修と一菜は礼儀正しく頭を少し下げ軽く挨拶を交わした

「それじゃ始めるッスか?とはいっても修がどの程度なのか知らないからなー、宇佐美!どんな感じだったッスか?」

「あー……とりまるくんが一方的だったね。意地悪とかじゃなくて単純に修君が追いついていなかった感じだよ」

つまりはとても弱いつてことか。さつき部屋を出るときもそう言っていたし本当なんだろう。まずは反撃はまだ出来なくても防衛は少しでもマシにした方がいい

「隊長ー!オレ達は?」

「お前たちは荷物を片付けろよ、どうせ置きっぱなしなんだろう?」

「つぐ……でも〜」

「そのあとは支部の掃除ツス。じゃあ!」

トリガーを持って参加したそうな春多に、こっちに戻ってきてまだ片付けていないであろう荷物を片付けるように命じた。聞き分けのいい一菜はすぐに動いた

修と一緒に2番の訓練室に入るとオレもトリガーを起動して準備を済ませて向き合う

「とりあえず一方的にやられたってことは防御が全くできていないって事だな」

「……………はい、烏丸先輩の動きが早くて」

「違うツス、とりまるが早いんじゃないかって修の目が追いついていないってことツス」

「追いついていない……………?」

「反射神経ツス。最低でもこれは鍛えておくべきツス、どんな状況どんな状態でも人間が一番頼りにするのは目と耳ツス。修はレイガストを持っていないのに使いこなせていないんじゃないや折角の堅い盾の意味がないツスよ。これからやるのはひたすらオレの攻撃を防ぐツス、隙があれば攻撃してもオツケーツスよ」

「分かった」

修は頭いいけど動きがダメ、まずはそこをどうにかしないとイケないオレは反射神経を鍛えることにした。春風を右手でクルクルと2…3回弄んでから右足を踏み込んで急接近する

「つ!?つぐー!」

「遅いツスよ」

まずは正面から行こうと春風を突きだす。シールドモードのレイガストで防ごうとするがそれより早く刃の弧月が修の横腹を切り裂いた。するとアステロイドを生成してきたがバックステップで下がりにながら放たれた弾をシールドで防ぐ

盾を持っていない側から攻撃しようと左へ回りながら徐々に近づく。当然修も攻撃されないように体を回すが春風の穂先を向けてアステロイドを撃つ

「っ、くー！」

反応は遅いけどギリギリでガードした。それを確認したオレは進む向きを変えて修に一気に近づくと、春風を振って盾モードのレイガストを攻撃する

盾に当てて上へ跳ぶと追うように修の頭は上を向いたが、後ろへ着地したオレを確認しようとして振り向くけどこちらを見る前に胴と腰をさよならさせた

「うわっ！」

「遅いッスねーもつと早くならないとランク戦じゃカモにされるッスよ」

倒れた修は数秒後には下半身も復元されて元に戻った。体を起こしてが表情は少し暗い、やる気はある感じだけど疲れが出ているのかもしれない。精神的な疲労が

「んー修行はやるべきかもしれないッスけど、ちよつと休憩するッスか？なんか疲れているっぽいし」

「え？でもトリオン体だから」

「そうじゃなくて。精神的な方！疲れて頭が回らなくなってきているんじゃないッスか？表情も少し暗いし」

見た感じ修は体より頭を使うタイプ。そういう奴は休憩を多めにして戦術を考えれる時間がある程度残しておいた方がいい。オレはどちらかと言えば体で動くほう、まあ頭も多少は出来るほうだと思ってる。隊長でもあるし

春多は典型的な体で動くタイプ。反対に一菜は頭で策を巡らすタイプだ、オレより隊長に向いていると思うけれどそこは受け入れてくれなかった

「お？お疲れオサム」

「空閑がいるってことは休憩？桐絵ちゃんは？」

「トイレに行ったよ。あとはそのまま任務に出るって」

そういえば今日は木崎隊が任務の日だったのを思い出した。とりまるはバイトと言ってたから2人か鈴鳴と合同のどっちかだろう。いつの間にか自己紹介を済んでいるのか春多と遊真は仲良さそうに

話している

「暇ならオレと模擬戦しようぜ!!もう合宿の所為で鈍っちゃってるからさー!」

「いいよ。何本?」

「ん〜10本!」

戦い好きな春多ならすぐに言うだろうなって思っていたけどその通りになった。一菜も同じだったのか呆れた表情だ

「春多、やるなら勝ってこいよ?それなりにできるやつだから」

「了解!」

オレがそういうと敬礼して訓練室へ入った。ブラツグトリガーじゃなくても、そこそこ出来るんだと思う。遊真の表情は少し楽しそうに見えたからだ

「そうそう、あたし見てたんだけど。遊真君、小南に3本取ってたよ」

「え!?それ本当なんですか!宇佐美先輩!」

「ホントホント。スコープオン1つでよく戦ってたよ」

宇佐美が言ってたことは結構驚いた。流石の一菜もいつもの落ち着きを失っていた

こりや……………春多でも苦戦するか……………?

ちよつとどんな戦いをしているのか気になって、一菜と一緒にモニターを覗き込んだ。そこに映っていたのは遊真が素早い攻撃を繰り返していた

春多は弧月で防ぐがトリオン体には少しづつ、傷が増えていった。防戦一方で距離を取ろうとするが、すぐに近づいてくる

だがシールドで邪魔すると遊真は一瞬止まるが、すぐに左へ動いて近づこうとする。けれど春多はメインの弧月を投げと同時に今度は接近する

「おらあ!!」

投げられた弧月を弾いて隙が出来てしまった遊真は近づいた春多に斬られた。だけど胸元からスコープオンを出して相打ちへと持ち込んだ

「うそ……………春多が訓練生に相打ち……………!!?」

「マジかよ……………これ、正隊員になってトリガー組んだらとんでもないツスよ……………マスタークラスは余裕で超えるほどに」

遊真は確かに強い、でもオレが知っているのはブラッグトリガーで戦ったことがあるだけ。ノーマルトリガーで、しかもトリガーを一つしかセツトできないC級で春多に相打ちにするなんて相当だ

その次は春多が勝ったが、今度は遊真だった。結局4:4:1引き分けと言う形になった

「つえーなお前！今度戦おうぜ！」

「いいけど、どこかいくの？」

「ああ、防衛任務に行こうと思ってな」

「残念だが春多、今日はないぞ」

「え……………ない？……………任務が？」

やるきがあるのはいいけど、残念なことに今日は防衛任務はない。それを聞いた春多は絶望してしまったみたいな表情をして床に手を付いた

「そ……………んな……………やっと帰ってきて……………任務にいけると思ったのに……………」

そんなに行きたかったのかちよつとだけ罪悪感が出てしまった。けれどいきなり今日帰ってくるなんて連絡がなかったし、入れていたとしても疲れているだろうから行かそうとも思わないけれど

「どうします隊長？」

「どうって聞かれてもな……………」

どうしたらいいのか全く分からない。結局解決策が見つからないままオレは家に帰った。今日は早く終われたみたいで叔父さんと一緒にご飯を食べている。テーブルに並べられているのはドライカレーにコンソメスープとポテトサラダだ

「あ、そうだ。明日の任務オレの部隊にしてもいいツスか？」

「護の部隊？彼らが帰ってきたのか？」

「そうツス。今日突然帰ってきててびっくりしたツス、レイジさんにはもう言っているツス、だからあとは叔父さんが許可してくれたらいいんす」

春多が任務に行きたそうにしているから、明日のシフトで部隊の皆で行けば元気になるだろうと思った。叔父さん腕を組んで悩みだした。本来はレイジさんたちとやる予定だったけど、急な変更は難しい。風邪で人数減ったり、急な予定が入ってしまったって任務にいけないようになった時など、そういう場合は非番の部隊に入ってもらうことがあるのだが

そんなときタイミングを計ったみたいにオレの携帯にレイジさんから電話が来た。通話ボタンを押して耳に当てた

『もしもし、護か?』

『そうツスよ。どうしたツスか?』

『ああ、支部に帰ったらお前の仲間が帰っていたからな。それで春多が任務に行きたかったらしいな』

『あはは……そうなんスよ』

まだ春多は任務にいけなかったことを引き摺っているらしい。口を尖らせて隅っこに座ったりしているとか。ご飯もいつもはうるさいのに今日に限っては黙々と食べていたと

久しぶりのレイジさんのご飯なのに、静かに食べるなんて重症だと頭を抱えてしまう

『明日の任務のことなんだがな。護のチームが行くべきだと思う』

『え?なんで……春多のことなら気にしなくても』

『そうじゃない。1年ぶりなんだ、勘を取り戻す時間は必要だろ。それにお前もトリガーを持ち替えてから連携に見直しはしていないだろ』

『あ、そっか……』

『京介と小南にはもう言っちゃ承している。あとは本部長に言ってチームを交代してもらえ』

『……ありがとうツス、レイジさん!』

オレ達のことを考えて任務を交代してくれたレイジさんに礼を言っただけで通話を切ると、叔父さんにそのことを伝えた。本人が了承しているなら問題ないと言って、本部に残っている職員にシフトの変更を伝えた

翌日、警戒区域南西周辺をオレの部隊が担当になった

「おつしやー！久々の任務だぜ！」

「春多、気合入れすぎて空回りしないでよ！それが隊長の新しいトリガーですか？」

「そうだ。春風って言うんだ」

少し薄めの赤い隊服を来たオレ達が着いた途端、春多は両手を上げて気合を入れていた。任務にこれたのが相当嬉しいようだ。一菜は新しくなったトリガーに興味津々だ

トリオン兵が来る前に春風と専用のオプショントリガー、それにこのことも説明すると丁度ゲートが開いた

「タイミングいいじゃん！」

「陣形はどうします？」

「ん？いつも通りだよ。オレと春多が前、一菜が後ろで援護だ」
「了解」

昔からの癖なのか未だに敬礼をやめない2人。だけどちよつとだけ嬉しく思ったりする。オレと春多が前に出ると一菜がアサルトを構えてハウンドを撃つ。モールモッド2体にバンダー2体。リハビリにしているはぬるいくらいかなと思うと弾が4体に命中した

けど当然威嚇射撃のため防がれて当然で、その間に一気に接近する
「おりゃあ!!」

春多がモールモッドの1体を撃破すると、それを足場にしてバンダーの顔を斬った。弱点にダメージはなくても、口が開いてその隙に一菜がアステロイドで撃破

「ナイス！」

「褒めてる場合じゃないでしょー！」

宙に浮いている春多は格好の的バンダーが既に砲撃の体制に入っていた。グラスホッパーを入れていないからシールドで防ぐ以外方法は無い。オレもモールモッド倒したあとγをバンダーに撃つと

「あれ？……撃ってこない？ラッキー！旋空弧月!!」

目の輝くが急に無くなって撃たなくなったのを奇跡だと思った春多は、旋空弧月で縦に真つ二つにしたした

久々だったけど連携も問題なさそうだ。春風に変えてからも今までどおり戦っていけそうだし。これなら何が来てもいいと思ってる、携帯が鳴った

画面を見ると迅さんからだった

14話 ブラックトリガー争奪戦1

気温が一段と下がるこの時間は昼のときと違って静かだ、けどオレ達がいる警戒区域では遠くからトリオン兵と戦っている音が聞こえる。上を見上げてみれば星が輝いている

綺麗だなと見ていたら一葉が敵が来ていると言ってきた。上へ向いていた顔を正面に向けると太刀川体、風間隊、冬島隊A級上位部隊と三輪隊が立っていた、全員バッグワームを付けているからレーダーには反応がないわけだ

そりやそうか、これから狩りに行くのに居場所を晒すなんてバカな真似はしないか

「あれ？迅さんと……忍田隊？アイツ等こつちに来ていたのかよ」

最初に口を開いたのは冬島隊の当真さんだった。オレの後ろにいる春多と一葉をみて不思議そうにしているが、まあ無理もない。帰国子女の2人は日本の勉強をするために四日市へ行っているとなつているから、今日この日に帰ってきているのは彼らにとっては良くない事だ

「よう、当真、冬島さんはどうした？」

「ウチの隊長は船酔いでダウンしてるよ」

「余計なことを喋るな、当真」

どうやら遠征から帰つてすぐに来たみたいだ。冬島さんがいないのは船酔いで倒れているからなのかと納得した。正直言つてトラップのやることは苦手だ。あつちには悪いけれど居なくて助かった「こんなところで待ち構えてたつて事は俺たちの目的も分かつてるつて訳だな」

「ウチの隊員にちよつかい出しに来たんだろ？最近ウチの後輩たちはかなりいい感じだから邪魔しないでもいいんだけど？」

普段はとんでもなくだらしない太刀川さんだけど、こういう戦闘関連では一気に賢くなる。それが普通に勉強のほうでも生かせたら、頭を悩ましている叔父さんとか風間さんとかストレスが幾分か減るだろうに

「そりや無理だ、と言ったら?」

「その場合は仕方ない、実力派エリートとしてかわいい後輩を守んないきないな」

「そッスね。たとえば本部隊員だとしても、アイツのブラックトリガーは奪わせるわけにいかないッス」

いつもより好戦的な迅さんに太刀川さんは気分が上がったみたいだけど、風間さんがそれを許さなかった

『模擬戦を除くボーダー隊員同士の戦闘を固く禁ずる』、隊務規定違反で厳罰を受ける覚悟があるんだろうな、迅、護」

「当然ッス、風間さんたちは命よりも重いものを遊真から奪おうとしているんだ、友人として、仲間として見過ごせないッス」

「それにね風間さん、ウチの後輩だって立派なボーダー隊員だよ。アంతらがやろうとしていることもルール違反だろ、風間さん」

その通り。ついこの間正式に入隊手続きは済ませた。玉狛では、だけど。迅さんはそれにと続けて言った

「ネイバーを入隊させちゃダメっていうルールは無い、現に玉狛にはネイバーのエンジニアだっているし、何より護も、その仲間の春多と一菜だって——ネイバーだ」

「……!!」

風間隊と三輪隊が驚いた。それも当然だ。1年前の遠征では宇佐美が玉狛に来たばかりで、後任のオペレーターが部隊との連携に慣れるために風間隊は参加しなかったから知るわけがない

逆に太刀川隊と冬島隊とは一緒だったから知っている、そして城戸さんが正式に入隊を認めているためこうしてオレのチームにいるわけだ

「本当なのか、護?」

「そうッスよ、風間さん。生まれも育ちも『向こう』ですよ、こっちの世界にオレの出生記録なんて無いッス」

驚いている人の中で1人だけ、三輪だけはオレを殺そうとしそうなほど睨みつけている。トリオン体だからよかったものの、弧月を持っている手はきつく握られていて、生身だったらきつと血が出ていたと

思う

「言つとくけど城戸のオッサンは許可しているからな！今更言つても何も変わらないぞー！」

「そうですね。たとえば人数差や戦力差があったとしても私達は彼を守るために、何度でも武器を持って邪魔をします。私たちのことはご存知ですよ？隊員となった彼を追つても処罰を受けるのはそちらですよ？」

アサルトを持って一菜がそう言うがまだ穴はある。処罰を受けずに遊真からブラックトリガーを奪い取るちゃんとした理由が。ソレに気づいてないでほしいと願つたがダメだった

「いいや、そんな事はないぞ。お前の後輩はまだ正式な隊員じゃないぞ。玉狛での入隊手続きが済んでも、正式入隊日を迎えるまで本部ではボーダー隊員と認めていない、オレたちにとってお前たちの後輩は1月8日までは野良ネイバーだ、仕留めのに何の問題も無い」

本当に最悪だ。穴に気付かれていたなんて。でもそこまで驚きはない、太刀川さんたちがここで退いてくれたならオレ達が来る必要なんてないのだから。つまりはこの結果は迅さんの中では予定通りと言うことになる。その証拠に迅さんはブラックトリガー…風刃を抜いて

「……やれやれ、そう言うだろうなと思つたよ」

と言つたのだから。オレ達もそれぞれ武器を構えて戦闘態勢になる。しばらくの沈黙の後、先に動いたのはこっちだ。一菜がアステロイドを撃つと風間隊はシールドを展開して接近。歌川は迅さんの方に行つたが無視して春風からアステロイドを撃つ

「春多」

「了解!!」

サイドエフェクトが左の民家の屋根から誰かが忍び寄っているのが分かる。その情報はオレの隊の2人にも共有しているから春多にも分かる。弧月を抜いて一見何もないところを斬ろうとする。カメレオンを起動中は無防備なため防ぐには解除しないといけなくて姿を現した菊地原が2本のスコープオンで受け止めた

「つく！やつぱり最初見られたから居場所が」

「それならオレに任せろ！炸裂弾！」^{メテオラ}

後ろにいた出水が分割したメテオラを放ってきた。これはオレのシールドでは防ぎきれないけれど、一葉が1辺10cmはある六角形の物質化した盾が守ってくれた。同じものがいくつも組み合わせられて大きな盾になったから命中することはなかった

「マジかよ……あんなのありか？ちよ!!」

お互い盾で見えないが、オレにはサイドエフェクトで位置が分かるから、春風を振って屈折旋空を上空へ放つ。1度目の反射で出水に向かうが、当然避けられる。だけどバックステップで下がっている瞬間に、地面に当たる直前で2度目の反射、今度は左足を掠めた

「あれが曲がる旋空？チートじゃね？」

「隊長!!」

「おう、ようこそツスよ。菊地原！」

春多が斬りあっていた菊地原をこちらに飛ばしてきた。盾は移動して遮る物がなくなると春風で斬ろうとするが、直前で風間さんが庇った

「させると思うか？」

「当然、やらせてもらうツスよ！」

返す要領でもう一度振る。流石に耐えられなかったスコープオンが碎けて腕の1本でも落とそうかと思ったら、三輪がハンドガンを構えていた。シールドを展開すると同時に一葉が3枚組み合わせた盾で防いでくれた。その瞬間鉛が生えて落ちた

「レッドバレット！つくー！」

アステロイドじゃなかったことに驚いていると、風間さんが蹴ってきた。体勢が崩れそうでも1回バク転して前を見据える。隣に春多も来て弧月を構えるが、迅さんとやりあっていた太刀川さんが旋空を放とうとしていた。後ろに跳んで回避して屋根に着地すると、一旦逃げる。離れたところに当真さんのトリオン反応があるけれど、撃つてくることがなかった

取りあえずは凌ぐことが出来たオレ達は今後の作戦を話し合っていた

「それでこれからどうするツスか？」

「まとまって行動していたら一網打尽の可能性もあります。それにこちらは遊真くんを守るという立場を利用して分断してくる可能性高いと思います。三輪隊の2名は見ませんでした。合流するかと」

一菜が現在の状況を告げてきた。古寺と米屋を見なかったけど合流していると思う。問題はどうか動いてくるかだ。分断してきたらこちらもそうせざるをえない

片方を相手している間に、もう片方が玉狛支部に入ってしまったからだ。たとえ違ったとしても迂回して挟撃の可能性だってある

「そうだな、風間さんがそつちに言ってくれると嬉しいんだけど。オレのところに来るだろうな」

確かにそうだと思う。オレのサイドエフェクトじゃ風間隊は来る可能性はかなり低い

「私達を相手にするならまずは隊長のサイドエフェクトを封じるために出水先輩と春多の足止め、米屋先輩、それと三輪先輩のレッドバレットの構成で来る可能性が高いかと」

「そツスね。太刀川さんは迅さんとやりたいだろうし」

「まーそうだろうね。何人かそつちが相手をしてくれればこつちはやりやすくなる。お、きたみたいだ」

何人来ようと関係ない。遊真を守るためならいくらでも立ち上がってやるつもりだ。普段は付けない黒いヘアピンに触りながら覚悟を決めると予想通り二手に分かれて玉狛に向っている

「頑張れよ」

「そつちもツス」

最後にそれだけ言い残して迅さんは太刀川さんたちの所へ向かった。オレ達も三輪たちの所に行った。たえここで撃退したとしても今度は更に戦力を増やして来る可能性が高いと思う、と言うより城戸さんなら多分やりかねない

それでも入隊日が来たとしても遊真の入隊を認めてくれるとも思えない。だとしても迅さんは何か策があるんだろう、でなければ隊務規定侵してまで守ろうとしないはずだし

そんな事を考えながら道で待っていると三輪達がやってきた。7、8mほど離れたところで止まると玉狛が何を考えているのかと問いかけられたが、そんなのオレが知るわけがない

「そんなの知らないツスよ。ボスも迅さんも飄々としているから何をしようとしているのかなんてさ。でも遊真の、アイツの大切なものを奪うっていうなら手加減はしないツス。全力で阻止するツスよ」

こつちに来て手に入れた衣食住を手放すことになっても、オレはきつと守るために立ったと思う。そして後ろにいる2人もさも当たり前かのように付いて来るだろう、喜ばばいいのか呆れればいいのか分からないけれど

「そんなの……大切かどうかなんて関係ない！ブラックトリガーを持っていてるなら奪うのが当然のことだ！そうじゃなければ……オレ達が奪われ続けるだけだ！そんな理不尽なことがあつてたまるか!!」

「っ!!あつぶな……」

怒りを抑えられなかったのか激昂してハンドガンを抜くと撃ってきた。何とか春風で弾いたが、乱戦状態だとそうもいかない。この1発が戦闘開始の合図となつて出水がハウンドを放ってくるが、一菜のアサルトとエスクード改のお陰で全て防いだ

「オラッ！」

「させるか！」

三輪は横に動いて、米屋は真っ直ぐ向ってきて槍を突き出してくるが春多が弧月で弾いて守ってくれた。2本目の弧月も抜いて斬り合い始めた

「春多、任せたぞ」

「了解！」

旋空を除いて米屋に飛び道具はなかったはずだから、同じアタッカーの春多に任せてオレは先に出水を落とそうとしたが、当然三輪が邪魔をしてくる

「っ、通してくれないッスか？」

「させるわけないだろ、ネイバーがっ」

激しく憎まれてしまったな、なんて他人事のように思いながらバックステップで距離を取ると、銃を構えてきたがエスクード改が防いでくれた。その隙に出水のところに行くのと背後にトリオン反応を感じた

「させるわけないだろ？」

「っ!？」

さつきまで春多と相手をしていたはずなのに、後ろにいたのは米屋だった。咄嗟にシールドを張ったが、幻踊弧月で巧みに避けて左肩を掠めた

「やっぱり護はすぐに落とせないか。おっと！」

「お前の相手はオレだろ！」

「それは悪かったな。じゃあお前を落としてからにするかな」

春多が切りかかるが当然防がれる。出水の元に行こうとした時違和感を感じた、あまりに離れていることに。シューターなら当然だがその顔に貼り付けた勝ち誇った表情が気になった。三輪は一菜と撃ち合っていて近づけるような距離じゃない。じゃあ何でなのかと思っていると足元にトリオンキューブがあった。気付いたときには遅く爆発した

「隊長!!」

「隊長!？」

「やってくれるな……!」

ギリギリでシールドを展開したが、トリオン体はそこそこダメージを受けた。仕掛けるタイミングは多分米屋を相手にしたときだ、あのときにこっさり置いて距離を置いたんだらう

オレのサイドエフェクトは見ないと感知できないから完全に不意を突かれた

「今度は三輪ッスか？人気者ッスね、オレ」

振り返れば三輪が弧月を振り下ろそうとしていたから春風で受け止めたが、背後はがら空きでいつ狙われてもおかしくない。すると一

菜がハウンドをセットして上空へ撃つと放物線を描いて出水を狙った。だけどシールドで易々と防ぐとお返しと言わんばかりにアステロイドを分割して放った

間違いなくオレも射程に入っていてこれでは三輪も巻き添えを受ける、ここでシールドを展開すれば守ってしまうことになる、だからと言って何もせずにいると今度こそバイルアウトしてしまう

もうすぐで命中するって時に一菜がエスクード改で守ってきた

「隊長。出水さんの相手は私になります」

「……わかった。出来るだけ時間を稼げ」

「了解です」

後ろに立った一菜に出水の相手を任せるとして、春多のほうはどっちもそこそこのダメージを受けている。やっぱり幻踊弧月の前ではただ防いだり避けたりするのは限界があるみたいだ

「余所見をしている暇があるのか!」

「おっと」

他のところに気を取られていると三輪がアステロイドを撃ってきた。シールドで防ぐと屈折旋空を放つが避けられてしまう

15話 ブラックトリガー争奪戦2

迅さんはなるべく大人しく帰ってもらうのが目的で、必ずしもベイルアウトさせる必要はないと言ってた。だからリーチがある春風で少しずつ三輪のトリオン体を切りつけていくが、懐に入り込まれるとかなり危なかった

「っふー」

「あつぶなーギリギリじゃないツスカ」

上手いこと受け流されると一気に距離を詰めてきた三輪は、弧月を切り上げてきた。ギリギリのところでもスコープオンを出しても破壊されてしまったが、おかげで深く切られるということはなかった

でも一歩間違えればさっきのでベイルアウトさせられてた

バックステップで距離を取るとYを起動させて春風から撃つ。最初は避けていた三輪だが、次第に追い込まれてシールドで防いだ。風間さんたちから聞いているだろうがシールドが勝手に消えて舌打ちをした。今がチャンスかなと柄を握って振るうがまた懐に入られた、だけど今度はそれが目的で、春風を手放すとスコープオンを起動して手に持つと右肩を軽く斬る

「っ…この、ちまちまっ…」

「っー」

少しの苛立ちを見せるが力任せに振るってきた弧月に簡単に破壊される。ハンドガンを構えられて下がりながらシールドで防いだが、瞬時にレッドバレットをセットしてあるマガジンに替えて撃つてきた

「くそ…重たいツスなーコレ」

「そのまま跪いてろ、すぐに終らせてやっつ!?!」

「隊長!!」

「ナイス春多」

ゆっくり近づいてきた三輪は弧月を持ち上げるが、振り下ろす直前で春多の旋空弧月がオレ達の間を通った。三輪が驚いている隙に鉛を出来る限り切り落として軽くすると立ち上がって距離を取る、フリ

をして春風を出して突き出すが

「っ!?やるじゃないツスカ、今のは入ったと思っただんすけどね」

「バカにするなネイバー」

「酷い言われようツスね」

日夜玄界を攻めて来ているトリオン兵のせいでネイバーを恨んでいるやつは憎悪は晴れる可能性は低いだろうが、それでもこうして力を身に付けている事に嬉しく思うのは皮肉ってやつかもしれない

「ただ今は遊真のブラクトリガーを奪われないうちに引き下がるわけにはいかない

「槍では懐に入られては距離を取るまで防御しか出来ない、それならと右手でグリップを握って、左手でその前にある持ち手を握ると分裂した

「っ!!?その槍にはそんな仕掛けがあったのか」

「そうツスよ、少し本気で…!!」

「あれは…ベイルアウトの光?…誰かがやられたのかしら」

春風の別の姿に驚く三輪を他所に迅さんがいるところからベイルアウトした光が夜空を走った。誰がやられたのかは知らないが、ブラクトリガーに脱出機能はない。少なくともオレが知る限りでは、だ

「だろうね。少なくとも迅さんじゃないのは確かだ。オレ達はこのまま三輪たちを返すために踏ん張るぞー」

「了解!」

「りようか…っぐ!卑怯じゃないのかよ?」

オレの言葉に一菜のあとに春多も応えてくれようとしたが、そのときは隙だらけだったのか米屋にトリオン供給器官を貫かれていた

「余所見厳禁だぜ?」

「クソ…隊長、すみません」

油断はするなと日ごろから言っているのにやられた春多に後で鍛え直しだなと決めて、頭の隅に一先ず置いておく。今度は三輪の変わりに米屋がオレに特攻してきた。よく見ればあちこち傷だらけでト

リオンも少しずつ漏れ出ている

「つぐ……よくも春多を倒してくれたな」

「いまは戦闘中だぜ？隙があれば倒すのが……普通だぜ？」

「つつ!!!」

さつきまで幻踊と合わせての得意の攻撃を繰り返していた米屋がいきなり離れた。不思議に思っていると後ろにトリオン反応に気付いて振り返れば回りこんでいた三輪が弧月で斬りかかってきた

「隊長!!……この、しつこいわね！」

「いやいや、お前を援護に行かせないようにするのは当然だろ」

一葉も出水の数に物言わせた弾で援護には来れないみたいだった。さすが三輪隊のアタッカー二人の連携には恐れ入ると思う、右腕を切られてトリオンが漏れ出してしまう

「これで、終わり……!!あぶねーあぶねー」

「銃もなしに使えるのか……」

三輪から距離を取ろうと思った瞬間には米屋が既に後ろにいて槍を構えていた、不味いなと思いがんまを起動すると当たらないように離れてくれた。春風を使って撃っていたはずのトリガーが銃もなしに使えたのだから当然驚いている

「そうッスよ。銃はあくまで射程と命中率を上げるための補助ッス。だから近づいたら危ないッスよ!!」

「避ける出水!!」

「なっ！アステロイド!!」

27発に分割したガンマを一葉と撃ち合っている出水に向けて放った。三輪に言われて気づいたが遅いとオレは思ったんだが、アステロイドを放たれて爆発して煙が出た。晴れるとまさかの無傷で驚いた

「マジッスか……今のを防ぎきるって、すごいッスね」

「A級舐めんなよ。つつてもシールド1枚使えないけど」

出水はそう言うがとっさにアステロイドの弾幕とシールドで防ごうなんて本当にすごいと思う。シールド一枚と言ってもトリオン能力自体高いから残りの1枚でも一葉とまともにやりあえると思う。

というか防ぎながら放つなら1枚で十分だが

「はあーどうすつか、春多はやられたしオレも無視できないくらいに損傷してるし」

「それなら一思いにオレがやってやるよ!」

「つとー…それもいやなんだよなく…：…：…しょうがない、さつさと終らすか。トリガー解除」

「っ!!?」

今の状況を見てこのまま三輪たちを大人しく帰ってもらうことが出来るかと聞かれたらかなり難しい。特にオレは2人の連携に右腕を斬りおとされたわけだ。春多はベイルアウトしていないし一菜も消費が大きいエスクード改を使い続けるのはリスクもある。万が一突破されたとしてもレイジさんたちがいるから問題はないが、そうなったら事が更に大きくなる

迅さんが忍田隊^{オレ達}だけに言ってきたのはそういうことなんだろう。今も玉狛支部では三雲たちが訓練中だ。ならオレは取るべき方法はコレしかないトリオン体を解除した。戦闘中に何をしているんだと驚いている、普通ならすることがない非常に危ない行為なのだから「おいおい、勝ち目がないからって警戒区域^こで解除するのはあぶねーぞ?」

「勝ち目がない?そんな事ないツスよ。むしろ…：…：そつちが負けるのが決まっているんすから。トリガーオン」

心配してくれてなのか出水がそう言ってくれるがそれは杞憂だ。負けが決まったそつちが気の毒に思ってしまうほどだ。ヘアピンを取るとトリガーを起動する。何で2つもトリガーを持っているのか?と思っっているに違いないと思う。だってこれはボーダー本部にはまだ報告していない未確認のブラックトリガー^こなんだから

換装が終ると赤いジャケツットにオレンジのズボンと灰色のブーツ。忍田隊の隊服と同じだが、オレ専用の春風は握っていない。起動してないんじゃない、ないのだから当然だ

だけどその代わりに地面から約2mくらいの黒い棒が出てそれを持った

「おまえ・・・何だそれは？」

「ブラックトリガーだよ」

「なんでお前が持っているんだ!!？」

「そんなに怒鳴っても何も変わらないぞ？それにオレが持っていることに何か不満でもあるのか？」

「違う！何でお前がブラックトリガーを持っているのかと聞いている！いつ手に入れたんだ!!」

ギヤーギヤー吼える三輪にうんざりするが疑問に思っているのは最もだと思う、けれどトリオン体に肉体的な疲労はないけれど精神的には疲れる。親切心から言ってやったのにオレを睨む三輪の表情は全く変わらない

「吼えるのと無駄に疲れるぞ。何で持っているのか？オレが適合者だからだ。何時？5年位前だ」

「おいおい護？なんかお前性格変わってね？」

確かに米屋言うようにいつもは語尾に「ツス」を付けていたが、あれはまだ玄界ミデンに来た頃に林藤さんに「語尾に付けると怪しまれないし、お前に似合うと思うぞ」と刷り込まされた所為だ。後になって安定しない語尾に逆に怪しまれたり微妙に似合わないとか友達に言われたり、何故か成績はいいのにバカっぽいと笑われたりと来た頃は散々だった

「こつちが本来のオレの口調だよ、語尾に『ツス』って付けていたのはボスに騙された所為なんだよね。まあそういうわけで、絶対にここを通さないからな」

「っ!!ふざけるな!!っ!!何だコレは・・・？」

怒りの言葉とともに三輪は弧月を振るが、突如地面から伸びた黒い棒に阻まれてオレを切ることができなかった。すると米屋がコレならどうだと弧月（槍）を突き出すが、コレも黒い棒が2本伸びてその間を締め切るかのように黒い壁が現れた。ガキンツと金属同士がぶつかるような音が小さく響いた

「なんだこれ!?!...おつとー!」

一瞬戸惑う米屋だったが地面から影が不規則に曲がりながら伸び

ていることに気付くとバックステップで下がると、さっきいた場所にはオレが持つているのと同じ黒い棒がいくつも飛び出た

夜で暗いから見え辛いはずなのに避けたのは正直すごいと思う

「すごいなー、暗いから見えにくいはずなのに」

「バカ言え、月でよく見えるし視覚支援だってあるんだぜ？」

「三輪！陽介！離れろ！」

確かにオペレーターの支援次第では夜であっても昼間みたいに明るくする事だってできる。それなら避けられたことにも一人納得している、出水がハウンドを飛ばしてきた。瞬時に壁を作ろうとしたが通常のハウンドよりスピードは少し遅い。もしかしてと思つて後ろにもう2本追加して間を黒い壁で繋ぐとオレを守る箱を作った瞬間、派手な爆発音がした

それを聞いてやつぱりと思つた。バイパー+メテオラの合成弾、トマホークだった。曲線を描いていたからハウンドだと勘違いしてしまつたけど、防御はこつちの方が早いし堅い

「護、お前言ったよな？ブラックトリガーを使うときは本気で守らなといいけないとき、譲れないものがある時だつて。それが今だつて言うのか？」

壁越しでも三輪と米屋のトリオンは移動して出水のところに戻つた。1年と少し前に行った遠征でも太刀川隊がいたから、この中では出水だけがオレがブラックトリガーを持っていることを知っている。まさか今使うとは思つてなかつたみたいだけど

「そうだよ。そつちが奪おうとしているのはあいつにとつて命より大事なものだ。だからコレを使う。どうしても行きたいなら倒してみろ」

「命より大事？そんな事知るか!!ネイバーはオレ達の敵なんだ!そんなやつがブラックトリガーなんて持つていたら奪うのが当然だろ!」
「バカか?ネイバーからすれば三輪たちも立派なネイバーだ。自分達は違うとも思つたのか?それにな、三輪のお姉さんがブラックトリガーになつたらどうするんだ?」

「なん……だど?何が言いたいんだ……?」

「簡単なことだ。ブラックトリガーになったお姉さんを規則だからって手放すのか？」

「そ……そんなのツ……そんな言葉でオレを惑わそうとしても無駄だああー!!」

「……………簡単に逆上するなよ……………」

単に立場が違えばミデン玄界も立派なネイバー。なのに三輪の言葉にはさすがに怒りを覚えた。単純に見方を変えたら子供でも分かるようなことなのに、ただそれを指摘しただけで顔を険しくした

それにブラックトリガーをネイバーが持つことに危険視して奪おうとするのはいい。敵意があるならば。だけど友好的なやつにまで奪おうとするならそれはもう単なる身勝手な略奪行為だ

こつちの国を守る組織とは言えろくに知りもしないでそんな事をするのは許せない。ならばオレは自分の立場を悪くするとしても遊真を守るために戦うだけだ

逆上して接近してくる三輪に再び影を伸ばすと上に跳ぶが、棒が伸びる長さに限界なんてない

「なにつ!?ぐあー!」

2枚のシールドで防ごうとしていたが、ノーマルトリガーがブラックトリガーに敵うはずもなくあっさりと壊れて三輪の四肢を貫いた。トリオン体の重要部分の2箇所は外してあるからベイルアウトはしないが、満足に動くのは困難なはずだ

「隙ありすぎじゃねえのか?」

「そんなわけないだろ?」

三輪を相手にしていた隙に米屋が近づいて弧月(槍)で突こうとしていたが、既に足元には影が伸びていた。伸びる直前で跳んで避けたが、曲がり角の先にはバグワームを起動して潜んでいた一葉が銃を構えていた。

「っ!!くそ!!」

シールドで防ぎながら避けようとするがそうさせないと、2本目の黒い棒を持って別の影を伸ばして米屋を困うように棒を飛び出させた。シールドを固定型に切り替えたとしても撃ち続けられている限

りいつかは壊される

そしてついに壊れたかと思ったそのとき、別のシールドが再び米屋を守った

「そこから何とかして逃げろ！陽介！」

「無茶言うよな、傷すら付かないんだぜ？」

手に盾と書かれてシールドを起動して守ったのは出水だった。トリオン量は多いから銃弾では壊れるまで時間が掛かる

「一菜！そいつはオレがやる。隠れてチャンスを狙え」

「了解！」

「お？今のうちに……っておいおいマジかよ」

トリオンの残量に余裕はあるだろうが、壊れるまで撃っているといずれは足りなくなってしまう。それにオレだって影を伸ばし続けた状態では動くことができない

だから一菜を再び下がらせて隙が出来たら狙ってもらうことにした。チャンスかと思った米屋を逃がすことなく4つの棒を出して黒い壁で囲い、上も塞ぐと箱にして閉じ込める。そして黒い棒をランダムに飛び出させると中から叫びが聞こえた

「暗っ！……ちよ、なんだ!?おわあアア!!」

「陽介!!このっ！」

「っ！まだ動けるのか」

運が悪かったらベイルアウトしているだろうなと思っていたら、四肢を貫かれたはずの三輪が弧月で振りかぶってきた。棒から手を離してしまっただから箱が消えて、中からトリオン体がズタボロになった米屋が地面に倒れた

その状態に一瞬昔の記憶を思い起こされたが、感傷に浸る暇もなく三輪の攻撃を捌く事に意識を戻した。大分損傷しているはずなのによく動くなど驚いているとハンドガンを構えたが、撃つより早く一菜の銃撃で左腕が撃ち抜かれた

「そこにいたのか！メテオラ！」

爆破効果のある弾丸を飛ばすがエスクード改では焦げ跡が付くだけだった。バググワームを再起動してまた隠れる。春多がいてくれ

たら一菜がこうしてこそこそする必要なんてないんだが、いない奴に文句を言ってもしょうがない

出水を倒そうと飛び上がった棒を振り下ろすが、ギリギリで避けられてコンクリートの地面を少し破壊するだけだった

「あつぶな……けどこれはチャンスかもな」

いつでも防御するためなのかトリオンキューブは1つだけ、でも分割量は多く1発が小さい。放たれた瞬間黒い壁で守ったが左右にキューブが見えた

「それで防いだつもりか？ シューターはある程度なら弾を離れたところに動かせるんだぜ？」

出水の言うとおりシューターは一定範囲ないなら弾丸を動かすことができる。たとえ真っ直ぐにしか飛ばないアステロイドであつてもだ。言われて気付いたオレは反射的に飛び上がって何とか避けれたが足先が少し当たってしまった、でもこの程度ではなんの支障もないと思っていたら

「落ちろ、ネイバー」

三輪が右手にハンドガンを構えてオレを狙っていた。けど問題なのは南方向にあるマンションに1人スナイパーがいる。しかも出水も2つのトリオンキューブを出して全攻撃フルアタックの準備をしていた。跳んでしまったのは間違いだったと今になって後悔しても防ぐ方法なんてない。確実に倒される

そう思った瞬間には弾が放たれた

16話 ブラックトリガー争奪戦3

出水から弾丸が放たれて倒されるの覚悟したが、オレには当らなかつた

「これは…エスクード改!？」

前と後ろに一葉専用の防御トリガーのエスクード改が守ってくれた

「たいちよ!?!…つく、すみません」

姿を現したことで一葉は当麻さんの狙撃でトリオン供給機関を撃たれてしまった。すぐに戦闘を続けられないことを知って、短く謝ると光となって玉狛へと飛んでいった

「これでお前一人だ。ネイバー」

残りオレだけとなった状況に勝ち誇ったように宣言する三輪。確かに援護も望めなくなった今は数では負けている。それでも勝つと思えるのはブラックトリガーがあるからなのか、多くの戦場を戦い抜いてきたからなのかは分からない

ただハッキリしているのは護るために戦うと言うことだ

「そんな状態で動けるのはすごいよーでも、もう限界だろ」

「つく…ナメるな!!」

動く早さが落ちているが、それでもオレの攻撃を受け止めている。反撃する余裕はないのだろうけど

民家の壁に棒を当てると瞬時に影が伸びて横から数本伸びた。三輪の逃げ道を制限すると近づいて振るが弧月で受け止めた。出水はいつでも援護できるように少し離れた位置にいるが、三輪が近くににいる以上下手に攻撃はしてこなかった

「当真さん狙撃できないの？」

するとスナイパーの当真に援護を求めるがそれは不可能だ。位置的にはオレの真後ろにいるから、撃てば三輪も命中してしまう。移動すればいいのだろうが、その間に決着がついてしまえば意味がない。そもそもオレのサイドエフェクトじゃ一度見られているためあまり意味はない

三輪が弧月を振り下ろすが受け流してカウンターで先端で顔を殴る。一瞬よろめいた後地面に突き立てて伸びた影から棒が飛び出す。肩や足を貫いて今度こそ戦闘不能なほどダメージを追ってしまった
「こりゃ……負けか？」

「まだやるなら相手になるぞ？ だけどあつちのほうも風刃相手に無事じゃないだろう？ すでに何人かベイルアウトしているし」

戦況までは分からないが、迅さんの方で見える反応は3つ。少し離れた位置に2つだから5人だが、このあと玉狛に行つて捕獲のために戦おうと思つたら多分無理だろう。三輪が教えてしまった鉛レッドバレット弾ですぐに行動不能にさせられると思う

「おまえらネイバーはいつもそうだ…オレ達から大切なものを奪つて…お前はまだ分かつたいないんだよ!!! 大切な人を失う悲しみを！ 迅だつてそうだ!!」

「姉一人失つたくらいで自分が一番不幸ですみたいに言うな」

1人くらいとは言ったが、家族を失う悲しみは誰も同じ。オレだけならまだいいけれど、さすがに迅さんまで言われたら黙つて聞き流すことができなかった

「くらい…だどっ!!」

「5年前。まだ未熟だったオレは調子に乗つて攻めてきたネイバーの中に突つ込んで捕まった。本来なら交渉材料として無事ですむはずだったが、そうはならなかったんだ」

「どういう意味だ？」

「拷問だよ。裏切つて仲間になれつてね。まだ10歳の子供にだよ？ 結構怖かった死ぬんじゃないかって、おかげでまだ身体には傷跡が残っているんだけどね。数日して父さんたちが助けてくれたんだけど、同じ牢にいたやつがもう手遅れで、トリガーを使えば助かると思つて渡したらブラックトリガーを作つて消えたよ」

今でも思い出す。このブラックトリガーを見るとあいつの顔を思い出す、身に付けていると側にいるような気がする。小学生の年のころにそんな壮絶な経験をしていることに三輪達は何も言つてこなかった

「それだけじゃない、街に帰ろうとした時母さんがね、目の前で殺されたんだ。怒り狂ってそのナイバーを殺してしまったよ」

「ころ…した？」

「そうだよ。何人も。戦ったナイバー全員殺してやった。母さんの敵だと何度も思いながらね。けどやっぱり、復讐しても気持ち晴れることなんてなかった。戦うことに疲れてオレは、母さんが生まれたこの玄界ミデンに来てみたかった。反乱を起こしてやってきたのはいいけど、代わりに今度は父さんが犠牲になった

確かに三輪みたいに沢山大切な人を失った人も居る。けれど復讐したってその先はどうなるんだ？誰にだって幸せになる権利はある…オレはそれを何度も、いっぱい奪ってしまった」

たとえ憎いほど敵だったとしても。殺すことはなかった。むしろ自分自身を傷つけ貶めていった。そのことに気付くのに時間がかかり沢山心配もされた。そんなオレが幸せになっていいはずがないけれど、笑って生きていたいと思っている

「オレは…「護」って名前をくれた父さんと母さんに、オレ自身に恥じないようにしようと玄界こくで生きることを決めたんだ」

国を捨てる前に父さんが教えてくれた。オレの名前はオレが大切だと思つたものを護れるように、と願いを込めて付けてくれたのだと三輪はなにか言いたそうだったけどなにも言わなかった。その時迅さんの方でベイルアウトした光が2つ本部のほうへ飛んでいくのが見えた

3つあつたトリオンが無くなっているから迅さんの完勝なんだろう

「うわーすげ、風間さんと太刀川がいるのに倒したのかよ。攻撃特化の風刃ですごいな」

ブラックトリガーは他のトリガーを同時に使えないから、風刃は受け太刀する以外防ぐ方法がない。それなのに隠密部隊の風間隊だけでなく、1位の太刀川まで倒したのだ。きっと未来が見えるサイドエフェクトのおかげでもあるのだろうけど

三輪と米屋もボロボロだから戦闘続行は不可能。もう終わりだろ

うと迅さんの元に合流しようとしたが一度足を止めて振り返って言った

「あ、言い忘れてたけど。迅さんだって母親と師匠を亡くしてらしいから、ネイバーが恐ろしいってのは知っているからな」

オレもレイジさんから聞いたってだけで本人から直接は聞いていない。たしかレイジさんも父親を亡くしているといつか言っていた気もする。それがネイバーなのかは分からないらしい

迅さんと合流すると揃って本部へ。会議室に入れば上層部の人たちがかつちを睨んできた。それもそうだ、ネイバーを庇うだけでなく本部隊員を撃退してしまったのだ。おまけにオレのブラックトリガーを持っていることを知ったのだから

どう納得させるのかと気になっていたらまさか風刃を本部へ返還するということだった

「ちよー迅さん!?本気?それは師匠が残したブラックトリガーなんスよね!」

「ああそうだよ。そんな心配しなくても最上さんはこの程度じゃ怒らない。それにA級部隊を退けたブラックトリガーはかなり価値が上がったしね」

「価値って…そうかもしんないツスけど」

言われればそうなのかもしれない。価値が付いた風刃は魅力的だと思う。それでも師匠の形見であるブラックトリガーを手放すのは、本当にそれでいいのかオレには分からなかった

交渉がそれで成立するかと思えば当然そうはならなかった。問題はオレだ

「護くん。君は何故ブラックトリガーを保持していることを報告しなかったのかね?」

「言ったら没収されるからツス」

「ふざけているのかね?」

オレはふざけてないどいない。言えば没収されるのは分かりきっていたことだからだ。大切なこのブラックトリガーを取られるわけにはいかない。たとえ玉狛が3つも所持するということに本部が危

機感を抱いてもだ

「護。どうしていままでブラックトリガーを使わなかったんだ？」

すると今度は叔父さんが聞いてきた

「絶対に護りたいからツス。コレを使うときはそういう時って決めるツスから」

無闇に使うものじゃないは当然だけど、ノーマルトリガーだけだとしても限界がある。それでベイルアウトするなら力不足で仕方ないけれど。今回みたいに絶対に守らないといけないときは使おうと決めていた

だからいままで使うことはなかったのだ

「なるほど。どうしても譲らないというのなら今度は天羽を使おう」

「っ!!それでもどうツスカね？」

オレに渡す気が無いと知ると城戸さんは今度は天羽を刺客に送ると言ってきた。直接戦ったこと無いけど、天羽が戦った後は更地になるような危険なブラックトリガーを持っている。防御特化のオレとは反対だけどどこまで防げるか分からない

それにブラックトリガー奪取に賛成していた鬼怒田さんと根付さんも躊躇っている。唐沢さんだけが意外と落ち着いていて大人の余裕を見せられているような気がした

「そんなことしなくても大丈夫ツスよ、城戸さん。こいつはもう勝手にブラックトリガーを使いませんよ」

緊張感の走る会議室に迅さんはいつもの調子で言った。サイドエフェクトでもう分かっているからなのかもしれないけど、それで本当に引き下がってくれるのかとオレは不安だった

少しの間があつて城戸さんが口を開いた

「…護くん。今後一切勝手にブラックトリガーを使うのを禁止する」

「了解ツス。もし辞める時はこっちのトリガーを返すツス」

遊真のブラックトリガーを取りに行かないのなら使うつもりもないし、守らないといけない時にノーマルトリガーでやられそうな場合では使うけれど。さすがに城戸さんも結構怒っているだろうから許可は取ろうと思うけど

もし勝手に使って没収されそうならノーマルトリガーを返すつもり。そのことに根付さんたちが驚く

「当然ツスよね？コレはオレのでボーダーのじゃないツス」

最初に適合したのは偶然だけど、ボーダーからもらったものじゃない。友人が命欠けて作ってくれたトリガーだ。没収されるくらいなら辞める方を選ぶ

「あまりにも身勝手過ぎるとは思わないのかね？」

「何の連絡もなしにいきなり夜襲しかけてこようとしたそっちのほう が身勝手すぎると思うツスけど？」

「そのことに関しては私も同意見だ。論議を差し置いて実力行使をするのは見過ごせない」

身勝手なのが分からないほど馬鹿じゃない。それに先に仕掛けてきたのはボーダー側だ。叔父さんまでも賛成してくるってことは今回のことは知らされていないってことなんだと思う。遊真のブラックトリガーを奪うのが緊急性が高いのなら、防衛本部長の叔父さんと話し合ってから行動するのが普通だ

ネイバーを恨むのは勝手だけど、だからって好き勝手倒して奪っていい理由にはならない。命より大事な物だって誰にだってあるのだから

叔父さんの言葉で会議室は一気に張り詰めた空気になってしまった。城戸さんたちと派閥が違うのは知っていたけれど、ここで完全に割れてしまったら迅さんがしてきたことが無意味になってしまう。防衛派の叔父さんたちが玉狛に付いてしまったらそれこそ、城戸さんは本気を出してくるに違いない

沈黙の会議室を終わらせたのは迅さんだった

「まあまあ大丈夫ツスよ。もう終わったことなんだしこれ以上ピリピリしたってしょうがないでしょ。護も勝手に使わないだし、使えるやつも他にいないからこのまま持たせておくのが一番ですよ。城戸さん」

臆することなく言えるのはすごいと思う。オレだったらあんな無表情で話してくるやつは苦手でボロ出してしまいそうになる。結

局それ以上追及されることなく迅さんの取引があっただけで終わった

「あーやっぱり城戸さん苦手ツス・・・」

「そうか、でも昔はあの人も普通に笑ってたんだぞ？」

「えー!?絶対嘘でしょ!城戸さんが笑うとか天変地異でも起こるんじゃないツスカ!!」

鉄面皮が笑うところなんて経験上オレは知らない。笑ったら笑ったで多分気持ち悪いと思う。迅さんは普段から嘘ついたりするから、城戸さんが笑ったという話は半分だけ信じることにして玉狛に帰ろうと廊下を歩いていると、風間さんと太刀川さんがいた。説教でもされるのかと思つて更に気分が下がるが、風間さんがブラックトリガーの奪取の命令を取り下げられたと言つてきた

「仕事が早いなーと、何食わぬ顔で通り過ぎようとするが、太刀川に腕を掴まれた

「待て待て護。お前がブラックトリガー使うほどなのか?守りたいものつて」

「そうツスよ。ブラックトリガーは誰かの命を犠牲にして作られるんすから、危険だからつて奪おうとするのは横暴ツス」

「迅。なぜ風刃を差し出した?」

オレが太刀川さんに聞かれている間に、風間さんは迅さんに聞いていた。確か聞いた限りでは風刃は迅さんの師匠だと。それほどの思い入れがあるはずなのに、そこはオレも気になって耳を傾けた

「なぜつて、そうするのが1番だからだよ。それに、遠征にも出るA級を退ければ箔が付くからね」

はぐらかすように具体的なことは答えなかった。わざわざ箔を付けて手放すなんて、確かに取り引きするための物の価値は上がっているが、あくまで迅さんが使ったから上がっただけだ。「未来視」のサイドエフェクトで

オレが使つてもわからない。サイドエフェクトのおかげで建物越しでも位置がわかるが、シールド無での戦闘でどこまで戦えるかは自信ない。少なくとも混戦状態で狙撃を躲す、なんて芸当はできないだ

ろう

自販機前で少し話をして太刀川さんたちとは別れた。家に帰ろうかなと思つたとき、メールが着た

「えーつと、『急用ができたから帰れそうにない』か。絶対さっきのこトツスよね・・ごめんなさい、つと」

叔父さんからのメールだった。先の会議室で今回の事は知らされていなかったみたいだった。あとでオレのブラックトリガーのことを聞いてくるだろうから、謝罪の言葉と一緒に情報を渡すと付け足して返信した

「あ、春多にもメールしないと。この1年何してたんだよ！あいつに限ってサボつたつて事はないだろうが、もう一度抜き直してやる！」
一度閉じたスマホを再度起動させて春多にメールを送った。少ししてごめんなさいと帰ってくるが、無視して特別メニューを考える。もちろん宇佐美先輩のやしまるシリーズは使うつもりだ。あいつの叫ぶ姿が目には浮かぶようだ

17話 権利十戒めⅡ矛盾

オレが気が付いたときには荒廃した土地に立っていた。だが壊れている建物はどれも三門市にあるものじゃない。白や薄茶色の色をした壁。ところどころ風化で崩れていて、蔦が絡んでいたり花が咲いている

「……プロスペリタース？」

思い出した。ここは戦闘になつて捨てられた西29番区。オレが軍に入隊してからよく来た場所だった。なぜこんなところにいるのか。今更思い出すなんておかしかった。ついさっきまで叔父さんと話して寝ようとベッドに潜ったはず。だからここは夢の中なんだとすぐに分かるが

「なんで……っ!?……血……っ?」

一歩足を踏み出せばピチャと、液体を踏んだ音がした。顔を下に向けて、さつきまで土だったのに今では真つ赤な液体の上に立っていた。次に鼻に突いた臭い。覚えがあるこれは嫌でも血だと思ひ出させた

続いて今度は大きなものが落ちたみたいに、ドチャと後ろから聞こえた。頭の中には向いてはいけない。ダメだと警告しているのに、オレの体は操られるように振り向いた。そこには死体が1つ。右肩から腰まで酷く斬られていた

「っ……っ!!?……ち、ちが……」

死体があると知ったことで、剣が右手に握られているのを知ってしまった。手元は返り血でなのか赤く染まっただけで、刀身も血が滴っていた。誰がどう見てもオレが殺した。そうとしか思えない

気が付けば周囲には死体が沢山。どれも死に際に悶え苦しんでいた表情をしている。知っている、どれも。「みたい」ではなく「オレが殺した」ナイバーたちだ

「……や……っ……っ……して……る……」

「殺して……てや……」

「殺……る……してやる!!」

「ああああ……ああああ……ちが、違うんだ……!!お、オレは……オレはああ」

いきなり死体が這いずる様に動いて、オレに近づく。殺してやると言いながら

震えるオレは手に持っていた剣を振り回して動く死体どもを斬った。斬って斬って斬って切りまくった。四肢を切断し、胴体を切つて、首をも喋れないように

「あつあつああ……あああつああああ……つああああ……つ……助けて……父さん、母さん……」

剣を逆手に持つて、一心不乱に死体を突き刺す。乱していた呼吸を落ち着かせようとするが、突然体が掴まれたようで動かせなかった。だけどオレの体には誰も何もなかった。まるで金縛りにあつたように微動だにしなかった

「護」

「護」

「父さん……母さん！助けて……オレ……オレえ……」

混乱するオレに今度は父さんと母さんが現れた。夢でもなんでもいい。助けて欲しくて、泣きながら呼びかけるが、2人から返ってきたのは恨みごとだった

「ねえ。何で私は死なないといけないの？」

「護。お前が先に乗るからオレは死んだじゃないか」

「な……なにを……言つて……」

助けるどころか恨んでいるを言われたオレは呆然と2人を見ることしかできなかつた

「迎えに行かなければ、私がいなければ死ななかつたのに」

「母さんの国に行こうなんて言わなければ死ぬ事がなかつたのに」

「やめて……言わないで……お願い」

それ以上は言つてほしくはなかつた。言われたら、オレは、オレを嫌いになってしまいそうだから

「護さえいなければこんなことにはならなかつた」

「つ……あ……ああ……あつあつああああ!!!」

聞きたくなかった。大好きな2人からそんな言葉を。半狂乱に叫ぶ中、オレの体には切り刻んだはずの死体が元に戻って、体に纏わり付いていた。だけでもオレにはどうでもよかった。父さんと母さんにあんな事を言われたのは一番のショックだったから

「も……るー……護……しっかりしろ護！」

「……っあああ……あ……あああ……お……じさん……?……ここ……は？」

呼びかけられる声に気付いたときは暗くなっていて、目の前には叔父さんが見下ろしていた。起き上がると呼吸が乱れている事に気付いて、深呼吸して落ち着くが。叔父さんが心配そうに見てくる

「大丈夫か護?かなり魘されていたけど?」

「叔父さん……お、じさん……っうう」

「ま、護……?」

とんでもなく不安で怖くなったオレは、叔父さんに抱きついて肩を震わせながら泣いた

「落ち着いたか?」

「うん……起こしてごめん」

「そんなことは気にしなくていい。そんなに怖い夢だったのか?」

ベッドに隣に座って頭を撫でられながら聞かれて頷いた。エアコンを点けて部屋を暖めているが、さっきまで消していたからまだ少し寒い。だからって訳じゃないけど、膝の上の手は震えている

オレは沢山の人を殺した。殺人鬼と言われてもその通りだと思う。母さんの仇だと来る敵、相手をした敵全て殺した。確実に胸を刺し貫いて、息の根を止めて

きつといままでオレは幸せじゃないかと思いつつも、本当は幸せだったのだろう。亡命して父さんも母さんもいないオレに、ロイと2人で生きていけるか不安だったが、ボーダーという組織があったという事。叔父さんがすぐに見つかつたこと。ネイバーなのにそんなこと関係なく接してくれる仲間や、一度は裏切つて置いてきたはず

なのに、再会して付いて来てくれたこと。誕生日とかお花見とか祭りとか楽しい事もいっぱい、オレは自分が犯してきた罪の意識が薄れていたのかも

だから今日見た夢は幸せになろうとしていたオレへの罰なのかもしれない。殺された人にも等しく幸せになる、楽しい事を楽しむ権利はあった。だけどオレは母さんの仇だと思い込んで一方的に殺した

オレは……笑っちゃいけないんだ。嬉しいことも

「寝れるか？不安なら寝るまで一緒にいようか？」

「ありがと。でももう平気ッス。こんな時間に起こしてごめんッス」

本当は平気じゃない。今も不安や恐怖は少しも消えていない。けれどこれ以上叔父さんに迷惑は掛けられない。親族といえど、なにもかも甘えるわけにはいかないのだ

4年半前はオレは軍人だったんだ。この位で心配させては情けない。叔父さんはオレの言葉に信じきれていないのか何度も聞いてきた。一人になったオレはベッドの上で、膝を抱えて顔を埋めた

「大丈夫……大丈夫……う……う……たすけてっ」

暗示を掛けるように繰り返すが、やっぱり恐怖が勝ってしまい、誰もいないのをいいことに本音を呟いてしまった。閉じた瞼の裏には父さんと母さん、そしてほんの数日だけだが同じ痛みを受けた友達のゼアの姿が浮かんだ

鼻を嚙りながら、嗚咽を漏らしてただひたすら、夜が明けるのを待った

「おはよー……」

「うわっ!?どうしたんだよ護!?その目!隈できるし…充血もしてるぞ?」

「え……?」

眠気に抗いながらなんとか辿りついた教室に入れば、青柳が最初にそう言ってきた。そりゃ寝ずに夜を明かしたのだから当然だろう。泣いたりもしたから充血もしかたがない

「そんなに酷い……?」

「あ、ああ……徹夜明けの漫画家みたいな感じだぞ？」

変にたとえが具体的だけど、荷物を席に置いてトイレの鏡を見ると確かに酷い。とはいえ今更寝るなんて怖くてできない。このまま眠気に耐えるしかない

「夜更かしでもしたのか？」

「うん、まあ……」

「もしかして怖い映画とか見たりしたんだろ！それで寝られなくなつたとか！」

どこの子供だよと言いたいが、他に理由が思いつかないからそれでいいやと頷いた

「マジで……？以外……」

「以外って……怖いものは怖いんだから……仕方ないだろ……」

事実父さんのせいで小さいころは寝れなくて、母さんに抱きついて寝たりなんて事もあるし。この前の桐絵ちゃんが行ってる学校の文化祭でも、お化け屋敷に入るだけで震えたくらいだし。夜出歩くとかは平気なのに、お化けとかの類はどうしてもダメなのだ

「ん」

「……なに、この手？」

青柳が突然手を出してきて何を求めているのか分からず聞いた。今更握手なんてなんの意味も無いだろうし、借りているものもないし、誕生日ってわけでもないからあげるものもない。ますます分からないオレは次の言葉に驚きが隠せなかった

「どうせ一人で寝るのが怖いとかで寝てないんだろ？HRまで手繋いでやるから少しでも寝ろよ」

「とか言つて〜ほ……ん……とは、忍田が好きなんじゃないのか？」

「ヒューヒュー！」

「はああ!?なんでヤローとなんだよ！ダチとして心配だからで!!」

他のクラスのやつが茶化してきたことでさっきまでの、友達はいいものだという雰囲気は台無しだった。まあホモだと遊ばれて慌てている青柳を見るのは面白いので

「ありがと青柳。オレ、感動したツス」

「ちよ!!護まで乗るなよ!!両手で握るな!!ふざけるなら離すぞ!!おい!

乗ることにした。差し出された手を両手で握って寝る事にする。指笛やカップル誕生ー!など聞こえたりして、たまにはこういうおふざけも楽しくていつまでも続いたらいいなと思った。けど、オレは楽しんでいけないから、青柳に悪かったと謝っておいた

午前の授業を終えて今日は学校が終わり。家へ帰ろうとしていると、道で壁にもたれかかって倒れている人がいた

「大丈夫ですか!?!.....那須先輩?大丈夫?」

倒れていたのは那須隊の那須先輩だった。顔色が悪く息も少し荒い、目が少しだけ開いてオレを見た後、バッグを指差した。体が弱いつてのは聞いた事があるから多分薬が入っているのだろう。人のバッグの中を漁るのは若干気が引けるが、チャックを引いて開ける。水がある他、後は財布等、その中にプラスチックのケースを見つけて、薬みたいなのが入っているからコレがそうなのだろう

「あか.....きい...ろ.....2つ.....っ」

「赤色と黄色を2つ?」

ピルケースには赤と黄色の丸いシールが貼ってあり、多分コレが飲む薬なのだろう。個数も聞くが違っていたみたいで、弱弱しく両手の指でピースサインを作る。どうやら2つずつ、が正しいみたい。蓋を開けて薬を出す。手に渡して蓋を開けた水の入ったペットボトルを渡す

「落ち着いたツスか?」

「ええ、ありがとう、護くん」

呼吸も落ち着いて意識もハッキリしてきたみたいで安心したけど、いつまた倒れるか分からないから帰ったほうがいいと提案するが

「うーん.....でも、今日は体調が良かったから映画を見に行こうかな
と思っただけど.....」

「そういつても.....見てるときにまた倒れたらどうするツスか?」

さすがにこのままって言うにはいかないから、ちよんと家まで送ろうと思う。けれど那須先輩は映画が見たかつたらしく、残念そうに顔を曇らせる。安全のためならこのまま家に帰って寝てもらうのが一番なんだけど。このまま暗い気持ちのままにさせるっていうのも気が引ける

「うーん……分かったツス！オレと一緒に付いて行くツスから、少しでも体調が悪くなったら言うツスよ？」

「え？……ありがとう護くん」

多分オレのやっていることは本当ならいけないのだろうけど、なんだかそうすると後悔しそうな気がしたので、オレが付いて行くことを条件にすれば万が一のときは大丈夫だと思う。それに女の子を泣かすようなこともしたくは無いつていうのも理由だ

目的の映画館に行き、チケット購入しようとしたとき、那須先輩が見たかったのがまさかの「ニヤン大冒険」だった。アニメシリーズ5年目を迎える名作。一緒に住んでいた主人が殺されてしまい、真相を見つけるために冒険に出る感動アニメだ。犯人を見つけたあとも、旅で仲間になった者達と困っている人を助けたり、問題を解決したりなど続けている。もちろんヒューマンならぬキャットドラマがあったり、絆を確かめ合う感動シーンがあったり、愛を誓い合ったりなどオレも大好きなアニメの1つだ

「いや、ニヤン大冒険……!?那須先輩それを見るんスか!？」

「え、ええ……護くんも好きなの？」

「ツス!!」

あまりの嬉しさに興奮したオレに那須先輩は驚いたようで、少したじろいだ。いけないいけない、自制しなければ。映画化するってことは知っていたけれど、まさかもう上映されていたのは知らなかった。チケット2枚購入し、上映中に食べる物も買って準備は万端

少し待って時間になると指定した席に座って始まる

「良かったね」

「そうツスね！あそこのニヤ吾郎の男を見せるところは良かったツス

!!

見終った2人は空になった箱とコップを捨てて映画館を出た、見に行こうとしていた那須先輩よりオレのほうが興奮していたみたいで、パンフレットやグッズも買ったのはオレだけだった。支払いを済ませると満足した気分に戻るとなぜか那須先輩に笑われた

「な、なんスか？中学生が見てやっぱ……おかしいツスか……？」

「ううん、違うの。護くんて他の子より大人びているように見えるから、今日みたいにはしゃぐところを見るとね、年相応に面白いなって」

「な、かわつ……オレは別にかわいくないツス！」

「ふふ、そうね。護くんは男の子だもんね」

「んっー」

どう否定しても好きな映画見て喜ぶ中学生にしか見えないらしくて、映画館を出るまでずっと生暖かい視線を向けられた

「ありがとうね護くん。そういえば学校は？もしかしてサボった？」

「違うツス！そんなことしないツス……冬休み前だから授業が午前だけなんス」

「そっか。もうすぐ冬休みだっけ。家にいることが多いから中々実感がなかったわ」

病弱な那須先輩は家にいることが多いからそう思うのも無理ないのかもしれない。学校と相談しながら出席数とか単位とか調整しているらしい、それでも足りないときは親に送り迎えとかされながら補習で補っているとも言った

「それにしても護くんって噂で聞くより普通の男の子ね」

「噂？なんスかそれ？」

話をしているうちにオレは思っていたほど子供だったと言われる。喜ばばいいのか怒ればいいのか微妙だ。どう答えればいいのか考えていると、那須先輩は唐突にそんなことを言ってきた。噂ってはじめて聞くけど、もしかしたら本部長の甥だっけことなのかなと思った。諏訪隊の笹森先輩は知らなかったみたいだし、まだ全員知っているわけじゃないけど

「……………護くんがネイバーって噂よ」

「っっ!!」

言いにくい事なのかな少しの間があった。オレはその噂を聞いた瞬間、心臓が鷲掴みにされたような衝撃を受けた

「護くん……………」

どう答えるのが正しいのかわからない。駅のときはさらつと答えてしまったが、今回はどうだろう。下手をすれば噂は事実となり広まってしまう。半日も経たずにメディアに伝わり、ボーダーへの批判が殺到するだろう。何かあったときは自分で責任を取ると言ってしまったけど、今その「何かあったとき」が現実になりそうで、どうすればいいのか必死で考える

正直に言つて誠意を伝えて傷口を浅くするか、だけど那須先輩が回りに言わないという保障はない。ならば言わないでと口止めしてもらうしかない。もしくは噂自体を否定するすべきか。そもそも噂の出所が分かっている以上、どこかで矛盾を指摘されてしまう。玄界ミデンのことは全て知っているわけじゃないから、来る前のことを聞かれてしまったらおしまいだ

どっちを選んでもいい結果にならないことは明白だった。もしかしたら昨日見た夢も、噂の事もオレへの罰なのかもしれない。恐怖で不安させることの次は仲間を奪う、でも仕方ない事だ。これがオレの罪なのだから

「護くん」

「……………那須…先輩」

「……………うちに来る？」

足が止まっていたようで、声を掛けられて俯いて考えていた事に気が付いた。変わらないトーンで家へ誘う那須先輩に、これは何を言っても誤魔化せないと諦め付いて行くことにした

18話 なんともない一日

那須先輩の部屋に来て座ると詳しく噂の事を話してくれた。C級を中心に広まっているらしく、B級以上も少し知っていたりしている。出所は分からず、那須先輩もチームのスナイパーの日浦から、訓練中に聞いたといっていた

「一応聞くけど、護くんはネイバーなの？」

「ツス。噂は本当ツス」

「それを本部長達は？」

「知っているツス。来たのは4年半前、ネイバーの侵攻があった日ツス。そのときに叔父さんたちと出会ったツス」

一応と言って聞かれるが、否定してもオレがネイバーだって言うのは払拭できない。それに落ち込みようからほぼ確定じゃないかと考えていると思う。だから素直に答えた。オレなりの誠意ってやつを

「そっか、本部長達が知っているなら大丈夫なんだね」

「オレは何かをしに来たわけじゃないツス。ただ、母さんが生まれた国を見てみたかった、それだけツス」

「お母さん？」

「オレの母さんはこっちの国の住人なんス。向こうで色々あつて……嫌になつて、それでこっちに」

「……ちよつとまつて、ネイバーに連れて行かれた人つて、生きているの？」

ボーダーは情報に規制をかけているからネイバー＝人間というのをほとんど知らない。大体がA級から知る事になる、遠征に行くときに知る事になるからネイバーフッドの事も含めて教えられるのだ。そして帰還したら口外してはいけない決まり。こうしている事で組織として維持しているのだ。オレは少しだけ、かいつまんで那須先輩に話した。だけどオレの過去に関しては大体にといった感じで

「……というわけで出会えた叔父さんと一緒に暮らしてるんス」

「そう、大変な世界なのね。ネイバーつて」

初めて知るネイバーの世界のことじゃなく、オレのことも聞いてど

う答えたらいいのか分からないのだろう

「那須先輩：今日聞いたことはできたら誰にも言わないでほしいです。これ以上広がると……叔父さんたちに迷惑かけてしまうから」

ボーダーを盾に言わないでほしいという事もできたけど、これはオレの問題だからそういうことはしたくない。と言っても多分迷惑を掛ける事になるだろう。市民にも知られるのも時間の問題だと思う。足をそろえて頭を下げた土下座してお願いをする

「ま、護くん！土下座までしなくていいから、誰にも言わないって約束するから。だからそんな泣きそうな顔はしないで、ほら！今日好きな映画観て楽しかったじゃない」

本当なら騙していたのかと怒ってもおかしくないのに、それなのに那須先輩はパンフレットを取り出した。優しいなと思うと、オレは周りにいる人たちは、オレがネイバーであつても気にしていない人が多い。主に玉狛支部のメンバーだけど。それだけでなく一菜と春多は一度は裏切られたのにまたオレに付いて来てくれた

不安だった玄界ミデンの生活も気付けば助けてくれる人たちに囲まれていた

そのあとは映画のことを少し話して家に帰った。ご飯のときに叔父さんに噂のことを話して迷惑かけてしまうことを告げた

「クリスマス？」

今日も学校が終わって玉狛支部に顔を出すと、先に遊真たちが来ていた。いつもならそのまま訓練なのだが、今日は少し違った。あと5日後に迫ったクリスマスに玉狛はパーティーをするのだ。それを知らない遊真は首を傾けた

「この国にはサンタクロースっていう、赤い服を着て白いひげを生やしたおじさんがいて。そのサンタが毎年全世界の子供達に欲しいものをプレゼントするっていう日なんす」

「ほー、この国にはそんな変わったおじさんがいるのか」

「いや、実際にはいないんだ。子供達の間で信じられている空想上の人なんだ」

多分遊真にはサイドエフェクトで嘘だと分かっているだろうが、言い伝えとか宗教などの話なんだろう思ったのか納得したように言った

「パーティーでもするんですか？」

「そうだよーみんなが買ったプレゼントを交換したり、レイジの兄貴のご飯を食べたり！」

雨取のしつもんは春多が興奮して答えた。レイジさんを兄貴呼ばわりしたり馴れ馴れしいが、気にしていないみたいだからいいけど。なんでも春多のいたスラムでは、世話してくれる年上がいると兄貴と呼んだりもするとか。とにかく毎年玉狛では春多が言うようにパーティーをやるのだ

「だからお前達も参加するなら交換するためのプレゼントを買っておくことだ。別に高価なものを買えとは言わない。陽太郎も参加だからお菓子でも十分だ」

お子ちやまS級隊員の陽太郎はお小遣いが多くないので毎年お菓子くらいしか買えない。百均で売られているようなネタめがねでもいいのだ。目的は楽しめればそれでOKなのだ。というわけでオレもプレゼントを買うために街へ。夜は任務のため今行くことにした。まあ明日でも明後日でもいいわけだけど

「さむ……………はあ……………」

耳が痛くなるほどの寒さに息を吐いて手を温めようとするが、それは一瞬だけですぐに冷たくなった。まだ日は出ているから飾られている電飾は光っていないが、赤と白で彩られた街を見ると、なんだか昔を思い出して引き返したくなった。赤はどうしても血に見えてしまうから

「……………帰ろうかな……………うわっ!？」

あまり落ち着かないオレはまた違う日に来ようと思ったら、後ろから何かがぶつかって倒れそうになったが耐えた

「よーさつき振りだなー！」

「青柳? どうしたんだこんなどころで?」

飛び掛ってきたのは青柳で、今日の授業を終えて別れたばかり。 2

時間も経っていない

「それはこつちのセリフだって。今日は支部に行くって言うて遊び断ったじゃんか」

「ああ、支部でパーティするからプレゼントを交換するからそれを買うために」

「へーへー楽しそうだねーお前は！そんな奴にはこうだ!!」
「ぎゃあああ!! つめてー!! 手抜けよ!!」

ほぼ不意打ちで襲われる冷えた手が腹に触れて叫んでしまった。通行人から目を集めて恥ずかしくなり、青柳の頭を叩いて距離を取る。ケラケラと笑う奴に天罰が下りろと念じたりするが何も起こらなかった。それから暇だからと買い物に付いてくる事になった

適当に見て回るが、中々いいものが見つからない。最終的には菓子の詰め合わせでもいいやと考えていると青柳が映画の話をしてきた「そういえばさ、つい最近お前が気に入ってるアニメが映画になったの知ってるか？」

「にやん大冒険ツスよね!! 昨日観たツス!! 憎いはずの敵を殺さず、仲間にするのは感動したツス! 他の仲間ともわだかまりを解決していつて……名作ツス」

「お、おお……楽しみたならいいけど……」

「青柳も是非観るツス!! お勧めツス!」

「オレはいいよ!」

両手で見ることを遠慮する青柳に口を尖らせてつまらない奴と吐き捨てる。なでだよと言ってくるが、あれほどの感動ものをオレは知らない

「なあ護」

「なんスか? 観る気になったツスか?」

「ちげえよ……日本の生活には慣れた? 住んでもう3年以上になるんだろ?」

にやん大冒険観る気になったのかと思ったけど、そうじゃないみたいで残念

確かにこつちにきてもう4年半になる。青柳とであったのは中学

からで、学校も中学からだ。それまでの一年半はこっちの世界の勉強とかいろいろしていたため遅れたのだ。その経験からボーダーと学校の両立はなれないと難しいということだ。宿題に任務と、それに加えて試験があったり大変だった。平均の点数を超えなかったら補習だったし、勉強する時間が難しいのだ。だから春多たちを四日市に住ませたのもまずは学校に慣れてもらおうと思ったから。1年ぐらいで十分だろうとこの前のブラックトリガー争奪の少し前に戻ってもらったのだが

なにはともあれ、友達とかできて学校や日本での生活に慣れてきた「そうツスね。大分慣れたツスよ。でも急にどうしたツスか？」

「いやーオレ達ももうすぐで高校生だなーって。護とはこれからも一緒だしさ、なんとなくそんな風に考えちゃって」

「おっさんみたいツスね」

「うっせ！」

自覚はあるのかそう言った

「まあ確かに中学入って最初にできたの青柳ツスからねー。オレはこれからも友達でいたいと思うツスよ」

「そーかよ……試合にも来いよ」

「うーん、任務がなかったら」

「そこは行くって言えよ！」

結局交換用のプレゼントは見つからず、そのまま支部に帰って夕食を食べた

「行つてきまーす！」

トリオン体になって支部を出ると今日の担当地区に向かう。柿崎隊から引き継いで今からオレ達が任務を続ける

「春多、一菜。学校はどうだ？ボーダーとの任務もあるから少し忙しいかなと思うけど」

「今のところ問題はありませんね。試験後に引越しだったので、そっちのほうに忙しかったですね」

「そうそう。別に夜はいつも訓練してたから任務が入っても大丈夫じゃないかって一菜と話したんだ」

「どうやらオレが何も言わなくても準備はしていたみたいだ。時間があれば訓練はするようには言っていたけど、訓練の時間を任務の時間と仮定してやっていたのなら問題はないだろう」

他に生活のほうも聞けば、こっちは全然問題はなかったようだ。A級に上がるまでに玉狛で常識や法律とか読み書きを教えていたおかげで特に困る事はなかったらしい。料理や家事等もレイジさんに教わっているので問題はないと。というかレイジさん家政婦としてもやっていけるような気もしてきた

問題なく過ごせているようで安心した。まだまだ聞きたいことはあったけど、リーダーにトリオン兵が5体出現した事を知り中断した「おっしやー！オレが全部倒すぜ！」

「何言ってるの！バカ春多！」

考えなしに先行しているわけじゃないだろうが、春多が弧月を抜いて接近する。一菜もカバーできる範囲を保って移動しながらアサルトにセットしているアステロイドで牽制。3体がモールモッドで背中の刃でガードする。当然視界が塞がれているので、跳んだ春多に気付かず旋空で腕ごと目玉も切断。2体まとめて倒せて、残りはオレが屈折旋空で腕を避けるように目玉だけを貫いた

残りはバンダーとバムスター1体ずつ。だけどこっちも一菜がアステロイドで行動を制限して、上空から弧月と春風で貫いて撃破する「そういえば隊長、ブラックトリガーって使っていないんですか？」
「支部の訓練室で時々。心配しなくても感覚は忘れないようにやるよ」

異例ではあるけどS級でないのにもかかわらずブラックトリガーを持っている。だけど任務で使おうと思ったら許可を取らないといけないし、S級隊員に上がらないといけない。そういうわけでこれから、というよりも今までも玉狛支部の訓練室で訓練しているのだ
「アレは極端な性能ですからね。定期的に使っていないのと大変ですもんね」

防御に特化したあのブラックトリガーは本来は攻撃性はない。争奪戦のときに棒を攻撃に使っていたのは応用だ。2本の棒が出てそ

の間に壁が出来る事で防壁として成り立つ

その代わり壁を出している間は動けないのが弱点であるが。そこは春多と一葉がカバーしてくる。まあ争奪戦のときは1年ぶりということも合って2人ともベイルアウトしてしまった。オレのサポート力もまだまだだった

「今度宇佐美先輩に頼んでやしやまるシリーズ大量に出して連携訓練するか？」

「いいっすねー！ひさしぶりにやりてー！」

見た目は色違いなモールモツドだが、性能は固体によって違うからいい訓練にもなる提案すればまっさきに春多が賛成してきた。なんでも四日市の学校では部活には入っていないが、度々助っ人として誘われるらしい。運動神経はかなり良いようだ。勉強のほうはギリギリというところだ

一葉も自前の弁当が人気で、調子に乗ってキャラ弁とか作ったりしていた。画像付きでSNSにあげていたり。手先が器用ということもあり料理部とか手芸部に呼ばれたりしたそうだ

2人とも学校生活を楽しんでいたようで安心した

「ん？笹森先輩？」

突然ポケットに入れていた携帯が震えて、取って見ると笹森先輩からメールが着ていた。明日訓練を頼めないかというないようだ。どうやらあれから弧月の振りは続けていたらしい

争奪戦があつて忘れていた、つてことは言わず学校が終わった後でいいかと送れば、すぐに了解のメールが返ってきた

「だれ？」

「本部の隊員ですか？」

「うん。ちよつとしたことがあつてね、お前たちが戻る前に弟子になつたんだ」

かなり端折ったが2人にそう言った。そしたらおめでどうと言われてしまった。別に弟子を取る事に祝われるほどじゃないんだが、まあいいかと流して次の交代まで任務を続けた

「長い事空けててごめんツス」

「いいって。支部からじゃ遠いから仕方ないって」

翌日学校が終わってそのまま本部に来ると訓練室にはすでに準備していた笹森先輩がいた。確かにすこし距離はあるけど、これないほどじゃない。単純にオレが忘れてただけだ

「じゃあはじめるツスカ」

「おうー」

オレもトリオン体に換装する。最初のとときと同じで、ただただ戦うだけ。だが動きが少し違っていた。反応はまだ遅いけれど、斬り返しが早くなったし。シールドを展開して防御に移ったり。特に無理に罅迫り合いに勝とうとしなくなった

「おっと……!」

「くそっ!」

春風の刃と競り合っていたが、突然引いて少しだけ体が前に出てしまった。その瞬間に首を切ろうと横に振るってきたが、シールドで防いだ

「意外と前より動きがよくなっているツスよ」

「ホントか!?!いつもよりはなんか馴染んだっていうのかな?普通に振れた」

「ただ振るだけでも手に馴染んでくれば、それだけで違和感が無くなってくるもんスよ」

一通り動きを見て休憩も兼ねて話をしようと思つて、訓練の様子を見るために設置されているベンチに腰掛けた。慣れない武器はただ持っただけでも動きに荒さが目立ってくるもんだ。だから振っているだけでも手に馴染んでくれば、動きは洗礼されていくのだ。軍学校の時代でも棒をひたすら1時間も振るだけとか、勝とうが負けようが時間いっぱい相手と戦う、なんて指導もされたものだ

「慣れてくればあとは実戦で磨いていくことかな?頻繁には来れないツスけど。……モールモッドを相手にすれば反射神経とか判断能力とか上がっていくと思うツス。手始めに3体同時に相手にするの

いいと思うツス」

「ぎ、3体も!？」

「そツス。1人で」

多分笹森先輩はこれまでチームで戦っていたから、個人の戦闘能力としては一般隊員と変わらないと思う。それに諏訪隊は先輩を前に立たせて、後ろから2人が撃っていくというスタイルだ。ガンナーの訓練はした事ないから教える事はできないけど、アタッカーなら経験がある。笹森先輩が強くなればトリオン兵倒して自信にもなるし、ガンナー2人の負担も減る

次はモールモッド3体を5分以内に倒す、これがクリアできればラック戦でも少しは強くなっているはずだ。人を相手にする時に反射神経と状況判断能力が上がっているはずだ

一瞬間が曇るが、今日成長していたのを実感したのか、やってみると言った。モールモッドは動きもそこそこ早いし、何よりブレードを振るスピードはトリオン兵の中でも最速。硬度も高いので破壊はできない

いかに早く倒すか、どうやってブレードを対処するか、判断が遅ければ逆にやられるほどだ

オレも笹森先輩が成長しているようで嬉しくなった。訓練はこれで終わって、本部を出ると再び街へ。昨日変えなかったプレゼントを買わなくてはいけない

19話 嘘の代償

凍えてしまう寒さに耐えながら何をあげようか悩む。去年は高いチョコを買った。1つ500〜600円もするようになった。今年もそれでいいかなと思うけど、同じものをあげるのは飽きてしまうしつまらない

「うーん、悩むなあ」

あと叔父さんには何をあげようかも考える。こっちはすぐに決まった。目を向けた先に時計があったから、色々ある中で腕時計の1つに決めた。艶のないブラックの、文字盤が黄緑色に輝くものを

喜んでくれるといいなど、期待を膨らませながら支払いを済ませて商品を受け取った。あとは支部のパーティーのプレゼント、と考え始めた矢先見つけた

「スノードーム・綺麗だなー」

ガラスの球体の中に置物があり、逆さにしたり振ったりすると、中の雪に似せた粉みたいなのだ水で満たされた中を舞うやつだ。大小様々で、中の置物もツリーみたいなのからサンタクロースみたいなのとか、ログハウスとかだったり魚だったり。綺麗だなんて見惚れていた。プレゼント用じゃなく部屋に飾るための個人にも欲しいなと思ってしまった

「^{ミディン}玄界って本当に、綺麗なものがいっぱいあるツスなー・・・」

建物は綺麗で、晴れた日の空も澄んでいて青い、動物も多いし。何よりご飯がとびつきりにおいしい。調理器具一つとっても色々ある。というかありすぎるほどだ

母さんから聞いていたよりずっとすごい国だ。ネイバーに対しては肩身狭いけれど

「そういえば何でオレの噂が広まったんだろ・・・？遠征部隊に三輪隊くらいしか心当たりがないな。まさか広めてる・・・わけないツスよね」
考えたくは無いけど、誰かが言わなければ噂が立つわけもない。火のないところに煙は立たぬって諺もある。オレの事を知っている誰かが口を滑らせたのかは分からないけど。これ以上広まらないでい

てほしいところだ。最悪、バレてしまつて街の人たちから恨まれてしまふかもしれない。それは避けたい。好きなものとか気に入つたお菓子が売られている店に入れなくなるのは嫌だ

噂の解決策を探ろうとしても中々見つけれず、悶々としたままスノードームを3種類買った。ログハウス、クリスマスツリー、サンタクロースの5cmほどの人形が入っている。全体は拳くらいの大きさだから、部屋に飾るのに丁度いい大きさだ。これでプレゼント選びの悩みから解き放たれたからか、小腹が空いてきた

「何か食べよ・・・お？フルーツジュースか」

淡い色合いのカラフルな看板が目に入った。そこはジュースの専門店らしく、注文してからフルーツを絞ったり、ジュースで刻んだりしているため新鮮な味がするらしい。オレはパイナップルが好きだからそれを注文。濾していないから果肉入りで半透明の液体に浮かんでいるのが見えた。2分ほどで透明なカップには黄色い果汁と果肉が入ったジュースが差し出された

「ん〜おいしいー!」

ストローに口を付けて吸うと甘くて酸っぱいパインの果汁が口の中に広がった。好きな味に満足してもう一度吸うと今度は果肉がきた。太目のストローだから詰まることもなく口に入ってきた。目的のものも買つて目標達成したから、今日はもう帰ることにした。道中何を作ろうかなと考えた

「豚挽き肉はある・・・キャベツもまだ半玉あるし。あ、でも冷凍が少ないっけ？弁当のおかず少なくなるなー」

冷蔵庫の中身を思い出しながらメニューを考えていると、足りないものもあることも思い出したので結局スーパーに寄つて材料を買つて帰ることになった。おかげで重たいの持ったから手が痛かった

「さてと、はじめるか」

エプロンを着てご飯を作り始めることにした。テレビから聞こえるニュースを聞きながら

「ただいまー」

「あ、お帰りー!」

もうすぐで完成つてとところでおじさんが帰ってきた。リビングに入るとネクタイを緩めてキッチンを覗いてきた

「お。今日はハンバーグか?」

「うん。あとロールキャベツ。ひき肉の期限がちよつとやばかったから」

「そうか。いつもありがとうな」

お礼を言ってくれるのは嬉しいけど、そういうのは恋人に言っただけならいいのと思う。というかおじさんももう30前なのに好きな人とかいないのか不思議だ。もう4年半もいるけどそれらしい影や噂は全く聞かないのだ。むしろ鈍感なのかもしれない。沢村さんから好意を寄せられているのに

意地悪して唐辛子でも入れてやろうかな、なんて思ってしまった。やったら料理で遊ぶなど怒られそうだからやらないけど。大分できるようになったハンバーグとロールキャベツを食べ終わると学校の準備をした。といっても明日は終業式だから課題を入れるバッグを持っていくだけでそれ以外は必要ないけれど

「あ、星が・・・」

ふと窓を見てみれば雲ひとつない夜空に星が煌いていた。どの国でも見える空は同じだなと思う。戦闘のあとだと少し悲しく見えるが、それ以外だといつも綺麗に見える。もし、父さんと母さんがこの星から見ているのだつたらこう言いたい

「大丈夫だよ、オレは平気だから」

慕ってくれている仲間もいる。頼れる人たちもいる。仲のいい親友もできた。噂が流れてしまっているけど証拠はないし多分近いうちに忘れられると思う。それに明後日はクリスマスで、玉狛支部でパーティーをやるから楽しみだ。午前中は青柳たちと遊んだりもするし。大晦日の大掃除は面倒だけど

目が覚めて起きると部屋はあまり明るくない。カーテンを開けると雲が広がっていて雨か雪が降りそうだった

「うわ〜傘必要なのかな・・・」

みてるだけで気分が下がりそうなほど暗い。とりあえずベッドから出てご飯の準備をしようと立った。キッチンで準備をしていると叔父さんも起きてきた

「おはよう護。今日は天気が悪いな」

「うん。午後から雨になりそうだって」

テレビを点けていたから朝の天気予報で知った。曇りのち雨とお天気キャスターが言っていた。幸い今日の終業式は午前中だけだから傘とか持つていく必要はないけど、夜には防衛任務があるから濡れながらやることになる。トリオン体と言っても服装とか濡れると普通に重くなる。撥水機能とかあればいいのにと毎回思ってしまう

オレのトリガーにはバックワームを入れていないから雨合羽代わりになんてできない。仕方ないとは言え濡れると動きが少し鈍くなってしまう。地面も滑りやすくなってしまうから慎重に動かないといけない。本当に面倒だ

「じゃあ明日は雪になるかもしれないな」

「うん。その可能性が高いつて言ってたし」

「丁度いいじゃないか、クリスマスに雪が降るとか」

「そうだね。はい、味噌汁できたよ」

会話をしながらも慣れてきた準備を終わらせてテーブルに並べて食べる。予定を確認してから制服に着替えてカバンも持つ。一応折りたたみ傘を入れて学校に向かう

「ん？なんだ・・・？」

通学路でいつもと違うことに気付いた。霧因気が少し尖っている感じがする。誰かに注目を浴びせているような、そんなはつきりとは分からないがあまりいい気分にはなかった。気にはなるがとりあえず学校に行くことにする、だけど段々と近付くことでなんとなくわかってきた。オレに注目が集まっていることに

あまり納得はできないけど、学校には行かないと冬休みの課題とか受け取らないといけないから上靴に履き替えて教室に向かう。階段を上って真ん中の教室のドアを開けると、そこには目を疑う光景が広がってた

「はよーッスー！」

「きやああーご、ごめんなさい！ごめんなさい！」

「え・・・？オレ、なにかしたツスカ？」

ドアの近くにいた女子が大げさに驚いて何度も謝ってきた。何かした覚えもないのに謝られると頭が真っ白になる

すると、青柳がオレに信じられないことを、眉間に皺を寄せて言い放ってきた

「なにしに来たんだよ!!ネイバー!!」

「っ!!・・・え・・・？なん・・・あ!!うそ・・・」

まさか親友にネイバーと言われるなんて信じられなかった。心のどこかで大丈夫だろうと思ってしまっていたのだろう。言われた瞬間に感じた衝撃が強すぎた。ハンマーで頭を殴られるとはこんな感じなのかと思うくらいに

そしてやつと黒板にも書かれている言葉に気がついた

『忍田護はネイバーだ!!』

『アイツはオレたちを騙している!』

『裏切り者!!』

『スパイは消えろ!!』

『家族を返せ!』

『お前が死ぬ!!』

『人殺し!!』

など色々と

納得がいった。尖った雰囲気はオレに対する敵意だったんだ。オレはソレを知っているのに、なんで気付かなかったのだろう。こっちの空気に染まってしまったのかもしれない。だから鈍くなったのかも

「ち・・・ちが・・・オレは・・・」

「何が違うんだよ!! ずっと僕達を騙してたくせに！」

「そうだよ！ ねえ！ 学校にネイバーが来たときもトリガーのこと詳しくなかったよね！」

「そうだよ！ ネイバー現れたのも絶対お前がいたからだよ!!」

「違う！ あれは！」

「黙れよ!! お前がネイバーじゃないって証拠はどこにあるんだよ!？」

「そ……それは……」

何もいえなかった。言わせてもらえなかった

「っ！……いて。いたっ！……っい！」

何を言っても信じてもらえない状況に呆然とすると筆箱が投げられた。ペットボトル、教科書、体育館シューズ、丸められた紙とかも。するとみんなの怒りは上がって椅子まで投げられた。腕で防いで顔に直撃は免れたけど、背もたれの板が額に当たった

勢いでバランスも崩れて壁に激突して、そのまま崩れ落ちた

痛い。顔もだけど、何より心が。親友の青柳にネイバーと言われた。裏切られた気分だった

ああ、そうか。そういうことか。裏切られるって……すっごい痛い……あいつ等が……どれほど苦しかったのか、今になって分かるなんて……

春多と一菜の経験した痛みをこんな形を知ることになるなんて思わなかった

「隊長!!」

騒ぎを聞きつけてなのか2人が来た。後から遊真と修と千佳ちゃんも。

「っ……おまえらっ!!」

「春多！……教室に戻れ」

「でもっ！」

「戻れ！……いいからっ……戻れ」

血を流しているオレを見て激昂する春多だが、なんとか止めることはできた。納得できない2人は怒りを込めた表情から戻さなかった

「おい！ おまえボーダーなんだろ！ そいつ捕まえろよ!!」

「そうだよ！なんでこんなところにいるんだよ!!」

「何だよこいつ等？ネイバーだと分かったらこんなことするのか？」

「落ち着け空閑」

同じネイバーの遊真も状況を理解すると表情が険しくなった、そこに修が出てなんとか抑えた。苦しい中なんとか考え出したのはみんなが納得するように修に拘束されることだ。頭が痛むがなんとか立ち上がって廊下へ出る

「修……行こう」

「護……」

「護……っ！大丈夫か？」

血が顎にまできた。拭き取らないと制服を汚してしまう。雨に濡れても大丈夫なようにもしものために持ってきていたタオルで拭こうとしたとき、階段からレイジさんが現れた。一瞬驚いたがすぐいつものポーカーフェイスに戻った

「っ……レイジ……ざん……」

「本部長から電話があつてきた。今マスコミとかに発表する準備とかしている」

「レイジさん!」

「修。護はオレが連れて行くから、お前達は学校が終わったら玉狛に來い」

傷口を押さえて涙を流している間にも話が進んでいく。いまのオレには何かを言えるような余裕もない

「行くか、護」

「……ごめん、春多、一菜……ごめん」

「隊長が謝ることじゃない!」

「そうです。隊長が悪くないですよ」

「ごめん……ごめん……」

階段を降りるときに2人に何度も謝った。何も相談もせず捨てて行ったことに対して、あのことが一体どれだけの傷を負わせたのか。今のオレみたいに相当辛い想いしたはずだ。気付いてくれてるのは分からないけど、あとでちゃんと謝ろう。こんなことで罪が消える

わけじゃないが、言っておかないと納得ができない

車に乗って移動している途中、レイジさんが一つの封筒を渡してきた

「これは・・・？」

「冬休みの課題だ。やっておけ」

中を開けると確かに数学や国語や物理など課題が入っていた。戻ってくるのが少し遅いと思ったならこれを受け取っていたのか。でもこんなの今更意味なんてないのに

ネイバーだとバレてしまっているから学校に行つたところでもう意味なんてない。カバンに入れてしばらく車に揺られていると本部に着いた

まず行つたのは医務室だ。頭の怪我を治すためにだ

「少し痛いけど我慢してね」

「・・・っ・・・っい・・・！」

切れた傷口を縫うための針が刺された。注射なんかよりも痛くて手を握り締めて耐える。3針ほど縫つたところで糸が切られガーゼが被せられて包帯を巻かれた。大袈裟だと漏らしたが、先生が言うには傷口が小さい割りに出血が多かったと。椅子を投げられたと言うと驚かれた。むしろこの程度で済んでよかったとまで言われた、当たり所が悪いと障害が出る可能性もあったという。ほんとうにこの程度で済んで良かったと思う

羽山春多&福山一菜

忍田隊

隊長：忍田護

羽山春多（はねやま はるた）

本名：ハルタ

5月19日、169cm

好きなもの：ゲーム、漫画、戦闘

ワックスで髪を少しはねさせておしやれを頑張っている

護をいつも隊長と呼んで慕っている

ポジションはアタッカーで護の戦い方を真似ている

メイン：弧月、旋空弧月、カメレオン、シールド

サブ：弧月、旋空弧月、バツグワーム、シールド

トリオン：7

攻撃：11

防御：8

機動：4

技術：7

射程：2

指揮：4

特殊戦術：2

TOTAL：45

スラム育ちの身分がない少年。生きる為に兵に志願してトリガー使いになるも、スラム出身だということに煙たがられていた。配属された護の隊でバカにされると思ったらそうでもなくて、対等な人間のように扱ってくれたことに次第に心を開いていき尊敬していく

福山一菜（ふくやま かずな）

本名：カズナ

こちらで作成したものです←

(<https://picrew.me/image-maker/37328>)

11月1日、157cm

好きなもの：可愛いもの、スイーツ

胸が残念な美人ガンナー

無類の可愛い物好きで、部屋の中は目が痛くなるほどのぬいぐるみの山

春多同様に護を隊長と呼んでいる

メイン：アステロイド（アサルト）、ハウンド（アサルト）、シールド、スパイダー

サブ：エスクード改、バググワーム、フリー、フリー

エスクード改：厚さ5cmの縦に伸びた六角形。トリオンの量だけ好きに出せる。自由移動、座標固定の2種があり、自由移動は思い通りに動かす、座標固定はその場に設置するモード

トリオン：7

攻撃：4

防御：9

機動：4

技術：9

射程：5

指揮：4

特殊戦術：10

TOTAL：52

軍人家系の家に生まれたため、望まぬ生き方を強いられた。本当は可愛い服を着て、可愛いぬいぐるみで遊んで、街のおいしいものを食べたかった。護の隊に配属されてレールの上のような生き方をする

んだらうなと思っていたが、同じご飯を食べて、どうでもいいことで笑って、そうして過ごすうちに護の隊にすることが楽しくなっていた

経緯

護がまだ生まれた国にいた頃の部下。国を捨てて立ち去ったことに恨むが、2年前に護の母親と友人の墓の前で再開する

春多は捨てられたことに怒りトリガーを手にして護と戦うも負けてしまう、どんなに恨んでも尊敬している心は忘れられず、自ら一緒にいさせてと言う

敵の侵攻に応戦していた一葉も、もう現れないと思っていた護に怒りの言葉を浴びせるも、名前を覚えてくれたことに、国を守ってくれたことに昔みたいに戻りたいと思い、戻るようにと言っても聞いてもらえなかった。ならばと護が暮らしている玄界ミデンに一緒に行くことになった

20話 崩壊

「大丈夫か？護？」

「・・・」

叔父さんが心配して声を掛けてくれるが大丈夫ではない。怪我もしているし

「・・・とりあえず今後のことについてだが、護くんのネイバー疑惑はもう消しようがありません。なので方向を変えて、4年前の大規模侵攻を防ぐために我々のトリガーを提供したのが護くんということにしましょう」

「たしかに、トリガーは元々ネイバーから貰ったものだからな。あなたがち間違いではないわい」

こつちに来たばかりの頃に聞いたことがある。ボーダーのトリガーはネイバーから提供してもらったのだと。プロスペリタースのと違い、組みかえられるから個人に合わせた戦闘スタイルを作れる。4つずつセットできるから汎用性も高いから、1人1人違うことでいい訓練にもなった

「・・・詳細は追って伝える、君はもう帰りたまえ」

「・・・はい。ごめんなさい」

「次からは気をつけることだ」

城戸さんから帰るように言われてそうすることにした。オレがここに居ても何も役には立たないから当然だ。出るときに謝ってレイジさんと車に乗った。向かったのはマンシヨンだが、ここに住むわけじゃない。しばらくは玉狛支部に居ることになった。ここに居たら他の住人にも迷惑だし、街の人たちは野放しにされているのが納得しないだろうからとボーダーの施設に閉じ込めている、ということにするらしい

それでも行くのは着替えを取りに行くためだ。さすがに手ぶらで行くには服が少なすぎる

「護、それは？」

「プレゼント、クリスマスの・・・」

叔父さん用に買っていたプレゼントを持って動かないオレをレイジさんは声をかけてきた。掠れた声で答えてメモ帳から1枚取り出して一言書いてリビングのテーブルに置いた

必要なものも1時間と少して用意はできた。冷蔵庫の中のものも。叔父さんは料理はあまりできないから残してたら腐ってしまう、だから玉狛で消費しようとしてレイジさんが言ってきた

車に揺られている間ぼんやりと春多たちのことを考えた。あの時、オレが置いていかれたと知った2人はどれほど辛かったのだろうなと。きつと、いや絶対周囲から酷い言葉を掛けられたと思う。それでも諦めずに見返してやると奮起していた2人は強いなと思う

オレは・・・多分無理だ。今でも立ち直れるか分からない。こんなんじや隊長として情けない

車に揺られて玉狛に着くと陽太郎が泣いていた

「まもる護ばはばわるるぐるぐないいいいー!!
みみんんばなつな・な・なウうぞぞづづぎぎだだああ!!
ごごいいづづららつつ!

どれくらい泣いていたのかは分からないが結構酷い。顔が鼻水と涙でグチャグチャで、目元が腫れていた。嗚咽交じりの陽太郎の叫びは少しだけ、オレの心を癒してくれた。小さな子供とはいえ、言葉にして悪くないと言ってくれるのはうれしい。それに子供だからこそ、ウソ偽りない言葉だから響くものがあるだなんて。身をもって知るなんて思いもしなかった

「ありがとう陽太郎。そう言ってくれると嬉しいよ。ん？なんだ、雷神丸お前もか？」

レイジさんが抱き上げた陽太郎と撫でてしていると足元に来た雷神丸が顔をこすり付けてきた。言葉は分からないけど心配されているの分かる。ほんのちよつと、癒されたと思った。だが現実はいつもオレに刃を突きつけてくる

『—ということは今後私たちの身が危険が及ぶ、という事なんですよか?』

『えーそうですね。ボーダーがしっかり拘束していれば恐らく大丈夫でしょう。ですが相手は我々に紛れていたネイバーですからね。一

体何をしてくるかわからないので確証が無いというのもありますし、いまだにトリガーと言う技術がどういうものなのか明かされていないので、脱走と言う可能性もありますね』

『ほんとうに危ないところでしたね。私の娘がネイバーが潜り込んでいたとされる中学校に通っているのですが、もう常に近くにいたのかと考えると信じられません！なんでネイバーなんて化け物がいるんですかねー？』

『さつさと死んでほしい！あつたりまえだろ？あんだだけ人殺しておいてなに自分は平然と学校に行ってるんだよ！つて話ですよ！』

『ネイバーなんてね、存在しちやいけないよ。さつさと自分の世界に帰って！化け物がここで生きる場所なんてね無いんだー』

「気にするな。マスコミが故意に悪意のある言葉だけ選んだだけだ」

「でも・・・あの言葉は紛れもない本心ですよ。当然ですよ？自分たちと違う異物は受け入れられない・・・動物も結局怖くて分からないから管理して、調べて、殺してつ・・・オレだつて・・・ネイバーだから怖がられるの・・・当然、なんだよっ」

テレビを切られても頭の中には討論やインタビューの言葉が響く。確実にそれはオレの心を蝕む呪いにも等しい

「護・・・」

「荷物・・・片付けます」

玉狛支部の人たちは優しい。オレやロイ、もう一人のネイバーが居るのに優しくしてくれる。オレたちにとって唯一の居場所といつてもいいかもしれない。だけど、その場所がいま、オレの所為で聞きに近づいているかもしれない。この場所を知られるのも時間の問題だし、他の支部も本部と違い市街地にあるから何かしらされると思う。最悪暴動とかあつたりするかもしれない

またオレの所為で周りを巻き込んでしまった。また誰かを失うのかな？いやだな・・・失いたくないから、護ろうと決めたのに

「あ・・・」

荷物を広げてタンスなどに服を片付けていると筆箱を机から落と

してしまった。シャーペンや消しゴムとか入れているとふと目に映ってしまった。紙を切れるカッターナイフを

カチ・・・カチ・・・カチ

ゆつくり黒いパーツを押すと音を鳴らしながら刃が現れた。紙を切るための道具であると同時に人も傷つける事のできる凶器でもあるそれから目が離せなかった

「・・・これで・・・」

テレビで言った人たちを殺せば化け物とか言われなくなる。それもいいかもしれない。大丈夫、人を殺すのはもう慣れてるんだ。いまさら怖気づく事なんてない・・・ただ、オレも傷ついて心が死んでいくだけだ。前みたいにおレから大切なものを奪おうとするやつらを・・・殺せば・・・護れるんだ。春多も、一菜も。レイジさんも陽太郎もロイも玉狛のみんなを・・・

「っ!!・・・レイジさん!隊長は!?!」

「部屋だ。それと乱暴に開けるな」

学校が終わった春多と一菜まっすぐ玉狛支部に帰ってきてレイジに注意されながらも、護が居る部屋に向かった

「隊長!!・・・え?隊長?」

「いない・・・どうして・・・?」

心配で焦る気持ちを抑えきれずに乱暴に開けて入るとそこには誰も居なかった。服の片付けも途中だった。2人は他にもトイレ、仮想戦闘ルーム、支部長室など隈なく探したのだがそこにも居なかった「それはおかしいだろ?帰ってからずっとオレはここに居た。護が出たのなら気づく」

上へあがる階段はリビングと玄関の2箇所あるが、玄関を開ければ音で分かるのだ。なにより護の様子が心配だったためレイジは晩御飯の準備をしながらも気にしていたため気づかないというのはおかしいのだ

「オレ、探してくる!!」

「春多! レイジさん、私も行ってきます!」

「気をつけろよ!」

居てもたつてもいられない春多は外へ出て護を探す事にした。一菜も同様で一言残して後追うように出た

「隊長ー!!」

大声を出して走り回るが返事が返ってくることは無かった。レイジも料理の合間に護の携帯に連絡を試してみたが応答がない。何度も留守電になってしまうのだ。部屋に上がって見渡しても居ないのは当然だが、少しだけ異変に気がついた

「護・・・バカな事はするなよ」

荷物の片付けは途中なのは異変の一つだったが、それよりも気になったのは机の上に散らばった筆記用具たちだ。勉強していた、というわけでもない。プリントもなにも無いのだし、机に置いたら傾いて出てしまったという可能性だってある。じゃあどうして気になるのか、ないのだ。カッターナイフが

レイジはもしかしたら護が人を刺す、などという考えをしたくないのだが。今の護は正常ではないからどうしてもそんな想像してしまうのだ

「っ・・・病院?」

突然鳴り出した携帯を見たら何度か行っているため登録していた病院からの連絡だった。最悪な想像が過ぎたためまさにそれはうれしくもない連絡だった

春多たちは川沿いに走って探しているが一向に見当たらない。街の方に行ってしまったているのかもと考えているが、いまのこの状況で行くとは思えず。支部に帰ってからの護の様子を知らないため、ネイバーを化け物と叫んでいる人を殺しに行っているんじゃないか、という考えまでにはまだ至っていないかった

「ぎゃ!? は、春多・・・」

「どうした!? ...これは。血?」

のども疲れていた一菜はふと地面を見ると赤い点が見えた。コン

クリートに赤は見えづらいのにとよく見るとそれは血だった。春多も来てそれは点々と続いているのが分かった

「も、もしかして……」

「そんなわけないだろ！だって、隊長はもう、殺したくないって……」
血痕を見たことでついに護はまた人を殺したのではないかと想像してしまった。軍人だったころ殺すごとに荒んでいく護を間近で見ている2人はもう取り返しの付かないところまで壊れてしまったのではないかと考えてしまう。春多は必死で否定しようとするも、血を見続けているうちにしてしまっただんじやないかと、一菜と同じ意見になっていた

信じたい。けれど目の前の現実がそれは無意味なものだと語りかけていた

「春多！一菜！乗れ!!護が見つかった!」

レイジの運転する車が2人の近くで止まった。護が見つかったと聞きすぐに乗り込んで向かった。場所は三門総合病院

21話 嘘から出た実（まこと）

土手を走っているのは護の親友だった青柳だ。本来なら学校の後クラスの連中とカラオケに行く予定だったのだが、護がネイバーだということとでそういう空気じゃなくなりカラオケは中止となった

当然だろう、みんなが裏切られたようなものだ。青柳にいたっては隠していた秘密を明かしていたのに、護は隠していたのだ。しかもネイバーだと。内容が内容だけに仕方ない、と思えるほど青柳は割り切れろうとはできなかつた

「くそっ!!」

家にいてもなぜ隠していたのか？　なんで話してくれなかつたのか？　オレのことは結局その程度関係だつたのか？　と。そんな事ばかりしか考えられないからと、気分転換に走ることにしたのだ。世の中は受験戦争で大忙しだが青柳は野球をしていたのでスポーツ推薦でそんな心配はない。だから暇があれば体を鍛えるために筋トレや走り込みなどしている

「は？　なんでいるんだよっ」

いつものコースを走っていると前には護が歩いていた。ボーダーが確保したはずなのになぜか一人で歩いているのだ

「！・・・あ」

護も青柳に気付いたようで足を止めた。目は赤く充血してて頭の包帯は血が滲んでいた

「なんで、出歩いてるんだよー！」

「・・・わかんない」

「わかんないって・・・ウソを言うなよ！　ネイバーなんだからさっさと帰れ・・・なんだよソレ？」

言っている意味が分からない青柳は声を荒げるが、そこふと護の手握られているものに目がいった

「これ？　これはね、オレを・・・苛めるやつらを切るためなんだよ・・・」

「っ・・・オレを刺すのか？」

「え？　違うよ切るのは・・・オレ、だよ」

「……は？」

ほんとうに意味が分からなかった。護は護を苛めるやつ人たちを切るためにカッターナイフを持っている。なのに自分を切るとは一体どういうことなのか？ 身構えていた青柳は見てしまった。護の歩いた後に血のあとが続いている事に、そして左手から血が垂れている事に

「みんなが怖いのはナイバーだ：そしてオレはナイバーで。だからオレが悪くて……オレがいなくなれば苛められる事もなくなる……」

「な……は？ な、なに言つて……」
「それに……死んだら、父さんと母さんに逢えるから」
「っっ！」

そう言つて護は笑つた。狂つていると青柳は思った。全部ナイバーが悪いはずなのに、なのに今の護を見ると自分たちが悪いみたいを考えてしまう

「おいー！」

ナイバーにまともなやつなんていないと思つていたら、護が倒れた。元々ふらふらとしていたのだが、血を流しすぎて立っていらられる限界を迎えて倒れてしまったのだ

「か、るい……」

思わず駆け寄つて抱えあげると想像より体が軽かつた事に青柳は驚きを隠せなかった。体感でそう思えるつてことはそれなりに血を流してしまつたという事だ。しかも自分で自分を傷つける護に動揺しててナイバーだからとかいうことは忘れてしまつていた

とりあえずと携帯から119番に連絡して救急車を呼んだ。意識は薄く危険な状態だと乗つていた救急隊員は言つていた。オレたちが、オレが追い詰めてしまつたと青柳の手は震えていた

病院に着いて処置が施された。幸いにも重要な血管は切れていなかったため出血死になるほどではなかったが、やはり生きていられる血の量がギリギリまで減つていた

起きるまで少し時間が必要と言わる。ランニングをしていたから手持ち無沙汰で、ただ座つて時間が過ぎていった

20分ほどしてレイジたちが到着したが、一緒にいた青柳を春多が怒りの顔で近づいて胸倉を掴んだ

「つぐー！」

「おまえっ！隊長に何したんだよ!？」

「落ち着け春多。ここは病院だ」

レイジに言われてちよつとは落ち着くが、内心殴りたいという気持ちの春多は青柳をずっと睨んでいる。代わりにレイジが事情を聞いて救急車を呼んでくれたことに感謝した

「学校では裏切り者とか言っておいて・・・なんで助けたんだよ！お前たちにとって敵じゃないのかよ！」

「当たり前だろー・・・カッターナイフとか持ってて、手首切ってて・・・おまけに父さんや母さんに逢えるとか、意味分らない事言ってる頭の中がグチャグチャだったんだよ！オレだって・・・親友だと思ってたんだ・・・なのに・・・」

軍人でもボーダー隊員でもない青柳は精神的にはまだ幼い。それで護たちの事も考えろというのは少し無理があつた。しかも自身の秘密を明かして信賴していたからこそ、今日までネイバーだと隠していたことに許せなかつたのだ

お互い気兼ねなく話せる。青柳はそう思っていたのだから今回の事はかなりシヨクだったのだ

しばらくの沈黙の後青柳はもうこれ以上居たくないと思つていった。レイジも支部でご飯を作らないといけないと戻つていった。春多たちは残つて起きるまで待つた

「隊長・・・大丈夫だよな？」

「春多・・・私たち、頼りないのかもね」

自分たちがどれほど護を信賴しているのかと伝えているのに、こんな事になつてしまった。部下として、仲間としてまだまだ頼りないのだと一葉はそう感じたのだ

任務でも背中を任せられるほどにも強くなっているのに。ランク戦も順位は低いがA級にはなっている

「・・・白くっ！」

「隊長!!」

「春多?一葉?ど、して・・・」

これからどうしたらいいのか迷っていたら護が目を覚ました。眠っていたせいか意識はまだ朧げだが2人の姿も見えているしりかいてもしているから障害は残らなかつたようだ

安堵する2人をよそに護は天国じゃなかつたことに少し残念がつていた

「青柳が・・・」

病院に運ばれるまでの経緯を聞いたオレは驚いた。ネイバーのオレを睨んでいたのに救急車を呼んでくれるなんて

「隊長!」

「っ!なに・・・?」

突然一葉が声を上げてびつくりした。俯いていた顔をあげるとだきしめられた。春多も一緒に

「私たちどこまでも付いて行きますから!!」

「遠慮はしないでください!オレたちができることならなんでもしますから!」

2人の必死な言葉にオレはやっとまた間違えたんだと知った。いつもそうだ、手遅れになる前に気付けばいいのに、我に帰った時にはいつも心配するオレの大切な仲間

「ごめん・・・ごめん、2人とも」

本当にカッコ悪い。隊長だからカッコつけてたのかもしれない、父さんたちがいないら自分でなんとしないといけないと無意識に思ってたのかもしれない。オレはこの4年以上一玄界・ミデン・で何を学んだんだよ! 15のオレはここじゃ子供なんだ、親に守られて育てられ頼って当然なのに。軍に入って大人達に混じって任務に参加してたオレは大人になつたと自惚れていたのに、本当にオレは成長していない

頼るのはなにも悪いことでも恥ずかしいことでもないのに。どうして頼ることをしなかつたんだろう。でも

「気持ち嬉しいけど、あまり信頼されすぎると・・・重いんだ・・・気持ち。だからお前たちも文句とか言ってくれればいいんだぞ？」
「なら隊長も私たちをもつと頼ってください！」

「つう・・・返す言葉も無い・・・」

全くもって頼もしい仲間だ。オレに依存しすぎているような気もするけど、今はそれは飲み込もう。でも一度死に掛けたからなのか不思議と気持ちが落ち着いている。また何かしらの切欠があると暴走してしまうかもしれないけど、そのときはこの2人に止めてもらおう。殴ってでもいいから

「分かりました。その時は骨を折ってでも阻止しますからね」

「・・・一葉おつかねー・・・」

「・・・うん」

春多もオレもこのとき一葉に対してかなり恐怖した。さらつと骨を折ると宣言した彼女の言葉は多分本気だ。もしかしたら冗談みたいなノリで言っているのかもしれないけど

少し疲れたから寝ようかなと思つたら扉が開かれておじさんが入ってきた

「護っ！・・・よかつた、生きていたか。木崎から連絡をもらったときは今度こそダメかと思つたぞ」

「ごめん・・・いてっ!？」

口で息を吐いているからほんとうに急いだんだなつてわかる。謝つたら突然頬を叩かれてびっくりすると、何が起こつたのか理解する暇も無く抱き締められた

「お前はほんとうにつ・・・自分のしたいこととかしたらいいのに。いつも任務があるとか、姉さんが生まれた国だから護るからとか・・・もつと正直になつてもいいんだぞ？少しくらい文句とか我がまま言ってくれてもいいのに、もつとおじさんを頼ってくれてもいいんだ」
「つうん・・・ごめん、ごめん・・・おじさん」

おじさんも一葉たちと同じことを言ってきた。やっぱりオレはど

こか迷惑かけないように気を使って、我慢とかいっぱいしてきたみたいだ。おじさんにまでこんな心配させてしまったのだから

「少し早いがクリスマスプレゼントだ」

「ありがとう．．ゲーム機？」

渡された袋には最新の携帯ゲーム機とソフトが4本だ。なんでもオレはゲーム機を友達の家とかでやつたりはするのに、持っていないことに少し気にしていたらしい。けどおじさんはゲームとか全く分らないのできとうに買ってきたらしい

格ゲー2つにパズルとRPGが1つずつ。どれもオレがやって楽しかったと話したところのあるゲームだ。覚えていてくれたんだと嬉しくなった

「そりゃ姉さんの忘れ形見だからな。引き取ると決めただから大切に育ててやりたいからな」

「おじさん．．．気にしてくれるのはいいけど、自分のことも考えたほうがいいよ？年なんだし」

「私はまだ．．．33だ。手遅れではない。それに中学生が要らぬ心配をするな」

「いてー」

軽く頭を叩かれた。文句とか言ってもいいってさっき言ったのだから言ったのに酷い。大人は簡単に言葉を裏返してくる。輸血もほぼなくなってきたので帰ることになった。だけど服の左側は手を切ったことで血の色で染まっていた

でもおじさんが来るまでできていたので乗って支部まで送ってもらった。その道中今回のうわさの原因が分かったといって経緯を聞いた

「未所属B級隊員が今回の噂の原因なんですか？」

「そうだよ。理由は単なる嫉妬」

メディア対策室には室長の根付と顔の広い東とテレビに出てる嵐山の3人がいた。信頼できる隊員たちや職員たちが集めた情報によつて今回の護のネイバーという噂の真相が報告されていた

理由は嫉妬。しかもその隊員は2年前から正隊員として防衛任務とか出ているのにもかかわらず今までチームに所属した事などなかったという。妄想癖があるらしく隊員たちは彼を仲間にするのを敬遠していたらしい

それが自分の人格と力不足ということを確認することなどしなかった要因となり、チームに所属している隊員を妬んでしまったと

しかもタイミング悪く護が通っている中学校でイレギュラー門^{ゲート}が開いたときにトリガーはネイバーの技術だということを言ってしまった事、ブラックトリガー争奪戦の頃に春多と一葉が帰ってきて忍田隊復帰ということが重なって、融通が利いてもらっている護をターゲットにしてしまったという

「なんでそんな・・・」

「しかも護くんがネイバーなのは事実ですからね。噂がどうであれボーダーが否定しなかった事で真実が変わってしまった」

「噂を流した隊員はネイバーを見つけたからと功績として認めてもらいたがっているが、当然そんなことなどするはずもない。彼は記憶封印処置をして除名と会議で決まった」

「妥当でしょうね。オレと嵐山がするのは真実を広める事ですか？」

「いや、そういうわけにもいかないよ。すでにトリガー技術の提供者ということで公表してしまった、更に公表してしまってはボーダーのイメージが揺らいで立場危うくなってしまう。この件は伏せておいて、ん？」

「どうしたんですか？」

今回の事をの顛末を聞いた2人は護ほどではないにしろ、多少は心は痛めていた。地道にでもポイントを溜めれば昇格してB級には上がれる。実力が伴うかは微妙なところだ。だから除名されてしまっ

た隊員のような者も少なからずいたりする

さらに印象を一度操作してさらに重ねると怪しまれて支持されている今の立場が揺らいでしまう可能性が高いのだ。すでにネイバーを隊員にして秘匿していたという事実で少し悪くなっていたのだ。これ以上悪くする訳にはいかないと結論していたときに木崎から連絡が来た

「なにつ!? 護隊員が!？」

「根付さん!? 護くん! 何が・・・？」

「彼が・・・病院に運ばれたそうだ」

「ツツ!!？」

「・・・手遅れだったのか・・・」

表示されている画面には病院で話を聞いた木崎からの分が書かれていた

「彼は手首を切って血を失いすぎたそうだ。今治療を終えて輸血をしてもらっているらしい」

容態は安定していると付け足したが、部屋には重い空気に包まれた。ただの妬みから生まれ根も葉もない噂が本人が思いつめて自殺を計ろうとしたのだ

「室長、ネイバーが病院にいと通報が・・・」

職員の1人がノックをして入ってくると、ついさつき来た情報と同じだった。病院関係者からの通報だったらしい

22話 クリスマスパーティー!

「メリークリスマス!!」

25日の夜はクリスマスパーティーで、玉狛のみんなが集まるとボスの合図で始まった。テーブルにはレイジさんが作った料理やケーキが並んでいる

「隊長…なにから食べる?」

「自分で取るよ…両手が使えないわけじゃないから」

春多が紙皿を持って代わりに取ってくれようとしているが、右手は利き手だから箸だつてしっかり使える。そこまですてもらわなくてもいいと言うと心配そうな目で見てきた

「我慢とかしているだけじゃないから」

それでも心配みたいだ。気持ち嬉しいがどう言っても今のオレにそこまで言葉に力は無い。手首を切つて病院に運ばれるということだけでなく、誰にもなにも相談せず溜め込んで自滅していくという前科があるため、一菜もチラチラとこつちを見て気にかけてくる

病院で治療を受けたオレは輸血するだけで入院の必要が無いため、そのまま支部に帰つて事の顛末を聞いて少し驚いた。たまたま、タイミングが重なっただけで一隊員の不満が爆発してしまった。おじさんはこのことが分かつていれば防げたというのに出来なかつたと、謝ってくるがおじさんが悪いわけじゃない。しかも続けてボーダーがオレがネイバーだと否定しなかつたところで真実が変わつてしまったことに、城戸指令上層部の人たちも今回は自分たちに非があると言っている。とくに根付さんはテレビに映つて発表したわけだから他の人より責任を感じていた

オレから何か要求とかあると聞かれたけどそんなものはない。偶然が重なつたとはいえ、一時休隊にしたのも複製したのもオレの判断だし。怪我したのも自分でしてしまったことだ。どう繕つてもオレが近界民であることは変えられない。これまでもボーダーにはオレのわがままも聞いてもらえたし、これ以上は欲張りだ

「隊長！くじ引かないと」

「あ、ああ……………7番？」

どうやらいつの間にかプレゼント交換をやっていたみたい。一葉に肩を叩かれてやっとなり気付いた。割り箸がもう一本しか残っていないので、引く意味あるのかと疑問に思った。太いところには黒い文字で「7」と書かれていた

。誰のプレゼントなんだと受け取ると結構小さい。お菓子か何かかと思いつながら開けると

「……………めがね？」

「ふふ〜護くんが引き当てちゃったね！」

「これ、宇佐美先輩が？」

メガネの中央を押し上げながら嬉しそうに宇佐美が口を開いた

「でもオレ目は悪くないけど……………？」

「そこは大丈夫！そのレンズ、度は入っていないから護くんでも付けられるよ」

「そうなんだ？……………どう？」

宇佐美が言うように確かに歪んで見えないから度は入っていないみたい。顔につけてみんなに見せて感想を求めると

「似合ってますよ！」

「かつこいいっすよ隊長!!」

「意外だな。護がめがね似合うなんて」

「めがわるくなったのか？」

一葉に春多にとりまると陽太郎と続けて他のみんなも結構好評だった。意外なのは余計だけど、ここまで褒められると悪くない気がする。これからも付けてみたくなる。オレが買ったアクアリウムはレイジさんがもらったみたいだ。そのあとは何か映画を見ようとDVDを入れて観る人や料理を食べる人やで別れた。オレは映画を観ようかなと椅子に座っていると隣に座っていた修が相談があると言ってきた

「どうすればレイガストをうまく使えるか？師匠はとりまるとは聞きたくないの？」

「残念だがオレはレイガストに関してはさっぱりでな、護の国には同じような武器があるんじゃないかと、いつか聞いてみたらいいと言ったんだ」

とりまが付け加えるように言ってきた、本人からそう言ったのなら何かアドバイスしようかなと思っただが。生憎オレは剣型と槍型しか扱ったことがない。両剣型はあったけど使ったことがないから修の求める答えは出せない

「けど、強くなるのに近道は無いよ。あるとするならひたすら反復練習だ。修は体でなく頭で戦っているから反応が遅れてるんだと思う」
戦闘が得意でない戦闘員によくあることで、受け取った情報から対応策を考えて動こうとするから気付いたときにはやられていることに。対照的に反射で動いているやつは考えずに動いているから簡単には倒せない。頭で考えるタイプが必要なのは反復練習をすること、そうして体に動きを馴染ませることで少しは考えずに動くことが出来る

だから軍でもみんな訓練生のときは同じ武器を同じ動きをして体にしみこませていった。オレが言えることはそれくらいで、アドバイスといえるほどのことじゃない

「遠征に行きたい気持ちで焦りたくなるのも分からなくもないけど、何かを取り込んだところで強くはならない。馴染んだ武器を使い続けたやつが強いんだ。まず修はモールモッドを安定して倒せるくらいには成長しないとランク戦でも危ないぞ」

「……そうか、アドバイスありがと。護」

「オレも強いわけじゃないからあまり参考にはならないけど」

そんなことはないと言った修は言って手にする皿に乗った料理を食べる。オレもから揚げを箸で刺して口に運ぶ。どんなに強い人も初めからそうじゃなく、地道な訓練から身に付けていって強くなる。成長速度には人それぞれだし、春多なら近接、一葉なら遠距離と向いている素質も違ってくる

オレみたいな遠近対応できるタイプはどちらも訓練が必要で、一点集中のやつらと比べると劣っている。器用ですごいと言われること

があるが、必ずしも強いわけじゃない。ましてやオレはブラックトリガーの訓練も必要なため、春風に使う訓練の時間は余計に少ない「ん？」

すこし視線を感じれば春多が見ていた。そこまで心配しなくてもいいのにと呆れるが、ちょうど飲み物が切れていたので頼むことにした

「春多」

「なんすか!？」

「ジューズ、入れてくれるか？炭酸の」

「了解!!」

そこまで嬉しそうにしくなくてもいいのと思うが、もしオレが春多の立場だったら？まとも人として扱ってくれた人のことをどう思うのだろうか？

ごみのようにぞんざいに扱われてきたことに荒れてしまったなかで、出会った人が周囲と同じように接してくれたとしたら？少なからず信頼してしまう

一緒にご飯を食べ、時には買い物と一緒にしたり、戦場を共に駆けた仲間。そんな上官が一人で抱え込んで自滅していく姿を見ているのだろうか？オレは

「はいッス」

「ありがと春多」

できないな。心配させまいと気遣ってくれているのはわかるが、信頼している人が傷ついていく姿を見たくはないな。頼ってほしいとも思う。今の春多たちのように

そう考えると、オレについてきてくれたこの2人は、本当に頼れる仲間だ

なんでもというわけにはいかないが、少しはこいつらの想いに応えてやろうと思ひ直す

「春多」

「今度はなんですか？」

「風呂、一緒に入ってくれ」

「え!?そ、それはつまり……」

「アホ!片手じゃ満足に洗えないんだよ!」

「あ、ああ!そうっすね!!ははは……」

確かに故郷には男色はあった。遊び目的の人も居れば愛し合って一緒に過すなど

春多のこの慌てっぷりはつまりそういうことなのだろう。好意を向けてくれるのは素直に嬉しい。嫌われるよりは全然いいから、でも悪いけどオレは女子が好きだし、それ以前に人の命を奪ったオレに誰かと幸せを分け合うというのは許されないんだから

「よう、外にしていると冷えるぞ?」

「迅さん」

玉狛の屋上で夜風に吹かれていたら迅さんが湯気が立つコップを2つ持って隣に来た

「迅さんってここにいますか?」

「いきなりどうした?」

確かにいきなりのことで驚いているけれどそれは用意された行動をなぞっているだけだ

「未来が視えるならオレのいいたい事やそれに対しての返しとか動きとか分っているんでしょ?」

「そうだな。未来が視えるってことはそういうことだ」

オレの問いかけに答えたこの言葉も復唱するように言っただけなのだろう。そしてそれは人の死もあらかじめ知るということだ。誰よりも早く、誰よりも多く。親しい人だろうが他人だろうとそれは関係ないのだ

便利のようなサイドエフェクトだけど、ここ最近では悪魔の能力じゃないかと思うようになった

「遭っただけでその人の未来が見えるならさ、迅さんは沢山の人を助けたいと思わないの?」

「思うよ。でもオレは神様じゃないからみんなは無理だな」

確かに神様なんてこの世には存在しないのかもしれない。どんな世界でも必ず誰かが傷つき、誰かが死ぬ

「それは迅さんの考えですか？」

「そうだよ」

「……………本当にですか？ 未来の迅さんの行動をなぞっているだけじゃなく？」

「……………」

「迅さんの意思って、どこにあるんですか？」

未来が見えるっていうことは逸脱したことをすると予定から外れてると修正をしなくてはいけない。そしてそれが連続すると最悪の未来に近づくことになる

だから迅さんは未来通りの行動をしなくてはいけない。じゃあ迅さん自身の考えや意思はどこに存在するのか？ という疑問が出てくる

どんな未来のするのかと選ぶのは迅さんの意思なのかもしれないけど、結局それも未来の自身の選択を繰り返すだけだ。テレビでやってるドラマの役者みたいにただただ演じる

「オレはいつもここにいてるぞ。どこにでも……………それにな、まだお前に心配されるほどの実力派エリートは弱くないぞ？ 今のお前がすることは……………ほら」

「ん？……………おまえたち……………」

結局はぐらかされてから言われて振り返ると春多と一菜が扉の間からのぞいていた。まったくしょうがないやつらだと一度息を吐いて中に入った

「お前たち、そろそろ寝るぞ」

もう夜も遅いから寝ようと言うとはい！ と答えて付いてきたがなぜオレの部屋で一緒に寝るのだろうか？ 確かにたまたまに夢に甦される事もあるが、この2人がそれを知っているわけがない。言った覚えも一緒に寝たこともないのに。もしかしてサイドエフェクトなのか

かと思ったが、最近の2人の検査ではそれはありえない

「隊長。夜に散歩なんてしないでくださいよ?」

「……分かったよ。そこまで信用ないのか?」

「当然!」

酷いやつ等だ。さすがに冬の夜に出歩くことなんてあまりしないのに、念を押すように言う一葉にまるで信用されていないことにため息を吐く。しかも春多もなんの躊躇いもなく同意してきたのだから、これはオレを逃がさないための包囲網ということなのだろう。多分トイレに行くのにも付いてこられる可能性だって高い

「ち、ちなみにトイレに行きたいときは……?」

「もちろん付いていきます!」

「あ、はい……そうですか……」

どうやら慈悲はないらしい。完全にオレをマークするようだ。まあベッドと一緒に寝てくつつかれるよりはまだマシだろう

こうなったのもオレ自身が招いた行動の結果だ。きつとこれからもこのときのことを持ち上げて黙らせてくるはず、かつては上官と部下という関係だったのに。ミデンこっちに来てから遅くなったものだよ、ふてぶてしくなったというのが正しいのか? まだこっちの言葉の意味は完全に理解していないからあっているかは怪しいけれど。故郷にはなかったものが沢山あつて退屈はしない

父さんと母さんがいなくて寂しいけれど、心配してくれる仲間や怒ってくれる叔父さんとかいてくれるから大丈夫だと思える。少しはわがままとか言っただけで困らせたらどんな反応とかするのか、そう考えると楽しく思える。いつか無理難題言っただけで困らせようと決めて瞼を閉じた

23話 変わらない過去（じぶん）

「オレの、家……？」

気がついたときは目の前には以前住んでいたオレの家があった。久しぶりに見た家に胸の中は懐かしい気持ちでいっぱいだった。玄関を開ければ母さんがご飯を作っていた。オレの好きな牛肉を煮込んだスープを

「お帰り護、アナタ。今日もお疲れ様」

「あ、うん……ただ、いま」

「どうした護？今日の任務で疲れたのか？そんなんじや父さんみたいにはなれないぞ」

「父さ……ん」

分かっている。ここは夢の中だ

母さんと父さんが生きているのはおかしいことぐらい分かる。だけど、たとえ夢でも姿、声を聞いてうれしくならないはずもなかった「っ……うう」

「護？どうしたの泣いて？」

「ごめん、なざい……オレの所為で……」

オレが過信しなければ母さんが死ぬことはなかった。オレが玄界ミデンに行くかと誘いに乗らなければ父さんが死ぬことはなかった。全部オレの所為で死んでしまった、もう2度と会えない

「ごめん、ごめん……」

「いいのよ、護。あなたが元気で居てくれれば」

「ああ、お前が生きてくれればそれでいいんだ」

泣き崩れてずっと謝るオレにやさしく抱き締めてくれる。ぬくもりを感じて余計に父さんと母さんだと思ってしまう。これは夢、いつかは覚めてまたさよならをしなくちゃいけない。なのに流れる涙は止まることがなかった

ズサツ

「えっ……母さん？父さん……？」

何かが刺さる生々しい音を聞いてなんなのか顔を上げてみた。すると2人の背中には木製のなにかがあった。そしてそのまま父さんと母さんは倒れてしまった。一体どういうことなのかと背中を見たら赤いしみが広がっていた、その中心には鈍色にびいろに輝くものが突き立っていた

「な、に……これ……」

口から出た言葉は理解していてもソレを否定したいと願っていた。けれど全く反応しない2人にソレは間違いなく剣が突き刺さっているという事実が色濃くなつた

嫌だ嫌だ現実を受けれない子供のように泣き崩れるオレ。そこへ追い討ちをかけるように声を掛けられた

「全部お前の所為だ」

「っ！、お……まえは……」

振り向けばそこにはオレが最初に殺したナイバーが立っていた。口を歪ませて殺したことに罪悪感など微塵も感じさせなかつた。それに、オレは母さんの背中から剣を抜いてソイツを斬つた

「うああっああああ!!なんで、なんで!!母さんを殺したんだ!?!母さんはなんも悪くないのにツ!!」

血飛沫ちしぶきを上げながら倒れたソイツにオレは何度も何度も何度も剣を突き刺した。返り血を浴びながらも刺した剣が肉に刺さる、骨に当たり碎ける固さと音が手と耳から伝わり。死んでからもその場から動けなかつた

もうしたくないと、しないと誓つたはずの殺しをしてしまった。簡単に

夢の中とはいえオレの決意はこんなにも薄っぺらかつた。これじゃ悪魔だったり危険人物だったりといわれても仕方ない。生きていいのか分からない、後悔を感じているとき人の気配がして回りを見れば10人はいそうなくらいのナイバーがいた。みんな武器を持って

「いや、いや……もう、オレは……」

「許さん……お前だけは」

「殺せ…」

「殺せ、奪え」

「殺せー!!」

「オレはあああああー!!」

全員虚ろな表情でゆっくり近づいてきて武器を向けてきた。殺せ殺せと言われてオレは怖くなりまた剣を持って斬った

「いやあああ…やだああ!!オレは、オレは怖かったんだ!!お前たちが!!怖いんだよ!!もう嫌なんだ、あんな痛いのはもう嫌なんだよ!!!だから仕方ないんだ…!!だから…だから…オレはっ…」

首を切つて、心臓を突き刺して、四肢を切り落として、胴を切り離して叫びながらただただ剣を振り続けた。悲鳴と恨みの言葉を聴きながら動かなくなるまで

「オレは…嫌なんだ…痛いのは…あんなのはもう、嫌なんだ…だから仕方ないんだ。こうでもしないと怖いんだよ!!」

すべてが終わったときオレは血の海と肉塊の中央に立っていた。膝を崩して自分で自分を抱きかかえるようにした。こんなに怖かったのかと驚くほど震えていた

「助けて…だれかッ…お願い…許して…助けてっ」

こんなオレでも助けてくれるのかはわからないけれど言わずにはいられなかった。一葉や春多は助けてくれるのかもしれない。オレがどんなになってもどんなことをしても付いてきてくれた。多分こんなオレでもずっと傍に居てくれるかもしれない。叔父さんは怒ると思う、けれどやっぱり母さんの子だからって傍に置いてくれるかも、都合のいいことだと思っけど一人になってしまうのは怖い

そんなことばかり考えていると突然頬が痛くなった。目を開けると真っ白い壁があつて、一体どうしてなのかと混乱していると上から少し怒り気味の声が聞こえた

「護ーいい加減起きなさいよ!食器片付けられないでしょ!」

「ぎ、りえちゃん…?」

顔を動かせば上から見下ろす桐絵ちゃんが腰に手を当てて部屋に居た。体を起こすと妙に頭が静かで、寝起きのときのゆっくりとした

思考がすぐに通常状態になって状況を理解した。ただ寝ていたのに起こされたのは気に入らないため部屋を出ようとしていた桐絵ちゃんの腕を掴んで後ろに固定して壁に押さえつけると机の上にあった定規を手に取り首に当てる

「昨日クリスマスで疲れてるんだ。勝手に起こさないでよ」

「ちよ、護…あんた何をするつもりよ…?」

「それに知ってるでしょ? オレ、今色々大変なの。そんなときに無理やり起こされるの嫌なんだけどね。ソレより知ってる? ただの板でも擦れば皮膚が切れて出血させることもできるんだよ?」

「っ…!?!」

久しぶりに楽しくご飯を食べたと言うこともあり満腹になったり、おじさんから貰ったゲームを遊んで夜更かしをしたりなど睡眠時間的には足りていないのだ。単なる逆ギレだがオレは今起こされたことに苛立ちを感じている

定規に力を入れると桐絵ちゃんの目に涙が溜まるが何も感じなかった。ただ起こされた腹いせをすることしか頭になかったのだが「隊長?! 何してんだよ!」

今度は春多が入ってきて手を伸ばして邪魔をしてきた。逃れるために距離を取ったら騒ぎを聞きつけたのか一菜と遊真が来た

「っ…何って、無理やり起こされた腹いせっ!?!」

「っ! 護の馬鹿!! アンタなんかもう知らないわよ!!」

頬に突然の痛み。乾いた音が響いて頭の中にあつた考えが吹き飛ばすと春多たちが緊張した表情でオレを見ていた。桐絵ちゃんは部屋を出て行き、最後に見た顔には涙を流していた。そこでオレ何をしようとしていたのか正常に理解した

「は、るた…オレ、まさか」

「たぶん、そうだと思う」

異常なオレを知っている春多たちならさっきのオレを見てすぐにわかったはず。だから聞けばそうだと返ってきた。つまりオレはあの瞬間春多が来なければ桐絵ちゃんを殺していたかもしれない。とんでもないことをしてしまったことによりやく理解したオレは膝を床

につけて泣いてしまった

結局オレはどこまで行っても、どんなに良い事をしても畜生であることに変わりなかったのだ。しかも4年以上も過ごしてきた仲間に何の躊躇いもなく殺そうとしていた。オレは非情で人でなしでしかなかった

そのあとの新年までは桐絵ちゃんに避けられてばかりだった。あんなことをすれば当然のことだろう。春多たちの説明で周囲の誤解はないのだが、桐絵ちゃんが仲直りを望んでいないのなら仕方ないことだ。諦めるしかない

仲間にまで手を掛けようとしたオレには相応しい罰だ

新年を迎えても桐絵ちゃんとは仲直りはできず。支部のみんなは初詣に行くために玄関に集まっついていて、オレは留守番をしていなくちゃいけなくなった。というよりはしていかないといけない

まだ世間ではオレのことを敵視した意見が多く飛びかっており、しかも最悪なことに顔写真までネットに公表されている。学校の誰かが売ったのは考えなくても分かることだった

「ほんとに大丈夫か？」

「オレたちも残った方が…」

レイジさんや春多が心配してくれるが、むしろみんなの方が心配だった。オレに関する情報は必ずどこからか漏れて急速に拡散されていく。つまり仲間のみんなも危険だということだ

誰かの関係者は危険だ、みたいなことをこの4年近くで学んだことだ。知らないが故に面白半分に広まっついていく。ネットだから特定されないだろうと安心しきって嘘の情報でさえも流れる

「大丈夫だよ。大人しく支部にいるから。テレビで映画でも見てソファで寝転んでぐーたらしてるから」

「それならいいんだけどよ、何かあれば連絡しろよ？すぐに戻るから」

「ありがとう、ボス」

ボーダーの広報部の根付さんたちががんばって誤解を解いたり悪質な情報の拡散の阻止をしているが、おそらくイタチごっこにしかないと思う。オレ一人のためにもあまり無理はしないで欲しいかな。組織的なボスは城戸指令だけど、この支部では林藤さんがボスだ。橋を渡って見送った後、リビングに戻ってさっき言ったとおりテレビを点ける

「さうで、家じゃできなかつたことをやるかな」

部屋から持ってきたのはオレが大好きな「ニヤン大冒険」シリーズを1話から見ることだ。テーブルにジュースとお菓子を用意して、どつても着てエアコンも入れて部屋を暖めて準備は万端

いつもならおじさんがずつと見るなど言ってくるからできなかつたことだ。ディスクもセットしてリモコンの再生ボタンを押す

「あー懐かしい」

約半年振りに見る1話は懐かしい気持ちにさせてくれた。小さいながらも奮闘しまつすぐな意思で信頼を勝ち取り仲間を増やして旅するニヤ吾郎はかつこいいものだ

こつちに来た頃はこういうエンターテイメントは少なかつた、だから人じゃなく絵が動いて喋るのは本当に感動した。特にロイはオレ以上にのめり込んでしまつた

「そういえば…初詣にロイ見かけなかつたな」

いつもの支部のメンバーはいたが、そこにロイの姿は見かけなかつた。どうしているんだろうと部屋をのぞいてみると臭かつた。体を洗つていないときのような

「おーい、生きてるのかー?」

「……………ううっ」

入ると案の定部屋は暗く、電気を点ければごみが大量に散乱している。しかもいつのまにか戸棚のフィギュアは前見たときより増えている気がした。完全にオタクの住処だなとロイの恐るべき染まり具合に引いていたら足元からうめき声がした

「……………ううう、まあもーるうう」

「うわっああ!?!び、びっくりさせなよ!」

見ると痩せこけたロイが手を伸ばしていた。オレは父さんがゾンビ映画のシーンを思い出させる光景にビビッて一気に廊下まで下がってしまった

「全く、携帯があるんだから連絡ぐらいすればいいのに」

「電源無かった。それより護が悪く書かれている方がもっと気に食わないから、そっちが忙しかった」

「気持ちはいけれど、ただのもぐら叩きにしかならないぞ?」

もう軍人だった頃の面影は欠片もないくらいに肉が落ちていてびっくりした。とりあえず何日も風呂に入っていないらしいので、熱いのいやだと喚くロイを無理やり連れ込み洗ってやった。オレと同じ年のはずなのになんで介護みたいなことをしないといけないのか納得がいかなかった

それから時間的には少し早いがお節の残りを二人で食べることにした。なんでずっと部屋に籠っていたのか聞くとオレがネイバーだとバレた日からネットではあること無いことをが広まり、クラスメイトだって言う奴が洗脳されるんじゃないかとか、なんども触ってしまつて最悪など書かれていたらしい

ロイはそれらの誤解を解こうとがんばつたらしいが全く聞く耳を持つどころか、頭のおかしい奴や洗脳された危険人物など言い返されたそう

気持ちはうれしいが所詮悪いところが分かればずっと引き摺ってしまうものだから諦めたらと言おうとしたら、ロイが突然泣き出した「だって…護は何も悪くないよっ…:…僕をあの地獄から解放してくれんだもの! やりたいこと何もできなかったあんところから!」

「…ロイ」

ロイも一菜と同じ親に決められた道を進まされた奴だった。一般家庭だったから小さい頃から知っているけど、何事も成績や結果がすべての考えの親の元に生まれてしまったがために上位であることを強いられ、優秀な軍人として育てられたのだ

成績思わしくなく、ときは体に痣などできることもよくあった。その度に逃げたいとか帰りたくないとか泣いていたこともある。だからオレは国を出るときにロイにだけ話を持ちかけたのだ。返事は即答だった

無事にたどり着いた後はこれまで圧迫された生活の反動かやりたいうことをやりたいようにしていた。トリガー開発もその一つ

「お前がまた苦しむこと無いだろ。そりゃオレも…辛いけどさ。それでもやっぱり親友が変わりに辛い思いをするのも嫌だよ」

「護……」

「少ないけど玉狛のみんなはオレのこと信頼してくれてるし、オレもみんなのことを信頼してる。そうでなかったらオレ、ここにいないしね？」

レイジや桐絵ちゃんみたいに長く皆と居たわけじゃないけど、オレのことを信じてくれている。居場所を売ることだって容易いのに守ってくれている。そんな人たちを裏切れない。そもそも裏切るつもりなんてないけど

「んなことより、ロイ。なんだよのガリガリは？体鍛えろよ！」

「えー僕エンジニアだから鍛える必要なんてないんだけど？」

「親友としてほっとけないよ！その情けない体!!毎日筋トレしろ！」

「やーだー」

「…なら、サボった日は…」

「え、なにを…するの？」

「……棚にあつたフィギュア。1体ずつ捨てていく」

「いやー！僕が一生懸命集めたコレクションを捨てるとか鬼かよ!」

「たまには心を鬼にしてお前を鍛えないとな」

「鬼ー！ー！ー！」

洗っていてわかったこと。それあロイの体が心配になるほど細すぎたこと。これから心を鬼にして最低でも平均程度には戻さないといけないとメニューを考えることにした

「あとでレイジさんと相談して決めるから」

「あの筋肉ゴリラと相談しないでー！」

筋トレに関しては詳しいからガリガリのロイでもできるメニューを作らないといけない。体を揺さぶって阻止しようと叫ぶが無視だ。そういえば、桐絵ちゃんに起こされたときは心が静かで何の感情も出ないほど冷静だったのに、今は隣のロイがうるさいし鬱陶しいとさえ思っている。非情になるのなら起こされたときみたいになってもおかしくないのにな

考えれば考えるほどオレって何なのかわからなくなった

24話 開戦

「…初めてだな、学校に行くのがいやだって思うのは」

始業式の今日は3学期が始まる日。ボーダーからは危険性はなく積極的であること、オレがネイバーだと流れた経緯などを報道した。けれど一度認めてしまった以上危険がないからといって以前と同じ生活が送れるわけじゃない

学校に来るのでさえすれ違う人に見られて口を手で隠して何かを言っていた。菊地原みたいに耳がいいわけじゃないから聞こえないけど、いや聞こえないほうがいいのかもしれない。桐絵ちゃんのようにみたくにまたオレが傷つけることに躊躇わなくなったらボーダーの頑張りが無駄になってしまう。せめて、卒業までは通わせてもらえる嬉しい

たとえ喜ばれることがなくても、初めて通った学校で入学して最後は卒業したい。仲良くなってもう無理なのかもしれないけど。高校にいけなくなったオレには一番の願いはそれだけだ

「うそ…」

「いや……なんで来てるのよ」

「……マジかよ。空気読めよ」

「……………」

教室のドアを開ければ一斉にみんなオレを見て怯えたり睨んだりしてきた。当然だ。昨日まで普通に接していたやつが実は殺人鬼だったら、もうそれからは普通にできないのも。オレだって隣にそんなやつがいたら警戒はしてしまう

「お、おはよう…」

前みたいな元気はないけど、とりあえず挨拶はした。当然答えてくれる人なんて1人もいない中に入って席に行くが荒れていた

落書きは当然、何かで叩いたのか凹んだり欠けていたり、油絵の具が何かで塗ったのかシミのような後もある。とりあえず椅子は無事みたいだからかばんを置いて空ける

「っ!!」

チャックを開けるときでさえ怯えられる。少し悲しいけれど、このときオレは憤りもちよつとだけあった。母さんから平和なところと聞いてはいたけれど、実際に被害にあった後連れ去られた殺された遺族の怒りはもつともだと思つた。だがそれ以外に家はなくなった、財産を失つた、大切なものを壊されたなど自分より物のほうが大事という声に理解できなかつた

平和なのが一番なのだろうけど、それを謳歌しているだけじゃただ奪われるだけ。ネイバー^{オレたち}の世界では命があれば大丈夫、物は壊れても直せる。その常識がここじゃ無意味だ

確かに親しい人と過ごした家を壊されたり離れなければいけないのは確かに悲しいけれど。オレだつて10年以上過ごした家を離れるのに何も思わないわけじゃない

だがオレがこんな憤りを感じたところでみんなには少しも理解してもらえないと思う。オレだつてこう思うのは故郷で過ごした考えが基になっているからだ。ならオレがすることはこれ以上みんなの怒りを買わないように大人しくすること

カバンからレイジさんがやるように言ってきた冬休みの宿題を卓の上に提出した。そのあとは席に戻り廊下の水道から雑巾をぬらして机を拭く。絵の具は滲んで余計に酷くなる一方で、もつと酷いのは擦つても落ちない色だつた。多分ペンキだと思う

どんなに強く拭いても少しも拭き取れなかつた。HRまでやつてみたが綺麗にはならなかつた

それからどう過ごしたのかよく分からない。休み時間のたびに隣のクラスメイトはすぐに離れていった。相当オレが怖いらしい。オレが何かをしたというわけでもないのに。声をかけようものならごめんなさいの一点張りで聞く耳を持ってくれないし他の奴らからも睨み付けられる

「ふざけてんのかよ？ネイバーがいるだけで迷惑なんだよ!!」

「かえつてお願い。願いだから日本から帰つて」

たった一つの願い。それを黒板に書いたら当たり前のように反対や許しを請う声があがつた。今のオレの切実な願い

卒業式に出たい

入学式で中学に入ったら卒業式で終わりたい。高校に行けなくなつた今では学生生活で願うのはこれだけだった。けど近界民^{ネイバー}のオレにはそれすらも許されならしい。反感を買うのは予想できていたけど、実際に目の当たりにするともう心が折れそうだった

「お願い…卒業式…出させて…」

泣くのを堪えるがダメだった。頭を下げたら目から涙がポタポタと落ちて床を濡らした

「ふざけんな!!」

丸められた紙を投げられた

「いるだけ迷惑ってなんでわからねえんだよ!!」

オレの筆箱を投げられる。落ちて中身が散った

「ネイバーが生きてるとかおかしいんだよ!死ねよ!!」

ゴミ箱を投げられた。さすがに大きいから衝撃で倒れた

起き上がろうとするが何でか腕に力が入らない。いや、震えていた。悔しくて、悲しくて嗚咽を漏らしながら蹲るしかなかった。世界は非情で残酷だと誰かが言った。人のほうが悪魔より悪魔だと何かで読んだ覚えがある。これが大勢の人の人生を奪ったオレへの罰なら受け入れるけど、だけでももう少しだけ時間が欲しかった

世界はそんなオレのことなど気にもかけないみたいだった。けたたましいサイレンが三門市に響き渡った

「つつ!?…こんなときに…」

大規模侵攻が今日、今このときに始まった。混乱するクラスにオレは立ち上がり叫んだ

「みんな逃げてくれ!!ネイバーが攻めてきた!!早く避難所に—」

「何が逃げてだ!!お前が呼んだんだろうが!」

「オレたちに復讐でもするのかよ!?オレたちが何をしたんだよ!!悪いのはお前たちだろうが!」

「誰が悪いとか今はそんなこと関係ないんだ!!オレたちボーダーが食い止めるから!早く逃げて!お願い…卒業まであと少しだったけど、みんなと楽しく過ごさせてよかったよ。トリガーON」

これからどう頑張ってもオレに学校の友達はできないし元に戻らない。それはもう諦めるしかない。だけどこのまま巻き込まれて死んでしまえなんて思わない。せめて少しでも遠く、避難所に逃げて無事でいて欲しい。ポケットからトリガーを取り出して起動する

「隊長!!」

「隊長…お前らっ」

「春多…いいんだ…っ…っ…行こう。守るために」

隣の教室から一菜と春多が来て、オレの足元を見て何があったのかをすぐに理解したようだけど出そうになる手を止める。オレたちがやるのは仕返しじゃなく戦って守ることだから。春多はまだ納得はできないみたいだけどトリガーとを取り出して起動する

「護…もしかしてこれっ」

「そうだよ。大規模侵攻が始まったんだ」

窓から飛び降りて着地すると後ろから同じくトリガーを起動した修たちが来た。本来なら咎められるはずのC級も使用の許されている。この前のイレギュラーゲートの一件が響いたのだろう

根付さんからすれば使えるものが居ながら何もせず犠牲者を出すことのほうがボーダーのイメージや信用を落としかねないと危機感を持っているからだろう。実際正隊員のオレでも一般人が居る場所ですらいつでもどおりの戦闘はできなかつた。そういった意味では囮役としてでも居てくれると助かる

「隊長、指示を。この場に居る者たちの中で隊長が一番上です」

「オレも今回はそのほうがいいと思う。こつちのことはまだ分からないことが多いから護が判断してくれると助かる」

「…分かった」

一菜と遊真の言葉で本部から指示が来るまではそうしたほうがいいとオレも思った。今居るのはオレを含めてA級春多、一菜。B級の修、C級の遊真、千佳、そして本部の訓練で友達になったという夏目出穂ちゃんの7名

C級にはトリガーの使用も許可されているが威力は心許ない。千佳のトリオン量ならそれすらも覆せる、というか入隊日にアイビスで

本部の壁を貫くという恐るべき事件を起こすほどだから誰かが守れば戦力にはなる。けれどまだ実戦経験はないから連れてはいけない

対して遊真はC級であれど修のトリガーでモールモッドを撃破と言う実績も、傭兵として多くの国を渡り歩いた経験もある。みんなの経験やトリガーを考えると指示が決まった

「春多、一菜はいつもどおりオレと行動。千佳と出穂は避難誘導、ただし緊急事態だからトリオン兵が確認されたときはトリガーを使って可能であれば撃破、できなくても囨になって市民からなるべき遠ざけるように行動を。本部への報告と救援要請も忘れずに。遊真、悪いけど経験と知識も豊富だから一緒に行動してもらおうよ。修は遊真とペアで行動、正直言うとお前一人じゃ心許ない」

「了解」

「分かった」

「りよ、了解つす」

「全然構わない、というよりそのほうがいいと思う」

「っ…分かった」

春多たちはまだ癖が抜けないのか足をそろえて右手を額に持つていつて敬礼をする。たまにするこいつらの行動に内心苦笑いしかない。ボーダーは確かに組織化されているが軍ではない。あくまで民間組織だ

千佳と出穂もはじめての実戦で緊張しているのか顔が少し強張っている。修は少しシヨックを受けている感じもしたが、もう今は戦争が始まったから優しさはあまりかけていられない。遊真はオレの指示に異論はなかった

行動方針が決まったことでオレたちは警戒区域へ向かった。一菜からの報告でゲートやトリオン兵は警戒区域内で出現しているらしい。本部の誘導装置が効いているおかげでまだ市街地へ侵入はしていない。けれどそれも時間の問題だと思う

「行くぞー！」

1体でも早く倒して市街地への被害を抑えるためにオレたちは別れて行動を始める。道路を走ると建物を迂回しないといけなくなるた

め屋根に乗って飛んで向かう

空には曇り空の下に飛行型のバドが無数に飛んでいた。戦況を知るためとはいえ数が多すぎるような気もする。遠征にしては何が目的かで作戦も違うし、襲われた側も対応を変えなければならない

それを考えるとバドのこの数は侵略でも考えているのかと思った。隊員の配置や戦況を詳しく知るためではないかと、けれど同時に何かを探すという目的もあるんじゃないかと考えられる

「隊長！見えてきました、バンダーです」

一菜の声で考えを一旦中止してトリオン兵排除を優先した。砲撃方のバンダーが2体居てこっちを見て砲撃しようとしていた。けれど目が光って放たれても一菜のエスクード改で問題なく防いだ

「屈折旋空！」

一度見たことでオレの目には盾越しでも位置がわかるから、春風を振って曲がる旋空を放ち目を貫いた。モールモッド、バンダー、バムスター、バドと4種類みたらすべてのトリオン兵の位置が判明した。春多と一菜が周辺を制圧している間、オレはトリオン兵の情報を玉狛支部の専用コンピューターと連動を開始する。サイドエフェクトで知った位置情報を仮想空間に疑似配置、共有登録者の位置情報も受け取りそれぞれの地点から見たトリオン兵の位置を表示する

「見えた！」

「ありがとうございます、隊長」

玉狛支部の隊員なら全員登録しているから離れたところにいる皆さんにも共有されているはず。それは修も例外じゃない

「こ、これは…!?!」

「オレのサイドエフェクトを利用した情報共有だよ。ただオレのサイドエフェクトの弱点を突かれたら消えるけどね」

初めて共有する修は突然建物越しに見えるトリオン兵に驚いている。淡い青色の輪郭が見えるから辺り一面に広がる光たちに言葉を失っている。C級の遊真は正隊員でないから登録はされていないためどんな風に見えるのかは分からないと思う。けどオレの情報を共有しなくても十分な腕を持っているから問題ないと思う。むしろ

る調子が崩れてしまう可能性もある

「見えているからちやんと周囲には気を配れよ？」

「分かったー！」

修もレイガストを装備して突撃した。遊真も続いて撃破していく。オレも準備は終わったから春風を構いなおして屋根から下りるとモールモッドの刃の攻撃を捌きながら横に振って目を斬る。その奥にバンダーが目を光らせて砲撃しようとしていた

光が一際大きくなるとビームが放たれその瞬間に飛び上がって回避する。落下する前に春風を投擲の構えをしてバンダーに目掛けて投げる

「よしーやれば当たるもんだな」

地面に着地して初めて槍投げをして成功したことに喜んでいると後ろからモールモッドが接近してきた。2本の鎌を広げて振り下ろすが、視界に表示される予測トリガーがどこに攻撃が来るのか教えてくれる

「お前の情報は嫌というほどあるから精度は高いから簡単に避けられるぞー！」

3度ほど避けて振り返ると同時に弱点を斬って撃破する。オレの周りにはトリオン兵の影はないし、春多たちも粗方制圧はしたらしい

「修、後ろだ」

「え、うわあ!？」

少し離れた位置にいる修たちもなんとか終えたらしいが、遊真の能力は本当にすごいと思う。C級のトリガーは正隊員のより出力を抑えているから訓練室以外のトリオン兵相手には対してダメージを与えられないのだ。だけどそれを覆すっていることは相当トリオンを扱う能力が高い

旅をしていたらしいけどその時に磨かれたんだろう。いつかオレにもそのコツとか教えてもらおうかなと思う

「隊長」

「一葉か、どうした？」

「今回の敵、目的は何だと思えますか？」

周辺は制圧できたので移動をしていると一菜が今回の侵攻の目的を聞いてきた。遠征において重要な目的は大きく分けて2つ。国の征服、目標としている物、人の奪取。作戦があるとはいえトリオン兵が大量に使える最初の段階でネイバーが出てこないとなると、物か人を奪うのが目的かなと思う

「だけど一体誰を？ っていう疑問が出てくる。トリオン兵だけを動かしている今は消耗させるのが目的なのだろうが、その後は？ ネイバーが出てきて疲弊しているところで目的のものを奪うのかもしれない。成功率を上げるには確実ではある

「まだ判断材料が少ないから分からない」
「…ですよね」

一菜も今回の目的は分からないようだ。ボーダーは軍隊といえるほど規模が大きいものじゃない。言ってしまうえば小国レベルだ。けれど技術や隊員それぞれのレベルは高いと思う。何より汎用性に優れたトリガーは個性に合わせやすい。今までの国とは違う優れた点ではあるが

「1つの性能に特化していないためトリガーによっては応用力が低い」
今回の敵がトリガーの奪取だとしても大規模にやってくるほどの価値があるのかと考えるなら無い。衛兵とか下っ端に持たせるためのトリガーを探しているだとしてもやり過ぎだ。遠征にはトリオンが大量に必要な。ましてやトリオン兵まで使えばその量は尋常じゃない

「それだけ大規模に侵攻するほどの目的が何なのか考えると1つだけある。ブラックトリガーだ」

通常トリガーの何倍もの性能を持つブラックトリガーなら可能性としてはありえる。大量のトリオン兵による襲撃も性能調査とトリオンの残量を減らすためと考えれば一応納得はできる

「けれどブラックトリガーは適合者が稀でもあるし、製作にも命を消費するので所持していない国も珍しくは無い。持っても使えないなんてことも」

だけどミデンにはオレと迅さんと天羽の3人の適合者に加え遊真が新たに加わった。まあ迅さんがというよりは風刃の方は適合者の幅が広いけれど、一番長く持つてて使い方を熟知している

他にあるとするなら占領して取り込むということだ。国としては戦力が増えるからメリツトは大きい。いつかクーデターを起こされる可能性もあるが。戦争をしかける理由としてはありえなくもない。敵の目的が何なのか考えていたら一葉が呼びかけてきた

「隊長!!あ、あれ……」

「アレ?……ん?」

見ているほうをオレも見ると撃破されたバンダーがいるだけ。何もおかしいところはないと思いつつ始めたとき、亀裂が広がった。反応はないからこれ以上なにかがあるはずなんてない。だけど確かに最初見たときから亀裂は何度か広がって、限界に達したのか壁を吹き飛ばすように腹が破裂した

「なんだ……あれは?」

そこから出てきたのははじめて見るトリオン兵。ウサギを模したような巨大な体躯で腕が以上に大きい。バンダーから出てくると目がオレたちを捉えた

25話 罪と罰

突如現れた新型のトリオン兵。オレや一菜たちが知らないとなると全くの未知の敵ってことになる。どう動くのか見ていると口が目がおれたちを捉えた

「来るぞ！」

「はやっ!？」

散開して距離を取ろうとするとあの巨体からは考えられない速度で春多に接近していた。太い腕を振ると吹き飛んだが幸いにもシールドで威力を弱めていたから飛ばされて壊れた建物の汚れが付いた程度だ

「こいつ、見た目より速え」

「全員防衛を第一に考えろ。遊真は修を守れ！」

「分かった」

「一菜！援護は任せた！」

「了解！」

早くて力のあるトリオン兵は初めてだ。未知数の敵にただ攻撃しても当たらないのは目に見えている。防御を意識させていけば大丈夫なはずだ。だけど修が出てこられては邪魔でしかない。遊真に命令はしたとしてもC級のトリガーでは心許ない。せめて援護に行くまで耐えてくれればそれでいい

春多が先行して弧月を構えて突撃、一菜もエスクード改を出してスタンバイして射撃援護を行った。だけど新型はそんなものは当たらないと言っているかのように易々と回避する。着地した先では春多が背中に斬りかかろうとしていたが、装甲の隙間から細かい棘が飛び出した

「なっ…ぐっああー！」

「春多!!」

シールドを展開して防ごうとするも、ただの棘じゃないそれは電撃を放った。もろに受けた春多はそのまま地面に落下して痙攣を起こした

「くそ、伝達系が麻痺するのか？春多を守れ！」

「了解です！」

まともに言葉も発せない春多は思考でオレたちに体が動かせないことを伝えてきた。倒さずに無力化するなんてオレと似たようなことをトリオン兵に装備させるなんて驚いた。いままで無力な一般人ばかりを狙っていたのに、ここにきて対トリガー使用のようなことを考えるなんて虚を突かれたようなものだ

オレが囷になって突撃して春風を振る。腕でガードして弱点を守る行動をした。これは別に当然だろうと思っていたが驚いたのがその固さ。モールモッドくらいは余裕で切れる出力なものにつけた傷のほとんどが浅いのだ

「つち。一菜！遊真！こいつの情報はないのか？」

斬って撃ってまた斬ってを繰り返すも巨体に見合わないスピードでかわしていくのは厄介だった。接近しているときにγを背後から狙ってみるも耳らしき部位が動いて腕で防いだ。レーダーの性能もいらしい。背後を取ろうにも電撃でカウンターとこいつは間違はなく単独ではかなり危険だ。B級なら間違いなく食われる

少しでも有利になれないかとボーターと旅で得た遊真たちの情報で何かないかと聞くと色々とあり整理が追いつかなかった

「諏訪さんが捕獲されました！現在風間隊が応戦しています！東隊でも小荒井隊員がベイルアウトしました」

「諏訪さんが？もう被害が出たのかよ…それに捕獲って、トリガー使いを捕まえるのが目的なのか？」

警戒区域内で諏訪さんが捕獲されたと告げられて驚いた。戦闘力は決して高くもないが低くもない。油断していなければ狙撃にも警戒できるほどには戦える人だ。そんな人がやられたとなればやはりB級では荷が重いのだろう。しかも東隊の1人がベイルアウトしたとも聞いて驚きを隠せない。風間さんでも褒めるほどに奥寺と小荒井の連携は優れている。乱戦でもなければ中々崩せないはずだ

それだけじゃない諏訪さんを倒すのではなく捕獲したということに疑問を感じた。大規模侵攻ともなればそれなりの目的がなければ

ただ戦力を浪費するだけ。もちろん捕獲にも意味があるのならだけど

大体他国を侵攻するほどの戦力を使うのにはマザートリガーや近隣国の要人だったりだ

『護君、聞こえる？今レプリカ先生から新型の情報が入ったわ！』

応戦しながら考えていると玉狛支部にいる宇佐美から連絡が来た

これは「ラービット」というアフトラトルの捕獲用トリオン兵だという。しかも一般人じゃなく、トリガー使いを狙う戦闘型らしい。戦闘力も高くB級ではやられると聞いた

「ゲート!?くそっ…遊真、修！お前たちでトリオン兵を排除して食い止める！新型はオレたちでやる！」

「わかった。油断はするなよ？」

「了解だ」

モールモッドにバムスターなどよくみるトリオン兵が溢れてきてこちらを無視して市街地方面へ向かった。ラービットを撃破しないと追いかけれないが、逆に追いかけたらラービットに攻撃される。仕方ないけど遊真たちを向かわせることにした。C級トリガーでもまとも戦えるのだから問題ないだろう

「おらあー」

一菜の射撃で腕で防御している間に背中に春風を突き刺した。棘が飛び出し武器から手を離して瞬時に下がったが電撃はなかった。単に離れたからしなかったのか、撃ち込んだγでできなかったのか。どちらにせよ少しだけ勝機が見えた

「隊長、春多は動けますがまだ完全ではないみたいです」

「…それでもある程度は動けるんだろう？ならモールモッドくらいは倒せるだろう。周辺の敵を片付けてくれ」

「了解…」

電撃の痺れは長くはないようだ。けれど短時間でも捕獲するには十分な時間だ。あの硬い装甲と俊敏性なら可能だ。春風を一度解除してから再起動することで手元に戻ってくる

「ふうー……いくぞー」

「はいー」

一度深呼吸して頭の中の考えを消す。まずはこの新型のラービツトを倒すことが最優先。春風を構えなおし突撃する。横から一菜の援護射撃で誘導して接近間近でγを数発撃ち命中させる。これで電撃はまた使えなくなるはずだ

先端から弧月の刃を出して振り下ろす。出力を上げたから切れたけれど左腕を切り落とすだけだった。その隙に右腕で殴ってこようとするとエスクード改が防御してくれて威力を減少させてくれたおかげで少し吹き飛ぶだけだった

「これでも食らってる!!」

立ち上がり屈折旋空を使って拡張された斬撃が数度曲がって避けた先にいるラービツトに命中する。なんとかこれだけの情報で「予測」トリガーが出した行動予測が当たっててよかった

「手強かったですね」

「ああ、本部。こちら忍田隊…本部？」

「隊長!!」

「なっ…イルガー!?!」

新型の撃破完了を本部に報告しようと思ったらノイズが混ざってよく聞こえなかった。どうしたのかと思う暇もなく一菜から呼ばれて同じ方向をみた。そこには爆撃トリオン兵のイルガーが2体、本部に向かっていた。迎撃装置を起動しているが1体は撃破できたけど、残りは自爆モードになった。次の瞬間本部の一角が閃光に包まれた

「ほ、本部は…?」

「無事……みたいだな」

光が収まり煙が晴れると焦げ跡が付いただけでオレたちから見える損傷はなかった。だけど敵もこれだけじゃない。今度は3体のイルガーが現れたのだ。さすがにこれは防ぎきれないはず

「隊長…!」

「無理だ…ここからじゃ間に合わない…」

なんとしないと、という気持ちはオレも同じだった。けれどいくらトリオン体の能力でも本部までは距離がある。耐えてくれるのを祈

るしかなかったのだ

迎撃砲台もどこまで倒せるかわからない。1体を撃破したとき小さな影が飛ぶのが見えた。次の瞬間には1体は斬られていた。残りは本部に命中し自爆

「あれって、太刀川さん？」

「たぶんね。弧月2本持ちはあまりいないからね」

指揮しているおじさんも太刀川さんが本部にいるのを計算に入っていたのだとしたら少し怖くなった。この玄界ミデンには肉を切つて骨を断つていうことわざがあるらしいけど、勝つためには犠牲も覚悟するあたり、戦争が理想通りに行かないってことをよくわかってる

「隊長、宇佐美さんから連絡でB級全員は合流して非難の進んでいない地域からトリオン兵を各個撃破。そのため市街地に被害は出るらしいです」

「…そうか」

ボーダーへの非難や支持の低下は覚悟の上なんだろう。ラービツトに襲われて戦力が減るリスクと比べれば正しいとも言える。けどはオレはまだ甘いのだろう、完全には、気持ちでは納得ができていなかった。あれだけオレへの罵詈雑言を浴びせられたのに、守らなきゃいけないと思うなんて呪いみたいなものだ

「本部。こちら忍田隊。新型1体撃破」

『こちら本部。理解した。忍田隊に指示を出す。B級合同部隊が到着するまで市街地南地区の防衛を頼む』

「…忍田隊了解…おじさん、家族だからって甘い判断はしなくていいよ。覚悟はしているから」

『…そんな命令が出ないことを祈る』

本部に新型撃破の報告をしたあと、市街地へ侵入したトリオン兵の排除を命令された。甥だからなのかわからないけど前線からは少し離れている。一応オレもいちボーダー隊員だというのを念を押すように告げる

おじさんとしてもオレたちを犠牲にして他を優先なんてことはしたくはないのだろうけど

「春多と合流して南地区の防衛だ」
「了解」

???
s i d e

「おいおい、またラービットがやられたじゃねえか？」

ミデン
玄界に侵攻しているアフトクラトルの遠征艇ではモニターを見ながら状況を見ていた。そこに1体、また1体とラービットが倒されていることに驚きながらも楽しそうにしているのは赤い髪に角を生やしたランバネインだった

「プレーン体といえどこの短時間3体も撃破」

大して驚いた様子もなく状況を確かめるように口にしたのは今回のメンバーの中では最年少のヒュース

「赤服の部隊に向かったラービットは電撃を阻害されようです。何らかの特殊なトリガーが使われたのでしよう」

今回の女性メンバーの1人であるミラ。得られた情報を報告をした

他に老兵のヴィザ、片目が黒く気性の荒いエネドラ、そして隊長のハイレイン。最後にアフトクラトル出身ではないミラード

「見つけたっ……お前だけは、絶対に殺すっ!!」

モニターに映る赤服で黒髪の少年。護を鋭い目つきで殺すと言葉を吐いた少女。その目には憎しみを孕んでいた

護
s i d e

市街地へ向かうほどトリオン兵は多くなり処理が面倒になってく

る。ほとんどがモールモッドだから余計に急がないといけない

戦っていくうちにC級が奥で見えた。もうそこまで攻められていることに焦りだした時、非難が遅れた学生を見つけて駆け寄るが

「大丈夫か!? 怪我は……なんで、こんなところに?」

「忍田!? ……なんでここにいるんだよ、やっぱりお前が連れてきたのかよ!」

居たのはクラスメイトたちだった

「ボーダーはなにやってんだよ! 守るんじゃないのかよ!」

「…敵の陽動に乗らないために避難が進んでいないところを優先して対処している」

敵の狙いは未だ明らかになっていない、そのため安易に陽動に乗らないためにもおじさんが判断したことだ。だけど少しでも侵攻を食い止め被害を減らすためにオレたちが向かわされた。わけなのだが今のみんなに言ったところで信じてもらえるのは難しいだろうし、作戦内容をすべて伝えるわけにもいかない

「君たち! 早く避難するんだ!」

避難を勧めているC級が呼びかけてくるが、オレを睨むばかりで動いていくれない

「早く避難してくれ。みんなに怪我はしてほしくない」

「そう言っただけは仲間を呼ぶんだろうが!」

「ネイバーの言うことなんか信じられないだろ!」

「今まで騙してきたやつ命令なんか聞かよ!」

「……………」

やっぱりオレがネイバーってことがみんなの中で強く残って反感を覚えてしまったみたいだ。だけどオレがみんなに避難してほしいのは本当だ。まだ1ヶ月ほど残っているけど卒業まで少し時間がある。卒業式にオレは出れるかは分からないけど

「頼む。オレには……オレは確かにネイバーだから信じられないかもしれないけど。故郷を捨てたオレにはこの国で過ごした時間が宝物なんだ。小さいときから戦争があたりまえの国について、平和な時間が一杯のここは本当に楽しかったんだ」

たとえこれでみんなと別れることになったとしても、思い出だけは大切にはしていきたい。本当に玄界^{ミデン}でのこの4年間の生活は楽しかったから

プロスペリタースでは幼年学校には行っただけど、そこからは軍人になるために訓練所に入った。訓練と家の往復で毎日が大変で、周りには遊んでいる子だっていた。羨ましいとも思うことだっただけであつた

だから義務教育として15歳まで学校に行かないといけなのは驚いた。授業は分からないことばかりで面倒だっと思うことも沢山あつたが、修学旅行とか海の学校とか体育祭とか、イベント行事など楽しいこともあつた

ボーダーの任務があるから部活には入らなかつただけど。おじさんには薦められたが。本音を言えばそこそこ興味はあつた。同じこととして汗流して勝利を喜び合うってなんか感動しそうだなって思つたのを覚えている

今となつては入らなくて正解だったのかもしれないけど

「だから、みんなには逃げてほしい。卒業式に出て綺麗に学校生活終わらせたかったけど」

「なにしてるんだ、早く逃げるぞー!」

なにも言つてはくれなかつただけど疑いの目は変わらずだつた。中々動かないみんなにC級がやってきて手を引きながら連れ去つていった。これで多分安心だろう。そう思つた矢先だつた

「ゲート!?こんなところに!?!……なんだ?……違うタイプか?」

警戒区域の外でゲートが発生した。誘導装置を無視したこれはイレギュラーゲートだとすぐに分かる。だがおかしな点が2つ。1つはさつきオレたちが倒したのとは違い色つきだということ。もう一つはここにはオレと一般人とC級しかいないことだ。トリガー使いを捕らえる正隊員は警戒区域にいるはずなのにだ

一体何が目的なのか混乱しているとトリオン兵の処理を終えた一葉たちが来てさつき修經由で木虎からの敵の真の目的を報告してきた

「隊長!!敵の狙いはC級!ベイルアウトできない彼らを捉えるのが目

的ですよ!!」

「C級?なぜ…あの時か!」

C級を狙う理由が分からない。戦力としては未熟であるのに捕らえる意味はない。それ以外に意味があるのだろうかけど、どうしてC級がベイルアウトできないことを敵は知っているのか考えたらすぐに心当たりが浮かんだ

イレギュラーゲートが学校に出現したときだ。あのとき修はC級で、違反と分かりながら戦った。そして負けた。おそらくこの時に脱出機能がないことに気付いたのだろう。しかもろくに戦えるトリガーもなければ戦えるほどの訓練を積んだ者もない。狙うには格好の的ということだ

「春多、一菜!お前たちはC級の護衛だ!敵の狙いがC級である以上避難誘導は破棄、本部に連れて安全の確保を最優先だ!」

「了解」

「…いいんすか?」

「…どうせオレは嫌われ者だ。今更だ」

避難を誘導するようにC級は命令されているが、敵がC級を狙う以上続けさせるわけにいかない。おそらくこれまでのトリオン兵の霍乱や本部への直接攻撃もあぶりだすのが目的だったのかもしれない。不幸中の幸いなのはマザートリガーが目的じゃないことだ

「フッフ…:会いたかったわよ。忍田護」

「…だれだ、お前は?」

色つきの新型の次は人型、つまりネイバーのご登場だ。だがそいつはオレのことを知っているらしく、初めから怒りをぶつけるような視線を送ってきた

でもオレはそいつを知らない。だけどそいつはオレにとって聞き捨てならないことを言ってきた

「お兄ちゃんの仇を討たせてもらおうわよ? 簡単に死ねると思わないでね」

『仇』。確かにそういった。つまり、こいつはオレが殺した誰かの妹ということになる。オレの罪、その罰を受けるときがきたのかと思った

番外 姉と弟

「護っー！」

オレがネイバーとして世間に広まってしまい本部にレイジさんに連れられて本部に来た日。会議室を後にしたときオレを呼ぶ声がしてそちらを向けば姉の忍田瑠花が心配そうにな表情で立っていた

「姉さん…っうー！」

「大丈夫？怪我して…」

突然抱きしめられて肩が鼻に当たってちよつと痛かった

姉さんの部屋はボーダーにあつて本部で暮らしている。重要人物でもあるため、オレが玉狛支部所属って事もあり弟のオレでもあまり来たことがない。だからなのか床に座っているのだけど、姉さんに抱えられるような体勢になっている。これでももう15歳だからこんなことされるのは正直恥ずかしい

「…学校、いやなら辞めなさいよ？辛い目に会うのは分かっているのだから」

「うん。でも…卒業はしたいから…必死でお願いしてみるよ…」

「そう…あ、そうそう。この前小南ちゃんの学校の文化祭に行ってきたんでしょ？護、かわいいかっこうしてたわね」

「っっ！？な、なんで知ってるの!?!」

最初は心配して話してくれていたけど、話題を変えようとしてきてなぜか文化祭の女装コンテストのことができてきた。しかもスマホにステージに出ているときの女装した格好までバッチリと映っていた

「ふふふ。小南ちゃんが教えてくれたわよ？」

「き、桐絵ちゃんのバカーー！」

思い出したくもない負の記憶。しかも画像だけでなく動画まであるようで、アピールタイムの会話が流れてきた

「や、やめてよ姉ちゃん!!」

「えー?どうしよつかなー?」

「お願いだからー!」

オレが赤くなつて止めようと必死なところが面白いのか、あと少しで届きそうなスマホを奪おうとするができなかった。さつきとは違う意味で涙が出てきた。しかも「姉ちゃん」なんて前の言い方ですってしまった。いつまでもそれじゃ子供っぽいからって「姉さん」って変えているのに

「ふふー、護はまだまだお姉ちゃんに勝とうなんて百年早いわよ」

「ううう…子供みたいなクマのパンいでで!?」

「護?女の子に下品なことを言う口はこれかな?んー?」

「ごひゃ、ごひえんつてー!」

膝抱えて不貞腐れたオレは仕返しとばかりに姉ちゃんが好きなパンツを口にしたら頬を掴まれて引つ張られた。結構力があつて千切れそうだった

「女の子に下着の話なんてダメだからね?」

「…はーい」

おかしいな。姉ちゃんは戦えないからオレが強いはずなのに。格闘だつて自信はあるのに

「全く…でも、まあ見栄とか張らなくて良かったわ。護はまだまだ目の離せない弟だね」

「全くつて姉ちゃんが強引なんでしょ!?無理やり膝の上に座らされるし!文化祭の動画流すし!頬めつちや引つ張るし!!むしろこつちが苦勞するよ!!」

昔からこうだ。おじさんが私の子だつて紹介されたときから少し強引などころがある。それも後から聞いた事情を考えれば無理をしているつて分かつたけど

オレと姉ちゃんは当然血の繋がりはない。同盟国だったアリステラの王族の娘。だけど5年前に滅んでしまい今はボーダーに協力してもらっている。逃げたときに赤ん坊だった陽太郎も王族の子。溜花の実の弟だ。いまはアリステラのマザートリガーを運用するため姉ちゃんはここに居るのだが

亡命してきたオレを戸籍上は従兄弟になるが、陽太郎と同じ弟のように接してくる。不安な様子を見せるたびに今回みたいに笑わせたがりわざといじめて辛いことから目を逸らせようとするのだ。最初なんか「私のことはお姉ちゃんと呼びなさい」と初対面でいきなりそんなこと言われて、しかも今は無いとしても王族の子をそんな無礼なことを言えるはずも無かった

「溜花様」と呼べば納得してくれず顔を掴まれて魚顔にされたり、手を上げることができないのをいいことにどこで覚えたのか関節技をキメてきたり無理やり「姉ちゃん」と言わされたのだ。元軍人だったこともあり後ろめたさはあった

「これからどうするの？」

「…とりあえず玉狛支部で暫く暮らすことになった」

「そう…それなら陽太郎のことは安心ね」

「…うん、何かあったらオレが守るよ」

姉ちゃんは本部にいるから安全は確保されている。だから外にいる陽太郎はオレたちやレイジさんたちの部隊で守るしかないのだ。オレが支部で住むことになったことでより安全だと安心できるのだ。オレのブラックトリガーの守りは堅いから。なによりそうならないでほしい。クラウントリガーである雷神丸が陽太郎を守るために暴れだしたら余計に大変だから

「陽太郎は元気？」

「そりやもう…人のどら焼きをほしがるくらいに元気だよ」

他愛もない会話。だけど今のオレにはとても心地よくて着替えを取るために家に向かうまで久しぶりに姉ちゃんと話した

26話 傷跡

5年前

あたしにはたった1人の兄がいた。長引く戦闘で国から離れてしまった私たちは補給のためによった国と戦闘になり、その国の軍人を1人捕虜にした

気の毒だと思うけど私たちが生き残るには情報と、安全を確保するための人質になってもらう予定だった。その場しのぎなのは分かってはいたけど。だけでも帰ることが叶わなくなってしまつては正常な判断なんてできない。お兄ちゃんも少しずつおかしくなつていったりもした

だけどその終わりは唐突だった

「お兄ちゃん!!」

捕虜の仲間が救出に来たのだ。遠征艇は破壊され私たちも次々と捕まつていった

私が見たお兄ちゃんの最後は、無惨な姿だった

「うわあっあああぁー!!」

捕虜の他にいた奴が作ったブラックトリガーで串刺しにされたのだ

「お兄ちゃん!!お兄ちゃん!!」

地面に落ちたお兄ちゃんは大量の血を流していた。たった1人の家族を失ってしまった。絶望の淵に立ってしまった私はもう生きていく意味がなくなった。だけどそのときお兄ちゃんは残りわずかな命と全トリオンであたしのためにブラックトリガーを作ってくれた。何かを言っていたのかもしれないけど聞かなくても分かった。「アイツを殺せ」と言っているんだと

それから地獄の日々だった

交渉材料にもならないあたしたちは軍に入るか、ただの一般人になるかしかなかった。あたしはどちらも選ばなかった。お兄ちゃんを殺したアイツに復讐をすることしか頭に無かった。あたしの身体は玩具のように醜い男どもの慰めに晒された

アフトクラトルが侵攻して崩壊したときは嬉しかった。あたしを苦しめ絶望に陥れた国が滅んだのだから当然の報いだ。混乱に乗じてお兄ちゃんのブラックトリガーを入手しアフトクラトルに取り入った。いつかアイツが逃げた国を滅ぼしてやるために、この手で殺すために

そしてついに今日、憎き敵を見つけた

「お兄ちゃんの仇を討たせてもらうわよ？　簡単に死ぬると思わないでね」

お兄ちゃんのブラックトリガー「地獄の叫び」で沢山苦しめて、ゆつくりと殺してあげる

『仇って…』

『ああ、十中八九…オレに言っているはずだ』

トリオン体の通信機能で会話をして、狙いがオレなんだと簡単に推測できた。仇ということは殺されたということ。置いて言った2年間のことは知らないけど、少なくとも2人からは誰の命も奪ってはいないという。ならば、消去法でオレということになる。誰の関係者なのかは知らないけど

「来るっ！」

ローブから手を出した敵は大きい鎌を出した。刃の部分が鎌らしくカーブしているが、先端がフォークみたいな三叉に分かれていた。まるで痛めつけることに特化したような奇妙な形状に警戒をした瞬間、迷いもなくオレに目掛けて接近してきた

「やっこのときが…っ!?　邪魔ね」

「分かりきった行動をさせるわけ無いでしょ？」

鎌が振られる瞬間に一菜のエスクード改が割って入って壁を作った。敵は邪魔されたことに腹を立てるが、左右からオレと春多が攻撃を仕掛ける

「おらっー」

「っふー」

だがあっさりと飛び退いて躲かされてしまった。別にそれは構わない、敵の出方や今更になって出てきた目的を探る意味でもすぐに倒しては情報を得られない。でも倒さないとトリオン兵がどんどん警戒区域を突破していく。被害が増えていくことに焦っていくのを待っているのかもしれない

「旋空ー」

「弾いたっ!?!」

着地の隙を狙って春多が旋空を使ったが、鎌を振って斬撃を別の方向へ弾いたのだ。シールドがあるなら使えばいい。多分破壊されるだろうが

じゃあ、もし使えないトリガーだったら武器で防ぐしかない。けど勢いがある旋空を容易く弾くなんて難しい。ましてや着地のすぐだから踏ん張りは利かないはず

玄界は汎用性とカスタマイズ性に重視したトリガーだから、オレたちネイバーのトリガーとは大きく違うため、ノーマルでも防御寄りにすれば不可能ではない。だがそれにしてもは鎌という形で防御に寄せられるのはおかしい

「っくー！ 見た目より早い！ 無理に追撃はするな!!」

「了解」

それなりに練習を積んだ動きは恐ろしく、大きいくせに鎌の使い方が上手い。しかもシールドは壊されるし春風で受けても一撃が重い。完全に並みのトリガーとは性能が違う。オレが思っているよりも遙か上を行く性能に嫌な予感しかない

「屈折旋空ー」

春多が離れた隙に屈折旋空で無理矢理距離を取らせた

そのタイミングでオレは気になっている予想をはつきりする為に

問いかけた

「おまえ…そのトリガー、ブラックトリガーなのか？」

「あら？　もうバレちゃったの？　隊長をやっているだけあって理解が早いわね。そうよ、これはあたしのお兄ちゃんのリックトリガー。あんたが串刺しにしたのよ！」

「リック…トリガー…まじかよ」

「っ……………まさ、か……………あ、あいつの……………即死、なんじゃ…」

問いかけられた敵は柄を撫でてあっさりと答えた。しかもオレにとっては因縁深い相手が作ったものだと

因縁というには数日だけしか会わなかったが、アイツはなんどもオレを傷つけていった仲間の1人だ。あの船に乗っていた奴ら全員未だに許せないが、串刺しという言葉ですぐに分かった

あの女のリックトリガーは、オレが最初に殺した男が作ったものだ。母さんを殺されて怒りのままにトリガーで痛めつけた挙句体中に穴が開くほど刺した。父さんに止められてからは見て無かったけれどまだ息が合ったんだってことに驚いた

「隊長…隊長！」

「っ?!　しまっ」

まさに過去からの復讐者って言葉が思い浮かんだ。罪も背負って生きていくと決めているし、罰も受けるとも思っている。だけど最初の犯した罪が罰を与えに来るなんて、こんな運命があるなんて怖くなった

一葉が呼んでいることに気づいたオレは目の前に敵がいるのに遅れて気付いて、回避しようとして下がろうとするが遅かった

「遅い!!」

「っぐ!!……………まだ大丈夫か?……………っぐ、っあああっあああ
あ……………!!」

胸を切られてトリオンが漏れていくが、供給器官には届いていなかったらしく。狙いがズレたのか咄嗟の回避が間に合ったのか安心した。だけどそれも束の間、次には張り裂けそうな激痛が襲ってきた
痛い、死んでしまうほどに痛い。両手で胸を押さえて蹲るオレに敵

は笑った

「あーっはっはは!! いい声で泣くじやない? どう? お兄ちゃんのトリガーの味は? 痛い? 死にそう? そうよねえ、だって……これはトリオン体の性能に関係なく生身で斬られたと同じくらの痛みを与えて苦しめるのがお兄ちゃんのトリガーなのよっ!!」
「っっい!!!……っがっああああっあああーっ!! ひぐ……っぐっうううっ!!」

振り下ろされた鎌は右肩に刺さった。杭でも刺さったのかと思うような激痛にオレは苦しめられた。いやでもあの拷問をされたときを思い出される。涙は出ないけど、生身だったら絶対鼻水もあわせて顔を濡らしていたと思う

「隊長から離れる!!」

「隊長! 大丈夫ですか!」

春多が追い払ってくれたおかげで鎌は引き抜かれたけど、伝達神経はやられているみたいで右腕はほとんど動かない。一菜も心配して来てくれるが正直大丈夫でもない。痛みの所為で動きは格段に悪い
「あははは! すごいじゃない、それだけ痛めつけてもまだ動けるなんて!!」

「正直、逃げたい気分だ!」

同じ長物だから懐に入られると弱い。だから春風は捨ててスコーパーを使うことで接近戦を仕掛けた。左腕だけじゃ決め手に欠ける。だから右腕の変わりはシールドとγでカバーしつつ、春多を主軸にして戦うことに切り替えた

幸か不幸か斬られたところが体の捻りなどで傷口が広がったり痛みが増すという事は無かった。だが一定の痛みが襲い続けるから単調な動きしかできない。一菜も春多よりもオレの方を防御に集中している

「うぐー……いってえ! こんなのを隊長に斬りつけやがったのかよ!! てめえ!」

「そうよ? だって敵なんだもん! お兄ちゃんの仇なんだから当然でしょ!!」

春多も腕を少し切られた。弧月を落として感じる痛みに吼えた。動きが悪くなったとはいえ3対1でここまで劣勢だと感じられるなんて予想以上だった

でもブラックトリガーだから鎌以外の攻撃はきつとあるはず。2人にそのことを伝えてもう一度戦いを仕掛ける

春多が先行して弧月を振るうが当たり前のように鎌で防がれる。けれど側面から一菜がライフルを構えて引き金を引いた

「その程度っ！」

「マジかよっ」

鎌を回して銃弾を防いだのだ。だが一菜が撃っている間は無防備になるから春多が反対から接近して切りかかるが、やっぱりオレの予想は当たっていた

「剣!? うわあ!!」

背中から伸びた2本の剣で弧月を防いだ。弾いて春多を吹き飛ばしてからオレの方へ向かってきた

「っ…片腕じゃ…」

スコーピオンじゃ受け流すにも心許ないと春風を分離して、先端の剣の部分を持って対応するが徐々に押されていった。繋がっている金具のような部分を春多は斬った。どうやらその耐久力は高くないらしい

「助かった春多」

「隊長避けて!!」

剣だけでは動かないみたいで春多のおかげで助かった。だけど一菜が叫んだ次の瞬間、オレの身体は浮遊感に包まれた。どうしてなのか気付いたときには敵の手には何も持っていなかった。つまり鎌を投げたんだ

「っ!?……ベイルアウト…しないっ!?」

トリオン体を破壊されたオレはベイルアウトした。はずだった

玉狛支部に設定してあったはずなのに、オレの身体は戦場に残されたままだった。トリガーの故障なのか、あのブラックトリガーの性能なのかは分からない。初めての異常事態に混乱したオレは凶刃が向

かっていることに気付かず棒立ちしていた

「つう!?……う?……つが、つあ……ゴヘツ……」

背中から飛ばされた剣が腹に突き刺さった。建物の外壁に衝突した。痛くて、熱くて動けない

「た、隊長……」

「いや、いや……いやあああ……」

「あつははは!! いい様ね!! お兄ちゃんみたいに串刺しにするのもいいわね」

痛みで意識が朦朧としてる中で2人の叫びが聞こえた。オレを恨んでいる奴の喜びの声も

寒いのか熱いのかよく分からない。うなだれている頭の視線の先には流れ落ちる赤い液体が学生服を汚していくのが見えた

「に……げ、ろ……は……た……かず、な」

ろくに言葉も紡げないけど、春多と一菜には生きていて欲しい。また置いていってしまうのかもしれないけど、後を追ってくるなんてことはして欲しくない

もしこれで、オレの罪が清算されるってならそうしたい。罪を背負うなんて言ったけどやっぱり疲れた。楽になりたい。もっと生きたかった、もっと楽しいことをしたかった、もっと学校とかに行きたかった。でもこれがオレの罰なんだからしょうがない。殺した人の中にはオレと同じくらいの奴もいたし

ごめん、春多、一菜。また置いていって。こんな最低な奴で、ごめん

迅 side

磁力を使う敵ネイバーのヒュースと戦闘しながら地下水道から地上へ出た迅。自身の役割を全うするために挑発しながら引き付けていると、分岐点の1つに差し掛かったことに気付き足を止めた

「護…すまない」

「余所見をしている暇があるのか!」

「おっと」

護たちいる方向を見て小さく謝った。どういった意味を込めての謝罪なのかは迅にしか分からない。これまで未来が見えるサイドエフェクトを持ちながら多くの人を見捨ててきた、必要な犠牲を強いてきた迅は同じ屋根の下で過ごしてきた護を失うのは選んだ未来とはいえ辛い

4年前の侵攻で来ることも分かっていた見つけて仲間に入れた。このときのために、これからのために

自分を見ていないことにヒュースは更に怒りを募らせながらも、繊細な操作で持ち手のない剣を形成し迅に飛ばした。分かっていたようにあつさりと避けられているから回避や危険を察知するサイドエフェクトを持つているのだと理解している。そうでなければたかがボーダー隊員一人撃破すらできないなんてありえないのだから

回避や受け流しで撤退するまで相手をしなければいけない迅は、三雲たちのためにもヒュースを残らせる未来を選ばないといけない。その結果護の死亡率が高くなるろうとも

そのときはまた、必要なことだったと割り切るしかないのだ

護…本当にすまない

何度目かの謝罪。口には出さなかったが、まだ押さえないながらに大人すら迷うような罪を背負う覚悟をしたり、名前の意味を体現しようと努力したり、世間から辛い罵倒を浴びながらも簡単には負けなかった強さは尊敬するほどだ。だからこそ春多も一菜も一度は捨てられなくても付いてきたのだから

このまま成長すれば立派なボーダー隊員になれただろう

生きるか死ぬかは護次第だ。そこに迅が介入する余地は無かった

27話 境界の守護者（ガルディアン）

痛い……身体が言うことを聞いてくれない……

「つ……あ……に、げ……」

痛くて体が動かないオレは、辛うじて持ち上げた頭で前を見た。そこでは一菜と春多が戦っていた

「おまえはぜってえに倒すっ!!」

「よくもあたし達の……あたし達の隊長を!!」

怒りと悲しみの声をあげていた。オレは逃げろと言ったのに2人は無視して戦っている。いつもは素直に聞くのにこういう時は無視するなんて、やっぱりオレは人の上に立つほどの能力は無いんだな

「いい気味よ!!……あたしからお兄ちゃんを奪ったんだから!」

「ぐっああ……つぐ、いつてえ……このお!」

鎌が春多の脚に傷を付けた。だけど痛みには怯むことはなく弧月を構えてまた立った

これ以上はもう戦わなくてもいい。頼むから逃げて欲しい。けどその言葉は口にするのができなかった

オレの生まれた国は「プロスペリタース」って言う

平々凡々な、コレといった特徴のない国だった。それでも軍事力はそれなりにあったので、侵略を受けるといふことはそこそこあった

父はこの国の軍人。母は玄界ミデンから連れ去られた人

トリオン能力も平凡で戦闘も雑事も並以下で、役に立たないと突然街に捨てられたらしい。読み書きもできないことは珍しくもないが、頼れる当てのない知らない土地で生き抜くのは大変だったと言っていた

それでも諦めず雇ってほしいと交渉を続けてなんとかパン屋で働かせてもらえることになったと。住み込みで給料もくれるという事

で警戒はしたらしいが、杞憂だったようで安心して暮らせるくらいに衣食住を得られたという

ある日朝の開店直後に来る軍人さんに

「す、好きです！」

と、突然の告白をされたらしい。なんとも青春をいそいそとした瞬間だ。だけどその初々しい軍人がオレの父さんだったのだから恥ずかしい話だ

連れ去られ捨てられて、身勝手な軍人を母さんはよく思っていないで断つたらしい。それが馴れ初めの始まりと何度目かの結婚記念日に聞いた。子供だったオレは「父ちゃんスケベー」なんて意味の分からないことを言っていたのを覚えている。何をどう思っただけでスケベなんて言ったのかよく分からない

「自分はお前のことが好きです。付き合ってください」

「……軍人さんはきらいです……けど、友達からでしたら」

何度目かの告白。それでようやく一歩前進したらしい

毎日来て買うときに告白をしてきたり、花や化粧品などプレゼントしたりと「お父さんには上手いこと外堀を埋められたわ」って頬に手を当てて照れながら母さんは言った

友達から恋人、そして夫婦となりオレが生まれた。名前は「マモル護」

母さんの国の言葉で名前を付けられた

裕福な国でもないから子供一人育てるのにも大変。育児にかかる費用も、預けられる施設もないから捨ててしまうなんてこともプロスペリタースでは珍しくもない。そうしてスラムが誕生し、そこで生きた子供は粗暴で他人の意見をほとんど聞かなくなる。親の庇護下で育てられる、育てられた人が羨ましくも憎いのだから

そんな環境で育ったのにも関わらず春多はオレたちを信頼してくれるほどに許してくれた

軍人の父を持つオレは当然、その背中を見て育ったから軍人になりたいと思った。母さんは戸惑っていたが最後には許してくれた。近所に住んでいたロイも一緒に軍人になるから緊張も恐怖も半分だった

トリオン能力がよかったオレは教官の指導のおかげか同期の中では5位になるほど実力もあった。初めて所属した部隊では期待の新人ともてはやされ、それに応えるように任務ではそれなりの結果をだしていった

1年経ち10歳になる頃、オレは部隊長として昇格し2人の部下を得た。それが春多と一菜だ

「本日付で忍田隊に配属となりました、カズナ・マリー・デイヴィス伍長です」

「…同じくハルタツす」

目に光がなく皺一つない整えられた軍服を着て見事な敬礼をしたのが一菜。名門の軍貴族の出身で、ゆくゆくは将官としての席が用意されている。大人に準備された人生を歩むことが決定されていた。そのため自身の好みなど一切が無視され、相応しくないと捨てられ自己主張はほとんどしなくなっていた

反対に春多は常に反抗的な目で周囲を見ていて、ちよつと気に入らないことがあるとキレて暴力を振るうことは多々あった。正直制御するのが大変だったし10歳のオレにできるのか不安だった

「よ、よろしく。オレは忍田護だ」

挨拶はしてみるも一菜は形式どおりの言葉を、春多は無視ときただけど扱いが難しいと思ったけど案外そうでもない。一菜はこっちから好みを聞けば答えてはくれる。軍人らしく、じゃなく1人の女の子として。春多は時間がかかったけど信頼関係を気付いていけば気を許していつてくれた

「そういう時わね、一緒に美味しいご飯を食べると仲良くなれるよ」と母さんが助言をしてくれたおかげで、オレはかけがえのない仲間2人を得られた

だけどその楽しい日々も終わりを告げてきた

「護!! 前に出すぎだ!」

「大丈夫だった! オレにはサイドエフェクトがあるんだから!」

追跡のサイドエフェクトが発現してオレはますます強くなっていった。トリオン兵なら一度見れば全体にどこに居るのが分かる。遮蔽物があっても関係ない。それはトリガー使いも同じだった

ある日プロスペリタースに敵が攻めてきた。正確には補給のために立ち寄ったがトリオン兵を展開したため侵略に来たと上が勘違いをしてしまったのだ

トリオン兵くらいなら難なく倒せるオレは父さんの言葉は無視して前に出過ぎていた。それでも大丈夫と自分の力を過信していた。姿を消すトリガー使いが現れるまでは

オレは突如目の前に現れた敵にトリオン体を破壊されてしまった。逃げるために下がろうとするが、そんなこと許してくれるはずもなく敵に捕まってしまった

「嫌だ、や……お願い、ヤダー……イダツアアアア」

「痛いのが嫌なら言えよ!! 司令官は! 保管庫は! マザートリガーはどこなんだ!」

「知らないいいい!!……やだ、やだつあつああアアア!」

服を脱がされて拘束され、熱いナイフで切り裂かれる。手足から血が流れ、激痛と恐怖でオレは泣き叫んだ。軍人として何も言わなかったといえば聞こえはいいが、本当は敵が知りたい情報なんて何も持っていないかった、が正しい

部隊の隊長だからといってもやっていたことは街や担当地域の巡回ばかりだ。そんな下っ端の部隊に重要な情報なんて誰が知っていたのか

「いだあい……つう……うう」

「酷い怪我だね……まだ子供なのに」

「っひっ!? いや、いやだ……こないでえ」

拷問は終わり手荒い治療で捕虜の部屋に放り込まれた。触れば痛い、動かしても痛い。蹲って痛いのがなくなるのを待つしかなかったとき、先に居た部屋の主が声を掛けてきた。完全に他人に対して恐怖するようになったオレは部屋の隅に逃げるが、狭いここではすぐに壁にぶつかる

赤い髪に細い体だが引き締まった筋肉。身長もあって見下ろされることに更に怖かった。あと目も鋭いから

「ただど見た目に反して一人称は「僕」。声も穏やかで優しかった

「大丈夫。僕も君と同じだから」

「え……………あ……………」

同じとはどういうことなのか？ 考えるより先に見せられた。被っていた毛布を開くと痛々しい傷跡がいくつも、しかも包帯も赤く滲んでいる。衣類なんてなく、暖を取れるのはこの毛布だけ

部屋の温度は低いから体を引っ付けて一緒に毛布に包まれた

「僕はガーディ。僕も敵に捕まってね。帰ることはできないから仲間になれってしつこくてね」

「何で、帰れないの？」

「あいつらの国は乱星国家でね、一度捕まった僕はもう故郷には帰れないんだ」

ガーディと名乗った彼は寂しそうに言った。オレも帰れなくなるのかと思つたが、船を攻撃されたことによつて修理しないとイケないし、燃料のトリオンも満タンではないからすぐには動かないと安心するようなことを言ってくれた

外で話していたのが聞こえたらしい

「おい！ てめえだよ！」

「え……………いや……………一人はいや……………」

「……………待っててね、あとで戻るから」

さつきオレを傷つけた奴が今度はガーディを連れて行つた。こんな怖いところに1人ぼっちなんて嫌だった。だけどガーディも怪我していて力が出せず引っ張られていった

戻るから、って残した言葉を信じて毛布に包まれて待った

どれくらい経つたのかは分からないけど、外が騒がしいことに気付いた

「つ……………え、なに……………地震……………」

部屋が揺れた。明らかに何かが起こっていることを知り戸惑っているとドアがいきなり飛ばされた

「っひ!?……だ、だれ…?」

「護か!……だいじよ……つく、すまない護……もつと早く来ていれ
ば」

「父さん!!」

現れたのは父さん達だった。あとから春多と一菜も来て、救出に来てくれたんだと嬉しくなった。予備のトリガーを渡されてそれで脱出する予定だったみたいだけど、オレはそれよりもガーデイのことが気になった

「護! どこ行くんだ!」

「ガーデイ! これです…か……」

拷問されている部屋に行つてトリガーを渡そうと思った。それなら安全に脱出ができる。ガーデイも一緒にと思つて扉を開けた先は残酷な現実が待つていた

「が…でい?」

「ッ…だれ…?」

椅子に固定されて体中から血を流すガーデイ。生きているのか分からないオレは弱々しく呼びかけた。すると掠れた声で返事をしてくれた。だけど見えていないらしく周囲を探すように頭を動かしている。目はちゃんと開いているのにだ

「オレ!…オレだよ!! 仲間が来てくれたんだ! これで助かるよ!

だからっ…トリガーを使えば…」

「あり、がと…でも、もういい…よ…」

「やだ…やだああ…」

幼くても直感で分かっていた、だからこそ否定したくて手にトリガーを握らせて嫌だと泣き喚いた。ほんの1時間も満たないだけの、知り合いと呼ぶのも曖昧な関係だけど。それでも同じ苦痛を経験した者同士。恐怖で震えていたオレに寄り添ってくれた人

子供のオレにはそれでも十分だった

「君の名前…教えてほしい…な」

「護!! 忍田…護…お願いだから…生きようよお」

「マモル…いい、名前だね…もし、運がよかったら…困ったと

き、僕が……力を貸すね」

「なに言ってるのかわからない!!…ねええー!」

「ご、めんね……でも僕も……マモルと会えて……よかった……よ。さようなら」

「やだ……いやだ!! ガーデイ、お願いだから死なないで!!」

「死なないよ……僕は、傍に居るから」

何をするかなんて理解はできていなかった。ガーデイは残り僅かな命と全トリオンを使つて、オレが握らせたトリガーでブラックトリガーを作つた。もう2度と会えない言葉を残すガーデイにオレは泣き喚くしかなく、気がついたら身体はチリとなって崩れ、残つたのは黒い髪留めの形をしたブラックトリガーだけ

「護……帰ろう。母さんが心配してる」

「うう……つうう……」

オレは父さん背中に乗つて街へ戻ることとなった。遠征艇は破壊、トリガー使いもほとんど捕獲し、1名が逃亡中とのことだった

「護っ!!」

「っ……かあさん……母さん!!」

いつもよりは帰宅時間は遅かったが街の安全区域ギリギリのところまで母さんが来ていた。やっと安全なところに帰れるんだって安心し嬉しくなった

「だけど、それは一瞬にして奪われた

「護……きやつ……あ」

「かあ……さん……?…母さん!!!」

逃亡中の敵が母さんを切り殺した。しかもそいつはオレを捕まえた消えるトリガーを使う奴だった

家族を殺されたことに怒りが爆発したオレは、ガーデイが作つてくれたブラックトリガーを使つた。適正があるかどうかなんて分からなかった。だけど使えた

「おまええええー!!! よくも! よくも母さんを!!」

どんな能力を持っているかも分からないブラックトリガーを叩き伏せ、吹き飛ばし、最後には地面から影の棒みたいなものが伸びて串

刺しにした。殺したんだから殺されて当然。ただそれだけしか頭になかった

「護っ。護ー！」

「っ……父さん……」

血を流して倒れる敵。それでも追い討ちを掛けるように殴つてきたら父さんに止められ、こつちに来るように肩を押されてその場を離れた

「まも……る……よかった、ぶじ……で」

「母さん……ごめん……ごめんなさい……っ」

「いいの、よ……いっばい……幸せになり、なさい……」

「広美……すまない」

「いい、のよ……護のこと……お願い、ね……?」

「ああ」

母さんはそれだけ言って死んでしまった

それからはただただ地獄の日が続いた

オレはまたあんな痛みも恐怖も嫌だった。だから攻めてくる敵は全て殺した。ブラックトリガーは鉄壁の防御を誇るほど硬く、オレのサイドエフエクトで見たあととは殻に籠るように壁で困って影の棒で刺してを繰り返した

父さんや春多や一菜の制止など気に留めずひたすら敵の殲滅をしていった

けど同時にオレの心にも傷を増やしていった。死んでいった奴らの断末魔、死に際の恨んでくる顔。それは確実にオレを蝕む病気となった。こうなったのはオレのせいだと、弱いから傷つくんだと心が死んでいくのを無視して押し込めていった

そんな日が1年ほど続いた。父さんは突然母さんの墓参りに行くぞと、無理矢理オレを連れ出した

街がよく見える丘。ここは母さんが唯一気にいつていた場所だった。そこにお墓を立てた

「護。おまえがあんなことをするのは分からなくもない。だがそれは」

「分かってるよ！ 命まで奪うべきじゃないって言いたいんでしょ！！
だけど仕方じゃないか！ オレは怖いんだ…今でも時々身体が痛
むんだ…ナイフで切られる痛みが！！ それ母さんだつて…こつ
ちが奪われないと奪われちゃうんだ！！ 大切なものが…消えるのは、
いやなんだ…」

「…そうだな。なら、平和なところに行くか？」

「え……？」

「母さんが生まれた^{ミデン}玄界は戦争をしていないらしい。そこならおまえ
はもう誰の命も奪うこともなく暮らせるだろう？」

「で……でも、そんなこと…」

「反逆罪として問われるだろうが、父さんが守ってやる」

「……………」

「母さんから護、おまえの名前の意味を聞いたことはあるか？」

「ない…けど？ 意味なんてあるの？」

「ああ、母さんのいた国では生まれてくる子供に願いや思いを込めて
付けるそうだ」

「オレの意味は…？」

「…護が守りたいと思ったものを守れる強さを持つてほしい、つて思
いが込められてる」

「つつ！」

母さんの墓の前で父さんはそう言った。初めて告げられた名前の
意味を知りオレは泣いてしまった。確かに今のオレは強いと思う。
だけどその使い方が間違っている

今までしたことは怖いから奪つてしまおうっていう暴論だ。オレ
が守りたいものを守っているとは言えない。だけど今更守れるのか
なんて不安だったけど

「おまえはもう強い。あとはそれで何をどう守る、かだ」

何を守るかはまだ分からなかった。けどもうこの国には居たく
もない、それだけはハッキリしていて。父さんはそれじゃミデンに行
くか！ と言った

死に際にこんなことを思い出すなんて、これが走馬灯つてやつなのかなって。いよいよもって罰を受けるんだろうな

「あんたたちも最悪よねー？　こんな人を大量に殺して、部下まで置いていつてさ？　よくそんな最低な上官に従うよ。理解できないわ」「理解できなくて結構よ。あんたが思うほど隊長があたしたちのことを思ってくれているなんて理解できるわけないわ！」

「っ……そうだぜ？　隊長は、オレたちの光でもあつて、希望でもあるんだからな！　そんな人が最低なわけないだろうが!!」

現実に戻ったのか、元々現実だったけど春多たちの声が聞こえるようになってきたのかはわからない。だけど敵の挑発を受けても戦う意志が、オレを信じてくれる気持ちが折れていなかった

勝手に罰を受ける時が来たんだと諦め、戦意も信じる気持ちも折れていたオレには、2人の言葉が胸の奥に響いた

「隊長はな、人以下に扱われるオレを、初めて人として扱ってくれた人なんだ！　初めてオレは、心の底から人間になれたんだって思えたんだよっ!!」

「約束された人生を生きるしかない私に「私らしく」生きてもいいって教えてくれた人なの！」

「っ………！」

2人はそう言って戦い続ける。トリオンもどれだけ残っているのかなんて分からないけど、ブラックトリガー相手に劣勢なのは代わらない。唯一意志だけだ。でも、その強い意志がオレにも伝わり。最後まで諦めない仲間を前に、オレが諦めるなんてカッコ悪すぎた

「うおおっおおおおお!!」

「隊長っ!？」

「まだ生きてたの？　しぶといわね」

最後まで2人のように戦いたい。人の命を奪ってにおいて何を今更生きながらえようとするのかと笑われるかもしれない。だけどせめて、春多と一菜の前では最後までかっこいい隊長でいたい

腹に刺さった剣を掴んで引き抜く。血がさらに出るが、オレはポ

ケツトから黒い髪留めを握る

「死に底ないが!! 今度こそ殺してやるっ!!」

顔を上げれば数えることすらできないくらいに剣が飛んできていた。あんなものが当たれば原型すら残らなくなるじゃんって思った

「隊長————!!」

「うそ……だろ……? 一菜、アレ!」

「え……?」

剣は確かに当たった。オレとガーディのブラックトリガーに

「持っていたのか……! まあいいわ、ブラックトリガー同士やりあいましょう!! もつとも、守ることしかできないそれはいつまで耐えられるかしら?」

ギリギリ換装は完了した。遊真みたいに生身がトリガーの中にあるわけじゃないし、レプリカのサポートもないから防御は自分でやるしかない

敵は剣を戻し、またオレへ放ってくるがそれは叶わない

「モードチェンジ! ヘルハウンド!!」

ワオオオオオー——

逃げもせず突っ立ってるオレはブラックトリガーのもう一つの機能へ切り替えた。その瞬間どこからともなく犬の叫びが聞こえ、腰の左右に反りのない片刃の剣が現れた。柄尻にはチェーンで繋がれた狼の頭がある

「喰え——」

オレはソレを撫でて命令すると。狼の頭は巨大化し口を開けて剣を食った

「な、なによ……それ……!? おまえ……2つもブラックトリガー使えたって言うの!?!」

「いいや、一つだけだ。これは攻撃特化のモード。普段は防御特化にしてるだけだ」

「ふ、ふざけないでよっ……!!」

「ふざけていないんだけどな……っふー!」

見たこともないトリガーにうろたえていた。このブラックトリ

ガーは防衛よりの性能をしているのかと思ったけど、ミデン玄界に亡命してからもう一つ、攻撃よりのモードがあるというのに気付いた。剣が2本という事もあり練習を兼ねて弧月を2本にして体に慣らしていた。今はオレ専用の春風だけだ

失った剣の代わりに数本が新たに出現して飛ばしてくるが、剣を抜いて全て受け流した

「春風に慣れようとしているのにやっぱり剣2本のほうがしっくりくるな……」

「このおおお！ もう一度痛みで苦しめてあげるわよ!!」

「っ！ それは、嫌だなっ！」

剣がダメなら鎌。接近して振ってくるが、受け止めて弾き返す。距離ができるがオレから詰め寄って防衛させる

「そういうえば…オレの仲間がいないな？」

「っ?!……どこ行った!?!……どこに隠れて……」

「後ろだよ！」

「っっ!!……つく！」

逃げられないように力を入れて押し付けているときに、春多たちがいないことを教えた。メリツトなんてないが、チームで戦うのがオレのやり方だ。言われて気づいてもすでにこの場にはいない

戸惑っている春多は後ろから突然現れ弧月を振るう。だけど反射神経がいいみたいで鎌を手放し横に飛んで回避した

「いったい……どうなって……?」

「あたし達はチームで戦うの。1人ぼっちのあなたにはできないやり方よ」

「っっ!?!」

そしてその先には一菜がライフルを構えていた。引き金を引いて弾丸が放たれるも片腕を吹き飛ばすだけで済んでしまった

「すいません隊長」

「気にするな。それより防衛は任せた」

「はい！」

「春多、合わせろ」

「りょうーかい！」

2人ともオレの元に来て隊形を組む。謝罪もしてくるが今はどうでもいい。反省も全て終わったあとにすればいいことだ。もつとも、オレにその時間があるかどうかは分からないけど

「なんなのよ……なんなのよそのトリガーは!？」

「なら、教えてやるよ」

理解ができないみたいで声を荒げていた。それなら分かりやすくしてやろうとオレは狼達を呼んだ

すると影から生えるように盛り上がり、形が作られていつて狼になった。その数はこの場にいるだけでも50匹入る。オレのトリオンの限り増やすことも可能で、全て消費して呼ぶとなると500匹くらいになる

「こいつらはオレの武器でもアリ、仲間を守ったり援護したりすることのできる狼たちだ。こういうこともできる」

「っ……あれは、あたしの剣!？」

1匹が口を開いて剣を飛ばした。それは敵の腰から飛ばしてくる剣と同等の形をしていた

狼達の口の中は簡易的な門ゲートみたいになっており、国家間を移動できるようになもの。簡単に言えば無限に入る袋みたいなもの。だから最初にオレに向かってきた剣を食ったため、中にはまだ大量の剣が残っている。その一つを出しただけだ。しかも空間内は時間が動かないため、トリオンの消費もなく、運動も保存したまま。だから剣の勢いもそのままに飛ばされたのだ

「なんなのよそれ……そんなの、強すぎるよ……」

「ブラックトリガーなんて総じて総じて桁違いの強さを持つているだろ?」

これがオレの、ガーデイのブラックトリガー「境界ガルドの守護者ディアン」の力

28話 守るために

「くう!!……っ」

鎌で構える敵に対して振り下ろした2本の剣で押さえつけ、その横から一菜がライフルを構えて射撃を行う。だけど自分の攻撃を受けるのを覚悟したのか腰から伸びた剣で肩にダメージを受けながらも強引に後退させてきた。そして剣同士を重ねて盾にすることで一菜の攻撃を防御した

「旋空、弧月っ!!」

「なっ!?!……伸びた……斬撃を飛ばすものじゃないの!?!」

その後ろでは春多が弧月をまっすぐに構えており突くようにして旋空を放つ。だが見え見えの攻撃など躲すことが可能で、ギリギリで体を捻ることで服を切られるだけで済ませた。だがそれだけで終わらないのがガーデイのブラックトリガーだ

伸びた旋空の先に狼が口を開けて待機している

「よそ見注意だぜ!」

「……!! しまった!」

旋空を避けるためにバランスを崩したことで回避はできない。オレと入れ替わるようにもう一匹の狼が跳んで口を開けると、春多が突いた旋空が飛び出した。腹に命中したがトリオン器官より下だったため撃破とまではいかなかった

「このっ……罰を受けるやつが何を今更生きるのよ!?!」

敵は漏れるトリオンを手で押さえながら聞いてきた

「今更か……確かにオレは一度は生きるの諦めて罰を受けようと思っ
た」

「なら、何だよ!!」

「……そんなもん簡単だ。死にたくないからだ」

「………は……?」

オレに復讐するために敵意を向けてくる相手に罰を受ける時が来たんだなって、剣が刺さったときそう思っって抗うのを止めた。生きるのを諦めたのだ

「だけどオレのために戦っている2人の気持ちを聞いてしまったのは、簡単に死んでしまったらそれこそ裏切るようなことになる。信頼してくれる2人のためにもしぶとく生きようと思う」

「それに……オレは、オレの願いのためにも生きなくちゃいけないんだ」

「死に損ないの願いなんて……大したものじゃないでしょうが……!」

「オレは忍田護だ。オレの名前にはオレが守りたいものを守れるようにって思いが込められてる。だから、オレはこの国を、ミデン玄界を守りたい! そのためにも生きて戦う!」

「っ……お兄ちゃんだって……まだ生きていたかったわよ!! 今更自分だけ生きようなんて思うなあー!」

オレに『護』って名前を付けてくれた父さんと母さんのためにも、オレのために力を貸してくれるガーディのためにも戦わなくちゃいけない。誰に言われたことでもなく、オレ自身が選んだことだ。人の命を奪ってしまったことも

だからその責任は果たさないといけない

「行くぞ、春多! 一菜!」

「はい!」

「おう! ぶちのめしてやるぜ!」

女の子に対してその言葉はどうかと思うけど。それでも忍田隊は目的も思いも今は一つになっている

春多が先行し弧月を振るった。鎌で受け止められ飛ばされると剣が伸びてくるが一菜のエスクード改が守った。視線が向いていないうちに一菜が撃ちながら腕のない左側に回りこむが、剣が飛んできてエスクード改でも防ぎきれず貫通する。だが狼が一菜を食べることで負傷することなく別の狼から現れる

「そうやって……狼の中を通っていたわけね」

「そうだ」

瞬間移動の仕組みを理解したところで困ることもないし、むしろ知ってくれたほうがどこから攻撃が来るのか? と勝手に警戒してくれたほうが隙が大きくなる

「っ!? つく!自分も移動できるなんて…!」

オレ自身を食べさせた後、後ろに現れたオレは腰から伸びてる剣を切り落とした。切ったところで意味がないことは分かりきっているが、そのままだと大きすぎて困るから切った

「このっ、またこの鎌で苦しめ…っ!?」

大鎌が振るわれそうになったが、それより早く柄尻の狼の頭が敵を飲み込み空中へ吐き出した

「浮いてっ!?!…しま…」

「これで終わりだ」

宙にいる敵を中心に狼たちが覆うように顔を向けて囲っており、口を開けた瞬間食ったものを全て吐き出した。剣だけでなく、一菜の銃弾に春多の突きの旋空を

境界ガルドエイアンの守護者自体に飛び道具は無いから敵から食ったものや春多たちに頼るしかない。遠距離攻撃が防御寄りの状態でしかできないのが不便なところだが

四方八方から攻撃を受ければさすがに無事じゃすまないだろう

「…っく…お兄ちゃんの…おにいちゃんのブラックトリガーが負けるなんて…」

どうやらギリギリで剣で守ったのかはわからないが損傷はかなり大きい。片足と残っていた腕も鎌を握る手がなくなっていた。顔にもヒビが入っているほどにダメージが入っていて、これじゃ戦闘継続は不可能なのは明白だった

「…無駄だと思うが、投降しろ」

「投降…? 冗談…あんたたちに捕まるくらいなら死んだほうがマシよ!」

「そう、なら死になさい」

「っ!?!」

復讐の相手に言われたところで意味は無いかもしれないと分かっ
てはいたけど、やっぱり拒絶されてしまった。捕虜として大人しくするなら最低限の衣食住は保障するし、アフトラトルとの交渉にだっ
て使えるはずだ。こうなっては仕方ないと強引に連れて行くしかな

いと思った瞬間だった。音もなく黒い針が敵の胸を貫いていた
「ミラっ!? な、なにをするのよ!」

「命令には従わず、役割すら果たせないあなたは不要なのよ。それに、同じブラックトリガーを使っていながら易々と敗北するなんて。あなた、使い手として相応しくないわ」

トリオン体が破壊された次には突如空中に黒い空間が出現した。その中には角を生やした女のトリガー使いがいた。しかも黒色。間違いない、ブラックトリガー使いだ

『た、隊長。どうします…?』

『様子見た。空間系は迂闊には出れないからな』

一菜の緊張の籠った声が通信機から聞こえてくる。本来なら逃がすわけにはいかないだろうが、何も無いところに突如現れた。それだけでも普通のトリガーじゃないのは当然だ。しかも角が黒いことでブラックトリガーであることも確認できた。さっきの胸を刺した攻撃は音が無かったから背後に出されたら回避はまず無理だと考えるべきだ

オレたちの中で警戒心が極限まで上がっているとブラックトリガーの女は、仲間を助けるために手を差し伸べた。感情の籠っていないような表情で向かう手は高い位置にあった。違和感を感じていたオレはあの女の言葉を思い返して気付いた

「隊長!」

「っ!!」

「あら? 以外ね。敵を助けるなんて」

気付けばオレは飛び出していた。ミラと呼ばれた女の手は、オレたちが相手をしていた敵の首元、おそらくブラックトリガーと思うものを掴んで引っ張った。それを奪った直後に周囲に黒い小さな空間がいくつも現れた

手を伸ばし体を抱き寄せた次には、さっきまでいた場所には黒い棘が伸びていた

「おまえ……仲間を……!」

「ミラ……っ? どういう、こと……なの?」

「不要なのよ、あなた。私怨にしか固執してなくて目的を忘れる。相手に痛みを負わせるブラックトリガーも満足に使えないなんて、使い手として相応しくないわ」

あの女は明らかに仲間を殺そうとしていた。表情一つ動かすこともなく、まるでそうする予定だったみたい

さっきまで敵だった奴は自分を殺そうとしていたのを理解して声が震えていた。それもそうだ、どれくらい仲間として過ごしたかは分からないが、遠征に来るのにそれなりに訓練はしたはずだ。多少の仲間意識はあるはずだから、この裏切り行為は信じられないと思うのも分かる

「返してっ！ それはおにいちゃんのブラックトリガーなの、返してよっ！」

「残念だけど。コレは決定なの、元々国に置いてかれた人間なのだからいなくなっても困らないわ」

「待って、ミラ!! お兄ちゃんの……おにいちゃんの、トリガー………っつ」

冷たい声でブラックトリガーを回収した女はそのまま消えていった。駆け寄ろうとするのを止めながら次はどこから攻撃してくるのか警戒していたけどその必要はなかった。家族のブラックトリガーを奪われて泣き叫ぶ姿には同情はするけど、いつまでもそうしているわけにはいかない

「春多、一葉。おまえ達はっつアア!？」

「おまえが……おまえがあのまま死んでいれば!! 裏切られることなんてっ……なかったのに!! おまえの、おまえの所為だ!! 何もかもおまえの所為で滅茶苦茶にっつ!!」

さっき助けた敵の女がオレを突然倒してきた。そのまま顔を殴られるがトリオン体だから痛みもないしダメージも受けない。ただ泣きながら叫ぶ言葉は胸が締め付けられた

オレがこいつの兄を殺したから。そのときから全てが狂ってしまったのだ。怒り任せに殺しさえしなければこんな事にはならなかったはずだ

オレが、あの頃のオレが慢心さえしてなければ捕まることなんてなかったんだ。そうだ、すべてオレが招いた結果だ。抗わず大人しく死んでいればよかったのかもしれない

「お兄ちゃんの……おにいちゃんの、仇を……離してっ!!? 邪魔しないでよ!!」

春多が泣き叫ぶ敵をオレから引き離れた。その姿にいつかのオレを見ているような気分になった

「オレらの隊長をそれ以上責めるのは止めてもらうぜ。それでも言うってなら口を塞いでも黙らせるからな!!」

「いいよ、春多。そこまでしなくても」
「け、けど……」

さすがに口を塞ぐなんて乱暴すぎる。敵だから容赦する必要なんてないのかもしれないけど、それよりもオレたちにはまだやるべきことがある

「状況は？」

『護くん!? よかった、無事なのね!』

「なんとか。それより修達は？ オレたちはどう動けばいい？」

『修君たちは千佳ちゃんが…』

『雨取が敵のトリガーに当たってキューブにされてしまった』

「レイジさん!? やられたんですか!？」

今戦況がどうなっているのか知るために宇佐美に聞けば声が曇った。代わりに答えたのはまさかのレイジさんだった。修達はオレたちと別れた後人型ネイバーに遭遇、レイジさんたちが応戦するが撃破されたらしい。何をされたのか分からないくらいに一瞬で。それでも時間稼ぎはできたらしい。予想だが超高速の斬撃を放つタイプじゃないかと言う

その後迅さんと遊真が合流。それぞれ敵を分断してレイジさんを倒した敵を遊真が撃破したらしい。ただし同時に遊真のトリガー反応も消失したという。不安でもあるけどあいつは強いから生きていると思いたい。修たちと本部を目指していた烏丸だが、鳥を使うブラックトリガー使いと遭遇。これに応戦したが撃破された

だけどわかったこともある。そのトリガーは命中するとキューブになるということ。トリオン体に当たると操作ができなくなりベイルアウトしかできなくなる。またワープトリガーと連携して背後からの不意打ちも可能だということだ。しかも鳥だけでなく魚、ハチなど動物や昆虫など他の姿もあるらしい

『イメージとするならシューターみたいなものだ。動きはおまえでも知っている生物のそのものだ』

「とはいえ命中すると厄介だな…」

話を聞けば聞くほど面倒な相手だ。境界の守護者ガルディアンで対処は可能かもしれないが、防御形態はオレ自身が動けなくなる。攻撃形態は遠隔攻撃の手段が少ない。狼達の腹の空間が敵のトリガーの攻撃対象になるかどうか微妙だ。ワープで不意打ちというが、もしそれが味方のみ無効なのか。それとも命中するときに性能が発揮されるのか。詳しいことが分からないと判断が辛い

『あ、いま出水くんからの報告で鳥を使うトリガーはトリオン以外のものには弱く破壊もできないみたいよ！』

ということとは狼達に瓦礫を食べさせてそれを盾にすることもできる。でも瓦礫自体に運動はないから出した瞬間から落ちて意味がなくなる。とはいえ考えている暇はない。敵はなぜか雨取を狙ってるらしいから、なんと少しでも守らないといけない

「春多、一葉。おまえ達は捕虜を連れて本部へ連行だ。オレは修の援護に行く」

「危険です！ 隊長のブラックトリガーでも敵のトリガーの前では意味がなくなります！」

一葉の言っていることは間違っていない。トリオンに対して絶対的な優位を持つ以上危険度は高い。だけど仲間を見捨てるわけにも行かないし、ミデンこの国を守りたいってもう一度思い出したから

「それに…おまえ達だって無謀なの分かっててオレの為に戦ってたじゃん？ 逃げろって言ったのに」

「そ、それは……」

「とにかく戦いはまだ続いてんだ。後は頼んだぞ」

捕虜を一菜たちに任せて修の援護に向かうために地面を蹴って屋根に飛び乗る。距離があるから間に合うかは微妙だ。サイドエフェクトはリセットされてしまったから位置もレーダーでしか分からない

それでも諦めたくはない。最後まで戦って守るって決めたんだ

29話 終わりの一手

「三輪が!？」

『ああ、偶然居合わせた三輪が人型と戦っている。その隙に三雲は本部に近づいている』

レイジさんからの情報で偶然だというのが、多分だけど迅さんが関係しているんじゃないかって思う。ネイバーに恨みを持っている三輪が素直に修を助けるつもりはないだろうし。遭遇するように未来を選んだってことなんだと思う

「オレも目視まで近づいた!」

『護は修の援護に行け。三輪が抑えているなら敵の目的の阻止が優先だ』

「了解!」

数十m先には修の姿が確認できた。横には三輪と情報にあつた生物を弾とするトリガー使いのネイバーも。たった一人で大丈夫なのかと不安になったが、シールドを薄く小さくして広範囲を防御していた。命中したらキューブにされる性能を小さいシールドで対処するなんて考えている。威力自体はそこまでない。当たったからといって弾けるわけでも貫通するわけもないから厚さなんて必要ない

足止めとしては十分すぎるだろう。あとはトリオンがどっちが先に切れるかの勝負だろう

「修!!」

「護! これは…?」

「オレのブラックトリガーだ」

家の門に隠れていたからそこへ降りた。一緒にいる狼達が気になっっているようだが端的に答える

「ん?…避ける!」

「っ…!」

「これは…あの女のトリガー!？」

視界の隅で何か光ったと思つた次には見覚えのある黒い物体が空中に出現する。口にするより早く手を伸ばして避けさせるとオレ

の腕を貫通して修の足にまで刺さった

「…目標補足」

地面の空間からミラと呼ばれていたトリガー使いが現れた。周囲に敵の目らしいものはないのに正確すぎる。トリオン反応で来たにしては門の陰に隠れているオレたちを狙えるなんて仕組みが分からない

「とりあえず逃げるぞー！」

「は、はいー！」

何のために狙うのかは分からないけど千佳ちゃんを奪われるわけにはいかない。剣を振りぬくが今度は地面に沈んで回避した。修は家の塀を沿うように奥へ進んでいく

「つち…あつちかー！」

修を追いかけたにしてもどこへどう曲がったかなんて分からないはずだ。ここは住宅地だから隠れられる場所が多い。だけどサイドエフェクトが敵の女が修たちのほうへ行っているのが見えた

「意外と早いわね」

「くそっ！ またかよー！」

思った以上に厄介なトリガーみたいだ。後ろからの不意打ちのつもりだったのにあっさり回避されてダメージを与えさせてくれない。ほぼノータイムで出現する黒い空間は音もないためどこから出てくるのか分からない。こっちの飛び道具はオレと同じように撃ち返すのでは接近戦しかない。それでも修たちが逃げる時間が稼げればいい

「これならどうだー！」

「それはもう見たわ」

狼達を周囲に集めて口を開かせる。その瞬間トリオンの弾丸が一斉に敵に襲い掛かった

一葉が本部へ捕虜を連行しながら付き添わせた狼に弾を撃っていると連絡がきた。だから今も狼の腹の空間には一葉が用意してくれた弾がある

「はじめてだったら、少しは手傷を与えたかもしれないわね」

「っ……まあ、ワープのトリガーがそこまで早くなければオレの勝ちだったろうな」

意味があまりないだろうと思っていたけれど、かすり傷一つすらないなんて予想より低かった。一体どうやってこいつを攻略するべきか悩む。専用トリガーなら可能性はあったかもしれない。けれども解除すれば再換装できる自信がない。境界ガルドエイアンの守護者でも気力を振り絞って発動させたようなものだ

「でも、あなたを相手をしている暇はないのよ」

「…また修のところか」

すぐに援護に向かうと空から黒い何か落ちてきた。修の肩越しだがあの形状は新型のトリオン兵だった。今あんなものに襲われたら修なんてあっさりとやられる。焦って倒そうと前に出ようとするが、その前にレプリカが止めてきた

『心配無用だ、護』

「レプリカのコピー、追いついてきたのか！」

「コピー!？」

遊真のブラックトリガーが学習し自分の力にするのは知っているが、トリオン兵までもコピーするかとオレは驚いた。なんでもコピーできるなんてチートもいいところだ。だがあればこっちの味方なら逆に戦力は増えたようなもの

「レプリカ。新型にあの女の相手を頼めるか？ どうも今のオレとは相性が悪くてな」

新型に空間トリガーの棘が刺さるが、硬いのか目玉までは届いていなかった。あの攻撃が防げるならあの女にとって相性はよくないはずだ。今までの情報からすればあいつ自身の攻撃はあの棘のみ。仲間との連携も可能だが単独ではそれ以外の攻撃手段はないってことかもしれない

ブラックトリガーは良くも悪くも強い。だがその分敵との相性に左右されやすい。汎用性を求めているボードアのトリガーは組み合わせによってブラックトリガーといえど天敵となりえる

『心えー』

「…っ!!」

「言つたはずよ。悪足掻きは好きじゃないの」

レプリカの新型である女の相手を頼んだ次には空間トリガーの棘で真つ二つにされていた

「…っ!! レプリカー…!」

「乗れ!!」

一瞬だけ驚きで我を忘れていたが、コピーした新型が動いたことで我を取り戻した。だけど動いたってことはレプリカが操作しているわけじゃないって事になる。どうなっているのかは分からないけどまだ動くなら戦ってもらうしかない。修が半分になったレプリカの片方を持って去ろうとするが、片足が動かないのでは遅い

オレの狼に跨らせてこれで一気に距離を稼ぐことにする

少し走つたところで建物の破壊音が聞こえてきた。三輪と相手にしているネイバーが近くに来ていたのだ。しかも鳥を出して新型に放ってきた

「させるか!!」

「っち、邪魔をするな!」

キューブ化されて無力化されては困るから、一葉の弾丸を放って阻止する。オレにまで飛ばしてくるが撃ち落せば問題ない

『護、頼みがある』

『なんだ?』

オレが守る行動を取ったことで断続的に新型のほうへ鳥を飛ばしてくる。このままジリ貧かと思つたとき修から通信が来た

『20秒だけ、時間を稼いでほしい』

『20秒? なにをするつもりだ?』

『レプリカが、策があるって』

20秒の時間稼ぎをしてほしい。それが修からの頼みだった。厳しいけど不可能ではない。だが修にどうにかする方法なんてあるかと聞けばレプリカに案があるらし

いったいどんな策なのか分からないけど、遊真たちと旅をした数年間の記録を持つレプリカだから最善策を考え付いたのかもしれない。

半分になった状態でできるのかはわからないけど、ただ修一人を進ませるよりはマシかもしれない

『わかった。最低でも20秒は稼いでやる』

『ありがとう』

「さつきから小さい攻撃ばかりだな？ 邪魔ならオレをどっかに飛ばしてしまえばいいのに」

敵が修に向ける意識を少しでも減らすためにも挑発を仕掛ける

「あら、あなたのような相手にそんなトリオンを使うなんてもったいないわ」

「そう…かよー！」

成功かどうかはわからないが話し相手にはなってくれそうな感じだ。壁を蹴って近づいて剣を振る。当たり前のようにワープして逃げられる

「さつきから逃げてばかりだな？ 棘で刺す以外何もできないから逃げるしかできないのか？」

「…弱者ほどよく吼えるわね」

「当たり前だ！ オレは子供だ、一人の人間だ。弱いのは当然で、だからこそ頼るんだよ!!」

「っ!! うつとうしいわね」

苛立っているのか眉間に皺が少し寄った。オレの言葉に煽り返してくるが、反論せずに受け止める。オレは所詮強いと思いがついていた弱い子供だ。戦うこと以外何もできない。ネイバーと知られたときオレは何もできなかった。根付さんたち大人の人が頑張っただけだ

ただ頼ることしかできなかった。子供なんだから当然かもしれない。戦える力があるからって、サイドエフェクトがあるからって何でもできるわけじゃない。だからオレは、オレに足りないものを周りに頼って助けてもらう

今はそうでも、いつか今度は頼らせてと言われたときにそうすればいい
いい

オレばかり見ているから狼の動きが見えていなかった。後ろから

口を開けた狼がレプリカがコピーした新型を吐き出した。殴ろうと
してくるのを下がって回避したのを見て柄の狼を伸ばした

「しまった!?! 放しなさい!」

「そうはいかないだろ! オラッ!」

ジャラジャラと鎖の音を鳴らしながら敵の女のミラに向かった。
すぐには避けられなかったようで左腕に噛み付いた。棘を刺してくる
がダメージはない。狙いをオレに変えてくるが、それよりこっちが早
く狼を引っ張ったことで噛み付いた腕が千切れた

このまま追撃しようとするが、横から魚が迫ってきてて邪魔され
た。ビルの壁を壊し蹴り飛ばす。出水のおかげでトリオン以外には
弱いことが分かっている。けれど数が圧倒的に違いすぎるから押し
負ける

「つく……修?」

物陰から出た修はついに行動に移すことにしてみた。今の状
況でどんな策があるのかわからないが、このまま追い詰められてジリ
貧になるよりは一か八かの賭けに頼るしかない

今度は鳥が修を追いかけるがコピーしたトリオン兵が瞬時に動い
て盾になった。けれどトリオン出できている以上キューブ化して倒
されてしまった。あとはオレと三輪が惹きつけるしかない

「ミラ、仕留めろ」

「了解しました」

距離がある以上すぐには駆けつけられない。それよりミラってやつ
を倒す方がいいと、もう一度柄の狼を飛ばして首を食い千切ろうとし
たけど小さな棘で阻止され、しかも修の体にくっつもの棘が刺さって
身動きが取れなくなっていた。横からはキューブ化する鳥が迫って
いる

「ベイルアウトしろっ!!」

最悪オレがキューブ化した千佳を回収すればいい。修まで回収で
きるかわからない。考える余裕なんてないんだからそうしてくれと
願っていたら、何を考えたのかトリガーを解除した

「っ、換装を解いた!」

換装時にほんの数秒だけ多少の位置情報のズレがあっても換装で
きるよう作られている。そのおかげで棘から脱出できた修は物理に
は効かない鳥を受けながらも本部の入り口へ向かって走った。たし
かに片足が使えなくなっていたトリオン体よりは早い。だけどそれ
で間に合うかは分からない

「うるさいぞー！」

「バイパーー！」

オレとしたことが修の無謀な策に呆然としていた。ビルの上では
三輪たちが戦っていて、キューブ化のトリガーを使うネイバーにダ
メージを与えていた。とりまるがやられた連携を逆手にとつて。我
に返ったオレは援護しようとするが、ミラのトリガーで三輪はどこか
に飛ばされてしまった

あとすこし、10秒でもいいから時間を稼げればいい。修がたどり
着いて本部に入ればいいのだから

「邪魔だー！」

「それはこっちのセリフだー！」

焦っているのか鳥を大量に出して襲い掛かってくる。一葉に命令
して狼に弾丸を送ってもらっているからギリギリ迎撃できているが、
ミラの方まで注意しながらは生き残れるか分からなかった

「だけどその心配はなさそうだった

「トリオン切れか？　空間移動するだけあって相当トリオンを使うみ
たいだなー！」

「黙りなさいー！」

凶星だ。敵に余裕がなくなってきた。ミラの手に行っている球体
の形状が崩壊し始めた。これまでのダメージでトリオンも大量に漏
れているだからこの辺が限界なのだろう。棘も長さも数も減った。
放っておいても何もできないはずだ

「しまったー！」

三輪がいなくなったことでフリーになったネイバーがまっすぐ修
のところへ向かっていった。修のそばに置いておいた狼は消されて
しまったしすぐには助けられない。せめて壁を削ろうと守っている

魚を狙う。オレも下りて境界ガルドエイアンの守護者を防御モードにして黒い棒を地面叩きつける。黒い線が一直線に伸びていく

奴との間に壁と棒を伸ばして邪魔をする。キューブ化と言っても通れるだけの大きさを作るのに時間が掛かるはずだ。これで修の策は通せる、そう思っていた

「っ……………修——!!」

ミラのトリガーの棘が修を貫いた。生身だから今度は痛みがある
すぐに助けに行きたいが、今動けば修との間を遮っている壁が消えてしまう。そして千佳が奪われてしまう

「っ……………どうすれば……………修…!?!」

このあとどうすればいいのか逡巡していると修は足を止めた。そして脇に抱えていた切断されたレプリカを手にとって——投げた

30話 長い旅路の果て

真つ二つにされてもまだ機能しているらしいが、浮遊はしていない。けどそんな状態で入り口を開けることなんてできない。失敗する可能性が高い

じゃあなんで投げたんだと、レプリカが飛んでいく先を見ると敵の遠征艇の中が見えた

もしかして修は、レプリカを敵の船に投げてシステムにハッキングして強制的に撤退させようとしているのか!?

「っ!!……頼んだぞー・レプリカ!!」

時間を稼いでとだけしか聞いていなかったから、こんな大胆な方法を思いつくなんてすぐには分からなかった。修は役目を終えた。あとは投げ飛ばされたレプリカがハッキングできるかどうかだ

足を止めない敵に誰か援護してほしいと願った。それが叶ったのかは分からないが遠くからの援護射撃が行われた

「邪魔な壁をどきなさいー!」

「つぐ…悪いが意地でも嫌だね」

壁の維持とキューブ化のトリガーにさえ注意を払ってあげればいい。一番邪魔なオレを消したいはずで、その予想は当然のように当たって棘が伸びた。棒だけ掴んだまま体を横に移動させて回避しようとするが、数本が肩付近に突き刺さった

「つく……ならこれで」

「しまっ……!」

棘でだめなら強制的な移動と、足元に大きな黒い空間が出現した。気付いたときには地面の感覚がなくなり落下をした。棒を掴んで耐えようとするが、空間が閉じて切断されてしまった

「っ……くっそー!!」

本部西方面に飛ばされたオレはもう何もできない。防御モードにしたから狼は全て消えた。膝が折れ地面を殴る

「いつも……いつもそうだ!……オレは間違っ……失ってばかりだ

「……どうすれば正解だったんだ!？」

サイドエフエクトが発現して強くなったと勘違いし、数時間しかいなかった友を、母と父を失った。素性を隠して生活していた所為でクラスメイトからも敵視される。一体どうすればこんな辛く苦しい思いをしなくて済むのか分からなかった

『護くん……敵は撤退したわ。修君のおかげよ』

「うさみ……さん……」

泣き言を言うオレに支部にいる宇佐美から連絡が来た。レプリカは無事ハッキングで来て敵を強制的に撤退させたらしい

『だがまだトリオン兵はいる。護、まだ戦えるなら最後まで、何もできないオレたちの代わりに頼む』

『修は幸いまだ生きています。重傷だが本部の医務室に運ばれてた』

「つつ……生きて……千佳、千佳は!？」

『無事よ。修君が替え玉をしたおかげで千佳ちゃんは攫われなかったわ』

修は怪我を負ってしまった。助かるかどうかかもオレにはわからない。医者じゃないしそんな知識なんて持ち合わせていない。そしてらとりまるがすぐに教えてくれた

修は生きている。しかも千佳も連れ去られずに済んだ。どうやら替え玉を持ってずっと敵を欺いていたらしい。本物の千佳を家の植木に隠して、キューブ化の性能を使って偽物を作ったっていう事なんだろう。追い詰められた状態でよくなそんな細い橋を渡るような作戦を思いついたものだ

「つ……分かった。オレも、最後まで戦うよ」

修は自分の役目を最後まで貫いた。なら、まだ戦えるオレはボーダー隊員として、ミデン玄界を守りたい願いのために戦わないといけない

そのまま西へ向かい警戒区域を突破したトリオン兵の排除を始めた。市街地へ襲うように命令を出されてから放置されているため、倒しても倒しても遠くまで行ってしまっている

「うわああ……た、助けてくれー!」

「頭を守って!!」

20分かけて西方面のトリオン兵の大半を片付けた。中には新型も混ざっていた

周囲には目の前のバムスター1体だけみたいで、捕まえようとしているところを攻撃モードにしたガルディアンで目を縦に斬り下ろす

「たすか……っひ、お……おまえはネイバーの!」

「つつ……早く避難所に向かってください。この辺は粗方倒しましたがまだ」

「そんなこと言って、ワシらを纏めて殺すつもりなんだろう!」

オレが誰なのかおじさんは気付くとまた怯えだした。警戒区域を出れば分かりきっていたことだけどやっぱり辛い。それでも説得を続けようとしたとき、少し離れた先で瓦礫に埋もれた人を助けようとしているのを見つけた

「どうしました?」

「お、おまえ……」

「……どこが痛いですか? 手足の感覚は?」

ネイバーが来たと死を覚悟されたけどオレにそんな意思なんてない。とはいえ言葉で伝えて信じてもらう以外にできることなんてない。そんなことより60代に見えるおじさんが片腕だけ伸ばした状態で瓦礫に埋もれていた。意識はハッキリしているようで足が痛いという

瓦礫を見ると下手に動かせば潰れる可能性がありそうだった。どうするか少し考えた結果防御モードにしておじさんの体の周りに棒を斜めに伸ばす。昔の時代で木の棒で作った骨格にわらを被せて家にする、イメージとしてはそんな感じだ

「合図したらこの人の手を掴んで引っ張ってください! お願いします、協力してください!」

「……」

ネイバーに言われることに抵抗はあるらしいが渋々協力してくれた

救出するために棒を伸ばす。いきなりだどどこかが崩れて被害を増やす可能性もある。だから慎重にゆっくりと。瓦礫が持ち上がり

顔が見えてきた、胴体も見えてある程度隙間もできたところでもう大丈夫だろうと合図を出して引つ張ってもらった

「つい……ありがとう、君のおかげで助かったよ」

「いえ、ボーダーとして当然のことをしただけです」

「それはどうかな？」

「え？」

「私は教育関係の仕事をしていてね。だから嫌なことをしてきた相手に平等に手を差し伸べ助けるなんてことはごく稀なんだ。君は、いい親御さんの下で育ったね」

「っ………はい」

初めて、正体が知られてから褒められた。奇跡でも起こったのかも
しれない

おじさんは怪我をしているから簡易的な治療をして病院へ向かうらしい。オレはまだ残っているトリオン兵の排除のために立ち上がるが、トリオンが残り2%くらいだった。そして1%へと減った

後ろを振り向いて他の人たちに肩を貸してもらい歩き始めた。最後の最後でオレは、誰かを助けて感謝された

『護』

「迅さん？」

最寄の病院へオレも行く必要があるなと思ったとき、迅さんから通信が着た

『おまえはよく頑張った。おかげで今回の侵攻を防げた。だから………おまえはもう自由だ』

神妙な声で「自由だ」と言われた。その言葉を聞いてオレは意味を理解した

「自由………そっか。うん、わかった。オレもありがとう迅さん」

『………こんな結末しか選べなくて済まないな。護』

「十分だよ。最期に感謝されたんだ、報われたよ」

こんな結末しか選べなくてというけど、これが最善の未来だったってことなんだから仕方ない。未来が見えるからといって犠牲なしの綺麗な物語なんてないんだ

迅さんと通信を終えて今度は本部と繋げた

「叔父さん」

『護か。そっちの状況は?』

「西方面は粗方倒した。でもまだ残っているから少し応援がほしいところ」

『そうか、すぐに向かわせる』

「これでもう大丈夫だろう。残ったトリオン兵は来てくれる部隊に任せよう」

「叔父さん。いままでありがとうね」

『何を言っている。礼を言うならこちらのほうだ』

「…ミデンに来て不安なことがいっぱいあったけど、叔父さんたちと会えてよかった。何もかも知らないオレとロイは安心できた」

『…護? 急にどうしたんだ?』

「オレ……いっぱい罪を犯したから罰を受けなくちゃ、いけないから……ボーダーの人たちにもいっぱい迷惑、かけてしまったし』

『悪い冗談はよせ。いまは—』

『こちらこそ、ボーダーとしてもこれまでの尽力に感謝する』

叔父さん言葉を遮って城戸指令がねぎらいの言葉をくれた。迷惑だったかもしれないのに。泣いてしまいそうだ

『護! すぐに病院に行くんだ! 罰を受けないといけないとしても諦めないでほしい—』

「ごめん……それは、無理……みたいだから。だから……ありがとう、さようなら」

『まも——』

他にも色々言いたいことはあった。感謝したいこともいっぱいあった。だけどそれを全部言っていると時間が足りなくなる。だから5文字の言葉に全部込めて別れを告げた

その瞬間トリオン切れになりトリオン体が消失し、生身の体へを戻った

「つつ!!……ごほつ」

痛い。腹に受けた傷を感じるようになって苦しい

夕日が赤くなつてて血みたいだなつて思つたときには顔が痛かつた。どうやら倒れたらしい。もう手も足も力が入らない。痛みもなんだかなくなつてきて眠たくなつた

「!!」

「!」

なに言っているんだろう? 全然聞こえない。というか疲れたんだから眠らせてほしい

「護」

「起きなさい、護」

「……父さん? 母さん?」

気が付けばオレの家にいた。目の前には父さんと母さんがいた。死んだはずなのと思ひ出したときには気付いた。オレも死んだんだと

「おまえはよく頑張つた」

「そうよ。護は父さんと母さんの自慢の息子よ」

「つつ……ご、めんなさい……ごめんなさい……」

頭を硬い手で撫でられ、柔らかい手で頬を挟まれる。感触も声もオレの知っている父さん達だった。自慢の息子と母さんは言うが、オレはいつぱい人を殺したことで自慢じゃないと泣いてしまう。胸を張つて頑張つたなんて言えない

「謝らなくていいのよ? もう護は頑張らなくていいのよ」

「そうだぞ。もう辛いことから逃げたつて誰も怒らない。だから、笑え」

いつぱい頑張つた。いつぱい辛いことに耐えた。だから楽になりたい、楽にしてもいいと母さん達は言ってくれる。ボロボロのオレは疲れたから、そうすることにした

「うん! そうする!」

迅さんも言っていた「自由だ」と。だからもうココで父さん達といることにした

この死後の世界で父さん達といつまでも。だってこれがオレの望んでいた父さんと母さんと過ごすのが、オレの幸せなんだ

31話 許せるのは自分だけ

「ぎ……なさい……っー……おき……い！」

何かが聞こえてくる。女の人の声だ

「護！ 起きなさい……するよ！」

五月蠅い。まだ眠たいんだから寝かせてよ

「お……さん知らないからね……」

やっといなくなつた。折角気持ちよく寝ているのに起こしにくるなんて最低だよ。睡眠妨害罪だよ

布団の中で包くるまるオレはさつきまで起こそうとしてきた女の人に悪態を吐きながらも一度夢の世界に入る。心地よい浮遊感と暖かさにはしばらくそうしていると時計が五月蠅く鳴り響いた

「うう……なんだよ……折角寝てた……っ!!? ……あつあああああああ!!」

ドンツと壊す勢いで叩くと時計は止まつた。手にとつて時間を見てみると朝の9時を迎えようとしていた。たしか今日の勤務は9時からだったはず。そろそろ起きるか、体を布団から起こすと何かがおかしいことに気付いた。そしてもう一度時計を見る

9時になろうとしており、勤務時間は9時から。つまりもう数分しか猶予がなかったのだ。そのことに気付いたオレは一瞬にして部屋を出てダイニングへ向かった

「母さんなんで起こしてくれなかったんだよ!？」

「起こしたわよ。なのに護は全然起きないじゃない。お母さんは悪くないわよ」

「布団剥ぐとか五月蠅い音出すとか……あーもう時間がねえ!!」

時間になつても起きなかつたら起こしに来てと頼んではいたのだが、どうやらオレはそれを無視してしまつたらしい。もうあと2分しかない。確実に遅刻確定だった

急いで部屋に戻ってカーキ色の軍服を着て家を飛び出す

「トリガーオン！」

ついでにトリオン体に換装して身体能力を上げてさらに急ぐが

結局15分も遅刻してしまった

「珍しいですね。隊長が遅刻するなんて。ご気分でも悪かったのですか?」

「もしかして布団の暖かさが気持ち良くてナニでもしてたんじゃないの?」

「ハルタ! 上官に向かって下品なことを言うな!」

書類整理をしているカズナが心配をしてくれるが全くもってそうじゃない。ハルタも男らしい理由を軽く言ってくれるがそれも違う

「いや:単に布団が気持ち良くてまだ寝ていたかっただけ」

最近は妙に眠たい。訓練で疲れているからかと思っただけ、昨日は巡回警備の任務で。特に戦闘も怪しい人物も見かけなかった。おまけにトリオン体だから生身の体に疲れはない

「ストレスが溜まっているのでは?」

「ストレス? オレが?」

ストレスとか精神的なことなら確かにトリオン体に関係なく影響はあるだろうけど。それでも適度に発散はしているからそれも違うと思う。2人のやり取りは五月蠅いけど、これもオレの部隊ではいつもの光景だし

「それじゃオレは今日の巡回の準備をしてくる。部屋の後始末したら来てくれ」

「はい。でも待つてください、隊長」

デスクから立ち上がったオレは今日の巡回担当地域を回るための司令書を受け取りに行こうとしたらカズナが引き止めてきた。いつも仕事はきつちりこなすから後になって報告忘れなんて珍しいと思っていたらそれは違った

「たーいちよ! 誕生日おめでとう!」

「おめでとうございます。隊長! 私とハルタからです。似合うといんですけど」

ドアの取っ手を掴んでいた手を放して振り返ると、紙吹雪が舞って祝いの言葉を投げかけられた。珍しい理由がコレだったなら納得できた

今日はオレの誕生日だ。だから驚かそうと報告とは別にしてきたわけだ。そしてカズナが渡してきたのは紙袋で、中身は服だった

赤色のジャケットにオレンジのシャツ、黄色とグレーのパンツだった。2人で選んだらしいけど、多分結構時間が掛かったんじゃないかなって思う。事あるごとに言い合いとかするから「あれが似合うー」「いいや、こっちよー!」「そんなの隊長にはあわない!」とか選んでいく様子が手に取るように分かった。結果的にお互い納得できるものがこの組み合わせだったわけだ

「サンキューー! ちよつと着替えてくる」

選んでくれたんだから着ないわけにはいかないだろう。でもオレはこんな明るい色の服は選ばないから正直不安だけど。部屋の外に出して今着ている服と変えて中に入れた

「どう…だ? こういう明るいの着たことないから似合ってるのかわからないんだ」

軍人になってからはいつも軍服ばかりだから、服もおかしくなければそれでいいと拘りも持たなくなってきた。だからこういう普段選ばないものを考えてくれるのは結構新鮮な気分だった

「おー意外と似合ってた」

「予想以上です、すごく似合ってます」

「とりあえず想像よりおかしくなかったことには素直に喜んでおくよ」

どうやらこの色の組み合わせはハルタたちも予想以上に似合っていたってことが分かった。こいつらもおかしくはないかな? 程度には思っていたんだろうな。すぐに脱いでやろうかと思ってしまうたよ

15歳になってこんなサプライズをされるとは思わなかったけど、オレは意外と喜んでしまっていた。それを悟られないようにトリオン体に換装してさっさと巡回に行くことにした

予定地区に到着するとそこは送り込まれたトリオン兵が数体いて、こちらに気付くと進み始めた

「モールモッド3体か。これなら余裕だな」

「油断しないのハルタ」

「カズナの言うとおりで。手馴れたトリオン兵でも数で責められたらひとたまりも無いんだから」

戦士1人1人の質も大事だけど、基本的に数の暴力は強力だ。余裕を見せるハルタをカズナが釘を刺して調子に乗らないように言った

「それじゃ、撃破するぞー!」

モールモッドがカズナの射程に入るとオレとハルタは左右に別れて射撃を開始した。アサルトの銃弾の雨に足を止めてブレードで弱点を守っているが、剣を抜いて背中に着地すると突き刺して撃破。となりのモールモッドが体の向きを変えてオレを攻撃しようとするが、突進して展開したブレードを切り落とすと地面に着地して奥へ向かう

あとはハルタとカズナが相手をしてくれるからと任せても大丈夫だから

「見慣れたから余裕だな」

攻撃範囲まで来たオレを硬いブレードが襲い掛かるが、飽きるほど訓練してきた相手だから避けるのは容易く、隙を見つければ斬り落としてから弱点の目に剣を突き刺して撃破する

「さすが隊長だ!」

「おつかれさまです」

「ああ、お前たちもな。ダメージも無いみたいだしこのまま続けて大丈夫だな」

カズナたちも任せていたのをすっかり倒してダメージもないように、このまま巡回の任務を続けられそうだと知り予定の時刻までこなした

本部へ帰還している途中にハルタたちがくれたこの服を見てなぜかいつも通りの格好と思った。ついさつきもらったばかりなのにどうしてそんなことを思ったのか分からなかった。この違和感がなんなのか考えようとしていたら、今度はハルタたちの服装が違うことに気付いた

いや、いつも通りの支給されている戦闘服なのだが。それが余計に違和感を強くさせた

「なあ。ハルタたちってオレと同じ格好をしていなかったっけ？」

「え？　なに言ってるんスカ隊長？　オレたちはずっとこれですよ？」

「そう、だよな……？」

後ろに座るハルタが答えたように、この2人が来たときからずっと戦闘服は変えていない。だけどオレの中にはいまの格好に違和感を感ずるのだ

それに、他にも色々なにか忘れているような気もした

「そんなことより、今日は隊長の誕生日なんですから！　楽しみましょう！」

「そうそう！　ケーキでも食べてパーティーと過ごしましょうよ!!」

「つぶ。それ、ただハルタがケーキ食べたいってだけじゃないのか？」

「ち、ちがいますって!?　何言ってるんすか！」

街が近づいてくるにつれて今日の任務ももうすぐ終わる。ハルタの欲望丸出しの言葉も今日も平和だなんて感じられた

「ただい……っ!？」

家に帰宅してドアを開けた瞬間そこは家じゃなかった。いや、確かに家らしい建物だったがオレの家とは違っていた。それに出迎えてくれたのが母さんじゃなく知らない人たちばかり。眼鏡を掛けたおっさん、筋肉質な茶髪、ふわふわしてそうな黒髪の青年、優しそうな笑みのサングラスの人、髪が長くて少し怒ってそうな女の子、こっちも髪は長いけど黒髪の眼鏡を掛けた女の子、髪が白い小さい子供、表情が硬い眼鏡の少年。他にも何人かいた、けどどの人もオレは知らないはずなのに、不思議と知っているような気がした

「…、護？　どうしたの？」

「え……あれ？……母さん？」

「そうよ？　帰ってきてぼーっとして、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ……ただいま」

母さんに呼ばれ現実に戻った。玄関に立ったままで呆けていたら

しい。なんでもないと誤魔化して部屋に向かった

さつき見えた人たちは一体誰だったのか？ 知らないはずなのに知っているような気がした。胸の内にそんなモヤモヤした気持ち悪い感覚が残ったまま夕食の時間になった

「誕生日、おめでどう」

「っ…あ、ありがとう…！」

15歳にもなると祝われるというのは結構恥かしくなってきた。嬉しいことではあるんだけど、みんなから注目されるというのはむしろ痒かった。ケーキに刺さった蝋燭の火を消して部屋の電気が点けられる。カズナが用意してくれたケーキ屋のだから相当良いモノが使われているだろう。オレも何度か差し入れて持ってきてくれたのを食べたことがある。庶民が食べるものとは味の深さが違っていて美味しかった

ケーキが切られて取り分けられていると今度は幻聴が聞こえた

『なんで護のほうが大きいのよ！ アタシのケーキでしょ！』

『えつと…ごめん…交換した方が…』

『別にいいわよ。初めてなんでしょ？ こっちのケーキ』

『お？ 小南も譲ってやるなんて成長したなー』

『アタシのほうがお姉さんなんだから当然よ！』

『そんなに大差ないだろ…？ 身長なら護のほうが』

『もー!! レイジさん嫌い!! なんでそんなこと言うのよ!』

『あらあらレイジくんは女心分かってないわねー』

『ゆ、ゆりさん!?! そ、そそそんなことは決して…?!?!』

知らない声、でも知っていていつも聞いていた声。会話で3人の名前らしいことを聞いて、何故かさつきの幻覚で見た人の名前と姿が一致した

「護?」

オレは…知っていた。まるで一本の線で繋がれたように次から次へ大事なことを思い出していった

叔父さん、林藤支部長、陽太郎、瑠花姉ちゃん、レイジさん、とりまる、宇佐美さん、ゆりさん、クローニン、桐絵ちゃん、修、遊真、千

佳、レプリカ、春多、一菜。なんでこんな大切な仲間を、家族を忘れていたんだろう？ それに、思い出したくも無かったことも思い出してしまった

「つつ……父さん、母さん……」

「どうしたの護？」

「泣くほど嬉しかったのか？」

「うん……また、会えて嬉しいよ……っ」

顔を上げればオレを見つめてくる父さんと母さん。かけがえのない親。だけでもう、この世にはいない人たち。オレの所為で死なせてしまった

「よかったね、護」

「ガーディ!?!……お前にも……会えてよかったよ……!」

「僕もだよ」

声がして振り返ればたった、数時間だけ過ごした友達のガーディがいた。あのころと変わらない姿で。助かるかもしれない命をブラクトリガーに使ってオレを何度も助けくれた。困ったときはガーディのブラクトリガーを使えば何とか乗り越えられたことも多かったから

「護はよく頑張ったよ。いっぱい辛いことに耐えたよ。だからさ、もう自分に罰を与えるのは辞めてみない？」

「……でも……」

「護。見ろ」

「……あ、それは……!?!」

ガーディが指した方向を見るとそこにいたのはボロボロのオレだった

『もう……いやだ……痛いよお……母さん、父さん……』

「あれは護の心だよ」

「オレ……の心？」

「うん。護は沢山罪を犯したから罰を受けないといけないうって耐え続けたのがあの子。そして――」

【オレは大切なものを守るためなら……なんだってする】

「また……オレが……」

「こっちは護が守りたいものを守るためになんでもする覚悟をしている【護】だよ」

春風を持って切っ先をオレに向けて今すぐにも殺してきそうな目で睨まれた。オレが何人もいるから多重人格かも知れないと思っただけど、記憶だつてしつかりあるし、オレ自身が考えてしてきたことをも覚えている。だったら多分こいつらは性格が違うだけのオレなんだ。こいつら含めて全てが「忍田護」なんだ

気付けばさつきまでいた家は無くなって、父さんと母さんとガーデイが立っているだけだった。それで本当にこの世界が夢の中の世界なんだつて分かった。どうして夢を見ることになったのかも

「オレは……死んだのか？」

「ううん。護は寝ているだけ。ただ起きるか死ぬかは護が決めることだよ」

「……そっか……死ねば……自由になれるのかな……？」

ミデンの大規模侵攻で重傷を負ったオレはどうやらまだ生きているみたいだ。だけど沢山の命を奪ったオレが生き続けることはいいか分からなかった。一菜や春多がこれからも笑っていられるのか気になった。いや、あいつらのオレへの信頼を考えればその可能性は低いだろうな

じゃあ生きるかと問われれば答えに迷う。ボロボロの『オレ』を見ればもう助けてやりたい、解放してやりたい。自由にして楽にしてやりたいって思う。結局オレはどうすればいいのか分からない

「それは僕達には決めれない」

「ガーデイ……」

「護を許せるのは護だけだよ。もう死んでいる僕達は護の決めたことを見守ることしかできないから」

「護。あなたはまだ15歳なのよ？ まだまだ楽しい事だつていっぱいあるわよ」

「母さん……」

「かつこ悪くて当然なんだよ。みんなカツコいいだけの人生を送れる

人なんていないんだからさ」

「つどうさん……！」

夢の世界では生きているオレしか許せる人がいない。父さんと母さんに抱き締められて声と温もりを感じた

「まだ、オレ……守れる……かな？」

「ああ、お前は父さんの自慢の息子だ。できないことはない」

大切な仲間、友達を放って置けないと思うオレは強欲だ。まだ生きて守りたいと、このまま死んでも霊にでもなっ出てきそうな気がする

「また迷惑……がけて……しま……」

「子供は大人に迷惑を掛けなさい。いつか大人になったときにその分助けてあげれば良いのよ」

確かにまだ中学生だけど、それでももう15歳は大人に近づくのを感じるんだから甘えたり迷惑を掛けるなんて恥かしくなった。けれど死ぬまで好きにしてみたくもあった。ゲームとかご飯とか服とかお菓子とかもつとしてみたいことがある。だってこのミデンは魅力的なものが溢れかえっているんだから

「つつ……う、ううあああああつあああー！」

久しぶりに母さんたちの前で泣いた。夢の中でだけど

今までのオレからは想像できないような情けない姿だったと思う。だけど、涙を流しているうちに、胸のうちに「ナニか」が剥がれていくような気がした。多分それはオレが自分で縛っていた罪の意識とか、必要以上に幸せを享受してはいけない自制心とかじゃないかと思う

泣き終わるころには不思議と心も身体も軽くなった感じがした。きつと今ならまだ歩いていけると思う。起きれば春多と一菜もいるから倒れそうになれば支えてくれる。玉狛にはボスや桐絵ちゃんやみんながいるし、本部には叔父さんだって。もうオレは一人じゃないから大丈夫だ

「オレを殺すのか？ ならお前を——」

「いや、【お前】もオレだから……そっちの『オレ』も」

『オレはもう、痛いのも苦しいのもいやだ…』

切っ先が胸に触れた。ちよつと力を入れれば刺さってしまふ。だけど不思議とオレは怖くはなかった。多分きつとそれは進むために前を向こうと決めたからだと思う。今までは殺してきた人や自分のした罰を忘れないために下を見ていたから

「オレ一人じゃ弱いから、さ？…助けてくれない？」

【……】

『…え？』

「おまえたちも忍^オ田護^レだから。痛いことも苦しいことも、楽しいことも面白いことも、一緒に生きよう」

【……分かった】

『…うん、怖いけど…一人じゃないなら』

春風が光の粒になつて消えていき代わりに手が差し出された。ロボロになつていた『オレ』も弱々しくだが立ち上がって手を被せてくる。オレも乗せた

『これから…いっぱい辛いこと、あるよね…』

【オレたちならもう大丈夫だろ。そうなんだろう？】

「うん。オレたちは1人じゃないから」

不安な気持ちは当然ある。だが今までみたいな恐怖とかは感じない。だつて楽しい思い出だつてたくさんあるから。きつとこれからその何倍もの思い出ができるはずだ。それを一葉たちと作れるなら最高なことだ

2人のオレが光に包まれて薄くなると、光の粒がオレへ流れて入ってくる。きつと本当の意味で1つになるってことだろう

最後にオレが光り出すとなんとなくなつてわかつた。多分起きようとしているんだろう。誰かいるのかなつて期待もしつつ、誰もいないかもしれないと不安にもなつたり。体が薄くなり最後に父さんたちに別れの挨拶でもしようと思つたり。振り返ればいなかった

「別れぐらい…言わせてよ…：…ありがとう。父さん、母さん、ガー
デイ」

いなくなつた空間に向けて感謝の気持ちを込めて言った。死んで

もオレを見守ってくれていたことにありがとうを

32話 奇跡の糸

まず分かったのは体が非常に重たいことだった

目が覚めたオレはぼんやりとした意識で最初に知覚したことだ。次は手が動くことを知り、体を起こそうとするがなかなか力が入らない

い
それどころか胸から下の感覚がほぼなかった。嫌な予感がよぎって手を動かして腹や腰や脚があることを確認できて最悪な状態ではないことに安心した

「あ……る……よかった……」

徐々にはつきりしてきた意識で胸から下がなかったらそもそも生きていられないってことに遅れて気づいた

どれくらい寝ていたのか分からず、顔を動かしてみるとサイドテーブルに時計があった。日付は25日になっていて、どうやらオレは3日間も寝ていたらしい。でも、よく思い出せば納得だ。腹に穴が空いてしまったのだから治すのに体力を使うだろうし。むしろ3日で起きた事がすごいことだ

ということは、体の感覚があやふやなのはきつと麻酔のせいだな

しばらく外の青空を見ていると病室のドアがノックされる音がした

「忍田さん、入りますねー……！ せ、先生！」

入ってきたのは看護師さんで、オレが目覚めていることを知ると慌てて医者を呼びに行った。数分後に戻ってきた

「精密検査もしないといけないけど、現時点では目立った後遺症はないね。傷の治り具合も順調だし、2, 3日すれば普通に歩いても問題ないでしょう」

白髪が生え始めている医者に診てもらった結果以上はないとのことだった。連絡を受けたレイジさんたちが来てくれて叔父さんたちの代わりに説明を聞いてくれた

腹の傷はやはりというか当然内臓にまでダメージがあった。手術して繋がっているがしっかりと治るのにはもうすこし時間が掛かること。傷跡も残ってしまうようだけどそれは別に気にならなかった。もうとつくにオレの体は傷だらけだし、今更って感じだ

「今はまだ麻酔が効いていますますが、もし痛むようでしたら痛み止めを飲んでください。それでも痛い場合は呼んでください」

「はい、ありがとうございます」

検診も終わり一通りの説明も受けた。オレの体はすぐに救出した人たちによって病院に運ばれ手術を受けたという。一時は出血多量で危なかったらしいけれど乗り越えたという。それから是一般病棟に移って今日まで眠っていたということだ

それはいいんだけど、さつきから横にいる2人がちよつとだけ鬱陶しく思っている。いや、原因はオレなんだけどさすがに大げさな気がする

「たいぢよー！ー！ ぼんどにい…よがっだああ」

「っ…泣き過ぎよはるダー…っつ、もう…おきないんじやないがって…」

慕われているの嬉しいんだけど。涙と鼻水を流しながらはちよつと勘弁してほしい。いや、心配してたのは分かるんだけど…病院なんだしもう少し静かにしてほしいし、春多の鼻水がベッドに…

「分かった分かった…オレが悪かったって!! とりあえず鼻水だけは引っ込めろって!」

このままじゃオレが寝ているところまで鼻水の領域が迫ってくるんだ。だから引っ込めてくれ!!

「2人とも、もう護は大丈夫なんだし。そろそろ落ち着いたらどうだ? あまりに泣きすぎると…ミイラになるって知らないのか?」

「「え…!!」」

「え…? 桐絵ちゃん?」

鳥丸がティッシュを取り出して春多たちに渡して落ち着かしてくれていた。流れるように冗談まで言って。泣いてミイラなんてなるわけないだろう、って思っていたら騙されていたし、しかも腕を組

んでこつちを一切見ようとしなかった桐絵ちゃんまで驚いていた。そういうえばそうだった、桐絵ちゃんはとーっても騙されやすいんだっ

た
「嘘です。泣いただけでミイラにはなりませんよ」

ちやんとすぐに嘘だと明かしてくれたおかげで冗談で済んだけど、まさか一菜まで騙されるなんて思わなかった。オレより玄界ミデンにいる日が浅いとはいえこんな嘘に引つかかるなんて思いもしなかった

「ハハハハ…まさか一菜まで…珍しいこともあるね」

「っ…からかわないでください」

意外な一面を見てちよつと面白かった。笑われたことに怒ったのか顔を赤くしてそつぽを向いた

「とりあえず元気なようでよかった。そろそろ話してもいいか？」

「…うん。大規模進行のあと、どうなったの？」

場も少し和んだことでレイジさんが話を切り出した。オレがトリオン切れになって倒れた後のことを

結果から言えば大国相手に被害を抑えたから防衛成功と言える。けれどC級隊員が幾らか攫われてしまった

攫う理由としては戦力にする、トリオン供給機関を得るため、ボーダーこっちの戦力を削ぐため。と考えられるけど、わざわざ隊員を狙う理由が分からない。結局ボーダーは敵の真意を掴めないままアフトクラトルを退けたわけだ

市街地や民間人への被害も過去と比べれば大幅に抑えた。けれどこの国の人たちはたった少しの被害でもボーダーを責めるに違いない

「そっか…‥‥‥捕虜は？ 置いていかれたあの子は？」

「ああ…‥‥何もしゃべろうとはしない。忠誠心というよりは絶望しただって感じだ」

「…‥‥」

オレに復讐しようとしていたあの子。国に帰れなくなり、兄を失い、兄のブラックトリガーまでも失った。その喪失感は多分オレ以上だろう。いつか話をしないといけないだろうな

「叔父さんたち……って聞かなくても分かるか」

「ああ、市民へ発表するための資料を作ったりしている」

そう、アレだけの戦いと被害があつて何も発表しないのはイメージが悪い。だから公表するためのデータを集めて資料を作っている。今日叔父さんが来れなかったのもそれに忙しいからだろう。なにより防衛シフトが崩れているから急いで編成しなおしたり、落ち着くまでの防衛指揮を執っていたりしているはずだ

「本部長にはさっきメールで送ったから、少しは安心するはずだ」

「ありがとうレイジさん」

簡単に説明を聞いたオレは防衛が成功してよかったと安心した。だからなのか急に眠たくなってきた

何度も瞬きをして眠気に気づいたのかレイジさんがもう帰ろうと言った

オレも傷を治すためにも体力を使うから大人しく寝ようかなと思っていたのだが、一つだけ思い出したことがあつた

「そういえば、修はどうしてる？ 傷は軽いのか……？」

本部前で修は敵のトリガーを無効化するためにトリオン体を解除したのだ。戦場でそんなことをすればオレみたいに命が危ない

だが、修が持っていた半分だけのレプリカを敵の船に投げてハッキングして強制的に撤退をさせた。結果から見れば成功だけど、実際に目の前で刺された修を見ればそっちのほうが気にしてしまう

オレが聞くとみんなが黙ってしまった。もしかして最悪なことになったのかと想像してしまった

「修は…重症だ。今もまだ目を覚まさない」

「っ……っ……っか……」

最悪の中の最悪ではないことには安心はした

今は一般病棟で眠っていると聞いて、病室を伝えるとみんなは帰っていった

オレは迷ってしまった。あの時、壁で守るのか剣で戦うのか。どちらが正しいのか眠ってしまうまで考えたけど、結局起きてからも答えは出なかった

あまりおいしくもない病院食を食べているとコンコンとドアがノックされた

「どうぞ」

レイジさんたちが来るにとしてはノックをするんだなあって律儀なところがあるんだと思っただけれど違った

「君が忍田護くんだね？」

入ってきたのは髭の生やした50代後半っぽくみえる知らないおじさんだった。けれどオレはどこか見覚えのある顔だなと、知らないのに知っているという不思議な感覚になった

「はい…？ あの、あなたは…？」

「失礼。私は君に命を救われた者だよ」

「……………あ…あのとき瓦礫に埋まってた」

コートを脱いで椅子に座ったおじさんはオレに命を救われていると言った。けれど近界民ネイバーのオレに助けられたなんて言うのは変なんじゃないか？ と疑問に思っているときようやく思い出した

大規模侵攻で敵のトリガーにワープされてトリオン兵を排除したとき、瓦礫に埋まって救出した人だと

「思い出してくれたようだね。君のおかげで私はこうして死なずに済んだ」

「でも…あまり怪我はしてなかったはずじゃ…？」

死なずに済んだと大げさに言うおじさんの言葉にいまいち納得ができなかった。覚えてる限りじや擦り傷とか打撲はあつたとしても、命に関わるほどの怪我をしていたようにはみえなかった

「だけど、おじさんの次の言葉で大げさではなく本当に危なかったんだと理解できた」

「私は心臓が弱くてね。薬をなくしてしまって予定の時間に飲むことができない状況になってね。君が倒れた後私も倒れてね、病院に一緒に運ばれてなんとか薬が間に合って助かったのさ」

「そ、うだったんですね…よかったです」

確かにそういうことなら死ぬかもしれない。礼を言いくるのもわ

かるけど、でもオレは近界民だ。良心があつたとしても、敵かもしれないオレに言いに来るのは分からなかった

「君は、どうして私を助けてくれたのかな？ 近界民である君が」

「っ……それは」

やっぱりおじさんもそれが気になつたのだとわかつた。こつちの世界にとつてオレたち近界民は絶対の敵として認知されている。礼を言いに来たのはついので、こつちのほうが本題なのだろう

きつと厳しい言葉とか言われるのかもしれないけど、オレの答えは決まつていた

「それは…守りたいと思つたから。この国を。それだけです…オレがそう思つたからそうしただけです」

「…そうか。その言葉が聞けてよかつたよ」

「え…？」

怒るでもなく、悲しむわけでもなく、笑うわけでもなく、おじさんは微笑んで「よかつたよ」と答えた

どんな意味でそんな言葉を言つたのかオレには理解ができなかつた

「無駄にならなくて済んだよ」

鞆を開けて黄緑の大きい封筒を差し出してきた

一体何なのか分からずとりあえず受け取つて、書かれている文字を読むと「三門市立第一高等学校 入学願書」と書かれてた

「……………え……………これ、は……………」

頭が何も考えることができなかつた。合格をして4月から通うはずだった高校の入学願書が、今オレの手元にある

何でこんなものがある？

どうしてオレに渡す？

おじさんは一体何者？

なんで？

どうして？

答えが分からず黙つておじさんを見て言葉を待つた

「そういえばまだ名乗つていなかつたね。私は羽堂武道はどう たけみちという者だ。

この学校の理事長をしているものだよ」

「つつ!?…り、じちよう…!」

名刺も差し出されて受け取ると、確かに理事長と書かれていた。オレは今になってとんでもない人を助けていたんだなと知ると同時に、余計に分からなくなった。願書を渡す理由が

「君はいい友達を持って幸せだね」

友達はもういない。失ってしまったんだ。なのに理事長はオレには友達がいて、幸せだねと言った

「……え?」

「実はね—」

オレが眠っている間の数日の間のことを話してくれた

理事長は助けてくれたオレが経営する学校を受験していて合格していたことを知った。後になって近界民だと分かる生徒を守るためにと合格の取り消しをしたことも。子供預かる学校としては当然の処置だとその時は思っていたらしいが、オレに助けられて考えが変わり、本当に大丈夫な学生なのか調査を指示したと

結果としてはやはり近界民ネイバーなのが問題で、中学の教師達は口を揃えて「騙ネイバーされていた」「潜り込む為の演技だったのかと」「はじめから知っていたれば通わせなかった」など言っていたと。それは当然のこと、実際に騙ネイバーしていたし演じている部分もあったのだから

だが、それ以外はオレに対する評価は「ただ運動神経がいいどこにでもいる中学生」ということらしい

言葉の意味はその後に分かった

最初は学校としての対面を保つためにも合格取り消しは妥当だと結論が出ていたのだ。だが、大規模侵攻が終わって翌日、合格していた生徒の数名が取り消しをしようとしたのだ。それがオレが通っていたクラスメイトだった

近界民ネイバーだけでなく大丈夫な奴なんだと気付いたやつらがいて、それでクラスネイバーのみんなに説得したらしい。命を掛けて守ったオレにも学校を行かせる権利くらいあるだろうってことになり、第一高等学校で合格を貰っていた奴が、オレの合格取り消しを撤回させないと自分達の合

格を取り消すと言ったらしい。別に学校としてはその分他の学生のための枠が空くのだから気にすることがないのだが、そうさせなかったのが次だった

命を掛けて大怪我までして街を守ったのになんとも思わないのか、と

ネットや学校中にも言いふらすとも言ったらしい。それはもう脅迫に近い行為だ。けれど所詮は中学生が言っていることだからまともに取り合わなければいい。それでも無視ができないのはここが三門市だからだ

大規模侵攻が起こったことです。で何名かが合格を取り消し、引越してよその学校に通わせるという連絡を受けている。人がやってくるのがめつたにない三門市では手痛いことだ。学校を経営するために資金は必要。これ以上減れば来年度から増えないかもしれない、もしかしたらさらに減るかもしれない

悩んだ教師たちはオレに再度受験資格を与えることにしたらしい
「—そういうわけで、君にもう一度私の学校を受験できるようにしたわけだ。予定は君が退院した3日後に行う予定だ」

「あ、ありがとうございます…っ」

眠っていた数日の間に色々あったことに驚いた

馬鹿な夢かもしれないけど、また文化祭とか参加できるかもしれないことに嬉しくなった。楽しませる側になれることに

理事長は用事を終えたため帰った

20分ほどの時間だったけど、まるで1時間近く経っていたような感覚だった

手にしている封筒にはしっかりと「三門市立第一高等学校 入学願書」と書かれており、書類もしっかりと入っていた